

元校長だより

nukkun46

さようなら、またお会いする日まで

2015.03.30 Mon

昨日、ブログを書いたところ、いろいろな卒業生からメールや電話をもらいました。私がこの3月末に退職するとは知らなかった方たちです。無理ありません、余り退職については広く語らずにいたからです。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

その問い合わせの中で、皆さんに関心をもってもらったのは「4月以降はどうするのですか？」という内容です。

私としては4月から（と申しましても2日後からですが）、微力ながらも、子供の健全な成長、特に病苦や虐待や強制労働や貧困などの中にある子供たちの健全な成長を助けるための活動を始めたいと思っています。力の許す限り、子供たちのためにこれからの人生を捧げたいと考えています。あるボランティア団体の役員をさせていただくのと同時に、5～6月からはShare One Club for Childrenという非営利型の社団法人を立ち上げて、やれるだけのことはやってみたいと考えています。

皆さん、その節には、どうかご支援ご協力を宜しくお願いします。

最後に宣伝をさせていただきました（笑）

昨日のブログで私は「本校には信頼できる素晴らしい先生方がたくさんいる」と書きましたが、下記の文はそういった教員の中の一人の文化祭での取り組みが示されている学級通信です。本校教員の熱い生徒への思いの一端が示されています。中学3年生を担当していた教員の学級通信です。文化祭後のブログで紹介するつもりが、今の今まで忘れていました（笑）。下記に紹介しておきます。

それではさようなら。皆さん、お元気で！！

<学級通信>

2014年9月11日

◎「糸」という曲との出逢い

体育祭が終わって間もないホームルームにて、コーラス大会の曲決めが行われた。20曲近く挙がった候補を全て聞き、選ばれたのは、中島みゆきさんの「糸」。最初は生徒の誰もが知らない曲だったが、聞いているうちに妙に引き込まれるものがあった。特に合唱用にアレンジされたものだからハーモニーが絶妙だった。

「これを完成させられれば、コーラス大会は優勝間違いない！」

そのくらいのクラスの雰囲気。

担任としても早いスタートを切るため、即座に楽譜を探した。が…。

あれ？見当たらない？選曲の際にYoutube で聞いた合唱のページには「坂部剛 編曲」と書いてある。しかし、ネット上でいくら検索しても、別の方が編曲されたものしかない。「…まあ大して変わりはないだろう」とダウンロードしてみたが、構成が全く違う。キーも違う。というか、聞いていてゾクゾクしたあの感じが全くない。

むむむ。これはもう、諦めるしか…。

クラスで相談した。曲変更を余儀なくされるかもしれない、と。しかし返ってきた言葉はSさんの意外な言葉だった。

「そしたら連絡取ったらいいじゃないですか？その合唱を歌っている人たちに」

おいおい、どこぞの団体かもわからん人達なのに…と思ったが、Youtube をよく見ると「アンサンブルKAT00」と歌っている団体名が書かれていた。しかし、さすがに連絡先は書いていない。クラスにそのことを伝え、私は別の曲のことも考え始めていた。

しかし、そんなことで諦めるSではなかった。SんはアンサンブルKAT00 さんのホームページを見つけ、書き込みをしようとしていたのだ！実名のまま書き込もうとしていたので、少し一緒に文章を考え、6/30、ついに書き込んだ。…すると、1 週間後、アンサンブルKAT00 幹部の方からお返事を頂くことができたのだ！

「こんにちは。糸の楽譜はまだ売っていないようなので、一般的には手に入りません。EKT（アンサンブルKAT00 のこと）では作曲者の坂部さんから直接もらっています。連絡を取ることはできますので、ホームページからメールでご連絡ください。」

急いで坂部さんのホームページを探した。確かに、メールアドレスが載っていたので今度は指揮者の多田さんからメールをした。ドキドキ…。

しかし、テストが終わり、面談が終わり、夏期講習が終わり、…。1 週間経っても2 週間経ってもメールが返ってくることはなかった。

上のメールの“連絡を取ることはできます”はそういう意味かもしれないなあ…。勉強合宿前、そろそろ楽譜を買わないと伴奏の喜多さんに迷惑をかけてしまう…。第二候補の曲の楽譜を購入しようか迷っていた時に、ふと気づいたことがあった。

「ん？待てよ…。“メールでご連絡ください”ってのは、『アンサンブルAT00へ連絡下さい』って意味にも取れるな。よく考えたら、いきなり坂部さんのアドレスを教えるわけにもいかないだろうし…。それならこういう文章になったのも頷ける。これは試してみる価値があるぞ！」

7/27、勉強合宿に行く直前にメール。

7/31、勉強合宿を終えて翌日、7:00 に出勤。メールチェック。

返信が来ている！

「アンサンブルKAT00、加藤と申します。…坂部さんへの連絡は…」

何と、坂部さんの本当の連絡先を教えてもらうことができた！坂部さんのホームページのアドレスはどうやらほとんど使っていないらしく坂部さんはあまりチェックされていないらしい。すぐに文面を考え、坂部さんへメールを送る。

部活指導後に職員室に戻ると、坂部さんから返信が！！

「こんにちは、メールありがとうございます。楽譜お送りできますよ。…」

きた。ついに。…1 ヶ月。長かった。

坂部さんは「販売前の楽譜だから」ということで無料でいただくけると。。。

坂部さん、太っ腹！

さて、実はここからが大変なのだ。すでに夏休み中。急いでクラシックギター部の練習に来ていた喜多さんのもとへ。喜多さんはこの後、

? 混声4部（多いところでは6部になっている部分もあった）を3部に編曲する

? 各パートの練習用音源を作る

? 伴奏の練習をする

をしなければならないのだ。?は井上先生にお力をお借りした部分も大きいですが、皆の知らないところで喜多さんは夏休みの貴重な時間をクラスのために捧げたのだ。

こうして、3年C組の「糸」は今日まできた。

既存の楽譜が存在しない曲との出逢い。

諦めないで何とかしようと思ったクラスの生徒。

諦めの悪い担任。

さあ、明日は本番。

人事は尽くした！ 天命を待て！

「一生青春、まだまだこれから」

2015.03.29 Sun

3月14日の中学校の卒業式、そして3月20日の今年度最後の終業式、そして次期校長への引き継ぎ作業、また校長をしていた時の膨大な書類の整理など・・・、3月は本当にあわただしく過ぎ去りました。41年間の教員生活の最後の日々を味わったりする余裕もありませんでした。

ただその間、いろいろ教職員の方々や卒業生の皆さんが私のために開いてくれた送別会では、皆さんの温かい気持ちに涙が出るほどでした。

私はこの3月末をもって退任・退職をいたします。私が大好きな桃山学院を去るのはとても寂しいです。生徒たちの顔が見られなくなることが何よりも寂しい限りです。

しかし不安はありません。それは本校には信頼できる素晴らしい先生方がたくさんいるからです。また、幸いにして、この何年間か本校の教育活動に対する評価が高まっているなかで退職させていただくこと、後顧の憂いなく退職できることは誠に嬉しいことです。

終業式では全生徒達に私からの最後のメッセージを伝えました。いろいろ伝えたいことがありますが、今回は「ぞうさん」という童謡で有名な詩人のまど・みちおさんが87歳のときに子供たちに書いた「子供たちへ」という手紙に私の思いを託して述べさせてもらいました。

できれば皆さんも絵本になっている「子供たちへ」という本を読んでください。素晴らしい絵本です。

本当に41年間の教員生活の中で多くの生徒たちと出会ってきました。卒業後も交流が続いている卒業生たちも多くいます。本当に幸せな出会いをさせてもらいました。深く感謝しています。

最後に、桃山学院中学校高等学校を去るに当たって、生徒・卒業生からもらった私の宝物を紹介します。一つは3月14日の中学卒業式のとき、中学を卒業する5期生達が私にくれたユーモアあふれる賞状です（文言：【賞状：学校長 温井史朗殿 <お疲れさまでしたで賞>貴殿はこの六年間、桃山学院中学校高等学校の学校長として、私達を見守って下さったことを褒め讃えます。平成二七年三月一四日 五期生生徒一同】）。

もうひとつは私が担任した国際コース一期生達（2004年卒）が同じ日の夜に行われた私のご苦労さん会で私にくれた「卒業証書」です（文言：【卒業証書 温井史朗殿 あなたは桃山学院の教師として、一時代を築き、愛すべきキャラクターと個性的な指導で更にそれを上回る超個性的な生徒を多く輩出し、教師人生を晴れて修了したことを証します。<一生青春 まだまだこれから> 平成二七年三月一四日 元祖一五組一同】）



書を捨てよ、町に出よう！

2015.03.02 Mon

先月行われた高校の卒業式で、私は卒業生達に伝えたい思いながらも伝えることができなかったメッセージがいくつかありました。そのうちのひとつを書かせてもらいました。〈?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

「書を捨てよ、町に出よう」（卒業式で伝えられなかったメッセージ）

今日、新たな地平線へと旅立っていく皆さんに「書を捨てよ、町に出よう」と云う言葉を伝えたいと思います。但し、この言葉は私のオリジナルな言葉ではありません。この言葉を初めて聞いたのは私の大学時代であり、この言葉は寺山修司という方が書いた評論のタイトルとして使われたものです。どういう訳か、この言葉を聞いたとき、私の中の何かが化学反応を起こしました。「書を捨てよ、町に出よう」、なるほどそれは本ばかり読んでいる者以外にとっては大した意味しか持たない言葉ですが、私にとっては大きな意味を持つ言葉でした。というのも私はその頃、人生の意味について深く思い悩み、その解答を、さまざまな本の中に見出そうとしていました。大学へは最小限度行くだけで下宿先の小さな部屋に閉じこもっていました。実は閉じこもっていたのは私の身体だけでなく私の心でもあったのでしょう。人生の意味を知るために文学だけでなく心理学や宇宙論や神秘主義の本まで読み耽っていました。その時にふと出会った言葉が「書を捨てよ、町に出よう」という言葉でした。書とは書物のことです。私はその言葉を私へのメッセージ、あるいは天啓と受け取りました。部屋の中に閉じこもって、あるいは自分の殻に閉じこもっていた状態がおそらく煮詰まってきた、つまり臨界点に達していたのだと思います。私は書物を捨てました。もちろん捨てたというのは文字通り捨てたのではなく、本への強い執着を離れたわけです。それから時間の許す限り、外の世界にむけて歩み始めました。外の世界は新鮮でした。様々なアルバイトで得たお金で時間の許す限りいろいろな場所へ旅をし、山にも登り、海にも行き、大自然の中で雨風に打たれたりしました。貴方達にはして欲しくはないのですが、山でも海でも命の危険にさらされたこともありました。また部屋に閉じこもっているのは体験できないような、さまざまな人達、思いもよらない人達にも出会うようになりました。

さてここで私は何を云いたいのでしょうか？先ず一つは皆さんに行動することの大切さを知っていただきたいということです。行動することによって、さまざまな出会いもあり、さまざまな経験もできるのです。行動が非常に大切だということです。考えてばかりいては物事は進みません。時には自分の殻を破るためにも思い切って行動に出ることです。

哲学者カントについてのエピソードがあります。カントは人間の理性に重きを置いた哲学者です。そのカントがある女性に一目惚れをしました。そして彼はその女性に結婚を申し込もうとしたのですが、そこは理性を重んじるカントらしく、「結婚した方がいい理由」と「結婚はしない方がいい理由」をいろいろと考えだしました。結論は結婚した方がいい理由が312で結婚しない方がいい理由が311でした。考えに考えた末、結婚した方がいい理由が1つ多いと分

かり、彼はその女性にプロポーズするために訪れました。するとドアを開けたその女性は既に結婚して赤ちゃんを抱いていたというエピソードです。もちろんこれは根拠のないエピソードですが、ただこのエピソードで云おうとしていることははっきりしています。考えすぎて、チャンスを逃すよりも、とにかく、失敗してもいいから思い切って行動すべきだということでしょう。あるいは行動しないで後悔するよりも、行動して後悔するほうが良いという拡大した解釈もできるでしょう。私も人生においてあるいは日々の生活においても行動することが非常に大切だと思います。

当然、ここでの「書を捨てよ、町に出よう」という「町に出よう」という言葉は、「行動を起こせ」ということだと思います。

しかし、この「書を捨てよ、町に出よう」という言葉には別の意味が込められています。それは作者が込めた意味ではないと思いますが、「書を捨てよ」と云う段階で「書を好む」ということが前提としてあるわけです。分かりやすく云うと、「昔は妻子を捨てて出家する」という言葉「つまり妻や子供を捨ててお坊さんになる」という言葉がありますが、捨てるためには妻や子供がいるわけです。独身、つまり妻や子供がいない人が、わざわざ妻子を捨てるといえば、表現そのものがおかしくなります。要するに「書を捨てる」には、書物をしっかりと読んでいなければなりません。

書物の世界、もっといいかえれば、町に出るという言葉が行動全般を表すように、書とは勉学の世界でもあり学問の世界でもあり読書の世界でもあり探求の世界でもあり、静かな中で世界を知り人間を知り自分を知ろうとする世界です。

私は40数年前に一たんは書を捨てました。しかし当時、捨てた筈の書物によって学んだことや知ったことは、その後、いろいろな行動を為していくうえで大きな役割を果たしてくれています。

またその後に読んだ書物もそれ以上に大きな助けとなっています。

皆さんも、しっかりと本を読んで下さい、しっかりと勉学にも励んでください、しっかりと研究に励んでください。そして物事の本質や真実を見抜く力を養ってください。同時に新聞なども読んで世界や社会に起こっている事象にも関心を持ってください。時には静かな時間の中でしっかりと自分自身を見つめ下さい。と同時に自分の殻を破って外の世界にも打って出てください。

自らが1歩2歩と前に進むための行動をしてください。行動には、自らを変え、環境や境遇を変え、運命をも変えていく力が宿っています。そしてどうかいい時代を作っていくてください。それは何も大きなことや目立つことだけをしろという訳ではありません。どの世界に身を置いても、それぞれの使命感を持って、自らが恥じることのない生き方をして下さい。家庭なら家庭において、次世代を担う子供達を立派に育てていってください。仕事なら仕事において、しっかりと自分の使命や役割を果たしていってください。

知行一致、あるいは知行合一と云う言葉があります。知ること、つまり学んだことと行動を一致させることの重要性は、敬愛する吉田松陰が自分の生き方の中心においていた言葉です。

最後になりましたが、皆さんには皆さんを今日まではぐくみ育ててこられた保護者の方への感謝の気持ちを忘れないで下さい。

「特に」と云ってはなんですが、事情があっってお子さんを女手ひとつで育ててこられたお母さん、あるいは男手ひとつで育ててこられたお父さん、あるいは祖父母や親戚という立場で育てられてこられた保護者の方々への感謝の思いはしっかりと胸に刻んで欲しいと思います。その方々に私からも「本当にご苦労さまでした」の思いをお伝えします。

そういう生徒の皆さん自身にも、人には言えない苦労や悩みや悲しみもあったと思いますが、それ以上に、自分を今日まで育てて下さった方に深い感謝を抱いてもらいたいと切に願います。

・・・などなど、新たな地平線へと向かう卒業生達に伝えたいことでした。

2015.02.20 Fri

先週の14日の土曜日、高校の卒業式が挙行されました。

中高一貫生徒を含めた638名の卒業生、そして保護者や来賓の方々のご参加で2000名収容の体育館がほぼ満杯となりました。

「例によって」私は式次第に書かれた内容と違うメッセージを卒業生の皆さんに述べました。

その口頭でのメッセージは「苦境を救う魔法の言葉」と「世の中に変わらないものがひとつだけある」ということに敷衍した内容のものでした。今後の卒業生の皆さんの人生において、とくに苦難や困難に遭遇しいたとき、それらを乗り越えるための一助となってもらえればという願いと祈りを込めて、そのメッセージを皆さんに伝えました。

卒業生の皆さんには、新たな旅立ちへの不安や先生や学友達と別れる淋しさはあったでしょうが、それ以上に祝福と希望に溢れる素晴らしい卒業式となりました。式次第に掲載した式辞は以下の通りです（一部省略）

<卒業式 式辞>

ただ今、卒業証書を手にした全ての生徒の皆さん、卒業おめでとうございます。このお祝いの日にあたり、ひと言はなむけの言葉を述べさせていただきます。

英語でlifeという言葉は皆さんもご存知でしょうが、それを辞書で引けば、いくつかの意味が記されています。最初にでてくるのが「生活」という意味です。そしてもうひとつ「人生」という意味があります。だから英語でgood lifeと言った場合、「いい生活」と訳してもいいですし、「いい人生」と訳してもいいわけです。しかし、それを日本語にすると2つの言葉の意味がもし出すイメージは全く違ったものになります。

私は皆さんには「いい生活」というよりも、「いい人生」を送ってもらいたいと願っています。当然、いい生活というのは大事なものですが、しかしそれ以上に大切なことは「いい人生」、つまり「充実した人生」を送ることだと思います。物やお金に恵まれたいい生活だけでは真に充実した人生になることはありません。むしろ辛いことや苦しいことがあっても、それらを前向きに積極的に乗り越えていくときにこそ充実した人生になるでしょう。また自分だけの為ではなく、愛する家族や世

の為や人の為に生きてこそ、充実した人生になるでしょう。またさまざまな面で日々自分を高めていくことによって充実した人生になるでしょう。

lifeには別の大きな意味があります。それは「いのち」という意味です。命が地球上に誕生したのは40億年以上前と云われています。そして人類が誕生してから数百万年と云われていますが、今あなた方が生かされている命はその時から綿々と途絶えることなく引き継がれてきたものです。私達も最初は海に住んでいましたが、やがて陸に上がり、哺乳動物として進化し、そして今、意識をもった人間としてここに存在しているのです。命が誕生して以来の長い進化の歴史を通じて、今、まさにあなた方ひとりひとりがここにいるのです。それも単なる命としてではなく、自らを意識できる非常に稀有な奇跡のような存在として、今ここにいるのです。今ここにいることの不思議さを思ってください。ある哲学者は「太陽は素晴らしい、天空に輝く星々も素晴らしい、しかしそれらを素晴らしいと認識し賛美し賛嘆する自分がなければ、その太陽や星々の輝きに何の価値があろうか」と語っています。あなた方ひとりひとりがまさにかげがえのない素晴らしい命の表れなのです。どうか今生きていることに感謝をして下さい。

既に私はgood lifeという意味を紹介しましたが、今ここにいる皆さんのlifeそのものが無条件にgoodなものです。goodの語源はgodです。言い換えれば命とは神あるいは宇宙から与えられた賜物そのものです。だからこそ奇跡のように存在する自分の命を大切にするとともに、他者の命も大切にしていかなければなりません。それと同時にせつかく授かった命ですので、その命を積極的に前向きに活かしていかなければなりません。

私は積極的に前向きにということばを使いましたが、lifeには活気とか元気とかという意味があります。a face full of lifeと云えば活気に満ちた顔、あるいはイキイキした表情と云う意味になります。皆さんが授かった命をイキイキと活気にあふれて生きてこそ、その本来の意味を全うすることができるのです。バラはバラとして精一杯咲いてこそ、バラの美しさが際立つのです。神あるいは宇宙から与えられた命をイキイキと活気に満ちて生きてこそ、命本来の輝きがさらに増してくるのです。私のモットーの一つに「生きてイキイキ、死んでイキイキ」という言葉があります。後半の部分を説明すると長くなりますので単なる付け足しと思って下っていいのですが、少なくとも生きている限りはイキイキと毎日の生活を送ってもらいたいと願っています。

ただ長い人生です。イキイキと生きていても、辛いことや苦しいこともあります

。それでもそういった苦勞や困難からも何かを学び、それらを乗り越えていってこそ、自分の人生が輝き、「いい人生」さらには「充実した人生」になるものと確信しています。

最後に私の好きなサミュエル・ウルマンという方の詩の一節を紹介します。

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。

優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、

安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春と言うのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。

歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

．．．．．

求めて止まぬ探求心、人生への歡喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く 失望と共に老ゆる。

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

皆さんひとりひとりの将来が輝けるものとなることを祈念して、私からの式辞とさせていただきます。

2015.01.18 Sun



校長だより

発行・校長 温井史朗 2015年1月15日

始業式の放送で本校OBの故・やしきたかじん（家鋪 隆仁）さんについてお話をしましたが、たかじんさんが桃高新聞部時代に執筆した「桃陵（とうりょう）新聞」の記事（全て1967〔昭和42〕年11月3日号）が保存されていますので、生徒の皆さんに紹介いたします。



1月15日の木曜日、各教室にたかじん氏が桃山学院高校の新聞部の部員であった頃の記事を集め、生徒向けの「校長だより」として（始業式での約束どおり）各教室に掲示しました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

その記事には本校の文芸コンクールで「論文・評論部門最優秀作品」に選ばれたことや「NHKあなたのメロディー」でたかじん氏が作曲したCoffee-in-timeが選ばれスパイダースの演奏で奥村チヨさんに歌われたこと、またたかじん氏自らが新聞部員として書いた「主体性を貫け」という記事、それに「学校新聞検閲に思う」という記事が入っています。

その記事を読めば、今まで私が語ってきたのとは別の「たかじん氏」が感じられます。彼の音

楽的才能だけでなく、不正を嫌い、公を重んじる姿勢を感じます。

少し見づらくて申し訳ありませんが、たかじん氏に関する記事を集めた上記の生徒向け「校長だより」を掲載しておきます。

2015.01.10 Sat

読者の皆さん、あけましておめでとうございます。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さて、早速ですが、昨年12月24日に故やしきたかじん氏よりの寄付金が遺言執行人を通して本校の口座に振り込まれました（昨年12月25日のブログ参照）。

しかしその連絡を受けたのは2学期終業式やクリスマス礼拝が終わった後で、そのことを生徒達に直接告げることが出来なかったため、1月8日の3学期始業式の全校放送の放映で生徒全員に伝えさせてもらいました。

ただ中学1年生の2クラスには何かの故障で放送が入らなかったため、私が1クラスずつ出向いて話をしました。やはり放映ではなく、生徒達の表情を見ながら直接話ができることが嬉しい限りです。2クラスの担任は始業式の後に始まる実力試験の時間が迫っていたので「また校長の話が長くないか」とヒヤヒヤしていたはずですが・・・。

<3学期始業式挨拶>（一部省略）

私はいつも正月には「1年の抱負」というものを立てることにしています。つまりこの1年をどう過ごすかという決意です。

私の今年の抱負は「いつ死んでもいいように、悔いなく生きる」ということです。そういう私の抱負を聞けば、皆さんは「えっ校長死ぬつもりなんですか？」と聞かれるかも知れませんが、全く死ぬつもりはありません。それどころか、これからもしっかり生きるつもりで、私は27年計画を立てています。なぜ27年計画と言うと、3年前に30年計画を立てたから、今は27年となったわけです。いずれにせよ計画通りにいくと私は90歳を余裕で超えた歳になるのです。しかしいくら長期計画を立てていても「いつ死ぬか分からない」のが人間の運命です。

さてここで何名かの先生方や生徒達は「校長は正月早々どうして死ぬなんて縁起でもないことを云うんですか？」と思うかも知れませんが、そうではありません。人間は自分の寿命が有限であると意識した時から、今をしっかりと充実させて生きようとするのです。同時に、自分がこの世を去った後、みんなに何を残せるかと考えるわけです。少しでも次の世代に、特に子供達、更に云えばこれから生まれてくる子供達に何を残せるかまで考えるわけです。残すと云っても、それは必ずしも自分の残された家族に何かを残すということではありません。家族に何かを残したいというのは、それはそれで非常に自然な思いであるかと思いますが、それは単に自然なことではあっても特に立派なこととは言えないかもしれません。

やはり立派なことと云うのは、あるいは人間の使命というのは、この世の中を少しでも良くして、次の世代に託すということだと思います。そして何を残すかというその中身ですが、それは目に見える形で残す場合もあれば目に見えない形で残す場合もあるかと思っています。

実は、昨年12月24日の昼過ぎ、ちょうどクリスマス礼拝が終わった後ですが、ひとつの連絡

が私に入りました。それは私と同期の桃山学院高校の卒業生であり、私の大切な友人であったやしきたかじん氏、関西に住んでいる限り知らない人がいないほどの有名人ですが、そのやしきたかじん氏が、本校に1億円の遺産を残してくれました。そしてその1億円が桃山学院の口座に振り込まれたという連絡が弁護士の方から入ったのです。

非常にありがたい話だと感謝し、そのお金は同窓会の方々とも話し合っ、本当に有効に使おうと思っています。

さて先ほどの話に戻りますが、皆さんはその1億円は「お金というはつきりと目に見える形で、私達にたかじん氏が残してくれたもの」と思うでしょう。当然、はつきりした形での残し方ではありますが、そこにはたかじん氏の目に見えない思いが込められているのです。その思いとは何であるかをしっかりと私達は受け止めたいと思います。

その思いとは何であるかを知るヒントをたかじん氏はいくつか直接私に残してくれました。

ひとつは東日本大震災の後、たかじん氏と会った時、桃山の生徒に伝えて欲しいと私に云った言葉があります。それは「生きとうても生きられへんだ若者がいるんや。津波に流された命があるんや。そのことを忘れんと、その分、しっかりと生きんとあかん！！」という言葉です。

もう一つは別の時に会ったとき、「桃高が大学進学でも伸びているのは嬉しいけど、人間、頭の偏差値ばかりやったらあかんぞ、大事なのはハートの偏差値や」というものです。

そしてもうひとつは、これはたかじん氏が私にしてくれた約束ですが「いつか桃山で講演会をした。桃山の生徒を集めて講演会をした。言うとかけどオレが講演会するのは初めてやぞ」と云うものでした。結局、非常に残念なことに、その約束はたかじん氏の病気で実現できなかったのですが、そのとき私はたかじん氏に「講演会の内容はどんなにしたらええんや？」と聞いたところ、たかじん氏は「講演会では『萎縮すな！』と云うことをみんなに伝えたいんや」と私に強く言いました。たかじん氏は今の日本は全て、政治も経済も社会も教育もマスコミもそして個人個人も「みんな萎縮しとる」、だから「せめて桃山の生徒だけでも萎縮するな」と伝えたいんやと言っていました。

後日、たかじん氏が高校の新聞部の部長の時に書いた記事を教室に掲示して読んでもらいますが、それを読めば、当時からたかじん氏は非常に熱くて純粋な人間であると共に、曲がったことや不正なことが大嫌いな正義感の強い人だったと分かります。

障がいを持った子供のお母さんたち

2014.12.28 Sun

本校の宗教教育委員会が定期的に出しているピステイスという配布物があります。今年もクリスマス用のピステイスへ記事を書くようにチャプレンから依頼されました。例によって、今回も制限字数をかなりオーバーしてしまいましたので、既に配布されたピステイスの文末で、「止むを得ず」次のように約束してしまいました。

【「障がいを持った子供のお母さんたち」(Mothers of Disabled Children)というアメリカ人女性が書いたメッセージも紹介したかったのですが、ピステイスの字数の関係で断念せざるを得ませんでした。ご容赦下さい。もしよければブログ<校長だより>に紹介しておきますので、どうかお読み下さい】

ということで、今回は当ブログにて、改めてピステイスに書いた内容（トルストイの民話の紹介）のあとに「障がいを持った子供のお母さんたち」というメッセージを掲載させていただきます。

<ピステイス>

私の好きなトルストイの作品があります。正確に云うとロシアに古くから伝わる民話集です。奥さんも子供も全て亡くした貧しいお爺さんの物語です。お爺さんは地下室で靴の修理をして生計を立てていました。そしてその地下室の上には小窓がついていて、その小窓から通りを行く人達の足元を見ることができました。道行く人々の声もその窓から入ってきました。お爺さんは一生懸命靴の修理に励みながら、仕事が終わったあと聖書を読むのを唯一の楽しみにしていました。ある夜お爺さんは聖書を読んでいて眠り込んでしまいました。すると夢うつつの中にキリストが現れ「明日、私はあなたのもとを訪れる」と老人に告げました。老人は朝目が覚めてそのことを思い出しながら、それは単なる夢だと思いました。しかしそう思いながらも「ひよっとすると」という期待で、待つともなくキリストを待っていました。お茶も沸かしシチューも作って待っていました。

次の日、朝から寒い日でしたが、ひとりの疲れ切った老人がお屋敷の主人に命じられて辛そうに雪かきをしていました。今にも倒れそうな感じです。お爺さんはその老人を地下室に招き入れ、温かいお茶を飲ませました。そして昼過ぎになると今度は赤ちゃんを抱いた女の人が窓の外に立ちました。寒い日なのにその女の人は夏の薄着しか着ていません。お爺さんはその乳呑児を抱いた女性を地下室に招き入れました。その女性の主人は戦争に行ったまま帰ってこずに、今日食べるものにも困っているとのことでした。老人はその女性にシチューをふるまって赤子を包む古着を与え、お金もあげました。夕方になると今度は地下室の前の通りから子供を叱りつけている声が聞こえました。一人の貧しい家の子供がリンゴ売りのお婆さんからリンゴを取って逃げようとして捕まえられ、警察に突き出されようとしていました。お爺さんは慌てて通りに飛び出し、少年が取ったリンゴを自分が買い取るからと云って、お婆さんの怒りを鎮めて少年を諭しました。二人は仲よく通りを去っていきました。

日も暮れて夜になりました。結局、待っていたキリストは来なかったので、やはりあれは夢だと思い知り、聖書を読んで眠りにつこうとしました。

その時、人影が部屋の片隅に立っていました。その人影がお爺さんに「おまえには私が分からないのかね?」と話しかけました。お爺さんはその人影に「誰だね?」と聞くと、「私だよ」と云って最初にお茶をふるまった老人が出てきて微笑み、スッと消えました。

次に「これも私だよ」と云って、乳呑児を抱いた女性が現れて、また微笑みながらスッと消えました。

最後に「これも私だよ」と云うと、リンゴを手にした男の子とお婆さんが現れ、また微笑みながら現れてスッと消えました。

お爺さんの心は歓びで溢れました。そして読もうとしていた聖書に目をやると、このように書かれてありました。

「汝ら、わが飢えし時にわれに食を与え、渇きし時にわれに飲ませ、旅せし時にわれを宿らせたればなり・・・」

そしてページの終わりには次の言葉が記されてありました。

「汝ら、わが兄弟なるこれらのいと小さき者のひとりになしたるは、すなわちわれになしたるなり」(マタイ伝第25章)

私は何故かこの民話を読むたびに私が敬愛する女性を思い出します。重い障がいを持ったお子さんのお母さんです。私たちが窺い知れないほどの哀しみや苦しみや困難に打ち克ちながら、また終わりのない介護に従事しながら、一生懸命にその子供を育ててこられました。

その方が私に教えて下さった「障がいを持った子供のお母さんたち」(Mothers of Disabled Children)というアメリカ人女性が書いたメッセージがあります。以下にそのメッセージを紹介します。

<障がいを持った子供のお母さんたち> (一部省略)

Mothers of Disabled Children by Erma Bombeck

母親になる女性にはいろいろいます。思いがけなくなる人、自ら望んでなる人、周りのプレッシャーからなる人、またちよつとしたことでなる人。今年、約100,000人もの女性が障がい児の母親になります。どうやって障がい児の母親に選ばれるか考えたことがありますか?

私は神様が地球の上から注意深く母親を選んでおられるような気がします。

そこでは神様が天使達に大きな台帳に記入させています。

神様は次から次へと母親たちにそれぞれの子供を授け、その子供達を守るそれぞれの守護天使を決めていきました。最後に神様は天使達にある女性の名前をお伝えになり、「彼女には目の見えない子供を授けなさい」とおっしゃいます。

天使達は不思議に思います。「なぜこの人なのですか？とても幸せそうなのに？」

「そのとおり」と神様は微笑まれます。「笑いを知らない母親にどうして障がいを持った子を与えられよう。それは残酷なことだ」

「この人には忍耐力はありますか？」と天使が聞きます。

「あまり忍耐力を持ちすぎてもらいたくない。忍耐し過ぎると、絶望と自己憐憫に溺れてしまう。一旦ショックと憤りが収まれば、あとはなんとかやっつけていけるよ」

「でも神様、彼女はあなたを信仰していないと思いますが・・・」と天使は問いかけます。

神様は微笑みながら「全く問題ではない。大丈夫だ。彼女は最適だ。ちょうど良いくらいの身勝手さを持っている。」

天使は驚きの声を上げます。「身勝手さが長所なのですか？」

神様はうなずかれます。「時に子どもから離れることができなければ、長くは持たないだろう。この女性には完璧ではない子どもを授ける。今は気づいていないが、やがて人々にうらやましがられるようになるんだよ。彼女なら子供が発した言葉のひと言も当たり前だとは受け取らないだろう。子どもが初めて歩み出した時もその一歩を普通の一歩とは思わないだろう。子どもが「ママ」と初めて言えたとき彼女は奇跡を見たと思い知るだろう。目の見えない自分の子供に木や夕焼けを説明するとき、彼女も他の誰も見えないような目で私の作った自然を見ることができだろう」

そして続けて云われた。「彼女には私が見ている様々なこと、例えば無知や冷酷さや差別を見せてあげよう。そして彼女にはそれらを超えて生きさせよう。彼女は一人ではない。私は彼女のそばにいる、彼女が私のそばにいるように、私の務めを果たしてくれる彼女のそばに、私も片時たりとも離れることはない」

—
それでは皆さん、良い年をお迎え下さい。今年も「校長だより」を読んでいただきありがとうございました。

新年が皆様にとって、また困窮の中にある世界中の子供たちにとって、苦悩と絶望の中にある全ての人たちにとって、光あふれる希望の年となることを祈って、今年のプログを終わります。

サンタさんからのプレゼント

2014.12.25 Thu

昨日の終業式では昨年に引き続きサンタさんの格好をして校門に立ちました。今年は2度目のサンタさんということになります。慣れればサンタさんは癖になりそうです（笑）。他に2名の教員がサンタさんの格好で校門に立ってくれました。自治会やSBSの生徒達はトナカイの格好をして募金に協力してくれました。

また今回はクリスマスイブにふさわしい別の大きなプレゼントが卒業生の故やしきたかじん氏から授けられました（本校ホームページのNews & Topics参照）。

まさにたかじん氏はBig Santaさんです。しかし、たかじん氏は桃山にとってだけのBig Santaさんではありません。ここ何日か、たかじん氏が始めたOSAKAあかるクラブのメンバー達がグレートサンタランの収益で買ったプレゼントを難病に苦しむ子供達に手わけして届けに行っています。

昨年の2学期終業式では無償の愛の中にサンタさんはいると述べました。実際「人に喜んでほしい」とか「子供達の笑顔が見たい」とか「困窮の中にある人達に何とか手を差し伸べたい」という思いの中にこそサンタさんはいると思います。そしてその思いを行動に移す人こそサンタさんだと思います。

今思うことは、サンタと字こそは似ているけれども、人の心の中にはサタンが宿る場合もあるようです。欺瞞、強欲、虚栄、虚偽、憎悪、陥穽など、サンタとサタンは一字違いなのに、かくも違いがあるんですね（この記事を書きながら、まさに今気付きました）。その人の本質自体は悪くなくても、一度闇の中に足を踏み出せばなかなか元には戻れない場合もあるかもしれません。自戒しなければと思います。

そして無関心……。

今回は生徒達に世界への関心をもってもらうために以下のような話をしました。

<2学期 終業式挨拶>

皆さん、おはようございます、そしてメリークリスマス。

早いものでもう1年ですね。去年は確か「なりきることの大切さ」を話したかと思います。さっきまで私はサンタさんになりきっていました。

今日はクレイグ君という人のお話をさせてもらいます。クレイグ君と云っても誰ひとり知らないと思いますが、2000年当時、私と共に本校にいた教職員は全員クレイグ君を知っています。2000年というのは2001年に本校が国際コースをスタートさせた前の年です。2001年は初めて女子生徒40名を国際コースの生徒として受け入れた年でもあり、本校が男女共学校としてスタートした記念すべき年です。その国際コースを始めるに当たっての記念講演のゲストとして招いた人が当時17歳のカナダ人の少年のクレイグ・キールバーガー君です。

その講演会は、カナダ大使館や大阪府や大阪市の教育委員会、読売新聞社、朝日新聞社、あるいは日本弁護士会の協力を得て、一般の人対象に実施したのですが、カンタベリーホールに人が溢

れるほど多くの人たちが彼の講演会を聞き集まりました。当時はまだアンデレ館もダビデジムも完成していませんでした。さてそのクレイグ君とはどういう人でしょうか？

実は彼が12歳のある日まで、ごく普通のカナダの少年でした。その12歳のある日、彼がマンガを見ようとしてたまたま読んだ新聞の1行の見出しが彼を変えてしまいました。彼が目にした一行には、「子供の強制労働に反対していた12歳のイクバル君というインドの少年が射殺された」というものでした。イクバル君という少年は幼い頃から劣悪な環境のもとで絨毯を作る仕事に朝から晩まで強制的に働かされていましたが、ある日N G Oの助けで彼はそこからの脱出に成功し、小さい子供ながら「子供の強制労働の過酷な現実」を訴え続けてきました。訴えるときには片手に絨毯の切れ端、そして片手に鉛筆をもって訴えるのでした。絨毯は彼が朝から晩まで自分が作らされていたもので子供の強制労働を表す象徴でした。そして片方の鉛筆は「子供達に必要な教育」を表すものでした。そのイクバル君が子供に強制労働をさせて利益を得ている何者かによって射殺されたのです。その記事を読んだクレイグ君は、非常に強いショックを受けました。そしてその日学校に行って、クラスの前でそのことをみんなに述べ、「自分たちに何かできないか、何かしようと思う人は手を挙げて欲しい」と訴えました。するとポツポツと手が挙がりだし、結局12人の子供達で「子供の強制労働反対」の運動を始めました。最初、その運動は「12歳の12人の運動」というような名前を付けたらしいのですが、すぐに13歳になる仲間が出てきたので、自分たちの運動をフリー・ザ・チルドレンと名付けるようにしました。フリーというのは自由という意味と自由にするという意味があります。ですからフリー・ザ・チルドレンは子供を強制労働から自由にする運動です。現在、その会員数は子供や若者を中心に世界で百万人を突破し、今まで建てた学校が650校以上、そして5万5000人の子供が学校に通えるように支援をしています。

12歳のひとりの少年から始まった運動がこのようになったのです。

実は先日、私は日本に来たクレイグ君と会ってきました。15年ぶりです。

クレイグ君は私のことをとてもよく覚えていてくれ、ふたりで焼き鳥を食べた話まで懐かしそうに話してくれました。

さて、皆さんはそういったクレイグ君を特別な人だと思われるでしょうか？当然そう思われるかもしれませんが、クレイグ本人も云っているように全く特別な若者ではありません。最初にクラスのみんなの前で、新聞に書かれていたことを紹介して、「子供の自分達にできることは何かないだろうか？」と訴えた時には、声もかすれ膝がガクガク震えていたそうです。ただそういったクレイグ君を動かしたのは、自分と同じ子供が世界で想像を絶する環境に置かれているという事実を知ったことと、それを何とかしなければならないという強い思い、そしてとにかく最初の一步を踏み出す勇気であったかと思います。

最初に云いましたようにクレイグ君という名前をほとんど全ての人は知らなかったと思いますが、あと数年内にここにいる全ての人、あるいは世界の多くの人にはクレイグ君という名前を知るようになるかもしれません。おそらくそうなると思います。ノーベル平和賞の受賞者として知るようになるでしょう。すでに3回も彼の名前はノーベル平和賞の候補としてノミネートされています。

しかし、彼の夢は「ノーベル賞を取る」という、そんなちっぽけな（ちっぽけと云えば語弊があるでしょうが）夢ではありません。先日、私に語ってくれた彼の夢は「世界に強制労働に従事させられている子供達がゼロになる」というものです。

クレイグ君が運動を始める時には約2億5千万いた強制労働をさせられていた子供達は現在、約1億7千万人になっているそうです。0になるまではまだまだ遠い道のりですが、私達はしっかりとクレイグ君やクレイグ君がしているような活動、つまり本校のSBSやボランティアサークルの運動を応援していきたいと思います。道は少し違いますが、私自身も、何とかクレイグ君と同じような夢をもって進んでいきたいと思っています。ちなみにクレイグ君が本校で記念講演をしたときのポスターは中学、高校の大きな職員室の横に貼ってあるので皆さん見ておいてください。

本日、SBS募金に寄付して下さった皆さん、本当にありがとうございました。サンタさんに成り代わってお礼を申します。メリークリスマス。それではよいお年をお迎え下さい。

* <http://www.ftcj.com/about-us/history-ftc.html>

たかじん氏にも見てもらいたかった！

2014.12.03 Wed

11月30日、私が顧問の一人として関わっている*OSAKAあかるクラブ主催の*大阪グレートサンタランが大阪城公園で行われました。故たかじん氏の大阪への熱い思いを受けて設立されたOSAKAあかるクラブ主宰のサンタランです。今回、参加人数が初めて10,000人を超えました。桂文枝師匠も応援に駆けつけて下さり、サンタの格好をして私と共に人文字を描くハートの輪の中に入りました。人文字を描いてそれを空からカメラで映すというのものです。さすがに白いサンタの髭をつけた師匠（髭は急遽私の髭を貸しました）は分かりにくかったのですが、それでも師匠の回りの何人かは師匠に気づきました。空中撮影にはヘリコプターだけでなく小型の無人ヘリコプターも私達の頭上を旋回していました。そのとき師匠は「温井先生、アレなんでんねん？」と聞かれたので、私は「アレは無人のヘリコプターで僕らのハートを撮影してるんですわ」と答えたところ、師匠は「はあ〜そうでっか、えらいもんでんな〜」と感心されました。ところが同時に空を飛んでいる2羽の鳥を指差して「あれもそうでっか？」と聞かれたので、私は真面目な顔で「いえ、師匠、あれはカラスというものです」と答えました・・・。

師匠はたいした方です・・・。何が「たいした方」というと、もちろん落語家としては名実共にたいした方ですが、それだけではありません。以前たかじん氏が私に云った*「大事なのはハートの偏差値や」という言葉を思い出させる人です。そういったハートの偏差値が極めて高い方です。そしてとてつもなく子供好きな方です。

その後、私もスタート地点に設けられた2つある高い塔の片側の塔に登らされました。師匠はもう一方の塔に登り、用意スタートのピストルを撃ちました。そのあと師匠はひとつのグループのサンタ達（約3000人）を手を振って見送られた後、下へ降りて子供サンタ達と遊び始めました。師匠に代わってスタートのピストルを撃ったのは心臓血管外科で有名な大阪大学の*澤芳樹先生です。今回はサンタラン実行委員長として、総勢100名を超えるドクターや看護師さんと共に参加していただきました。

それにしても10,000人というサンタの集まりは圧巻です。大阪城公園がサンタ達で埋め尽くされたという感じです。聞くところによるとその数はラスベガスに次いで世界第2位の記録だそうです。来年はそれを抜いて世界1を目指そうという気持ちを私達メンバーは共有しています。実施後2年目にして参加人数が500名を超えた時点でたかじん氏も大いに喜んでいました。今回のこのサンタさん達を見てもらえれば、その感慨も感激も非常に深いものであったでしょう。「本当にたかじん氏に見てもらいたかった！」というのがOSAKAあかるクラブメンバー全員の思いでした。

私も東日本大震災の年からクリスマス（2学期の終業式の日）にはたった一人でサンタの格好をして*SBSや自治会の生徒達と共に校門に立ち（2年目からは教員がトナカイに「進んで」なってくれました）、それなりにヒトリサンタの孤独（?!）を味わってきたのですが、今回は大勢のサンタさん達の難病の子供達を想う気持ちに囲まれ、何とも云えない温かな一体感に包まれました。私も塔の上で、多くのサンタ達にGod bless you! God bless children!の祈りを込めて手

を振り続けました。但し、サングラスをかけた私のサンタ姿を「怪しいサンタ」とみた人も多くいたようですし、ひとつのグループには校長ということがバレてしまいました。あわてて私も髯を借りて付けましたが・・・（下記写真）。

閑話休題

日本にサンタランを初めて私達に紹介してくれた女性がいます。矢野舞さんという女性です。塔の上の私の横で写真を撮り続けていた女性です。その女性は日本のどこかで「サンタラン」をしたいという申し出があれば、そしてそのサンタランの開催が主催者の利益ではなく、子供達の喜びや福祉や公共性に結びついたものであれば、喜び勇んでサポートに駆けつける女性です。本当にこの人は大丈夫かなあと周りのボランティアさん達でも心配するほど、誰もが認める「優し過ぎるほどの人」です。その優し過ぎるほどの彼女を猛烈な行動（?!）に駆り立てているのは子供達に対する純粋な気持ちです。

さてその舞さんに私は「10,000人も達成できて嬉しいでしょう？あなたの苦勞も報われましたね」と云うと、すかさず「そんなことよりも難病の子供達へのプレゼントが増えるのが嬉しいです」という答えが返ってきました。

ここにもひとりの本物のサンタさんがいました。

<参照>

OSAKAあかるクラブ <http://akaruclub.jp/>

大阪グレートサンタラン<http://www.santa-run.com/>

澤芳樹先生<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/surg1/www/about/SawaYoshiki.html>

SBS(School By School) <http://www.momoyamagakuin-h.ed.jp/sbs/index.html>

矢野舞さん<http://fm-osaka.com/otona/?p=2142>

ハートの偏差値<http://nukkun46.jugem.jp/?eid=65>

<サンタ関連ブログ>

「サンタになりました」<http://nukkun46.jugem.jp/?eid=135>

「サンタはいるよ」<http://nukkun46.jugem.jp/?eid=152>



<真ん中の怪しいサンタが私です>

2014.11.27 Thu

宗教週間ということで朝の放送で全生徒向けに話をさせてもらいました。「お祈りの後の5分間で聖書に関係する話を」というなかなか難しい注文をチャプレンから受けました。〈?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

ということでイノシシの話をしました(?!)

<イノシシ>

皆さんおはようございます。校長の温井です。ここ何年か本校では目に見えて遅刻者の数が減ってきています。いい傾向だと思います。ところで昔、担任をしていたとき、遅刻した生徒が述べた言い訳のベスト3は「目覚ましが壊れていたんです」、「おかあちゃんが起こしてくれなかったんです」、「自転車のチェーンが外れたんです」というものでした。そのとき、同じような言い訳が多かったので、私は、「たまには『玄関を出ようとしたら大きな象が倒れていて玄関を出られなかったんです』とか『学校近くまで来たのにUFOにさらわれかけたんです』というぐらいのスケールの大きな言い訳をしろ!!」と言ったことがあります。

それはさておき、この間はロバの話をしましたので、今日はイノシシの話をします。

私の父親は従業員を何名か抱えた工場を営んでいました。その父親が、倒産する危機の時、特に明日お金の都合がつかなければ工場もつぶれ従業員の給料も払えなくなると云うピンチのとき、自分自身に言い聞かせていた言葉があったそうです。その言葉を自分に言い聞かせて眠りにつくことが何回かあったそうです。それは「山より大きなイノシシは出てこんわ!」という言葉です。おもしろい言葉ですね。なるほど大きなイノシシはいるけれど、いくら大きくてもイノシシが住む山よりも大きなイノシシはいないわけです。さてその言葉で父親は何を云おうとしていたのでしょうか?

おそらく父親はお金の工面をするために一日中いろんな努力をしたと思います。しかし、もう夜になってこれ以上のことはできなくなり、後は明日最後の努力をしなければならない、それにはひとまず今晚はしっかり眠って、明日に備えなければならないという状況になっていたと思います。そういうときに父親が自分自身に言い聞かせて眠りにつけた言葉として私に教えてくれたのが「山より大きなイノシシは出てこんわ!」という言葉です。

もし父親が聖書に出会って聖書を読んでいたら、次のような言葉を自分自身に言い聞かせていたと思います。それは「明日のことを思い煩うなかれ、明日のことは明日自身が思い煩うであろう。今日一日の苦労は今日一日で足れり」という言葉です。いい言葉ですね。真ん中を省略して言うと「明日のことは思い煩うなかれ、今日一日の苦労は今日一日で足れり」となりますね。これは私が大好きな聖書の言葉、というより教えのひとつです。マタイ伝の第6章にあります。

皆さんも、どうか、一日一生懸命努力したけれど、それでも明日のことや将来のことが心配で眠れないときには、この聖書の言葉を思い出して下さい。

私の父親がいったイノシシの言葉は忘れてもらっても結構です。聖書の言葉を胸に刻んで下さい。これで私からの話を終わります。

直感です！

2014.10.26 Sun

今年度の第一志望校宣言もほとんど終盤に近づいてきました。自分たちが一番行きたい大学（第一志望大学）とその理由を書いた宣言書を校長室で私に直接手渡す恒例の行事です。今年で6年目です。宣言書を手渡すと同時に私と直接問答をする事になっています。今年度も素晴らしい宣言書や力強い宣言が多くありましたが、私が校長6年目で初めて経験するユニークなものもありました。

そのうちのひとつは自分の行きたい大学を書いた大学名の下の理由の欄にわずか2行しか書かれていない宣言書です。

その2行とは次のようなものです。

「直感です。あくまでも直感です！！」

その2行を見たとき、私は何となく妙な感銘を受けました。思わず「そうか直感か、直感は大それたことや。じゃ頑張ってください」と直感的に述べてその生徒との話を終わりにかけたぐらいでした……。しかしもちろんそれで終わらす訳にはいかないのです、私はその生徒にこのように述べました。「君は冬に雪をかぶった富士山を目にしたとき直感的に「冬の富士山に登ろう」と思ったとします。そしておそらくその直感素晴らしいと思います。しかしそのまま直感に従って冬の富士山に登りますか？おそらく頂上に着くまでに直感が間違っていたと思うかもしれません。しかしそれは直感が間違っていたのではなく、その直感を生かすことをしなかったことが間違いなのです。冬の富士山に登るには、直感に動かされながらも、周到な計画を立て綿密な準備やトレーニングをしなければならないでしょ！」と云う旨のことを伝えました。

閑話休題

以前読んだ洋書にブリンク(blink)というのがありました。blinkとはマバタキという意味の他に「ほんの一瞬」という意味があります。書いてある内容は「世界を変える発明や発見の多くは一瞬のひらめき（直感）の中でなされた」というようなものです。その例としてアインシュタインが相対性理論を発見するのは一瞬だったという事実が挙げられていました。但し（この「但し」以下が印象的なのですが）アインシュタインは彼の中に閃光のようにひらめいた相対性理論を理論化するのに何10年もかかったというものです。細部は忘れたのですが、なかなかおもしろい本でした。

話を元に戻します。

別のユニークな宣言がありました。正確に云うとユニークなのは宣言にきた生徒です。その生徒はなんと計4回校長室にやってきました（その内1回は私が接客中で顔を見ただけなので厳密には3回です）。さてその生徒の最初の校長室での宣言はごく普通の宣言だったのですが、2度目の自主的な校長室訪問では、「あの時の宣言（最初の宣言）で僕は本当に気合いが入りました。それからしばらくは必死で勉強できたのですが、あのときの気持ちが薄れてきたので、もう1度気合いを入れて下さい」というものでした。そこで僕は「よっしゃ！！」ということで、しっかりと彼と握手をして彼に見えざる気合い（?!）を入れました。しかしそれからさらに「気合

いの注入」を依頼しに校長室に来ました。4度目はさすがに私も「アントニオ猪木ならビンタをするところやなあ」と述べると彼は「目を輝かせて『お願いします』と答えました。が、さすがにビンタはしませんでした。それ以来彼は来ていませんので、おそらく気合いは入ったのでしょう。

今回も生徒達はそれぞれが本当に自分なりの目標を持ち、それに向かって必死で勉強しているんだなあと実感しました。

今年度も素晴らしい宣言書がありました。最後にそういった短いながらも素晴らしい宣言書の一冊を紹介させていただきます。本校には教員志望をする生徒が結構多くいるのですが、その生徒もその一人で国立の教育大学を志望しています。そしてキラキラと目を輝かせて第一志望校宣言をしてくれました。以下はその宣言書に記されていた志望理由です。

私はこの桃山学院高校が志望校ではありませんでした。この学校に通うと決まってから高校1年の初め頃まで、憂鬱で仕方がありませんでした。

しかしそんな思いも高1の体育祭の頃から薄れていきました。それは教育熱心な先生方や、いつも傍らにいて支え合える友人やクラブの仲間ができたからだと思います。クラブ活動という自分が本当に打ち込めることにも出会うことができました。

3年間（今はまだ2年半ですが）、毎日が惜しいほど充実していました。楽しいこと、嬉しいことだけでなく、辛かったこと、悲しかったことも沢山ありました。しかし、その全てが今の私を創っていると思います。

私はこの桃山学院高校に入学することになって本当によかったと思います。だから私は私の後輩、つまり今後桃山学院高校に入学する後輩たちに同じ思いを抱いて欲しい、そう思って桃山学院高校の教諭になりたいと思いました。そのために、今、そして大学生になっても、努力を惜しまず日々精進していきたいと思います。

以上

世の中変えるのは若者、よそ者、変わり者

2014.08.26 Tue

8月25日に始業式を行いました。今回の始業式は、中学生全員はトリニティーホール（大講堂）で、高校生は今学期から中高の全教室に設置された最新式の電子黒板を使っの（トリニティーホールの始業式の）実況放送で行いました。

今回は「世の中変えるのは若者、よそ者、変わり者」の話、特に「変わり者の話」を私自身を実例に出して話しました。

<始業式挨拶>（前半部省略）

今、この放送を聞いている人は自分自身を変わり者だと思っていますか？あるいは自分の両隣の人についてはどうですか？右の席の人はかなり変わっているなあ、しかし左の席の人よりマシかなあ、と心で思っているかも知れませんね。あるいは自分自身が気付いていないだけで、ひょっとしたら貴方が一番変わっているかもしれません（生徒達から笑い声が起こりました）。

このように云う私自身はかなり変わり者だったと思います。特に小学生から高校生にかけてはかなりの変わり者でした。

一例を挙げますと、小学生か中学生のとき、鶴亀算というのを教えてもらいました。皆さんは鶴亀算を知っていますか？問題は「鶴と亀が9匹います。足の数が全部で26本です。さて鶴が何匹、亀が何匹いるのでしょうか」という問題ですね（実際は鳥は何匹ではなく何羽で数えるので、この問題の提示の仕方はおかしいのですが、このことは本題と関係がないのでおいておきましょう。こういうことに拘るのも私が変わり者だからかも知れませんね）。いずれにせよ、鶴とカメが集まっているという問題が出されたわけです。私はその問題を聞いた瞬間にその解答を考えるのではなく、全く違う世界に入ってしまう。「何で鶴と亀が9匹もいるんやろう？どんな池にいるんだらう？みんな集まって何をしてるんやろうか・・・」と全く問題の解答とは関係のない世界に入ってしまうのです。当然、先生に当てられても「ハア～??」という感じで答えることはできませんでした。先生や他の生徒からは白い目で見られていました。それは私の「変わり者」のほんの一コマです。自分自身は自分を全く変わり者だとは思わなかったのですが、さすがに大学生になって「ひょっとしたら自分は変わり者ではないか」と分かり始めました。とにかく皆といるより一人であるのが好きで、部屋に閉じこもってドストエフスキーというロシアの作家の本ばかりを読み耽ったり、アルバイトをして得たお金で一人旅ばかりしていました。

確かに私は変わり者でしたが、人には恵まれていました。みんな変わり者の私を排除するのではなく、今から思えばみんな私をそっとしておいてくれました。「まあ、あいつはあんなやっちゃ」というような感じです。

私自身桃山学院高校の卒業ですが、そういう意味では、今と同様に昔もお互いの個性を認め合う非常にいい校風の学校でした。特に私みたいな変わり者の生徒にとっては非常に過ごしやすい学校でした。先生方も生徒に劣らずかなり変わった優秀な先生方も多かったように思います（こ

でも笑い声が起こる)。

そのおかげで排除もされず嫌がらせもされず、自分なりの道を歩んでこられたのはありがたかったと思っています。

どうか皆さん、変わり者と思われる人がいれば、その人を大切にしてください。変わり者と見ずにユニークな個性とみてあげてください。そして変わり者には、世の中を変える力をもつ可能性がある事も知ってください。ベートーベンやゴッホなんかは非常に変わり者でした。IT革命をもたらしたステーブンジョブズやビルゲイツも非常に変わり者でした。iPS細胞でノーベル賞を取った山中教授も昔は非常に変わり者だったということです。

「世の中を変えるのは、若者、よそ者、変わり者」という言葉があります。

面白い言葉ですね。先ずはあなた方が世の中を変える力を持つわけです。ここにいる皆さん(中学生)もこの放送を聞いている皆さんも(高校生)も今の世界を「より良き世界」に変える力をもっているわけです。明治維新も高い理想と志をもった多くの若者の力によって成し遂げられたといっても過言ではないでしょう。また「よそ者」の力も必要です。確かに日本の国を変えたのは黒船を始め、外からの力、つまり私たちにとって「よそ者」の力があつたことは否定できないですね。そして「変わり者」です。みんなと違う視点から物事を見て、みんなと違うアプローチの仕方をして、みんなが常識と思っている科学や世界の枠組みを変える力を持つわけです。

まあ私なんかビルゲイツや山中教授の足元にも及びませんが、何を云いたいかと云いますと、日本では特に人と違っているということに対してプレッシャーをかける傾向があるということです。日本ではみんなと同じということに重きが置かれるということです。よく皆さんは「みんながそうしているから、自分もそうする」と云いますが、そういったことが昂じると、みんなと違うあり方や生き方の人を否定したり排除する危険な方向にいつてしまいます。人はそれぞれ違うからこそいいのです。その違いが大きい場合もあれば小さい場合もありますが、お互いにその違い、つまり個性を認め合つてこそ、各自の成長や世界の進歩があるのです。

少なくとも桃山はこれからもずっとそういう学校であつてほしいと願っています。全ての人が安心して自分の個性を輝かすことのできる学校でなければなりません。

私たち教職員も生徒の皆さんの個性や自主性を大切にしていますが、どうか皆さんもお互いの個性や自主性を大切に、日々の学校生活を充実させて送ってください。

2014.08.06 Wed

月に一度は最低限「校長だより」を発行しようと思っていたのですが、7月は忙しさにかまけてスキップしてしまいました。何名かの方から「どうかしたんですか？」という気遣いの言葉をいただきました。ありがたいことです。

昨日（8月5日）まで、私は千駄ヶ谷の東京体育館に行っていました。インターハイに出場したバレーボール部の応援です。今回はバレーボールだけでなく、アーチェリーや陸上部もインターハイの出場が決まり、つい最近の水泳部のインターハイ出場も決まりました。バレーボールについては46年ぶりのインターハイ出場だそうです。今回は日程的に可能なバレーボール部の応援に参加しました。

昨日の試合でバレーボール部は見事8位入賞を果たしました。3日に行われた1試合を抜かしただけで計4つの試合を観戦しましたが、それぞれ強豪校を相手にした手に汗にぎる試合でした。ある親しい校長には「まあ初出場といえる出場で8位以内に入るなんて奇跡みたいですね」と失礼（?!）なコメントまでいただきました。

さて7月には何ととっても7月27日の中高同窓会の100周年があり、太閤園の大きなホールが500名近い人たちで埋まりました。後からの申し込みは会場の関係で断らざるを得なかったとのことです。

同窓会前から本格的に始めたフェイスブック（と云ってもまだ使い方もままならないのですが）にも書いたことですが、その会場では、余り懐かしくない顔（いつも顔を合わせている本校教職員）は別にして、多くの懐かしい顔に出会うことができました。本当に盛大で活気あふれる桃山らしい記念式典でした。その式典では本校卒業生の7代目月亭文都師匠（1960年生まれ）を初めとする落語も聞かせてもらいました。式典終了後は、私と同期（66期生）の同窓生達と場所を移しての宴席となりました。同窓生というのありがたいもので、会えばすぐに「オレ、オマエ」の関係に戻ります。また既に「先に逝ってしまった」同窓生達の話しにもなります。またその宴席でもやはり「お前、なんで伝統ある男子校の桃山を共学にしたんや」という無理解にして頑迷なコメントをもらいました。また反対に「やあ、今日の同窓会は多くの女子の卒業生達もいて実に華やかやったなあ。男女共学バンザイ！」という理解ある好意に溢れたコメントももらいました。

その2日後には私が顧問をしている「OSAKAあかるクラブ」の5周年及び新理事長就任パーティーがありました。もともとOSAKAあかるクラブは私と同じ66期の卒業生であるやしきたかじん氏が「もっと大阪を輝かせようやないか！」という大阪への熱い思いと酔っ払った勢いで始めた会であります。今ではサンタクロースの格好をして走るサンタランなどの活動で有名になってきています。あかるクラブのメンバーからは「サンタランは歩いてもいいので、先生も参加しませんか」という実に失礼な誘い方での誘いを受けています。その新理事長には私が担任をしていたF君がなりました。F君は大手広告会社での重職に就いていますが、たかじん氏からの信任

も厚く、公私にわたって可愛がられていました。新理事長就任もたかじん氏の体調が悪くなったとき「F、おまえやれ」ということで決められたそうです。

閑話休題

このページの前文で私は「フェイスブックに書いたことですが」と云ってしまいました。実は7月の終業式の校長挨拶で「私は時間がもったいないのでフェイスブックもラインもしていない」と生徒達に述べたにもかかわらず、です。言い訳をしますと、実はフェイスブックには「時代に乗り遅れますよ」という知人の言葉にまんまと乗せられ、数年前に登録をしてしまいました。ただ登録はしたけれど、今回の中高同窓会100周年があるまで「ほっとらかし状態」にしていました。それを懐かしい卒業生達に100周年を知らせるために今回を機に再開をした訳であります。おかげで「OSAKあかるクラブ」で撮られた写真（バカ殿の格好をした新理事長とのツーショット）まで掲載され、恥ずかしい思いをしています……。

終業式で全生徒に対して話した「校長あいさつ」を載せておきます。タイトルは「ロバの話」です。

<終業式でのロバの話>

今日はロバと老人とその孫である子供の話をします。この話はもう既に皆さんにした話かもしれません。もし既に話した話だとしても初めて聞くような感じで聞いてください。

以前、担任をしていて何かの話をしたとき「先生、その話は2回目ですよ」とか「3回目ですよ」と教えてくれる生徒がいました。そういうとき、私は「君、人間年を取ったら記憶が薄れ同じ話を何度とするもんや。そんなときは優しい気持ちになって、初めて聞くような態度をとることが大事なんや。家でおじいちゃんやおばあちゃんの話をするときには、例え同じ話でもそういう優しさを持たんといかんよ」と言ったりしました。まあ、私の場合、若い時でも同じ話はよくしてはいました。またそういったことを指摘した生徒には時として「同じ話でも、以前話したときと季節も温度も湿度も雰囲気も違ってるはずやから、また違うふうに分かなければならない」と言ったりもしました。（ここで私は「多感な高校生のときに読んで身も打ち震えるほどの感動をした本も、オッサンになって読むと「何じゃ、これ」という場合もある」というような話もしたような記憶があります……）。

話を元にもどします。ある時、老人と少年がロバを連れて遠くの町に買い物に行きました。その途中である村を通りかかった時、その村の人達が「あの人たち、頭がおかしいんじゃない、どちらかがロバに乗っていけば楽なのに」と言って笑うのが聞こえました。そこで老人がロバに乗りました。するとまた違った村を通りかかり、そこの人達は「なんてひどい老人なんや、自分はロバに乗って、あんな小さい子供を歩かせるなんて」と言っているのが聞こえました。そこで今度は子供をロバに乗せました。すると次の村で出会った人達は「なんてひどい子供なんや、あんな老人を歩かせるなんて」と言っているのが聞こえました。そこで今度は老人と少年の二人がロバに乗りました。すると次の村で出会った人達は「あの老人と少年はなんと残酷なんや。二人もロバののってロバが可哀想や」と言うのが聞こえました。そこで二人はロバをおりました

。そこで老人は一言「やれやれ世の中みんなをみんな満足させることはできやせん！」と言いました。そこで二人は疲れ果てトボトボと家に戻りました。

さてこの話で私は何を云おうとしているか分かりますか？

フランスのサルトルという哲学者は「他者のまなざしは地獄を作る」と云っています。さて、どうでしょうか。「他者のまなざしは地獄を作る」という意味は分かりますか？要するに（要約し過ぎですが）「人の目ばかりを気にしてはアカン」ということです。「人が自分をどう思うか、自分は皆からどう思われるかばかり気にしては、お互いに辛くてしんどい状態になってしまう」ということです。

特に日本では「仲間と同じ」ということや「みんなと同じ」ということに重きが置かれていますが、そればかりを気にすると結局は自分自身の人生を苦しめてしまいます。自分自身の内在的で主体的な成長がありません。どこかで自分は自分であるというあり方や生き方が大切です。

なぜこのようなことを話したかという、前にも述べたことですが、最近の若者達の多くはラインなどでの関係に疲れているからです。いわゆる既読スルーしたり返事が遅れたりすることが、大変なことのよう思っていて、仲間はどう思われるかが気になって、結局はお互いに足を引っ張り合っている状態にもなっている、さらにはライン外しということでイジメや仲間はずれの原因になったりもしていると云われているからです。まったくくだらないことだと思っています。

そういう意味では、あえて、時間をもったいないのでスマートフォンをもたないとか、お互いに気を使い合うのがいやなのでラインをしないという生き方をしている若者達は、実に見込みがあります。またお互いにルールを決めてラインをしている若者達も、結構見どころがあると思います。

なるほど友達は大切ですが、本当の友達というのは単に噂話やお喋りを楽しむだけの友達ではありません。まして簡単に仲間になったり仲間外れにするような関係ではありません。足を引っ張り合ったりするのも本当の友達ではありません。それは友達というより単なる仲良しごっこのおしゃべり仲間です。おしゃべり仲間の仲間内だけの話と云うのは、たいがいは超ミクロのどうでもいいような低次元の話題が多いように思います。そういう仲間内ではウクライナやイラクで何が起きているようと興味なく、好きな人とだけ会話し、流行ってる音楽だけを聴き、他人がすごいよという記事や写真だけをチェックし、みんなが行くところだけに行くという非常に狭い世界に入ってしまうのです。ネットの世界においても同じことが云えます。ネットやラインは狭い世界に人間を閉じ込める危険性があります。私も敢えてラインもしませんしフェイスブックもしていません（⇒前述したように卒業生と連絡を取るためフェイスブックを始めたので、この部分は訂正しなければなりません）。

例えばナイアガラの滝という有名な滝がありますが、それをネットで見ても、全くナイアガラの滝を体験したことにはならないのです。直接、バスで行ってみて、バスを降りた所の遠くから足元に伝わる地響きを感じ、遠くから飛んでくる水滴を肌を感じ取りながら、滝に近づいていき、そして巨大なナイアガラを目の当たりにナイアガラの存在を5感で感じ取って初めてナイアガラの滝に出会うのです。人との出会いも同じです。人を真に理解するには、その人と向い合な

ければなりません。その人に関するネットでの情報をいくら集めても、その人の表面しか知ることができません。またいくらラインなどで関係を構築しても、すぐに壊れる表面的な関係でしかありません。

私は常に、真の友人とは、ただ単に愚痴を言い合ったり、人のうわさ話をしあったりするのではなく、直接面と向かいあって、哀しいことがあれば共に泣き、嬉しいことがあれば共に喜び、共に励まし合い、共に互いの成長を促し合うのが真の友人だと思っています。

今日から皆さんは夏休みに入りますが、どうかラインなどで時間を無駄にするのではなく、ましてやイジメを助長するような関係を構築するのではなく、しっかりと主体的に自らを鍛え、自ら考え、自ら学び、自らこの夏休みを充実させたものにしてもらいたいと願っています。高3生の皆さんは入試に向けて、悔いのない勉強に今いっそう励んでください。

これで私からの挨拶を終わります。

2014.06.30 Mon

先週の土曜日（6月28日）、本校男子バレーボール部のインターハイ出場の祝賀会が保護者会の主催で開催されました。私も学校代表としてお招きいただき、インターハイ出場の祝辞と共にインターハイでの活躍に向けて激励の言葉を述べさせていただきました。生徒・保護者・教員はもとより前顧問で今は80才になられた元体育科教員の粥川先生やバレー部OBの方々などを交えて、非常に活気ある壮行会ともなりました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

今年度は、男子バレー部だけでなく、藤木豪心君のモーグルでのジュニアオリンピック優勝に続き、陸上部やアーチェリー部からもインターハイ出場の選手が決まり、クラブ活動にも盛り上がりを見せています。

さて、今日は日頃から述べたいと思っていました「デモシカ先生私論」を展開します。皆さんは「デモシカ先生」というのご存知ですか？10年程前、高校生にデモシカ先生という言葉を知っているかと聞いた時、誰一人知らなかったのには驚きました。その時、「ヒッピー」と云う言葉は知っていますか？とついでに聞いたのも憶えています。これも殆どの生徒が「初耳や」という顔をしていたので、さらに驚きました。時代が変わり、その当時、普通に使われていた言葉が死語になっていくのは致し方ないことではあります。

本題に入ります。

デモシカ先生とは「大学を卒業しても特に就きたい仕事もないなあ～、仕方がないからとりあえず教師でもやるか」がデモ先生で、「本当は商社や新聞社に入りたいけど大学でチョット遊び過ぎた。だから難しい就職試験に合格するわけがない。まあ、教師になるしかないかなあ」というのがシカ先生です。当然どちらも否定的なニュアンスで語られます。（但し、一説には「教師になっても、政治活動に専念し『デモシカ』しない先生」というのがあります）。いずれにせよ、日本の就学人口が急増し右肩上がりの成長を遂げていた時代には結構デモシカ先生達が多くいたのは事実です。私の知人が卒業した某県立高校の話です。そこの英語教師の英語は誰が聞いても完璧な日本語英語（棒読み英語）なので、その知人が勇気を持ってその先生に「失礼ですが、先生の英語は外国人に通じるのでしょうか？」と聞いたそうです。するとその先生は「何言ってんだ君は、通じるわけがないでしょ！！」と自信を持って答えたそうです。

私の大学時代の親友にも（今は退職して有名なラーメン屋さんをやっていますが）「県の教育界にこの人あり」と云われた元教員がいます。生徒指導困難校（つまり荒れている学校）に赴任して立て直すのが自らの天命と「自覚し始めた」男です。「自覚し始めた」という意味は、最初はまるでヤル気のない教員でした。彼は教員をしながら文学賞のひとつも取って、文筆で生計を立てようと考えていました。それには（教師上がりの作家が多いこともあり）教師が一番と考え、「とにかく文壇デビューまでの片手間」でイヤイヤながら教員生活を始めました。当時、新人教師を対象にした留学制度が（旧）文部省で設けられており、彼も教員生活から逃げるため、早

速その留学試験を受けました。そしてその留学試験の最終面接（最終まで残ったのが「奇跡」と彼は言っていました）で、面接官から「あなたにとって教育の目的は何ですか？」という質問を受け、「そんなものはありません！」と正直に答えたということでした（当然不合格）。そのような男が、ある時、県内で1, 2を争う生徒指導困難高校に赴任しました（彼によると「宴席で当時の校長の頭をはったため『飛ばされた』ということですが・・・）。しかし、運命のイタズラか、その彼がその1, 2を争う高校で「忽然として教師こそ自分の天職である」という天啓を受けたそうです。とてつもなくヤンチャで気の荒い連中と裸でぶつかり合い、身体を張っての指導をした、あるいは「身体をはらざるを得なかった」指導が、彼に教師としての生き甲斐と自覚を感じさせたそうです。そういった身体を張った指導が功を奏したのか、卒業するときには彼らとの深い絆と信頼ができあがっており、涙、涙の卒業式となったそうです。そこから彼は、教育委員会を通して様々な生徒指導困難校から乞われるままに、生徒指導の責任者として、獅子奮迅の働きをするようになってきました。今、ここで書いたのは私の知るデモシカ先生のほんの一例です。

中には大学で旅ばかりしていて、旅をしたいために夏休みや春休みがあつて長く休めるという思い込みで教師をした者（そうはいかなかったと嘆いていましたが）や、プロの格闘家になるつもりが怪我をしたため止むを得ず教師になった者などもあります。ある意味、そういった人でも教師になれた「いい時代」であつたかもしれません。

さて、文頭で述べましたようにデモシカ先生は否定的なニュアンスで語られるのですが、私からみるとプラス面もあつたように思います。デモシカ先生の多様な個性や独自の経験が教育にとってプラスで作用する事も少なくないように思います。生徒は多様です。また社会に出れば生徒達はいろいろな人たちと様々な関わりを果たしていかなければなりません。そういった社会に出たからの準備教育という点でも、個性豊かな教員や一風変わった教員との出会いや関わりも必要なのかもしれません。没个性的で真面目な教師だけの集団では、個々の生徒の持ち味を伸ばし個性豊かな生徒達を育む力を十分発揮できないようにも思います。極言するならば、日本中の学校が、大学で教師になるための一般教養や専門教科の勉強ばかりに打ち込んできた「学業優秀なだけの教員」ばかりになったとすれば、学校現場が冷たくて活気のないものになるような気がします。その結果、多様な生徒や保護者に対応することも困難になってくるように思います。

ところが今はデモシカ先生を求める（?!）のが非常に難しい時代になってきました。団塊世代教師の定年退職により緩和されてきていますが、それでも大学でしっかりと専門教科の勉強していなければ教師になるのは非常に厳しいことも確かです。本校の採用試験も何十倍という倍率になったりします。

ということで、いくらデモシカ先生がいることのプラス面は認めても、本校でもデモシカ先生が採用されることは余りありません。但し、それでも本校では担当教科の専門知識だけでなく、EQ（心の知能指数と呼ばれるもの）や人間力のある教員を採用してきています。

最後に、最近始めて知った本校社会科担当教員の印象的な話を紹介させていただきます（本人からの了承済み）。その教員が本校の歴史の教員の採用試験を受けたときの競争率は60倍を超えていたそうです。当然、その教員はシツカリと勉強してきたのですが、難関は社会の専任教員を

前にしての歴史の模擬授業（3次テスト）だったそうです。そこで彼は模擬授業では「自分の好きなテーマについての授業を行っていい」という指示が出されていたのを幸いに、（専門家が少なく）質問が出にくいであろうイスラム史についての授業を展開したそうです。彼は彼が持ち込んだ一冊のコーランを丁重に模擬授業見学教員達に回し読みしてもらいながら、自分の授業を展開したそうです。そして彼は最終的に本校の教員となった訳ですが、新人教員として本校に就任したときも、他の社会の先生方から「アッ、イスラムの先生やな」と覚えられていたそうです。そういった模擬授業での傾向と対策を事前にできるということも、立派な教員としての資質の一部かもしれません。生徒に「生きる力」身につけさせるためには、教師自身が「生きる力」を身につけている必要があるかと思います。

「教育いろは唄」〈ま〉

真面目でも 真面目だけでは つとまらぬ
多彩な生徒 多様な保護者

4つの種

2014.05.31 Sat

本日、中学1年生の保護者対象のPTA懇親会が開かれました。その懇親会では改めて中1の3クラスの担任や中1生徒に関わる先生方の熱い思いを聞いて校長としても嬉しく思いました。会長を始め、役員の皆さん、ご苦労さんでした。また6月7日に行われる高1のPTA懇親会も宜しく願います。

さてその席の校長挨拶の中で私は先日中学1年生にした話のさわりだけを保護者の皆様に紹介し「あとはブログに書くので詳しくはブログを読んで下さい」と宣言してしまいました。但し、（おそらく）懇親会の余った時間の埋め合わせに、中学部会長から促されて2回目の校長挨拶をすることになり、その挨拶では結構詳しくその話の再現をさせていただきました。

いずれにせよ「今日中にそのお話は改めてブログに書きます」と中1の保護者の皆さんに（つい調子に乗って）約束してしまいました。悪いクセで私は余り「あとさきのこと」を考えずに人前で約束したり誓ったりしてしまいます。さらに悪いクセ（?!）で、約束したことは、例えお酒の席のことであっても（今日の懇親会ではお酒を飲んでいませんが）、何とか実行しなければという信念に縛られています……。

閑話休題

下記に中学1年生に述べた話を掲載します。学校から21時に帰り何とかブログの記事を今日中に間に合わせる事ができました。

下記の話がその話です。中間テストを明日に控えた日、初めて定期考査というものを受ける中学1年生の学年集会に出席して話した話です。話の始めに私は「今日は一つの話をしませう。そのあと皆さんにプレゼントを差し上げます」と述べました。「プレゼント」と言ったとき、あどけない中学1年生達の眼は期待で輝きました。そこで期待を持たせておいて先ず私は「一夜漬けの勉強は一夜で忘れる」という話をしました。記憶定着の理論に基づいた話ですが、中学1年生に理解しやすいように実例を挙げての説明です。つまり100の単語を10日後の単語テストに備え、与えられた10時間の制限時間を使って覚えるにはどういう時間の配分で覚えればベストかという話です。

さてそれから「プレゼントの話」を下記のようにしました。記憶にそって再現してみます。

<4つの種>

では皆さん、お待たせしました。今からプレゼントを一人ひとりに差し上げます。但しプレゼントには眼に見えるプレゼントと目に見えないプレゼントがあります。と言っても、目に見えるプレゼントでも、そのプレゼントには眼に見えないものがこもっています。例えば皆さんが持ってくるお弁当、まあ正確に云うとプレゼントではありませんが、それは単なるお弁当ではなく、そのお弁当を作ったお母さんや家族の思いがこもっています。愛情という眼に見えない、しかしとても大切なものが目に見えるお弁当の中には入っているのです。

今日私が私が皆さんに差し上げたいのは目に見えないプレゼントです。でもこのプレゼントは

一生役に立つプレゼントです。このプレゼントを大切にしてくれれば、学生のときも社会に出ても、多くの人から信頼される人になれるプレゼントです。では今からプレゼントを一人ひとりに手渡します。大切なものなので両手を重ねて手の平を上にして前に出して下さい。また心でしっかりとそのプレゼントを受け取るため、全員が眼をつぶって下さい。いいですか、では眼をつぶって両手を前に差し出して下さい。（みんなしっかりと目をつぶって両手を前に差し出しました）。

私はそのプレゼントを袋に入れて持ってきました。一人に3つずつあります。プレゼントはみんな何かの種です。よし先ず一つ目の種を取り出してみよう。この種は真っ白な種だねえ。あれ、この種には文字が書かれてあるよ。不思議な種だねえ。なんて書かれてあるんだろう？小さな文字だなあ……。あっ、「正直」て書かれてるよ！そうかそれで真っ白なんだなあ。さっき学年の先生からカンニングについての話があったけど、カンニングするときの心は黒か灰色になってしまうもんね。真っ白な心で人を騙したりズルイ事をしたりはできないものなあ。じゃ、先ずはこの真っ白い「正直の種」をみなさんの手に置くからね。はい、今、それぞれの手の上には真っ白な正直の種があるでしょ。それではそれをしっかりと口に入れて飲みこんで下さい。飲み込みましたか？（多くの生徒達は目をつぶったまま頷いてくれる）。

では次の種を袋から出してみよう。あっ、これは金色に輝いているよ！ピカピカ光ってるね。あれ、この種にも文字が書かれているよ。なんて書いてあるのかなあ？「努力」って書かれてるよ。そうかこれは「努力の種」なんだ！なるほど、努力をすれば、しんどくても眼も輝くし心もピカピカするもんね。一日、だらだらとテレビを観たりゲームをしていて眠るときより、勉強でも何でもひとつのことに努力をして眠るときの方が、疲れていても充実感があるもんね。第一努力をしている人は輝いてるからね。だから努力は金色なんだ。では皆さんこの金色の「努力の種」をみなさんの手に置くからね。はい、さっきと同じようにしっかりと飲み込んで下さい。

では3つ目の種を差し上げましょう。袋から取り出すからね。あれ、今度はきれいなピンク色の種だ！温かな色だねえ。それに不思議な形をしているよ。ハートの形をしているよ。なんか手に持つだけで気持ちがおんわか温かくなってくるようだよ。この種にも文字が書いてあるよ。なんて書いてあるのかなあ……。？。「思いやり」って書いてあるよ！そうかそれで温かいピンク色のハートなんだね。確かに、思いやりっていうのは、周りの人も自分も幸せにするものだからね。いくら強くても「思いやり」がなければ人間としては不完全だからね。イジメをする人は、この思いやりがないんだね。だから自分の心まで冷たくなってギスギスしてしまうんだね。ではこのピンク色したハートの「思いやりの種」をみなさんの手に置くからね。はい、さっきと同じようにしっかりと飲み込んで下さい。

飲み込みましたか、はいそれでは……。あっ、眼を開けるのをちょっと待って！3つの種と思っていたら、もうひとつ種があったよ。4つ目の種があったよ。この種を取り出してみるね。なんだか透明の種だね。それに今までの種と違って何も書いていない種だね。何でだろう……。？。そうか！この種にはみんな一人ひとりが色をつけて、文字を書き込むんだ！！いい種だねえ。さあ、みんな何を書いてどんな色をつける？今まで飲み込んだ3つの種以外に、自分が最も大切にしたいもの、あるいは自分に最も欠けていると思うものを書けばいいんだね。そうか、だから

透明の何も書かれていない種なんだ！みなさん、何を書きますか？そしてどんな色をつけますか？例えば、自分には体力がないなあと思えば、体力っていう文字を種に書けばいいんだね。それでは体力は何色になるのかなあ……。赤色だね、きっと。血の色だね。血気盛んと云う言葉もあるしね。また自分には精神力が足りないなあと思えば、精神力って書けばいいんだねえ。精神力は何色かなあ……。これは努力と同じように「ピカピカとした輝き」がある感じだから銀色だな、きっと。ピカピカと光る魂の力、つまり精神の力だ。あと集中力が足りないと思う人は集中力と書いてみて。集中力は青色のイメージかなあ。集中すると心が澄み切ってくるから空のように青色かもしれないね。でも色は各自で「これだ！」という色をつければいいんだよ。

では4つ目の種にそれぞれの言葉を書いて色を付けたかな。それではそれを両手に受けて、しっかりと飲み込んで下さい。飲み込みましたか？これで皆さんの中には4つの種が入りました。それではそれももう一度確認してからゆっくりと眼を開けて下さい。それから顔をこちらに向けて下さい。

どうですか、今、皆さんの中には4つの種が入っています。しかし大事なのはこれからです。種というのはしっかりと育ててこそ大きな樹になるのです。では皆さんの中に入った種を大きな樹に育てるにはどうすればいいのでしょうか？それは正直の種は正直にすることによって、大きく育っていくのです。例えば、最後の種に「集中力」と書いた人は、どうすれば集中力を自分のものとして大きく育てることができるかということです。それは「テニスをうまくなる」のと同じです。テニスをうまくするにはテニスを毎日することです。同じように集中力をつけるには毎日何かに集中することです。例えば勉強に集中するとどうなりますか。最初は1時間やっても、集中できなければ1時間が3時間ぐらいに感じるでしょう。しかし集中をしていると最初は1時間の中で集中できるのが10分間にしても、やがてそれが1時間の勉強で1時間集中できるようになってくるのです。集中力がついてきたのです。すると集中すれば1時間も10分程にしか感じられなくなるんですよ。そうすれば、集中力という樹は大きく育っていることになります。そしてその自分の中で育った樹は、一生の間、多くの実りをつけてくれる樹になるのです。どうか皆さん、今日みなさんに差し上げた種をしっかりと育ててください。

これで私からの話を終わります。明日からの中間テストはしっかりと頑張ってください。

2014.04.14 Mon

今回の学年始めの始業式は中学・高校の全生徒と全教員が参加して運動場で行われました。その前には先ず恒例の対面式です。中学2，3年と高校2，3年が、運動場に入って来る中1と高1の新入生達を拍手で迎えるものです。そのあと始業式が始まります。始業式ではチャプレンのお祈りのあと自治会から活躍したクラブ活動の報告がなされました。それから校長の挨拶ですが、その挨拶に先立って私は特別にクラブ活動功労生徒を紹介しました。それはJOCジュニアオリンピックのモーグル競技（フリースタイル）で見事優勝を果たした藤木豪心君の紹介でした。昨年度、世界ハンドトワリングの個人ジュニア部門で金メダルに輝いた現高校2年生の藤井愛さんに次ぐ快挙です。生徒達からも「ウォ〜」という感嘆の声と盛大な拍手が起こりました。私も「藤木君は将来オリンピックに出場すると思うので、その時の応援も皆でしっかりしましょう」というようなことを生徒達に述べました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

始業式では「表情を輝かすための話」をしました。それにしても小学校を出たばかりの初々しい中学1年生達と余り初々しくない（笑）高校3年生達とが共に並ぶ始業式での話は、毎度のことながら苦勞します。

<始業式挨拶>（抜粋）

皆さん、輝いていますか？いい表情をしていますか？もし輝いてない人がいれば輝くようにして下さい。いい表情をしていない人がいれば、いい表情になるようにして下さい。ではどうすればいい表情になり輝くことができると思いますか？今日は「いい表情になるための秘訣、輝くための秘訣」ということを話させてもらいます。

アメリカで面白い実験が行われたそうです。大勢の人たちの顔を写真に撮ってから、その人たちを無作為的に、つまりくじ引きかなんかで、同じ人数の2つのグループに分けました。正確には覚えていないのですが、その数を仮に50人、50人としておきましょう。数時間、その50人ずつの一つのグループにはテレビで娯楽番組を見せて、もう一つのグループには一定の課題を与えて図書館かどこかで勉強をさせました。そしてそのあとそういった人たちの写真をまた撮りました。そしてその後、娯楽番組あるいは勉強した人の前と後との写真、つまりビフォーアフターの写真をペアで、アトランダムに、つまりどれがどのグループなのか分からないように並べ、全く関係のない人たちに「いい表情になっている人」はどれかを選ばせたところ、ほとんどの人が選んだ写真は「勉強をした人」の写真だったそうです。

このことから何が分かるでしょうか？あつ、こんなことを云って校長は勉強をさせようとしてるんだな、と思う生徒もいると思いますが、まあ、それも当たっています。しかしそればかりではありません。いわば「宇宙の法則」について知ってもらいたいと思っています。

このことは皆さん自身が経験していることではないでしょうか？

一日だらだらテレビをみていたり、何時間もゲームをしたりして一日を終わるのと、しんどいながらも必死で勉強をして分からなかった数学の問題のいくつかが分かって一日を終わるのと、一日が終わって眠りにはいるとき、どちらに喜びを感じますか？私のいう喜びとは心の底から、魂の底からの喜びというものです。心の奥底では、どちらに喜びを感じるかということです。まあ、自分の一生を終わって目を閉じるときも同じような思いになるのかも知れませんね。

人は希望や夢や目標を持つときに少し輝きます。そしてその自分の希望や夢や目標に向かって、とりあえず最初の一步を踏み出す時、その輝きは増します。そして苦労しながらも2歩、3歩と進んでいくとき、そして自分の成長を実感する時、さらに輝きを増していきます。人は自分の成長を実感していくときに心の底から喜びを感じるのです。

運動もそうだと思います。

運動でいうと、自転車に乗れなかったのに何回も転びながら自転車に乗れるようになったときの喜びを覚えていますか？泳げなかったのに、何回も水を飲みながらも泳げるようになったときの喜びを覚えていますか？

運動も勉強も同じですね。今までできなかったことができるようになること、今まで分からなかったことが分かるようになることこそ、本当の喜びです。そしてそれは努力してこそ得られる喜びです。成長することの喜びです。成長や進歩の中に感じる喜びこそ、私は人間の大きな喜びの一つではないかと思っています。なぜなら、それは進化という宇宙の法則に一致するからです。宇宙は膨張を続けていると同時に、人類も含めて進化の道をたどっています。よく昔は良かったと人は言いますが、決してそのようなことはありません。昔は奴隷制度もあったし差別も今以上に強くありました。そのように社会も進化しているように、人間も進化を遂げていくようにプログラミングされているのではないかと思います。話が脇道にそれそうなので、元に戻しますが、宇宙の法則に従うとき、心の奥深い所、魂といってもいいかと思いますが、その個々の魂は喜びを感じるのです。

私自身、長年の教師生活で経験してきたことですが、勉強を始め授業が分かりだした生徒の顔は輝きだします。また長い努力が実って成績に結びついてきだした生徒はさらに輝きが増してきます。これは私自身だけでなく、多くの先生方が体験していることです。

どうか皆さん「いい表情、輝く表情」になるような学生生活を送って下さい。この学年がさらに充実した学年となることを願っています。

2014.03.11 Tue

3月8日に桃山学院中学校の卒業式が行われました。その後、本校のカフェテリアにて、謝恩会が卒業生や保護者によって盛大に執り行われました。

私は公務のため謝恩会の最後までいることはできなかったのですが、聞くところによると「大いに盛り上がった」ということです。特に会の最後の方で上映された生徒達制作の思い出ビデオが殊のほか出来栄えが見事で皆さん感動したそうです。中3生担当の教員団がせっかく作ったビデオが気の毒であったという感想までいただきました（笑）。でも作られた先生方、あなた方の努力を皆さん評価してくれている筈ですから、ガッカリしてはいきません。それより感動的なビデオを自主的に作れるようなシッカリした生徒達を育てたことを誇りに思って、心から満足して下さい。

また謝恩会では何名かの生徒や保護者の方が私の卒業式での式辞についての感想を述べてくれました。生徒の一人は「僕にはまだ頭上の星が見つかりませんが、校長のおっしゃられた通り頑張ります」と言ってくれました。

今回の式辞では聖書に出てくる「東方の3博士」についての話をさせてもらいました。これも実際に私が壇上で述べた式辞は（恒例のようになってしまいましたが）「式次第に予め印刷された式辞」ではなく、式辞を印刷した後で「コレも話したい、アレも伝えたい」をいうメッセージ、あるいはその場で聖霊が必要に応じて私の舌に乗せてくれた言葉（？）を「できるだけ」印刷された式辞から大きく踏み外すことがないように、少しは聖霊に抵抗しながら（?!）話をしました。校長は聖霊などと怪しいことを書いていると思われる方は、聖書を読んでみて下さい（ルカによる福音書12章11～12節「～何をどう言い訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」等）

中学卒業式 式次（一部割愛）

皆さんは既に本校での3年間を通して聖書を学んできていますので、東方の3博士の物語をご存知でしょう。ある時、3人の博士が夜空に輝く不思議な星が光っているのに気付き、その星に従って長い旅をし、イエスが生まれた所に行き着くというものです。

ところで皆さんには皆さんが後を追いかける輝く星がありますか？その星は既に皆さんの頭上に輝いているかもしれません。ただし自分の頭上を見上げてこなかった皆さんは、その星に気付いていないのかもしれません。どうか顔を上げて頭上高く輝く星を見つけて下さい。その星は皆さんが将来において実現したいと思っている夢であり希望であり叶えるべき目標でもあります。当然、もう既に頭上に輝く星を見つけた皆さんもいるでしょうし、その星を一生懸命に追いかけている皆さんもいるでしょう。ただし先ほど述べたように未だその星が見つからない皆さんもいるでしょう。是非、顔を上に向けて、つまり前向きに自分の将来を見つめ、自分の輝く星を見つけて下さい。友達との付き合いや日々の楽しい生活というものは大切なものですが、やはり顔を上に向けて自らの輝く星を見出すことが今はとても大切です。そしてどれだけ苦難や苦労があろうとも、決してその星も見失わずに、その星を追いつけることが必要です。ただ、もうひとつ、聖書のこの物語には書かれていない大切なことがあります。それは3人の博士達が星を追って旅をする時の様子です。その3人は星を追いつけながらも、旅を続けるときに心がけていたことがあったはずです。その心がけていることがなければ、決して星が導く所へ行きつくことができなかつたからです。彼らが心がけていたこと、それは足元をしっかりと見つめることです。月が出ていない暗い夜もあったし寒くて震える夜もあったと思います。また星に従うために道なき荒野を進まなければならない夜もあったと思います。しかし博士達はいかなる所に行くときも、しっかりと足元を見つめながら一步一步と進んで行きました。一步一步の着実な歩みがあってこそ、星が導く所に行き着くことができたのです。

もしこのことを皆さんに当てはまるなら、将来の夢の実現をめざしながらも、その夢を実現するためには地に足をつけた日々の地道な努力が欠かせないということでもあります。

「頭（こうべ）は高く天空を見つめ、足は大地をしっかりと踏みしめながら進むべし」

これこそが今日の卒業式を迎えるにあたり、私が皆さんにお伝えしたいことです。まだ自分の目標が見つからない人がいるならまずは自分の目標を見つけて下さい。そして目標を見つけたらしっかりとその目標の実現に向かって着実な歩みを始めて下さい。

これからの高校生活が真に充実したものとなることを祈念して、私からの式辞とさせていただきます。

生んでくれてありがとう！！

2014.02.16 Sun

昨日（2月15日）、高等学校の卒業式を本校ダビデジムで行いました。

厳かな中にも温かくてのびやかな雰囲気「桃山らしい」卒業式となりました。その中でも特に感動的だったのは、卒業する学年団が制作した映像でした。正式な卒業式が終了した後、スクリーンに映し出されました。入学以来ずっと教員たちが撮ってきた生徒達の様々なシーン（写真）でした。そしてそのひとつひとつのシーンの合間に、生徒からのひと言、とくに保護者への感謝のひと言が文字で映し出されました。

感動的な一言、ユーモアに満ちた一言、正直な一言、嘆願のひと言など、生徒達の様々な思いが様々なひと言を通じて述べられていました。しかし全てのひと言に共通していたのが【保護者への感謝の思い】でした。その映像を見ながら泣いている保護者も結構おられたとのことでした。

早速、その元となった生徒手書きの文を編集長である藤見教諭に借りました。いや～素晴らしい！！本当にどれも素晴らしく、本当は全てを紹介したいのですが、残念ながら紙面の関係もあり、ほぼ無作為的にその一部を紹介します。

<生徒のひと言>

「弁当やら何やらありがとう！感謝してます。大学行ったらお金かかるけど、もうちょい仕事頑張るな。」

「つかず離れず受験生にとって最良の距離をありがとう。これからは大学生にとっての距離を宜しく願います。」

「・・・。心の中ではいつも感謝してます！」

「いつもわがまま聞いてくれてありがとう。お母さんいてへんけど頑張ろうね。これからも迷惑かけます。」

「仕事頑張ってくれてありがとう。将来ビッグになって父さんが仕事しなくていいようにします。」

「お父さん、お母さん、本当に仕事しんどそうなのに、1番に私のことを考えてくれてありがとう。夜3人で5分だけでも話すのが大好きです。」

「いつも朝起きられない自分を起こしてくれたおかげで全然遅刻しませんでした。受験勉強の精神的支えになってくれてありがとう。」

「高校受験、最初は反対したよな。でも、桃山に来て本当によかった。ありがとう！！」

「6年間、桃山で過ごせてよかった。本当によかった。これからもいっぱい迷惑かけると思うけど、宜しく願います。」

「桃山に通わせてくれてありがとう。留学させてくれてありがとう。これからは役に立てる人になるために頑張ります。」

「重い病気をしながらも、優しい言葉で支えてくれたお父さん。毎朝起こしてくれて身の回りのことを助けてく

れたお母さん。時には思いっきりぶつかることもあったり、素直になれないときもあったけど、大好きです。いつもありがとう。」

「今まで18年間ありがとう。お母さんが桃山を勧めてくれたおかげで本当に楽しいカナダ生活と学校生活を過ごせました。これからも宜しくお願いします。」

「早くう一緒に私の稼いだお金でイギリスに行こう！」

「・・・。老後はまかしといて」

「・・・。大学を決める時に私より必死になって教育学部のパンフレットをもらってきてくれてありがとう。おかげで行きたい所を見つけることができました。これから4年間、まだ学生だから頼りにしてます。」

「3年間、お弁当を作ってくれてありがとう。『いつも同じやけど』と言ってたけど、毎日、とてもおいしかったです。」

「弁当に入ってる卵焼きに私は癒され元気を貰いました。変わらぬ味をこれからもお願いします。」

「お父さんとお母さんが大好きです。心がキレイになれるよう頑張ります。幸せになれるよう頑張ります。だから応援して下さい。その応援が勇気と力になります。」

「生まれてくる親の時点で『大当たりの人生』です。ありがとう。」

「・・・。本当にいろいろ迷惑かけたと思います。あと2年で20歳になりますが、何年経っても、私はあなた達の子供です。」

「18年間お金のかかる息子ですみません。社会に出るまで面倒みて下さい。宜しくお願いします。」

「いつも身体悪くしてまで俺のために頑張ってくれてるのに、ワガママ言ってごめんね。親孝行するまで長生きして下さい。母さんの子供に生まれてほんと幸せです。」

「いつか必ず恩返しするので、もう少し手を貸して下さい。」

「・・・。社会人になって初任給をもらったなら家族旅行に行きましょう」

「18年間、女手ひとつで育てあげてくれた。大人に近づく程、感謝の気持ちが深まります。より立派に成長したくさんの恩返しができますように！」

「お父さん、お母さん、生んでくれてありがとう！！」

最後に、私からの「編集後記」(?!)

卒業生の保護者の方々が開催して下さいだった「謝恩会」も非常に和やかで心温まるものでした。たくさんの保護

者の方々と共に、招待いただいた教職員全員が心から楽しいひと時を過ごすことができました。また謝恩会では各担任からの一言スピーチが行われましたが、今回も「自分の担任したクラスの生徒自慢」が多かったようです。

さて、その時のスピーチで、文理クラス担当の藤見編集長が編集過程で行った大胆な行為（?!）をカミングアウトしました。

それは「生徒達の手紙に書いた保護者への一言が余りにも感動的だったので、僕自身（藤見）の父母への思いを書いて、その中に紛れ込ませてもらいました」というものです。つまりスクリーンに映し出され保護者の方々が読まれた「一言」中には、本校教員の「父母への一言」も入っていたのです。

さすがです。謝恩会の参加者全員、あっけにとられながらも爆笑しました。

2014.01.16 Thu

みなさん明けましておめでとうございます。今年も宜しく申し上げます。

早速ですが、私の桃山学院高校時代の同窓生であり交友を続けていた「やしきたかじん氏」が逝去しました。余程、8日の始業式の校長挨拶では、たかじん氏の思い出や人柄や彼が私に述べていた思いを生徒達に語ってもよかったですのですが、私にとっては友人の死であっただけに公的な挨拶で触れることは憚られました。本当に惜しい人を亡くしました。特に桃山の生徒達にとっては「俺はこうみえても講演会というものをやったことはないんや。必ず桃山の生徒のために講演会をしたるからな」と言っていた約束が成就されなかったのが残念でした。たかじんさんの思い出については新聞に私のインタビュー記事が載ったのですが、その中で私はたかじん氏の東北被災地への寄付のことや酒席でのエピソードなども紹介させていただきました。またたかじん氏が伝えた母校への思いも新聞に載せてもらいました。

当ブログでも東日本大震災の後、たかじん氏が本校生徒へ伝えたメッセージが「生きとうても・・・」というタイトルで残っています。もしよければお読み下さい。

<http://nukkun46.jugem.jp/?month=201104>

新年の始業式では「座右の銘」について述べました。

【3学期始業式挨拶】（抜粋）

私は1月3日の日に学校でセンター試験にそなえて勉強をしている高校3年生達の顔を見に来ました。みんな生き生きとした顔で勉強をしていました。また既に校内でクラブ活動をしている生徒達も見受けられました。

さて、今日はこの場を借りて言葉というものについて述べ、皆さんに一つの提案をしたいと思います。前にも云った事ですが、言葉というのは人間だけに授かっているもので、それは大きな力を持つものです。人を生かす力もあると同時に、人を殺す力もあるのが言葉です。聖書にも「初めに言葉ありき、言葉は神とともにあった、言葉は神であった」と書かれています。日本においても、「言葉にはそれ自体に霊的な力が宿る」ということで、言霊ということが昔から信じられてきました。だから、言葉をどのように使うかは非常に大事になってくるのです。ツイッターやラインなどが流行る前からでも、自ら発した言葉によって、取り返しのつかない災難を招いた例は非常に多くあります。ましていつまでも形として残るツイッターやライン上でのやり取りは、言葉の使い方によっては自分自身や他人の破滅にもつながる危険性を孕むものであります。そのことは既に生活指導部長からも注意されていることなので、私からは述べません。私がここで述べたいのは、人を生かす言葉、特に自分自身を生かす言葉について述べたいと思います。自分が不安にかられたり落ち込んだりするときに自分に言い聞かせたりする言葉、あるいは自分自身を励ましたり、自分自身を戒めたりする言葉です。そういう言葉は座右の銘ともモットーとも言われています。担任の先生、特に中学担当の担任の先生、できたら黒板にその字を書いてあげてく

ださい。（「先生方、書いていただくのはモットーという言葉ではなく座右の銘という漢字であります」とここで余計な冗談を言ってしまいました）。座右の銘はザウの銘とも読まれます。座右の銘にはいろいろあります。各自が気に入る座右の銘も、その人の立場や職業によって違ってくるかと思えます。

例えば、ある登山家の座右の銘は「99里を半ばとせよ」というものでした。99里の里というのは昔の距離の数え方だというのはご存知だと思います。そこで100里の距離に行くのに、あと1里しかなくても、まだ半分の50里もあるという気持ちで、最後まで気を抜いてはいけないということを自分自身に言い聞かせるため「99里を半ばとせよ」という座右の銘を、その登山家は心に刻んでいたのだと思います。またあるプロ野球のピッチャーは「一球入魂」という言葉を座右の銘にしています。自分が今投げようとしている一球にこそ自分の全てを注入するということであります。

本校にも「人生はこころひとつのおきどころ」という言葉を座右の銘にしている先生がいます。詳しい解釈は避けませんが「人生は心ひとつのおきどころ」というのは、自分の人生や人生の出来事を自分がどのように見るか、例えば苦しい出来事も、ただただ苦しいものとして逃げたいと思うのか、それが自分を鍛えてくれる試練とみるのかによって違ってくる、だからせめて自分は自分に起こる人生の出来事を肯定的に捉えていこうというものです。

最近では「今やらなきゃいつやるの、今でしょ!」というような言葉が流行っていますが、それも実際に素晴らしい座右の銘になる言葉かと思えます。私自身「今、今、今を目覚めて生きるべし」という言葉を自分なりの座右の銘の一つにして、常に心が過去や未来に向かうのを戒め、今を充実させるための自分に覚醒を促しています。要は、そういった言葉を誰が言ったかではなく、その言葉がどう自分の心に響いて、どう自分の人生にいい影響を与えていけるかという事でありませう。

別に座右の銘は他人の言った言葉を使わなくても、自分自身で見出した言葉を座右の銘にしてもいいかと思えます。またいくつかの座右の銘を持ってもいいかと思えます。

また本を読んでいる人たちは、時々の状況によって、自分を励ますのに適切な座右の銘が浮かんできたり、座右の銘に出来るような素晴らしい言葉に出会う機会も多くあるかと思えます。

ちなみに私自身にも、非常に苦しいときや非常に困難なことが起こった時に念じてきた言葉があります。それは「どうってことない、どうってことない、どうってことない、命までとられることはない!」と云うものです。この場合は、自分で自分に唱える念仏や呪文のようなものですね。ただ最近では、体力も衰えてきていますので、神様にも助けてもらおうという切なる願いから、アーメンを最後につけさせてもらっています。「どうってことない、どうってことない、どうってことない、命までとられることはないんやから、アーメン」と云うものです。

随分おかしな座右の銘ですが、私自身には勇気や気力や安心を与えてくれる言葉ですので、私にとっては立派な座右の銘と云えるでしょう。

さて皆さんも自分の座右の銘というものを見つけてください。先ほども言いましたように言葉というものは自分を励ましたり戒めたりするのにも大きな助けとなってくれるものです。人は一人では生きていけません。人に頼ることもあれば、言葉に頼らなければならないこともあります。

できたらそういった言葉を見つけてください。その言葉は本の中に見つかるかもしれませんが。あるいは家族や年長者から教えてもらえるかもしれません。例え、人から聞いた言葉でも、自分の心に響けば、それがあなたの座右の銘となるのです。どうか自分の座右の銘やモットーを見つけてみてください。

2013.12.24 Tue

本日（12月24日）、終業式の前に、正門のところに立って募金活動をしました。サンタさんの格好をしました。

その募金に先立って私は次のようなメール配信をさせていただきました。

保護者・生徒の皆様へ

早速ではありませんが、第4回響プロジェクトの講演会で来校された被災地の方（TSUNASGARI代表勝又三成氏）から、南相馬地区を中心とした被災地の幼稚園児にクリスマスプレゼントを配布したい旨の依頼がありました。その中には被災者のお子さんや仮設住宅に住んでいるお子さんも沢山おられるとのことでした。そこで24日に生徒の皆さんから自由意志での寄付を募りたいと思います。ひとり1円以上ご随意で上限100円までの寄付（教職員は上限なし）にしたいと思います。終業式の24日の8時20分から9時20分まで守衛室前で私が直接受け付けます。どうか宜しくお願いいたします。

保護者の方から、そして多くの生徒達から寄付をいただきました。またボランティア部の生徒達も募金活動に協力してくれました。お陰で要望のあった約210名の幼稚園児全てにプレゼントを贈ることができました。また品物を持ってきてくれた方もおられました。聖歌隊の方々も募金をしてくれました。通行人の方も募金をしてくれました。アメリカから訪れている留学生のご両親も募金をしてくれました。総計で59,683円となりました。それに少し足してプレゼントを現地に送らせてもらいました。

先ずはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

尚、上記の配信とほぼ時を同じくして、教員には次のような社内メールを配信しました。

教員の皆様へ

実は去年の暮れ、東日本大震災の寄付集めでサンタクロースの格好をしました。中学生のみ対象にしてマルコ館のロビーでサンタをしたのですが、そのとき、サンタが好評だったこともあり、手伝ってもらったPTA役員の人に、つい調子に乗って「来年は高校生達対象にサンタをします」と云ってしまいました。そこでお願いですが、ひとりでサンタの格好をするものちょっと恥ずかしい気がしますので、誰か2名ほどトナカイ役をしてもらえればありがたいです。

24日の朝8時20分から9時20分で正門前です。寄付金は全て南相馬町を中心とした被災地幼稚園児のクリスマスプレゼントの購入に当てられます。トナカイさん、どうか名乗り出て下さい。他薦も受け付けます。

上記のメールを読んだ教員からは即座に何名かの「トナカイさん」の申し出がありました。さらに運よく（?!）先着順で選出されたトナカイさん所属の学年主任は、次のようなユーモア溢れる応答メールまでくれました。

この度は当学年の2頭のトナカイをお使いいただきありがとうございます。
他にも、小太りなトナカイ、スピード感あふれるトナカイ、若干凶暴そうなトナカイ等々取り揃えております。今後ともトナカイのご用命をお願いします。

本当にありがたいことです（笑）

サンタクロースの格好をしたまま、私は終業式で次のような挨拶を全校生徒にしました。。

終業式挨拶（抜粋）

今日、皆さんは私からの願いに応じて、被災地の幼稚園児にクリスマスプレゼントを贈るための寄付をしてくれました。ありがとうございます。
まだ集計されていませんが、おかげでたくさんのお寄付が集まったようです。また報告をさせていただきます。
ところで皆さんはサンタさんを信じていますか？これは何年か前に中学生に述べたことですが、私はもう一度、「サンタさんはいる」ことをこの場を借りて述べたいと思います。個人的な話になって恐縮ですが、私の息子は生まれた時、1680グラムしかない未熟児で、育てるのにとっても苦労しました。勉強なんかよりも、とにかく丈夫に健康に育ててほしいという願いで育てました。その甲斐があつてか、勉強は全くできずに、身体だけは丈夫に育ちました。さてその息子が小学校の時に、学校から帰ってきて、私に「サンタっているやろ?!」と同意を求めるような顔で聞きました。私は「なんでそんなことを聞くんや?」と云うと、今日、学校で先生が「『サンタを信じている人は手を挙げなさい』と言って皆に手を挙げさせたなら、ほんの少ししかサンタを信じている人はいなかった」と云うのです。そこで私は、「いるに決まってるやろ!」と断言しました。すると息子は安心したように「やっぱりそうやな。僕もサンタがいないと思っているなんてアホやなあ思ったんや!」と、私の同意を得て嬉しそうに答えました。きっと息子は小学生の高学年になって少数派の悲哀を味わっていたのだと思います。そこで、そのあと私は息子に「確かにサンタはいるけど、オマエがもう少し大人になるとサンタは姿を消すかしらんで」と述べました。それを聞いて私の息子は「なんでや、僕が悪いことをしたからか?」と私に聞きました。わが家では「悪いことをする子供のところにはサンタは来ない!」ということになっています。そこで私は「いや違う、とにかく大きくなってくるとサンタは姿を消すんや」と述べました。息子は悲しそうな顔をしました。そこで私は「安心しな

さい。まだ戻って来る。必ず戻って来る。お前が大人になって結婚して自分の子供を持つと、もう一度サンタは戻って来るからな。その時やはりサンタはいたと分かるんや」と云いました。息子は分かったような分からないような顔をしていましたが、今、2人の幼子の父となった息子は、「サンタなんかいない」なんて間違った考えをしていない筈です。今度聞いてみようと思います。

サンタというのは、一言で云えば、無償の愛の象徴でもあります。お礼や報酬を求めず、子供たちに与えるだけで満足する愛の象徴です。今日の私は、皆さんに何も与えずに寄付をもらったわけですから、サンタの格好をしても私はサンタではありません。被災地の子供たちにプレゼントを買うお金をくれたあなた方ひとりひとりがサンタです。そのお金を手渡したくれた保護者の方ひとりひとりがサンタです。また募金活動に自ら協力を申し出てくれた生徒のひとりひとりがサンタです。募金しようと思ながらも少し恥ずかしくて募金できなかった生徒もサンタなんです。サンタはあなた方ひとりひとりの心の中にもいるのです。自分の顔を切り取ってお腹を空かした人にアンパンの一切れを与えるアンパンマンのように、です。アンパンマンといいサンタといい、それは無償の愛の象徴です。そしてみんながなんでサンタさんやアンパンマンに魅かれるかというのは、実は、その同じ気持ちがすべての人に宿っているからです。目には見えなくても、神様から与えられた素晴らしい「他の人を思いやる気持ち」がみんなの中にあるからです。「美しいものを美しいと思えるのは皆さんに美しい心があるからだ」というのと同じなんです。どうかそういう気持ちを忘れないで大切にしていって下さい。

【わたしの願い】

2013.11.23 Sat

本日11月23日、桃山学院中学校と高校の第3回入試説明会を行いました。今年度からの入試説明会では、数名の現役生徒達（?!）に舞台上に上がってもらい「生徒インタビュー」なるものを実施しています。本校に入学を希望している生徒や保護者の方々たちにとっては、直接在校生の口から本校での様子などを聞くことができるので非常に好評を得ています。ただ舞台上に上がった生徒の口から「何が飛び出してくるのか」本番でしか分からないので若干の不安があることも確かです。その反面、教育活動に対する自信と生徒を信頼していなければ出来ない取り組みであると自負しています。

今日も舞台袖で出番を待つ生徒達と会いましたが、その生徒達には「校長の悪口以外は何を言ってもいいからね」と伝えました（笑）。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

下記の文は、本校の生徒達が建てたデイスクールのあるフィリピンの被災地への募金協力依頼を兼ねて、全生徒と保護者の方々対象に配布した文書（抜粋）です。宜しければご一読下さい。

<校長だより>

生徒と保護者の皆様へ

さて、家では「ただいま」「おはよう」「おやすみ」などの日常的な挨拶はできているでしょうか。

次の一文をお読み下さい。「わたしの願い」というタイトルです。この一文は産経新聞の「夕焼けエッセー」に掲載されたものです（掲載許可済み）。

小学校6年生の森琴音さんが書いたものです。琴音さんは3歳のときに罹った重い病気の後遺症で、下半身は麻痺し、言葉が出なくなりました。

「尊厳」、「家族」、「感謝」、「挨拶」等など・・・この一文を読んで、保護者の方々や生徒の皆さんは何を感じられるでしょうか？何を感じられるかは各自にお任せします。

ひととき家族で感想を語り合ってもらえれば幸いです。

【わたしの願い】

わたしは しゃべれない 歩けない

口が うまく うごかない

手も足も 自分の思ったとおり うごいて くない

一番 つらいのは しゃべれない こと

言いたいことは 自分の中に たくさん ある

でも うまく 伝えることが できない

先生や お母さんに 文字盤を 指で さしながら

ちよつとずつ 文が できあがっていく 感じ

自分の 言いたかったことが やっと 言葉に なっていく

神様が 1日だけ 魔法をかけて

しゃべれるように してくれたら...

家族と いっぱい おしゃべり したい

学校から帰る車を おりて お母さんに

「ただいま！」って言う

「わたし、しゃべれるよ！」って言う

お母さん びっくりして 腰を ぬかすだろうな

お父さんと お兄ちゃんに 電話して

「琴音だよ！早く、帰ってきて♪」って言う

2人とも とんで 帰ってくるかな

家族みんなが そろったら みんなでゲームをしながら

おしゃべりしたい

お母さんだけは ゲームがへたやから 負けるやろうな

「まあ、まあ、元気出して」って わたしが言う

魔法がとける前に

家族みんなに

「おやすみ」って言う

それでじゅうぶん

2013.11.16 Sat

先週7日の本校の生徒対象の宗教講演会のあと、その講演者の一人である神戸アドベンチスト病院の山形謙二院長先生に職員会議でも教職員対象の講話をしていただきました。神戸アドベンチスト病院は淀川キリスト教病院に次いで全国で2番目にホスピスを取り入れた病院だそうです。山形院長には医師や看護師さんたちが、余命宣言を受けた患者さんたちとどのように向き合ってきたのかを、豊富な体験と学識に基づいて語っていただきました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

閉会の挨拶で私は次のような趣旨のことを教職員に述べました。

<山形院長をお招きして>

学校教育というのは「生きる」ことに関わる現場です。生徒達の学校生活を生き生きとしたものにするにはどうするか、あるいは卒業後どのように充実した人生を送ってもらうかを視野に入れた取り組みが教育の根幹をなすものです。そういう点から、本日のように「死」をテーマにした研修には違和感を持たれた教職員の皆さんも多かったと思います。

実はそうではありません。生きることと死ぬことはコインの両面のようなものです。生きingことを真に充実させるには、死というものを抜きにしては考えられません。人生観と共に死生観も大切です。私も22歳の卒業生を病気で亡くしたとき、深い哀しみを体験し、今もその悲しみは癒されていません。どうか皆さん、ひとりひとりの命を大切にしてください。また限りある命の中での出会いは一期一会であると言われていています。生徒との出会い、教職員同士の出会い、全て大切なものです。かけがえのないものです。私も、多くの先輩の教員を見送って（亡くして）います。幸い、本校には若い先生方が多いのですが、これを機会に私を含めて年配の先生方を大切にしてください。（ここで図らずも笑いが起こってしまったので、もう少し、話を続けました）。

2013.10.01 Tue

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

高校のクラス全員が第一志望の進路先を決定してから、最終的に校長室を訪れて行く「第一志望宣言」が続いています。（当ブログ2009年9月3日「第一志望宣言」参照）。3年で残っているクラスもほんのわずかとなりましたが、その残りわずかなクラス対象の第一志望宣言を9月28日に行いました。文理コース・理系クラスのうちの1クラスです。

そのクラスでは、教育大学または教育系学部の志望、つまり教員志望の生徒達が非常に多くいて驚きました。実際30名のクラスの9名までが国公立の教育大学か国公立の教育系学部志望で、その内6名が大阪教育大学志望でした。小学校の教員、あるいは数学か理科の中学教員または高校教員の志望でした。そしてほぼ全員の生徒達は、教員志望理由として、「過去、あるいは現在の『素晴らしい先生との出会い』」と「教えることが大好き」という理由が書かれていました。私も「教えることが大好き」ということこそ、「子供が大好き」と云うことと共に、教師の原点だと考えます。いずれにせよ第一志望宣言書を手渡してくれた生徒の全員が、明確になった将来の夢に向かって歩もうとする意欲と熱意を感じさせてくれました。

その生徒達に観てもらいたいCMがあります（このことは改めて担任を通じて生徒達に伝えてもらうようにしました）。

それは、先日たまたまテレビを点けたときにかかっていたCMです（普段、殆どテレビを観ることはないのですが・・・）。既に皆さんも観たことがあると思いますが、「子供達にダンスを教えるのに苦勞をしている小学校の先生」のCMです。その苦勞には教師活動の原点があるように思います。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」と云った山本五十六氏の言葉を想起させる内容も含んでいます。今までやったことのないダンスを小学生に教えるには、自らもダンスを習得しなければならず、それを一生懸命先ずは自分で体得しようとしている教員の姿勢にも好感が持てました。

また「子供達の目を輝かせてあげたい」「出来ないことが出来るようにしてあげたい」「楽しく学ばせ、達成した時の喜びを子供達に味あわせてあげたい」という思いもよく表れていました。さらに校長という立場からみて印象的だったのは、教育に必要な機材（スタンドミラー）を（おそらく）自腹を切って購入しているシーンでした。本校の教員も頻繁にそういうことをしているようです。生徒に読ませたい書籍だけでなく、教室に置く本棚や文化祭に必要な機材まで自費で購入している教員も「少なからず」いるようです。当然、そういうのは学校が購入すべきであると言われればそれまでですが、その点については「見て見ぬふり」をさせてもらっています(笑)。

最高の教師とは「生徒の心に火をつける」教師と云われていますが、あのCMの教師像にはそれが表れているように感じました。（ちなみに最悪の教師とは「生徒の心の火を消す教師」でし

よう)。あの役をしている俳優さんが中学と高校の教員免許を持っているなら、是非、本校の採用試験を受けてもらいたいと思います（受けていただけるかどうか、また受けていただいても採用試験に通るかどうかは別にしまして・・・）。

まだ観ていない方がいれば、是非観てください。

http://www.youtube.com/watch?v=EKHWO_PX33Y

ついでにと云っては何ですが（あるいはひとつのことに偏ってはいけませんので）もうひとつ何か月前に私が感動したCMを紹介します。これも皆さんご覧になっているでしょうが、高見盛が出ている「愛されるという勝ち方もある」というCMです。もう一度、このCMを観ていただければ、それについて語る言葉は不要でしょう。

<http://www.youtube.com/watch?v=aW837cqSxz4>

CMとは、制約の中でこそ生まれる俳句のごとし（?!）と思います。極めて短い時間的制約の中でいかに印象的な映像を創るか、今日もわが卒業生達は広告業界で奮闘しています。ウィリアム・フォークナーという作家は「小説の役割は人々に大切な人類普遍の価値、つまり勇気や優しさや共感や希望などを思い起こさせることにある」と云っていましたが、どうかCM制作においてもそのことを忘れずに（?!）、今後も、卒業生である人もない人も、素晴らしいCMを創り続けて下さい。「銀のさら」のように海外でも話題になるシニールで型破りなCMも悪くはないと思わないこともないのですが・・・。

おかしな役のビデオレター

2013.09.18 Wed

今月13日と14日に文化祭が実施されました。開会式の私の挨拶では、東京オリンピックのプレゼンテーションに言及しました（下記抜粋?）。その後は、今回、世界ハンドトワリング大会の個人ジュニア部門で金メダルを勝ち取った高校1年生の藤井愛さんに世界一の演技を全校生徒の前で披露してもらいました。「さすがに世界一!!」という印象を教員も生徒達も全員が強く受けました。生徒の中から驚嘆の声と盛大な拍手が沸き起こりました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

また当日は元野球選手である桑田真澄氏の講演会を高3生徒と中学生、それに保護者の方々（希望者）を対象に行いました。ダビデジムが一杯になり、用意していた椅子が足りなくなるほどでした。講演前、少し時間がありましたので、桑田氏と体罰の問題などについての話をし、短い時間でしたが非常に有意義なひと時を持つことができました。講演会において桑田氏は1時間半にわたり、自分の挫折体験とその挫折をどのように乗り越えてきたかということを中心に話をされ、中学生も高校生達も「挫折や困難を克服して前向きに生きる」ことの大切さを教えてもらったようでした。

講演会の最後には質疑応答の時間があつたのですが、その質問に立った生徒達のマナーの良さに感銘を受けました。質問する前に自分の学年とクラス、そして名前を言うのはもちろんですが、桑田氏の講演にたいするお礼と賛辞を述べてから質問する生徒もいて、校長としても誇らしい気持ちになりました。

また14日の日には国際コース1期生達が訪ねてきて、彼らと同期で私の教え子である卒業生の結婚式で披露するビデオレターの1シーンを撮られました。サングラスをかけて、おかしな役をやらされました。そして困ったことに、私はおかしな役をするのがとても好きです。その何日か前には中学の担任が生徒達の要請を受けて、文化祭で使うビデオ撮りにきて、カメラの前でAKB48の曲に合わせたダンス（?!）の一部を校長室でやらされました。こういうことも私は大好きで、もっと踊りたかったほどでした。

いずれにせよ、楽しい非日常の2日間でした（下記、文化祭パンフレット記事抜粋?）。

<文化祭挨拶抜粋?>

さて、皆さんもご存知の通り、この前の8日の日に、東京でのオリンピックが決まりました。そして東京オリンピックが決まった7年後の2020年に日本でオリンピックが行われるのですが、このことをしっかりと覚えておいて下さい。つまり7年後、ここにいる皆さんはもう桃山学院中学にも高校にもおらず、大学生活をしているか、あるいは社会生活をしているかのどちらかだと思いますが、そのとき、ああ、7年前、東京オリンピックが決まったときに桃山にいたんだなあと思い出して下さい。とても思い出しやすいと思います。

さてそのオリンピックのIOC会議で最終の候補地を決める最後のプレゼンテーションで滝川クリス

テルさんが「おもてなし」という言葉を使いました。

おもてなしという語源は、「私は表も裏もない純粋な真心であなたに接します」という意味もあるそうです。

桃山の文化祭にはたくさんの人たちがやってきます。卒業生達、在校生の家族の方々、近所の方々、また来年桃山に入学してくる子供や保護者の皆さん、どうか、そういったひとたちを、純粋な真心でもてなして下さい。桃山学院の生徒としてふさわしい笑顔と品格と礼節で「おもてなし」をして下さい。

<文化祭パンフレット記事抜粋?>

文化祭の「文化」とは多様性であり、「祭り」とは非日常空間への移行です（この文意を即座に理解できる中学生がいれば立派です。この文意を理解できない高校生がいれば勉学に励んで下さい）。つまり、文化祭は、さまざまな人が、さまざまな形で、日常的でない雰囲気味わう日です。普段の学校生活では分からなかった友人の違う一面を見たりする機会でもあります。また非日常性というのは、「それが終わった後から始まる日常」を生き活きと生かすビタミンでもあります。

2013.08.27 Tue

昨日（8月26日）中学と高校の始業式及び夏期休暇中の成果を問う実力テスト（初日）が行われました。お陰で一つの大きな事故もなく生徒達の元気な顔が並びました。といっても今回は中学生だけを大講堂に集めての校長挨拶で、高校生達は教室設置のテレビの放映で私の挨拶を観たことになります。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

それはさておき、私が感心したのは中学生達の行儀と反応の良さでした。式が始まると同時に最後まで正しい姿勢を崩さず、しっかりと私や先生方の話を聞いていました。また渡米・来日留学生の紹介や活躍したクラブや個人の表彰の際には、心のこもった大きな拍手で歓迎や祝福の気持ちを表してくれました。

本題に入ります。昨日の始業式で私は急遽ネットによるイジメの問題、特に今中学高校生達の間で広まってきているラインについて言及しました。

その結果、後で何名かの教員から「校長の話はとても教育的でした」（?!）という珍しいお誉めの感想（笑）をメールや口頭でもらいました。

実際、今、ネット上のイジメについては新聞紙上でも取り上げられてきていますし、今後も深刻化されていくことが予測されます。場合によっては、前回の「イジメ問題シリーズ」とまではいかなくても、「ネット問題」について（その2）も出したいと思っています。ネット上の問題が起こるか起こらないかは別にして、また起こる頻度や深刻度は別にして、どんな教育現場でも避けては通れない問題だと認識しています。

ということで始業式の私の挨拶の概要を下記に紹介します。

<2学期始業式校長挨拶>

みなさん、おはようございます。夏休みはどうでしたか？勉強合宿やクラブ合宿などもあって大変だったと思います。しかし始まる前は長い夏休みと思っていたものも、過ぎてしまえばアツと云う間だったかもしれませぬ。充実した夏休みでしたか？

さて今日は新学期を前にして、2つの話をしたいと思います。

ひとつ目は、吉永元検事総長の話です。検事総長とは日本の検事のトップに立つ人です。検事とは、皆さんも知っている通り、法律に反する悪いことをした人を調査し告発する人です。吉永氏は戦後最大の汚職事件と言われたロッキード事件やリクルート事件で大いに力を発揮し、鬼検事と言われた有名な方です。ただ悪いものや不正をしたものには、例えその人が総理大臣であろうと経済界の大物であろうと、何も怖れることなく正義の戦いを挑んだ人であったので鬼検事と言われたのですが、反対に弱い立場の人たちには本当に優しい人であったということです。ですから多くの人達に慕われ、今年の6月に81歳で亡くなられた時には多くの人達が哀しみました。

さて、その吉永氏の話として、印象的な話が新聞に載っていました。それは吉永氏がまだ旧制

の高校生のときだったということですが、ある時、試験中に試験監督の先生が教室から出て行ったそうです。そこで、試験監督がいなくなったことを幸いに、何名かの生徒達が答案を見せ合ったり、教科書を広げたりしだしたそうです。その時、その吉永氏は、立ちあがって「みんな品のないことをするな！！」と怒鳴ったそうです。その怒鳴ったのを聞いて、カンニングをしていた生徒達も自分のしていたことを大いに恥じて、一生懸命自分の力で試験に取り組み出したそうです。

私は、その話を知って感動すると同時に、是非皆さんにも「そういう心意気」を持ってもらいたいと願っています。自分がカンニングしないだけでなく、カンニングしている人に注意できる人間、あるいは自分がイジメをしないだけでなくイジメをしている人に注意できる人間になってもらいたいと願っています。

学校としては、例え試験監督がいなくても、試験が実施できる学校にしようと本気で考えています。

これは私自身が経験したことですし、多くの教員が経験していることですが、生徒は点数が下がるにも関わらず答案の訂正を伝えてくる場合があります。何年か前、ある生徒は、当方の計算ミスで4点も点数が下がるのにその答案を持ってきたことがあります。実は非常に難しいテストで、その生徒の点数は43点でした。つまり4点引かれれば欠点となるわけですが、それでも敢えてその答案を持ってきたのです。その時、私はその生徒の人格の力に心を打たれ、本当に心の底からその生徒を尊敬しました。

どうでしょうか。試験監督なしに試験を実施できる学校にしていきませんか？それにはひとりでも「試験監督がないからカンニングするような品のない生徒」がいれば実現できないことです。また、例え、そういう生徒が居ても、そういう生徒に「品のないことをするな」と言える品格と勇気のある生徒が居なければ実現できないことです。今日からテストが始まりますが、是非、そのことをしっかりと心に刻んでおいて下さい。

幸いなことに、本校で補導措置を受ける生徒は年々少なくなってきました。

そしてもうひとつ、それは昨日の新聞に載っていたのですが、ラインによるイジメの問題です。今日は、急遽2つ目にこの話を付け加えました。新聞によると、イジメとまではいかななくても、ラインで仲間外れにされるのが怖くて、抜けるに抜けれない生徒がたくさんいるとのことでした。例えば、メッセージを読んですぐに返信しないと「既読無視」と云われ、いわゆる「ライン外し」というのがなされるということです。家でもラインがあるから気が休まらないと訴えている生徒もいると書かれていました。また別の新聞には、限りなく応答が続き、どこで切ったらいいのか悩んでいる人達も多いとのことでした。

私から云わせると、そういうときこそ、しっかりした判断や対応が必要だと思います。それがライン上であっても、守るべきルールや人への思いやりというのは、とても必要なことです。いや、むしろ、ラインやツイッターやネット上においてこそ、配慮、あるいはさっき述べた品格、さらには「ダメなものはダメ」だと判断できる知性や勇気が必要だと思います。

私自身のことについては云えば、どちらかというとも新しいもの好きでフェイスブックも始めたのですが、なんかどんどん知り合いの輪が広がっていきそうで、それ以降、誰からの招待も無視

しています。きっと、私とフェイスブックを通じてやり取りしようと招待してくれた知人、友人、卒業生達にとって、私の評判は実によくはないと思います。それでも構いません。フェイスブックで時間を費やすぐらいなら、まだまだ自分を高めるために本も読みたいし、星空も見上げたいし、他の事にもいろいろ従事したいと思うからです。それに私は、人と本当に分かり合える関係を築くには、直接面と向かって話をするのが何よりも大事だと思っています。社交的な関係だけで、今の大切な時間を無駄にしたくないと思っています。

どうか皆さんもラインやツイッターなどに関わる際には、配慮と品格を持ってかかわって下さい。自分の発言がどういう影響を与えるかを考えるだけでなく、ラインなどで無駄な時間を過ごすことのないようにして下さい。（本校では放課後等での使用は禁止していませんが）できたらラインをやらないで欲しいと願っています。

それでは2学期が充実した学期となることを願って、私からの始業式の挨拶とさせていただきます。

2013.07.20 Sat

皆さんお久しぶりです。いろいろと行事や業務が重なりブログの更新もままならない状態が続いていました。

本題に入ります。

塾の皆様にご覧いただくビデオを撮影することになりました。経緯は6月21日に実施した塾の方々を対象にした学校説明会です。今回は更に昨年を上回る285の塾から350名近くの塾長や先生方が参加されました。このことは本校教育への関心の高さがうかがえるものとして誠に喜ばしく感謝に耐えないことではありますが、それ以上に、教職員一同、皆様の期待に応えなければならないという責務の大きさも痛感させられています。

「塾の方々用ビデオ制作」の発端(?)になったのは、その説明会での私の挨拶です。その挨拶の中で私は調子に乗って(?!)「プロの方々の鑑賞に堪えるような学校現場のビデオを作ればいいなあと思っています」と一言述べてしまったのです。その説明会のあと、アンケートが回収されたのですが、多くの塾の方々から「是非、校長が約束した塾用ビデオを作ってほしい」といようなご意見が書かれていました(約束まではしてなかったんですけど・・・)。またわざわざ「桃山さんの作るビデオなら結構ユニークなものになるだろうから楽しみにしています」とか云うようなコメントさえいただきました。

いずれにせよ、一度口に出したことは、ましてや校長が公の場で口に出したことは、断固やらなければなりません。例え、そのことで回りの教職員の仕事量が増えようとも、です(笑)。

ということで昨日6月19日(金)の職員会議終了後、教頭や情報処理室長や教務部長や入試統括室長など主だった面々に校長室に集まってもらって「第一回塾の方々用ビデオ制作会議」なるものを開催しました。当然、このビデオは中学の先生方にもご覧もらえれば、さらに「創りごたえ」もあるかと思えます。

そこで、皆で決めたことは「すべて教職員の手作りとして、普段見られない教育現場のシーンを取り入れる」ということでした。さて普段見られない教育現場のシーンとはどういうシーンかという話で盛り上がり、結構、様々な提案がなされました。

「入試統括室長が炎天下汗だくになって自転車で塾や中学校を回っているシーン」とか「校長室での第一志望宣言を生徒が緊張して行っているシーン」とか「遅刻の増えた生徒が生活指導室に呼び出されて叱られているシーン」とか「教育のあり方について教員同士が激論を交わしているシーン」等等・・・。

まあ、どんな作品が出来るか楽しみであります。

下記の文は、第一回「塾の方々用ビデオ制作会議」のあと、全教職員に社内メールで送ったものです。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

教職員の皆様へ

塾の方々を対象にした学校説明用のビデオを撮ることになりました。

入試説明会等で放映している「保護者・生徒向けビデオ」とは違ったコンセプトで創ります。つまりプロを対象としているので、教育現場でのリアルな風景を含めたシーンなども取りこんで、「これが桃山だ!」という感動を与えるようなものを教職員自らの手で制作したいと思います。

そのための第一回「塾の方々用ビデオ制作会議」が本日19日に役職者を集めて行われました。

詳しくは2学期の職員会議で「撮影予定シーン」などを含めて発表します。

それは別にして、先生方も勉強合宿やクラブ試合などで「これはいい」とか「これこそ桃山」というシーンがあれば、 아이폰などで撮影しておいて下さい（編集時に削られることもおおいにありますが・・・）。また今までいろんな学年で撮ったビデオなどで桃山らしいシーンがあれば下記メンバーに手渡してください。

完成予定は来年の5月です。

メンバーに加わりたい先生方は申し出て下さい。また当方から撮影・編集員を何名か依頼させていただくこともあります。

報酬は「作品を創り出した喜び」と「完成記念パーティー」です。宜しくお願いします。

学校長 温井史朗

2013.06.16 Sun

中高の体育祭も無事終了しました。今年は会場の関係で体育祭は本校の運動場で行われました。例年に劣らず素晴らしい体育祭となりました。生徒の企画力や実行力に脱帽しました。みんながみんなを応援する桃山らしい大きな歓声がグラウンドに湧き立ち、生徒達の若さ溢れるエネルギーに圧倒されました<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

感動的な場面もいくつか見せてもらいました。まさに誰かが言っていた「明るく楽しい進学校」のイメージでした。

事故や熱中症になる生徒もおらずにホッとしました。万全の注意を払っているにせよ、いつも行事のときには生徒達の無事故を祈らずにおられません。

「安心して通える学校、安全な教育環境」が非常に大切な要素であると考えています。

現在、桃山学院中学高等学校で「いのちを大切にするマニュアル（危機管理マニュアル）作り」が危機管理室を中心に進んでいます。完成後、そのマニュアルの抜粋は全生徒を通じて保護者の方々にも配布されることとなります。そういったマニュアルは既に本校においては「海外で事故に遭った場合のマニュアル」等と共に既に存在していましたが、今回作成しているマニュアルは、今まであったものより更に詳しく完成度の高い総合的なマニュアルです。そのマニュアルを作るために高校教頭を筆頭とする危機管理室のメンバーは様々な研修に参加したり、モデルとなる学校訪問等を繰り返ししてきました。まずその努力に感謝したいと思います。

さて「いのちを大切にするマニュアル」の序文を書いてほしいと教頭から云われました。

そこで私はいろいろな事を書きましたが、読み方によっては折角作られようとしているマニュアルを否定しているのではないかと誤解されかねない一文を記しました。つまり「マニュアルはマニュアルとして非常に重要な行動指針となるけれど、危機緊急の際にはマニュアルを頭に入れてながらも、マニュアルを超えた迅速な対応も求められる」ということを書きました。実際、危機的状況の場合はマニュアル通りにはいかないことも多いかと思えます。さらに云うなら、マニュアルに縛られてはならない場合もあるかもしれません。危機緊急のときには、その場にいる教職員の咄嗟の判断が明暗を分けることも周知の事実です。「留まるか逃げるか」という二者択一の判断を迅速に下さなければならないこともあります。「皆で会議を開いて多数決」が通じない事態こそ危機緊急の事態です。トップが全責任をもって判断しなければならないケースも覚悟しなければなりません。

また災害や事故に遭ったときに忘れてならないことの2つを序文で書きました。その1つが「自助努力」です。自らが不測の事態に「どう対応するか」という判断と行動が、自分自身を救う大きな要素になります。時として集団行動が正しくない場合もあります。戦時中の爆撃や家屋延焼の時、皆と共に逃げて命を落としたという例は数限りなくあります。またパニックが起こった場合、人が向かう方向に多くの人殺到して大きな事故となるケースも少なくありません。極限状況では個人個人の咄嗟の判断や行動が問われる場面もあります。

さらにもう1つ忘れてならないこととして、本校生に「他者救援」のお願いをさせてもらいました。まず、自分と家族の命や安全が確保されてからのこととなりますが、災害時に危機的な状況に陥っている人がいれば、できる限りの救援の手を差し伸べてもらいたいと云うことです。1995年の阪神淡路大震災の時も、倒壊した家屋の中で家具の下敷きになって身動きできない人達を助けたのは、近所に住む人達でした。そういったことで多くの命が助けられました。また被災地に水や食料などの救援物資を届けるということも大切な「他者支援」のひとつです。桃山学院の生徒達には、災害時などにおいては、自分や自分の家族の命や安全を確保すると共に、そういった他者支援にも心に向けて力を注いでもらいたいと願っています。

今でしょ！

2013.05.12 Sun

昨日（5月11日）、第2回学級委員総会が開かれました。その中の校長挨拶で、新旧PTA役員の方々への感謝を述べた後、ほぼ恒例となっているup-to-date（最新）な学校での出来事を3つ述べさせてもらいました。ただ、時間の関係もあり最後の話はごくサワリだけの話になりました。そこでお約束どおり、続きをブログで書かせてもらいました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

もう既に終わったクラスもありますが、今も恒例の「第一志望校宣言」を続けています。つまり高校3年の各クラスの生徒が自分の第一志望大学と志望理由を書いた用紙を校長に直に手渡すセレモニーです。ただセレモニーと言っても、多くの生徒にとっては自分の決意を確認し確固としたものにするための重要な契機ともなるようです。ここ2、3年は高2ぐらいから第一志望校宣言をしたいというクラスも出てきています。

さてそのセレモニーにおいて、私はいくつかの質問をします。質問は生徒によって違う場合もありますが、共通した質問もあります。その内のひとつに「君の望んでいる志望大学に向けての勉強はどうですか？頑張っていますか？」というものです。それに対する答えは「はい、精一杯取り組んでいます」という答えも当然あるのですが、中には「まあまあです」とか「自分なりに」とか答える生徒がいます。そういう時に私は待ってましたとばかりに「まあまあ勉強で君の望んでいる大学に通るのか?!」とか「自分なりのそれなりの中途半端な勉強で志望大学に合格できているのか?!」と喝を入れます。するとほとんど全ての生徒は焦りながらも「いえ、一生懸命頑張ります」と答えてくれます。そこで私は間髪を入れずに「いつから頑張るつもりなのか?」と聞きます。ここでももし生徒が「明日から」とか答えようものなら、さらに私の喝が続くのです。「明日なんか来ない! Tomorrow never comes! です!。さあ、どうですか?」と追い詰めます。すると大抵の生徒は「はい今日から頑張ります」と返してきます。そこで私はさらに「今日からじゃない、今からだよ。今この宣言が終わって教室に帰るときから頑張らなさい。自分の限界を一度破ってみなさい。今、今、今しかないんだよ!!」と……。そして殆どの生徒は「なるほどそうだ」という納得した表情で反応してくれます（本校の生徒は素直な生徒が多いですね）。

ところが、最近、多くの生徒が「今からです」と答えてくれるようになりました。とても嬉しいことですので、私は自分がいつも標榜している「『今』哲学」（?!）が生徒達の間でも普及してきたものと早合点していました。

その早合点が早合点だと分かったのが、あるユーモアのある生徒が「今でしょ!」と答えた時です。「あっそうか、『今でしょ!』は流行語なんだ」と気付いたのです。そういえばたまたま観たテレビのCMで予備校の先生が車の買い時を「今でしょ!」と言っていたなあと思い出したのです。その時は単に「なかなかいいことを言うなあ」と思ったのですが、テレビを余り観ない私はそれが流行語にまでなっているとは知らなかったのです。

なんか私の特許を取られたかのような気が少ししたのですが、まあ誰の口からであれ「『今』哲学」が普及すればいいと考えました。

ただ、それが流行語となった結果、生徒達の口先だけでの答えとして、上滑りしていくのが心配な気がします。

だから今度からは「いつ頑張るか？」と聞いて生徒が「今でしょ！」と答えたら、「準備もないのに今から始められるか！まずは今日帰ってから受験の日までの日数と自分が勉強しなければならない分量とを割り出して計画を立てよ！！」と言ってみようかなと思っています（笑）。要は生徒達を覚醒させることですから・・・。

「いまといういまはなかりけり 『い』の時来らば 『ま』の時は去る」
(古歌)

「あと先の いらぬことなど思うなよ ただ中ほどの自由自在を」
(古武術奥義)

「時間の流れのなかでは『今』に特別な意味があるらしい」
(アインシュタイン)

私はいつも感じるのは「今」を逃してはもったいないということです。今を充実させること、できればその今をしっかりと味わうことが大切なんだろうと思います。過ぎ去った過去をいつまでも悔んだり、まだ来ぬ未来をアレコレ心配して生きることは、生きている「今」を逃すことになるかと思います。それはとりもなおさず、今、今、今の重なりでなっている人生そのものを逃すことになりはしないかという思いを持ちます。

「よく見れば 薺（なずな）花咲く 垣根かな」（松尾芭蕉）

もし芭蕉も歩きながら「昨日の宿のご飯は不味かったなあ。あんな所に泊まって迂闊だった」と過去を悔んでいたりと、「今日、泊まる場所はあるのかなあ」と未来を思い患っていたら、垣根の所に目立たずにそっと咲いている春の七草の小さな薺の花には気付かなかったでしょう。

「確かに未来は大切である。しかし桃山の未来は、今まさに目の前にいる生徒を大切にすることにある」と教員にもよく云っています。

お母さん（あるいは「お父さん」、あるいは保護者の皆さん）、子育てには子育ての時があります。子育てといっても幼い時と中学生になってからでは違うでしょうし、高校になってからはもっと違うでしょう。しかしいずれ健全な成長過程においては、子供達は独立し親離れをしていきます。嬉しいことでもあり寂しいことでもあります。

だからこそ、今のうち、苦勞も多いでしょうが、しっかりと子育てを楽しんで下さい。アツと云う間に子供は大人になっていきます。今は苦勞が多いかもしれませんが・・・。

「明日のことは思いわずらうな 今日一日の苦勞は今日一日で足れり」

(マタイによる福音書6章34節)

話がそれてきましたので、これで私のPTA学級委員総会の挨拶の続きを終わらせていただきます(笑)。

2013.04.07 Sun

もし君がときに落胆することがあったなら
この男の子のことを考えてごらん。
小学校を中退した。
田舎の雑貨屋を営んだ。
破産した。
借金を返すのに15年かかった。
妻をめとった。不幸な結婚だった。
上院に立候補。2回落選。
下院に立候補。2回落選。
歴史に残る演説をぶった。
が、聴衆は無関心。
新聞には毎日たたかれ、国の半分からは嫌われた。
こんな有様にもかかわらず、想像してほしい。
この不器用な、ぶざいくな、むつつり者に
世界中いたるところにいるどれほど多くの人々が<?xml:namespace prefix = o ns =
"urn:schemas-microsoft-com:office:office" />
啓発されたことか
その男は自分の名前をいとも簡単にサインしていた。
A.リンカーンと。

昨日（4月6日）、高校と中学の入学式を挙行了しました。今回は低気圧の関係で天気が大荒れになるかもしれない、場合によっては暴風警報が出されるかもしれないということで、その前日から「危機管理室」を中心に対策を協議し、暴風警報が出た場合の対応をしました。つまり入学式を迎える新中1生と新高1生の保護者のご家庭に各担任から「暴風警報が発令された場合」の措置についての電話をかけさせてもらいました。入学後に行うメール配信もセットされていない状態なので止むを得ない電話連絡だったのですが、急に担任から電話を受けられた保護者の方々も驚かれたと思います。当日も危機管理室のメンバーは午前7時前に集合して「暴風の場合」に備えたのですが、懸念されていた事態にならずに済みました。

さてその入学式ですが、高校の入学式では「挫折や失敗があっても、それを前向きに乗り越えていく時に新たな運命が開ける」という主旨の話を、リンカーンに関する言葉を引用して（上記）述べました。

中学の入学式では山登りの話やiPS細胞を発見した山中教授の話为例にとって「努力することの意義や喜び、感動することの大切さ」を述べました。ただ中学1年生には云いたいことが十分に

伝わったかどうか不安です。別にどんな所でどんな話をするのにも私はそれほど緊張しないのですが、入学したての中学1年生達に話をするときには、どういう訳か未だに緊張してしまいます。話をしている私を見ている真っすぐな眼差しに出会うと「頭が真っ白状態」になりかけるほどです。

中学と高校の入学式では在校生の「迎える言葉」が実に素晴らしかったこと、また中学の入学式の後で今回初めてなされた中学1年生担任の保護者への「率直な思いの伝達」も非常に印象的でした。

明日は在校生達が中学1年生と高校1年生の入学生達を拍手で迎える日となります。

2013.03.31 Sun

今年度も終わります。何よりも、生徒の尊い命がひとつとして欠けることなく、無事に1年間の年度を終了できたことを感謝します。当たり前と云えば当たり前のことのようにですが、私にとって「生徒の命が無事なこと」が何よりのことです。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

私は今回の高校の卒業式においては、当初、式辞として用意していたことは全く別のことを述べました。それはL生活指導部長についてのことでした。生徒達が慣れ親しんできた（?!）L生活指導部長が今年度で任期を満了し退任するという話でした。

この話は卒業していく生徒達にとってかなりセンセーショナルなものだったようです。このことは在校生達に「L先生が学校を辞める」という噂にまで発展して伝わったことから分かります。そういったことから、私は在校生達にもL先生の退任にまつわる話を述べる必要があると感じ（卒業式で述べたことを思い出しながら）3学期の終業式で同じ話を述べました。

<3学期終業式での話>（一部省略）

今日は二つの話をさせてもらいます。ひとつ目は、自分の夢を実現するには、やはり努力と同時に、自分の夢を実現するんだという強い信念と心が挫けない強さが必要だという話です。もうひとつは、人を表面だけの言葉や態度だけで判断してはいけないという話です。

今からする話は、実は高校の卒業式で既に述べた話で、私は同じ話をすることは余り自分の趣味に合わないのですが、今回は、今しかできない話なので、特別に同じ話をさせてもらいます。

L生活指導部長の話です。実はL先生は、今から私がする話を皆にするのをとても嫌がっていたのですが、「生徒自身の気づきと心の成長のため」という殺し文句でL先生を説得し、許可をもらいました。

思い起こせばL先生との出会いで何よりも印象に残っているのが、L先生と初めて会った時のことです（その時も今と同じように韓国名を名乗っていました）。初めて会ったと云いながらも、決して会話を交わした訳ではありません。そのときは本校英語科の新人採用試験のときで、何十名の応募者の人達がLL教室でリスニングの2次試験を受けていました。その中のひとりにL先生がいました。そのL先生を見た時、私は、L先生が発する何かオーラののようなものを感じました。何かが他の応募者の方々とは違うと云う感じです。その後、難関を突破して本校の教員となったL先生と話す機会を持った時、私はL先生を初めて見たときの印象をL先生に告げました。するとL先生は、「そうですか、それはきっと僕が小学校の低学年から持ち続けていた『教師になりたい』という強い思いが発散していたのでしょう」ということでした。L先生は、何と小学校の低学年のときから先生になりたいくて、小学校の先生の横で赤ペンを持たせてもらい点付けの真似ごとをさせてもらっていたそうです。そしてその夢は、高校に入ってから「教師になるには英語の教師でバレーボールの指導もしたい」という、はっきりした目標になってきたということです。高校時代に自分の夢を目標に変えたわけです。それから英語を専門に学ぶための大

学に入ったのですが、そこで何名かの友人や先生や知り合いから「教師になるのはとても難しい」ということを言われたそうです。実際、当時は今と違って、国籍が違って、日本の教員になるのはほとんど不可能な状態でした。

だから、多くの人達が、L先生のことを思って、教師をあきらめるように忠告してくれたそうですが、L先生の確信は揺るがなかったそうです。そしてそういった強い確信力こそが、L先生の夢をかなえさせる原動力になったわけであります。

そういう意味では、自分の小さいころからの夢をあきらめなかったL先生は、非常に心の強さを持った人間だと思います。しかし、強いだけではありません。

「強くなければ生きられない、優しくなければ生きていく値打ちがない」というのが私の好きな言葉ですが、ここではもう一つのL先生に関するエピソードを述べさせてもらいます。

あるとき、数年前でしたか、私は、ある席で、前に座ったL先生と腕相撲をしました。どうしてそういういきさつになったかは覚えていないのですが、私がL先生に腕相撲を挑んだのだと思います。そのとき私は必死に頑張ったのですがL先生に負けてしまいました。さて私に勝ったL先生はどうしたと思われませんか？

なんとL先生は涙を流し出したのです。私は不思議に思って、その泣いている理由を聞いたところ、「あれだけ強くて元気だった温井先生が、弱くなっていたのが悲しい」ということでした。その言葉を聞いたとき、私まで何かグツと胸に込み上げてくるものがありました。が、「いや、待てよ、右腕で負けたけれど、左腕には自信がある！」ということで、左腕での腕相撲に挑戦しました。そして見事、左腕では私が勝ちました。ただ、今、考えるとL先生はわざと負けてくれたのかもしれませんが。L先生は本当に、あるいは本当は優しい人であります。そういうL先生の優しさは、様々な生徒指導の場面でも見てきました。もちろんほとんどの生徒の皆さんにはL先生は怖い先生だという印象しかもっていないかもしれませんが。成程、怖い先生です。しかし、L先生の怖さや厳しさの裏には、「生徒達が健全に育ててもらいたい」という強い思いと愛情があることを知ってもらいたいと思います。

そのL先生の厳しさの裏にある優しさや生徒への思いということを知るにつけ、いつも思い出す物語があります。それは次のような物語です。

昔、あるお寺のお坊さんのお寺の庭に野生の仔鹿がはいつてきました。そのお坊さんは優しく慈愛に満ち、非常に人柄も素晴らしく、近隣の多くの人達から慕われていました。ところが、その庭にはいつてきた仔鹿を見るなり、そのお坊さんは、仔鹿を怒鳴りつけるだけでなく、近くにあったものを投げつけて追っ払ってしまいました。それを見た信者の方が、「何というひどいことをするのですか、いくらなんでも物まで投げつけることはないでしょう」とお坊さんに訴えたところ、そのお坊さんは、「いやいや、人間は怖いということを此処でしっかりと教えておいてやらなきゃならないのだ。それでないと、人間に慣れてしまい、人間に近づいて、やがて捕まって殺されるだろう」ということを言ったそうです。

今述べた話から、私は皆さんに物事を表面だけで見てははいけないということも知ってもらいたいと思います。まして人間をその表面に現れた言動、つまり、言葉や行動だけで判断してはいけないということを学んで欲しいと願います。

実は、そのL先生が今月一杯で生活指導部長の任期を終えます（もちろん生活指導の仕事は続けてもらいます）。そして、そのL先生に代わって新年度からは私の敬愛するN.T先生という地歴公民科の先生が生活指導部長になります。その先生も厳しくも非常に温かい先生であること、また生徒の健全な成長を強く願うがゆえに、L先生同様、校則違反などについても厳しく対応する先生であります。また中学校には、新たな生徒指導主任としてT.T先生が入られます。この先生も、今述べた2人の先生達と同じく、厳しくも優しい、あるいは優しくも厳しい先生です。

「強くなければ生きられない、優しくなければ生きている値打ちはない」私の好きな言葉です。

2013.03.10 Sun

3月9日、本校ダビデジムで第3回中学校卒業式が行われました。その卒業式では、入学時と同じ人数の124名の生徒ひとりひとりに私から卒業証書を手渡しました。その時、中学を卒業していく生徒達の顔には緊張と共に希望の輝きがありました。またその後、本校の食堂（スプリングホール）を借り切って、PTA役員と中1と中2の保護者の方々のお手伝いにより謝恩会が開かれましたが、楽しくて賑やかで和気あいあいとしたものでした。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さてその時、私は高校の卒業式とは違う雰囲気を感じました。高校の卒業式では、やはり母校を去るという思いが生徒側にもあり、自分が担任をしていた生徒達を違う世界へ送り出すという思いが教員側にもあるのですが、中学校の卒業式では、そのほとんどが同じ敷地内の高校に進むので、そういった惜別の雰囲気というものを余り感じませんでした。

私自身、担任をしていた時、高校卒業式の後、誰もいなくなった教室に戻り、ひとりひとりの生徒の顔を思い起こしながら、「使わせてもらった感謝を込めて」教室の掃除を独りでしたのを懐かしく思い出します。

しかし上には上がいるもので（?!）、ある教員は、卒業式で生徒を送り出した後、誰もいない教室に戻って、もう一度、出席簿を広げて生徒ひとりひとりの名前を呼ぶとのことでした。今回は、20数名を呼んだところで涙があふれて、最後まで読むのが非常に辛かったと言っていました・・・。彼は図体も声も大きな男の教員です。

また中高一貫教員の中で、中学から高校へと持ちあがる担任や教師団は、今さらながら「6年間を共に過ごした生徒達を送り出す時の寂しさ」を心配（!）しています。

さて、先月の高校卒業式の時と同様、今回も私は既に卒業式の式次第に書かれていた式辞と違う内容のことを中学校の卒業式でも述べてしまいました。

述べた内容は「今しかできないことを大切に、今、今、今を充実させること」についてです。その中で、今しか感動できない本もあるということなども、私自身の経験をもとに述べました。高校時代に感動した本として「アルプスの少女ハイジ」があると言ったのですが、それ以外にも「赤毛のアン」などもあったのですが、余りに少女趣味だと思われるのが嫌なので、一冊だけの引用にとどめておきました。

述べる予定だった式辞は以下の通りです。

第3回 中学校卒業式式辞（一部省略）

さてこれから皆さんは中学での3年間の生活を終えて、高校という、今までと違

った3年間の学生生活に入ることになりますが、その門出に際して、私は一つのお話をしたいと思います。

それは、ある物語です。

あるとき、ひとりの裕福な主人が旅にでるので、3人の召使を呼んで、それぞれに応じた財産を預けました。そしてかなりの年月が経ち、主人が帰ってきて、預けていたお金の清算を始めました。そのとき、一人目の召使はその預かったお金で商売をし、それを2倍に増やしました。また次ぎの召使もそのお金を2倍に増やしました。だが3番目の召使は、そのお金をただ地面の中に隠してそのお金をふやさなかったという話です。そして主人はお金を増やした2人の召使には「良い召使だ。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。私とともに喜ぼう」と言い、何も増やさなかった者には「お前は怠惰で悪い召使だ」と言って、その渡していたお金を、一番お金を増やした召使に渡してしまうという物語です。実は、皆さんも気付いたと思いますが、この物語は聖書の中に出てくるエピソードです。皆さんはこのエピソードをどのように理解するのでしょうか。私は、その主人を「神様」あるいは宇宙や自然の摂理ととらえ、召使を私達自身と捉えて考えます。そして主人が召使に与えた財産こそ、私達がそれぞれ生まれながら持っている各自の才能であると考えます。あるいは潜在的な可能性、あるいは個人個人の適性であるかと考えます。聖書では賜物という言葉を使っていますが、それを英語ではgiftという言葉で表します。そのgiftには「贈り物」という意味以外に「人が生れながらにして持つ才能」という意味があります。まさに私達ひとりひとりに、各自に見合った才能、つまり適性というものが与えられているかと思います。そして自分が天から授かった賜物を生かすことこそ、充実した人生を生きることにつながるかと思えます。聖書では賜物を生かした召使が主人から褒められるとありますが、それは神様から祝福を受けることであり、魂の喜び、あるいは「生き甲斐」というものを得ることだと考えます。反対に折角、自分が天から授かって持っている可能性を、そのまま開花させずに終えることは、天から、あるいは神様から叱られること、実際に神様というの大きな愛ですから、叱ったり罰を与えたりすることはありませんが、やはり何か失敗や生活の中の困難や心の寂しさということになるのではないのでしょうか。

さて皆さんのもつ賜物とはどんなものでしょうか。今、一度考えてみて下さい。中には自分には賜物と呼べるものはないという人がいるかもしれません。しかし賜物とは、英語や数学等の学力や絵を書いたりする芸術的創造力、あるいはスポーツで活躍できる身体能力といった目に見える才能だけではありません。もしあなたが人を思いやる優しい気持ちを持っているなら、それはあなたにとって立派な才能、つまり賜物であります。もしあなたがこつこつと物事をやっていくことが得意なら、それがあなたの立派な賜物です。もしあなたが行動力を持っているなら、それがあなたにとっての立派な賜物です。もしあなたが人を和ませる力を持っているならそ

れがあなたの立派な賜物です。また人それぞれに与えられた賜物は違うかと思いますが、どうか今一度、自分に与えられた賜物とは何であるか考え、その賜物を与えられたことに感謝し、今度はその賜物が自分に与えられている理由を考えてください。その理由こそ、あなたがこの世で果たすべきミッション、つまり使命です。どうかその賜物を大切に、その賜物を人生で生かして行ってください。中には未だ自分が与えられた賜物、つまり適性や自分の可能性が何であるか分からない人も多くいるかと思いますが、それはその賜物が皆さんの中に埋もれているだけあります。どうか自分の賜物に気付いて下さい。中3から高1にかけて、私達は「夢の確認」ということを言っています。夢の確認とは自分の賜物、あるいは自分の適性や可能性の確認と言っているかもしれません。具体的に言うと、高校という時期は自分が何に向いているか、どういう進路が自分の賜物を生かすのに適しているかをしっかりと見極める時期であり、今度はその賜物を確実なものにする時期でもあります。また賜物を何倍にも増やすための準備期間でもあります。それには、学校での勉学を弛まず偏らず充実させていくことを行って下さい。いくら優しさや人を思いやるという賜物に恵まれていても、例えばそれを医療関係の中で生かすには学力や資格が必要とされます。いくら行動力という賜物に恵まれていても、例えばそれを世界を相手にするビジネスで生かすには、それに見合う語学力や教養が必要です。こここのところをシッカリと心に留めて、これからの3年間を充実させて送ってください。夢の確認から夢の実現に向けて、大きく自分を成長させて行ってください。もっと言うなら、夢を夢で終わらせないように、夢を手の届く目標に変えられるように、日々の学びを深めて行って下さい。今までの皆さんの中学の生活がどうであったかをここでは問いません。ここで皆さんに望むのは、これからは、一日一日を充実させ、自分の成長を実感できるような高校生活を送ってもらいたいということでもあります。光陰、矢の如し。ただ楽しいだけの高校生活で終わることのないように心がけてください。3年後、ここにいる皆さんが大きく羽ばたき、それぞれの賜物を何倍にも生かせる道に進むことができることを祈って、卒業式の式辞とさせていただきます。

2013.02.17 Sun

2月16日、高校の卒業式が厳粛な中にも温かい雰囲気のもとで行われました。その卒業式では、卒業証書授与のあと（既に式次第には掲載されてある私の式辞は、後で皆さんに読んでもらうことにして）急遽、予定とは違う「はなむけの言葉」を述べさせてもらいました。<?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

その「はなむけの言葉」では、L生活指導部長とT学年主任の今年度末での退任を、今まで明かさなかったお二人の人柄やエピソード等に触れながら、卒業式という場で初めて公表しました。同時に、その後のバトンを引き継ぐに相応しいT新生活指導部長やK新学年主任の紹介もさせてもらいました。そのことだけでも、卒業をしていく高3生徒達にとっては「実に印象深い卒業式」となったかと思います。また6年間にわたる生活指導部長や学年主任の大役を果たした両名の教員にとっても、印象深い、退任を飾るにふさわしい（?!）卒業式になったのではないかと「願って」います。

私が卒業式で述べる予定であった式辞（一部省略）は次の通りです。

<第65回高等学校卒業式 学校長式辞>

今、皆さんは新たな頂きに向かって、歩みを始めようとしています。その歩みを始めんとする皆様へのはなむけの言葉として、「幸せになるための3要素」をお伝えします。第一に、健康でなければなりません。健康に注意して下さい。どれほどお金に恵まれていても、仕事も十分にできない、旅行にも行けない状況にあれば、決して幸せとはいえません。2番目は、仕事が大切です。これから先、皆さんもそれぞれ自分の仕事を見つけ、その仕事に就くことになると思いますが、仕事は人生の中で大きな意味と役割を持つものです。しっかりと自分に合った仕事を見つけて下さい。3番目は家庭です。将来は素晴らしい家庭を築いて下さい。要約しますと、幸せな人生を送るには3つの条件、健康と仕事と家庭に恵まれていなければなりません。この3つに恵まれるということは、本当に幸運なことで、それだけで心から感謝すべき境遇であります。しかし、実際はどうでしょうか。なかなか3つともに恵まれない場合も多いかと思います。健康で家族にも恵まれているけれど、仕事がうまくいかない。あるいは健康で仕事もうまくいっているけれど、家庭に問題がある。あるいは仕事も家庭も申し分ないけれど健康に恵まれないというケースも多いかと思います。さらには3つのうちの2つが欠ける場合、さらに、世間には、その3つにも恵まれない人がいるのも現実です。

問題は、そういう場合にどうするかです。実は私が皆さんにお伝えしたいのは、ここからです。当然、健康に恵まれない人は健康になるための努力、また仕事がうまくいかない人は仕事をうまくする努力、そして家庭に問題がある場合には、その問題を解決する努力というものが重要です。私も努力ということに大きな価値を置いています。「人間は自らの運命の開拓者である」という言葉は、ひとつの真実として、私がよく人に示す言葉です。自分の前向きな力で自分の運

命をプラスに変えていかなければなりません。しかし、実際は、努力してもだめな場合があるのも現実です。健康、仕事、家庭については努力だけで解決できない側面があります。さてその時にはどうするかです。

結論を言いますと、そういった状況にあっても、その状況を受け入れ、そういった状況から逃げることなく、幸せな人生を意義ある人生に変えていくものが3つあります。その3つとは教養と友人と信仰です。その内のひとつを持つだけで、自分の過酷な状況を克服する力や慰めを得ることができます。

教養の力とは、いわゆる叡智を身につけることです。真の教養、つまり叡智によって物の見方を変えることです。「世の中は心ひとつの置きどころ」と云う言葉がありますが、さまざまな本を読むことによって、さまざまな人の生きざまを知ることによって、ものの見方を自ら変えていくことができるのです。自分の回りの状況を変えることができなくても、その状況に対するものの見方を変えることができるのも教養の力です。しっかりといろいろな本を読んで下さい。例えば、若くして国のために死地に赴いた神風特攻隊の出撃前の手記を襟を正して読むだけで、自分自身の苦しみや悩みがどのようなものであるのかを理解できるようになるでしょう。また教養のひとつとして芸術的な感性も養って下さい。芸術的な感性は生涯にわたって大きな心の糧となるものです。

2つ目は友人です。嬉しいことだけでなく、自分の困難や苦勞に耳を傾け、励まし理解してくれる真の友人を持つことは、生涯の宝です。どうか友人を大切にして下さい。また信頼できる友人を持って下さい。信頼できる友人を持つには、自分自らが、信頼される人間になることが必要です。どうか自分を磨いて行って下さい。

3つ目は信仰です。信仰を持つことによって、自分の苦しみや困難を、自分を高めるための神からの試練であると考えることができます。明治維新に関わった下級武士達は常に「自分が辛い状況の中で、このように命がけの苦勞をするのは、天が自分に大きな使命を与えんとしているからある」と信じました。そして実際、そういった信念が明治維新を成功させる大きな力のひとつとなりました。彼らは神というのを、天と云う言葉に変えて表現しました。信仰を持つことによって、生活の安定は得られなくとも、心の平安を持つことが可能となります。どうかそのうち3つの内のひとつでも、自分のものとして下さい。

今後の皆様の人生が意義ある人生となることを祈念して、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

2013.01.28 Mon

今回は桜宮高校での体罰事件を受けて、体罰についてのブログを書くつもりでしたが、急遽、「情けない」に切り替えました。体罰についての話は下記の教員宛に出した文書を読んでいただければ、体罰をどう捉えているかご理解していただけるでしょう。一言で言えば「体罰は教育の放棄」であると考えています。

また体罰は、私がイジメの問題のときに述べたのと同じく、学校側が「本校には体罰はない」とか「今だかつて体罰はなかった」と言い切ったり、思い込んだり、宣伝したり(?)することの中にも危険性が潜んでいるような気がします。どこの学校にも起こり得ることと捉えた中で、体罰厳禁の徹底をしていくことが大切なのではないかと考えています。

さて、その急遽変更した「情けない」話とは、退職金引き下げ前の「駆け込み退職」をした教職員が172名もいたというニュース(1月25日の文科省発表)です。

なるほど、「家のローンを払わなければならない」ということなど様々な事情があるとは思いますが。中には「親の病気の治療費が必要である」という切実な事情のある教員もいるかと思えます。当然、そういった教員が早期退職の決断をするということについては、軽々に批判するのは間違っています。

さはさりながら、そういった「どうしても止むに止まれぬ事情」がある教員は別にして、その他多くの教員には「情けない」という印象を持たざるを得ませんでした。特に「150万円前後の退職金の減額を避けるため、途中で担任を投げ出した殆どの教員」については、同じ教育に携わる者として耐え難い思いさえしました。「あなたの今までの教員生活は一体なんだったんですか?」という問を発してみたい気にもなります。私自身、当然、150万円は小さな額ではないし、そういった条例の施行の仕方についても大いに問題があることは承知しています。それでも「途中で担任を投げ出す」ということが、本当に生徒達をどういう気持ちにさせるのか、現場にどういう混乱をもたらすのか、あるいは自ら省みて恥ずかしくないのか、改めて、そういった先生方に問いかけてみたい気がします。中には駆け込み退職者の中に教頭も混じっていたとの事で、その事の方が深刻なように報じられていますが、やはり教頭の退職以上に、担任をしている教員の学年途中での退職の方が、生徒達にとってはより深刻な問題だと思っています。私に言わせればまさに「罪づくり」です。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

罪づくり 教師と医者が 筆頭ぞいのち預かる 重み知らずば

(「教育いろは唄」2012年2月11日ブログより)

体罰厳禁の通達については以下の通りです。

<体罰厳禁の確認>

先般、桜宮高校の体罰による生徒の自殺が新聞やテレビなどで大きく報じられています。大津市で起きたイジメによる生徒の自殺と同様、誠に悲痛な出来事です。

私自身、若い頃、「これだけは許せない」という思いで、あるいは自分の感情に負けて、生徒に手を振り上げたことがあるのも事実です。

しかし、今、体罰は「いかなる理由があろうと」正当化できるものではないと考えています。また信頼関係のない中でなされる、生徒の人格を否定するような言葉も、生徒の心に大きな傷を負わせることとなります。

と申しましても、生徒達との関わりの中で、決して「萎縮」するようなことがあってはいけません。この文書によって、先生方を萎縮させるのが私の本意ではありません。熱血教員（本校には多くいます）は熱血を貫いてください。生徒の血を流すのではなく、自らの熱い血を胸の内にたぎらせ、自分の真剣な姿勢や真実な言葉、あるいは創意工夫によって生徒を指導して行って下さい。

既に今回も年度初めの合同職員会議でも注意させていただいたことですが、今回の出来事を受けて、再度、先生方に体罰の厳禁をお願いします。

また今回の事件では、「他の教員も見て見ぬふりをしていた」という点も問題視されています。今回の体罰事件も、指導力のある先輩教員に対して物申すことが極めて難しい状況だったかもしれません。

ただ、本校では、（ないものと信じますが）【万一】体罰がなされたら、その場にいる先生方は勇気をもって即刻その体罰を制止して下さい。それが生徒だけでなく、体罰をふるっている先輩や同僚の教員自身をも守ることになります。

また「体罰が行われた」という情報があれば、是非、私か教頭の方に伝えて下さい。いかなる通告も、その情報源の秘匿と同時に、情報提供された方の不利益とならないように最大限の配慮を致します。

よりいっそう、「生徒が安心して通える学校」「教職員が安心して勤められる学校」作りを目指していきましょう。

以上

2013年1月10

日

学校長 温井史朗

2013.01.14 Mon

私は3つの話を生徒相手にしてはいけないと教員に告げています。まず1つ目は「品のない話」です。男女共学となった今では、そういう話がなされることは全くなくなりましたが、例え、そういう話を何名かの生徒達が喜んで聞いたとしても、結局は品のない話は教員そのものの品格を貶め、多くの良識ある生徒達の信頼を失墜させることとなります。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

2つ目は「同僚の悪口」です。「みんなが怖れているX先生は怖そうだけど、実は奥さんには頭が上がらない」程度なら、生徒の気持ちを和ませ、かえってX先生に親しみを持たせる上でプラスになるでしょう（本校にはそういった先生も少なくないようですので、T先生やL先生などと誤解を招くイニシャルは避けてきました）。しかし、そういった親しみを込めた同僚についてのコメントではなく、自分の好き嫌いで言う同僚の悪口は、教育そのものに対する不信を生徒達に引き起こします。反対に、生徒達に告げる同僚への評価は、生徒達の信頼を増加させる力ともなります。例えば「みんなが教えてもらっているあの先生は、学生時代アルバイトしていた大手塾での『教科指導力アンケート』でナンバーワンになったんやで」というような事実を、敬意を込めて生徒達に告げるだけで、生徒達のその先生に対する信頼が増加します。教育においては、教える側と教わる側の信頼が大きな要素を持ちます。好きな先生の科目が得意科目となる例は枚挙にいとまがありません。

3つ目は「政治の話」です。ここで言う政治の話とは、自分の政治的な主観や主張を生徒達に押しつける話です。特に自分が支持する政党の話をするのは、その最たる例と言えるでしょう。但し、教育的な観点から、政治の話が全ていけないかというと、難しい側面もあることは事実です。私は以前、日露戦争の話を生徒達にしたことがあります。その中で私は「もし日本が日露戦争で負けていたら、今頃、少なくとも北海道はロシア領となっているでしょう」という司馬遼太郎氏の話の引用もしました。これも現在の領土問題に絡めた視点からは政治的主張と言えないこともありません。

話は変わりますが、そのことで私が思い出したことがあります。それはかなり前の話で、私が本校の交換留学の相手校（米国東部では有名な私立高校）に滞在していたときのことです。そのとき、私が見学させていただいたSocial Studies（社会科）の時間に、その社会科担当教師が米国の2大政党のひとつである共和党（Republican）の支持者を招いて、その人から生徒達に話しをさせたのです。当然その支持者は共和党の政策が、もうひとつの政党である民主党（Democrat）よりどれほど優れているかを力説しておりました。ただただ驚きでした。日本でもし社会の時間に先生が、例えば自民党を支持する人を教室に呼んで、生徒たちに自民党支持を吹聴すればどうなるかと思うと、本当に驚きました・・・。当然、授業のあとで私はその先生に自分の驚きを伝えたところ、その先生は「大丈夫、前回には民主党の支持者を呼んで話をさせたから」ということでした。これも民主主義国の中での政治教育だからできることであり、また2大政党の国だからで

きることも知れません。

さて、本題は何かといいますと、私は3学期の始業式に「政治の話」、もっと厳密に言うなら「政治に関心をもつことの重要性」についての話を中学高校の全校生徒にいたしました。

(ちょっと中学1、2年生には難しかったかもしれませんが、話の中のいくつかの用語については簡単な解説を加えました)。

<3学期始業式での話>

みなさん、こんにちは、明けましておめでとうございます。校長の温井です。

さて早速ですが、年が改まった今、もう1度振り返ってみて、今年の皆さんにとって一番大きなニュースというのは、なんだったでしょうか？もちろん、この場合のニュースとは、家庭や学校でのニュースではなく、日本の国、あるいは世界の出来事についてのニュースです。

もちろん私にとっては、教育に携わる者の立場から、大津市の事件に端を発して、明らかになったイジメの問題です。その事に関しては、誠に憂慮に堪えない気持ちを持っています。

さて、今日はそれとは別に、もう一つ、私が大いに関心を持ったことがあります。それは、尖閣諸島等の領土に対する問題であり、原子力発電の問題であり、そして衆議院選挙であります。つまりひと言でいえば、政治の問題です。原子力発電ひとつにとっても、世論は二つに分かれていました。つまり脱原発かどうかということです。もちろん誰もが原発稼働にはリスクが伴うと分かっているのですが、問題は、まだ原発に代わるエネルギーがない段階で、原発を廃止しているのかという問題が争点になっていました。とにかく原発は危険なものなので即刻、原発の稼働を全て取り止めるべきだという意見もあれば、今の日本の経済をこれ以上悪化させないためには電気料金を上げてはいけない、それには原発の稼働もやむを得ないという意見までありました。また大きな問題として、憲法、特に憲法の前文と9条についての問題があります。それは武力による国際紛争の解決を禁止したものです。この問題についても、やはり2つの対立した意見があります。ひとつは平和を維持し日本の軍国主義化を防ぐためには現在の憲法をしっかりと維持する必要があるという意見。もうひとつは、憲法改正は軍国主義化ではなく、むしろ平和を維持するために必要な措置、つまり現在の日本を取り巻く国際状況の中で、特に今後悪化することが予想される領土問題などにおいて、国を守り国民の生命を守るためには、現在の憲法の制約を緩和して、軍事的な衝突に対する抑止力も必要であるという主張です。これに関しても、日米安保条約を絡めた視点で、様々な立場から様々な意見が述べられています。ここで私は、何もどちらの意見が妥当であるとか、正しいとかいうつもりはありません。当然、私は、私の信念に基づいて、選挙にも行きましたし、個々の問題についての私自身の見解も持っています。

しかし私の見解とは別に、私が皆さんに望むのは、皆さんも政治に関心を持ってもらいたいということです。私は投票率の低さを見るたびに「この人達は、自分達の運命を他人任せにしていると思っているのだろうか」という疑問と不安にかられます。政治は、自分の生活に関係がないと思っている人達、特に若い人達の意識の低さに危機感を覚えずにはおられません。

政治と云うもの、あるいは政治体制というものがどれほど、その国民の個人個人の生活に影響するか、しっかりと自覚をもってもらいたいと思います。

今、私は、このように「政治に関心を持つことの重要性」を話していますが、国によっては、このような話さえもできない政治体制があるということも忘れないで欲しいと思います。（「こういう話をした翌日に、温井校長はいなくなっていたという場合だってあるのです」と云う部分は教室に爆笑を巻き起こすかもしれないと思い、割愛しました）。

最後に「苛政は虎よりも猛し」という話をします。苛政とは苛酷な政治、つまり国民を苦しめる残酷な政治という意味です。虎よりも猛し、というのは虎以上に獐猛で残酷だということです。この話というのは孔子にまつわる話です。孔子という人を皆さんも知っていると思いますが、その孔子が述べた言葉です。あるとき、孔子と弟子の一向がある村の墓地のそばを通りかかると、年をとった婦人が墓の前で泣いていました。そこでどうして泣いているのかと聞くと、実はこの辺は虎が出る恐ろしい所で、自分の舅も主人も子供も虎に殺されたというのです。それを聞いた孔子の弟子が「こんな恐ろしい所なのにどうして他へ引っ越さないのですか」ときいたところ、「ここでの政治（年貢の取り立て）はそれほど苛酷ではないので、ここに住んでいる」と答えたそうです。そこで孔子は、すっかり感心し、「苛酷な政治がおこなわれている所は、人を襲う虎が出る所以上に、恐くて住みにくい所である」ということで、「苛政は虎よりも猛し」と云う言葉を残しました。どうか皆さん、今の、そして今後の皆さんの生活にも、また日本の国そのものにも、大きな影響を及ぼしてくる政治というものに関心を持って、いろんな新聞や本などを読み、様々な人の意見にも耳を傾け、しっかりと学んでいって下さい。そして政治に対する意識も高めていって下さい。

サンタになりました

2012.12.25 Tue

東日本大震災で被災者の方々に未使用の衣類や日用品を送るため、22日と23日の両日にわたってサンタの格好をしました。サンタの格好で、持ってきていただいた品物と寄付金を受け取りました。今回は、中学生や中学生の保護者の方々を対象にさせていただきました。お陰で、両日に渡って多くの品々が集まりました。持ってきていただいた皆様には、サンタに扮した私やPTA役員の方々からお礼の領収書（?!）を手渡させていただきました。ただひとり、多くの子供用の靴を持ってきていただいた父親の方には、所用のため直接お礼を言うことができませんでした（この場を借りて御礼申し上げます）。お礼の領収書は、本校中学生がクリスマスカード・デザインコンテストで入賞した作品の裏を使用しました（下記）。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

また、この場を借りて、受付け仕分けや箱詰め作業をして下さったPTA役員の方々に深く感謝申し上げます。

領収書（に代えさせていただきます）

あなた：「神様、どうして困難の中にある人達を放っておくのですか？」

神様：「いいえ、放ってはいないよ。あなたを用意しているじゃないか！」

東日本大震災で被災された方々のためにご寄付いただきありがとうございます。ご寄付いただきました品物は、皆さまの「復興への祈り」を添えて、被災された方々にお届けさせていただきます。

金 _____ 円 と「あなたの祈り」を受領いたしました。

さて、終業式での挨拶は、予定では「政治に関心を持つことの重要性」というテーマで話すつもりでしたが、終業式前にサンタの格好をしたことから、急遽、話の内容を変更し、「なりきることの重要性」を全校生徒に語りました。

<なりきることの重要性>

メリー・クリスマス！！

中学生の皆さん、今日は私の格好を見て驚いたでしょう。そう、サンタクロースの格好です。サンタクロースの格好をすることについては、ある先生から「桃山の校長がそんな格好をするのはいかかなものではないでしょうか？」と言われたのですが、私は「桃山の校長だから、サンタの格好をするのです」と断言しました。それに昔からサンタクさんにあこがれていたということもあります・・・。

サンタクロースの格好をしながら、私はサンタクロースになりきりました。「何でもやる限り

は徹底して、なりきってやる」というのが私のモットーのひとつです。ただ今回は「徹底的にやる」という点においては不十分であったと思います。誰かトナカイの役をやって欲しくて、何名かの教員に頼んだのですが、丁重に断られてしまいました。来年こそ、誰かにトナカイ役をやってもらおうと考えています。トナカイ役にぴったりの先生がいれば教えて下さい（ここであるクラスでは、何名かが担任を指さしていたそうです）。不審者侵入の訓練でも、やはり不審者にピッタリの先生がいたので（ここでもあるクラスでは、生徒達がクスクス笑い、担任を指さしていたそうです）、きっと「いいトナカイさん」も見つかるかと期待しています。

さて、ここで私は何を言いたいかと云うと「トナカイの話」ではありません。つまり「やる限りは、なりきって、徹底してやる」ことの姿勢です。

その姿勢の根本は、大学に入ってやった様々なアルバイトを通じて学びました。大学になってやるアルバイトは、それなりにプラスの面もあると思っています。

ある時、夏に賑わう大きな旅館でアルバイトをしたことがあります。そこでの労働の中心は皿洗いや布団敷きです。皿洗いといっても半端な数ではなく、洗っても洗っても、どんどん食べた後の皿が洗い場に運び込まれてきます。最初、私は、あと何枚ぐらいあるのだろうか、あと何時間ぐらい続くのだろうかとか、この後は直ぐに布団敷きに入らなければならないとか、今日は大浴場の掃除も命じられるだろうなあとか、いろいろ考えながらやっていましたが、あるとき気がつけば、ただただ皿洗いに専念していました。何も考えずに、次から次へと運ばれてくる皿を、ただただ洗っていたわけです。

その時、私は、アレコレ余計なことを思わずに、雑念を払って、ひとつのことに専念すれば、時間もアツと云う間に過ぎることに気付きました。悟りと云えば大袈裟になりますが、生き方の小さなコツというようなものを体得しました。体得というのは実際に身体を動かして学ぶことです。皿を洗っているが、皿を洗っている自分がない、いわゆる無我の状態になったのかもしれない。その後、同じように、ビラ配りや引っ越しの手伝いなどを行いましたが、その皿洗いで体得した「なりきってやる」という姿勢はその後の人生でも本当に役に立つものでした。ビラ配りをするときにはビラ配りに徹するのです。その時、友達が見ていたら恥ずかしいなあとか、このバイト代は安いなあとかを一切考えないで、ただただ全身全霊でビラ配りに徹するのです。そうして無心になってやっていると、面白いもので、ビラを手渡す前から、ビラを受け取ってくれそうな人が何となく分かるようになってきます。もちろん外れる場合も少なくありませんが、ビラの渡し方次第で、ビラを受け取られ方が各段に違ってくることも分かってきました。面白いアルバイトでは、駅構内の床掃除がありました。なかでも大変なのは、ホームの床に貼りついたチューインガムをヘラで剥がす作業です。これも本当に自分がヘラとひとつになって、横を歩いて行く人達（の脚）も目に入らないほど、次から次へとチューインガム剥がしに専念するときには、時間が経つのさえ気付かないぐらいです。

また、もうひとつ体得したことがあります。それは例えば5時間の作業をする場合、「イヤイヤやっても5時間、勇んで（積極的に進んで）やっても5時間、どうせやるなら勇んでやろう」ということです。

皆さんで云えば、勉強もそうだと思います。家事の手伝いもそうだと思います。勉強を3時間

やるにしても、「イヤイヤやっても3時間、勇んでやっても3時間」です。そしてイヤイヤやる時間は長く感じるものです。反対に自分から飛び込むつもりで、勉強そのものに自分を忘れるとき、時間は短く感じられるだけでなく、吸収力も違ってきます。イヤイヤ行う30分は3時間にも感じられ、勉強になりきって行う3時間は30分程にしか感じられなくなるかもしれません。勉強するときには勉強になりきって下さい。

もっと一般的に言うなら、学校の先生は先生になりきって、大工さんは大工さんになりきって、お医者さんはお医者さんになりきって、タクシートの運転手さんは運転手さんになりきって、母親は母親になりきって、それぞれの使命を精一杯果たすことの中で、自分という小さな殻を破る働き、本来自分に備わっている潜在的なエネルギーや力も現れてくると思います。何か自分のすることになりきって、自分を忘れるぐらいまでになるとき、その作業が終わった後、今まで知らなかった充実や歓びも感じ取れるはずですよ。

明日、私はまた3時間、サンタクロースになりきって、マルコ館1階ロビーで被災者の方々に送る品物を受け取ります。

それでは、このあとは、ダビデジムのクリスマス礼拝で会いましょう。

2012.12.01 Sat

先ずは下記の文章をお読み下さい。

本校で亡くなった生徒のご両親が本校の生徒宛に書いた文章です。

桃山学院中学校高等学校の皆さんへ

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

桃山学院中学校高等学校の皆さんこんにちは。

今日は、少しだけ私達の「命のお話し」を聞いて下さい。

皆さんはAEDを知っていますか？心臓マッサージという言葉聞いた事がありますか？私達は、ひとりでも多くの方々に「勇気を出せば救える命がある」事を知ってもらいたいと思い、心臓マッサージやAEDの使い方の講習会を行っています。私達がこのような活動を始めたのは、当時桃山学院高校3年生だった息子が、亡くなった事がきっかけでした。

私達の息子は2004年5月、スポーツテストの1500m走の途中で突然倒れました。先生方が救命処置をして下さいましたが、私達が病院に駆け付けた時にはもう意識も呼吸も無く、何度名前を呼んでも二度と目をあける事はありませんでした。信じられない事でした。いったい何が起こってしまったのだろう・・・これは夢なのか現実なのか・・・どうして子供を守ってやれなかったのだろう・・・絶望と悲しみ、悔しさと後悔だけが私達に残されました。

息子が倒れた時にはまだ、一般市民にはAEDが使いませんでした。その年の7月から医療従事者ではない一般市民にもAEDが使用できるようになり、桃山学院にもすぐに2台設置されました。息子が倒れた時、学校にAEDが設置されていれば、息子は今もここで笑っていたのかもしれないと考える日々が続きました。そして、私達のような悲しい思いをする親がいなくなるように、子供達の大切な命が守られるようにと願い活動を始めました。

そんな活動を続けて行く中、心臓マッサージやAEDを勉強するだけでなく「命」についてたくさんの事を学び、考えてきました。そして今、皆さんに伝えたい私達の思いがあります。

皆さん、どうか自分の命を大切に思ってください。

皆さんは選ばれた命です。最初は小さな点だった皆さんの命は、お母さんのお腹の中で守られながら、280日もの間頑張って2000倍もの大きさに育ちます。それだけだってすごい事です。そして、命懸けで頑張ったお母さんと、命懸けで頑張った皆さん自身の生きる力で、新しい命が誕生します。そんなふうにして生まれてきた自分の命を大切に思ってください。自慢に思ってください。今、同じ教室にいるお友達も、同じようにして生まれてきました。みんな頑張って生まれてきた大切な命です。そして親は、頑張って生まれてきてくれた子供を抱きしめ「何があってもこの子を守る」と強く思うのです。

これから先、皆さんは楽しかったり、嬉しかったりするのと同じくらい苦しい事や悔しい事があると思います。そんな時は立ち止まっても良いのです。ゆっくりと時間をかけてまた歩き始めて下さい。自分は頑張って生まれてきた命だと自信と誇りを持って進んで下さい。

今の社会には、命をリセット出来ると思っている子供達が沢山いるとの報告があります。皆さんは命がリセットできると思っていますか？命はリセットできません。一度失った命は二度とは元に戻りません。永遠になくなったままです。どうか自分の命を大切に思ってください。そして自分の命と同じようにほかの人の命も大切に思える人になって下さい。

アンデレ館の前に、息子を悼んで先生方が建てて下さった慰霊碑があります。先生方は大切な生徒達の命を預かっていることを常に心において皆さんと向き合っておられます。慰霊碑の前を通る時、改めてその事を確認するのだとおっしゃっていました。皆さんは先生方にも見守られていますよ。

ご両親や先生方に見守られながら皆さんが「自分自身大切に思える心の強さと、ほかの人の命を大切に思える優しい気持ちを持った人」に成長して下さることを願っています。

2011年11月5日

前重壽郎

奈緒

「いのちを大切にする」ということは、言葉では簡単ですが、それを教育現場でいかに実行していくか、それが「地震訓練」や「不審者侵入訓練」等を含めて、あらゆる学校に問われている課題であるかと思います。本校は、その点において、今なお不十分ながら、パイオニア校のひとつとなることが使命であると考えています。

「いのちを大切にする」教育という使命、実は本校がその使命を使命として持つに至ったのは

、上記でご両親が述べられている大きな悲劇を通してであります。学校にとって、教職員にとっての最大の悲劇、それは生徒がその尊い命を失うという悲劇です。前重響君という将来有望な素晴らしい高校3年生の生徒がスポーツテスト中にその若い命を亡くしてしまったのです。8年前のことです。1500メートルを走っているときに突然倒れこんでしまい、急遽、病院に運ばれたのですが、そのまま不帰の人となりました。その時、私達は、その現場に居合わせなかった者も、その日のことを鮮明に覚えています。私はチャプレン室で、何名かの教員と共に、響君の回復を祈っていたのを覚えています。まして、現場にいた教員、応急処置を必死で行った教員、また担任やクラブ顧問や養護教諭にとっては、その日は、忘れることのできない日として、哀しみと後悔の日として、深く心に刻まれたままであります。後悔とは「何とか助ける方法はなかったのか」という後悔です。その教員達は、そのとき以来、AED普及の原動力となっている教員であり、指導員としてAEDの使い方の講習を積極的に行っている教員であります。担任は、今も時間の許す限り、響君の月命日には顔を出しているとのこと。

本当に私達には8年前の愁嘆の日を忘れることはできません。しかし、言うまでもなく、私達と比較にならない哀しみにあるのは、そのご両親であり兄弟であり祖父母の方々であります。その後、妹さんも本校に入学してこられました。その哀しみは消えることはないでしょう。

本校においては、教職員だけでなく、地域の方々やPTAの方々を対象にAEDの講習会を実施しています。また生徒達一人ひとりの生命を大切にするとともに、他者の生命を大切にしていくという全教職員の願いのもとに、昨年度、本校では「いのちの教育室」を創設しました。今年度は「響プロジェクト」をスタートさせて、11月17日に「輝くいのち」というタイトルで第1回の講演会と会合を持ちました。助産師さんに来ていただきました。第2回の響プロジェクトも既に予定が立てられています。

ご両親は、今、AEDの普及に取り組んでいます。11月には、NPO大阪ライフサポート協会の一員として、大阪府の私立学校の校長が参加する集会で、心肺蘇生講習の必要性やAEDの普及を強く訴えられました。

「桃山で自分の息子が亡くなりました」と云う言葉に、多くの学校長は驚かれた様子ですが、その訴えが、ひとりでも多くの学校長を動かしてもらえれば本当に嬉しいことだと思っています。

「助けられる命は助けられるようにする」という思いで、多くの学校でもAEDが各所に設置され（本校では現在9箇所に設置）、直接生徒達と関わる多くの教員が心肺蘇生をできるようになれば幸いです。

「大阪ライフサポート協会」<http://osakalifesupport.jp/>

<参照>

第2回 響プロジェクト（本校保護者と教職員対象）

●日時

12月8日（土）午後1時より講演会 午後2時より救命講習会

●講師

講演会・・救命救急士 松本政明氏

講習会・・関西学生BLS協会

●場所

講演会・・図書館

講習会・・トリニティーホール

禁止令

2012.11.09 Fri

先月、第66期生の中高同窓会が本校のスプリングホール（食堂）で行われました。66期生というのは、少し前（?!）に還暦をお超えになった卒業生ですが、大勢の方達が元気な姿を見せてくれました。さて、その懇親会の開会挨拶で、私は、現在の「発展しつつある桃山学院中学校高等学校」の現況報告をしたあと、「3つの話の禁止」をお願いしました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

それは「孫の話と健康の話と年金の話」です。これら3つの話は、どうも「年寄りじみて」いるので、若者の活気に満ちたキャンパスには相応しくない、だから生き生きとした気に満ちた場を、年寄りじみた話の気で覆って欲しくないという、随分失礼なお願いをさせていただきました。こういった失礼な話ができるのも、私自身が卒業生であるからかもしれません。

だいたい孫の話になると、大概是携帯に入った孫の写真を「ドヤ！」と云う感じで見せ合ったりするものです。特に昔、周りから一目置かれていた強面のヤンチャさんが、すっかり好好爺となり、目じりを下げて孫の写真を他人に見せるのは、どうもいただけません。「あの時の、男が男に惚れるようなオヌシのダンディズムはどこに行ったんや？」と云う感じです。また健康の話になると、それは健康の話というよりはむしろ病氣自慢（?!）のような話となり、自分の病氣や手術が如何に大変だったかを主張し合ったりします。中には手術の傷跡を見せる帰還兵もいます。そういった壮絶な戦歴を持った方々の中では、私みたいに、尿管結石（とても痛かったんですが）や、ちょっと高めの血圧ぐらいただと、肩身が狭い思いに駆られたりするから不思議です。

あと年金の話、これは、今後の若い世代に負担を強いるという前提があるので、そういったことを抜きに話すこと自体に「さもしさ」と恥じらいを感じます。

まあ、偉そうなことを言いましたが、後で、その時に役員で出席しておられたひとりが「あの禁止令があったのでよかった」と云ってくれました。しかし、実際のところ、そういった禁止令がなくても、同窓生達が集まると、その場は高校生の時に逆戻りします。一気に高校卒業後に生きてきた時間を飛び越えて、昔のオレやオマエに戻ってきます。そういった場でいつも盛り上がる話題は、「先生に怒られた思い出」や「同窓生に対するいたずら」などの話です。中には、今なら「いたずら」でなく「いじめ」と見なされそうなこともあります。まあ時代が違ったこともあるのでしょうか・・・。

いずれにせよ、みんな自分の人生を生きてこられた表情が顔に出ていました。その顔が、宴が進むにつれて、高校生顔に戻って生き活きと輝いてくるのも印象的でした。

ただ誠に残念なことに、何名かは鬼籍に入っておられたり、また連絡が取れなかったりという卒業生達もいたということでした。元気な昔の仲間が共に集って旧交を温め合う歓びと共に、時の流れの速さや無常を感じた人もおられたようでした。

その後、「今、生かされて、昔の懐かしい仲間とこのように集えたことに感謝しました」という便りや、「元クラスの仲間達と再会して、今後は定期的にクラス会を開くことにしました」と

いう便りも（娘さんが手作りで創られた美味しい生チョコを添えて）いただきました。また、ひとりの方は、自分が幹部をされている財団の奨学金の交付用紙も送ってくれました。母校愛というものも実感しました。本当にありがたいことと思っています。

2012.10.14 Sun

9月9日のブログで下橋邦彦先生との出会いを書かせていただきました。またその後、先生から頂いた「ん」の項目を、私の「いろは唄」に使わせてもらいました。その後、先生との交流が続いています。少し前、先生は寝屋川の教育委員会からの依頼でなされる研修に、私の「いろは唄」を使われるとのことでした。〈?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さて、下橋先生とお会いしたときに教えていただいた下記の十首に感動しました。この十首は下橋先生の大先輩にあたる大熊辰夫先生という方が作られた十首です。大熊先生は30数年前に天王寺小学校の校長を最後に退職された方で、現在は94歳のお年ながら元気にしておられるとのこと。また下橋先生は最近、その大熊先生との出会いや交流を表した著書「喜寿に向かう風—下橋邦彦エッセイ集」を刊行されています。先生のご了承を得て、大熊辰夫先生の十首を紹介させていただきます。

<よろこび 十首>

よろこびは 児らのハーモニー 聞こえきて
校長室（へや）のうちにて 合わせ歌うとき

よろこびは 教室（へや）をまわりて学習に
くいる児らのまなざし見るとき

よろこびは 種まきし子らの走りきて
芽いでたりとおどろきつげるとき

よろこびは 脚わるき子のけんめいに
走る姿に涙するとき

よろこびは いとけなき子の遠くより
走りきてする あいさつ受けるとき

よろこびは 寄り来て語るあどけなき
子らの話をうなづき聞くととき

よろこびは 動と声の校庭で

われもかかる日ありしと思うとき
よろこびは 子らの野球にまじわりて
アウト セーフと大声だすとき
よろこびは 朝会（あさ）の話を子らとともに
若き女教師たのしみ というとき
よろこびは 夕陽のかげりゆく校庭に
しばし佇ちいで家路思うとき

(1978年4月作)

それにしても、大熊先生のお人柄が窺える十首です。子供達を思う慈愛にあふれた唄ではありませんか！

私が大学時代に薫陶を受けた教育学の教授は、「一人前の高校の教師になろうと思えば、中学校を経験しなければならぬ。一人前の中学校の教師になろうと思えば、小学校を経験しなければならぬ。さらに一人前になるには、幼稚園から高校まで経験しなければならぬ」ということを述べておられました。そういう意味で、本校は小学校までとはいかないまでも、中学校を創立したことは、教員にとっても「良かったなあ」と思います。さらに「良し」と思うことは、業務量ひとつにしても、行事等で高校よりはるかに多忙な中学校を、敢えて自ら志願する教員が多いということです。来年度からの中学担任希望者も、早くから校長室に直談判に訪れ、既に定員を超えて（?!）います。嬉しい悲鳴というものです。

2012.10.08 Mon

今月初旬、校務の合間をぬって、全国のキリスト教主義学校が集まる研修会（キリスト教学校教育同盟研修会）に出席しました。その会場は玉川聖学院中等部・高等部という学校で、東京の自由が丘という閑静な住宅地にある学校でした。さてその研修会で、私は奇しくも、この春、お父さんの仕事の関係で東京に引越し、当学院の高等部に在籍している女子生徒と再会しました。短い時間の再会でしたが、大阪から（文化的に）遠く離れた地（?!）で、それも数ある学校の中で、この春まで本校生だった生徒と再会できるのが、何だかとても不思議な感じでした。私は、その生徒の表情を見た瞬間に、「あっ、この学校での生活に満足しているな」と感じることができました。しかし、念のため、「どう、この学校は？」と聞きました。するとその生徒は「とてもいい学校です。気に入っています」という答え。そして私は、これはちょっと意地悪い質問になりかねないのですが、次のような質問をしました。「桃山とどっちがいい？」と……。その生徒は迷わず「どっちもいいです」と答えてくれました。その生徒によると、確かに最初は女子高ということで不安もあったそうですが、そういう不安も全く必要なかったとのこと、友人にも先生にも恵まれているということでした。転校先で元本校生が幸せにやってくれているというのは、嫁に出した娘が嫁ぎ先で幸せに暮らしているような安心を覚えませす（笑）。ささやかではありますが、充実した再会の時間でした。<?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

2012.09.28 Fri

大津市の問題を受けて、私は1学期終業式の日(7月24日付けブログ)にイジメ問題に言及しました。そして次のようなことを述べました。「イジメはあってはいけないし、今回のことで自ら命を絶った生徒の辛さも計りがたいものであったでしょう。当然、学校の対応には深刻な問題を孕んでいます。またその死は、イジメ問題の深刻さを世間に知らせる上で、決して無駄ではなかった」と……。ただ最後に「どんなことがあっても自殺はいけない。その点で、その生徒の自殺という行為は肯定しない」とも述べました。それに対しては、ある教師からは、「亡くなった生徒を否定するような発言」には違和感を覚えたという感想が伝えられました。<?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

私は、そこで、生徒を否定しているのではなく、生徒の取った自殺という行為を否定しているということ、そして何よりも、生徒の自殺が連鎖反応を起こすことを危惧しているということを書きました。「連鎖反応に対する危惧」ということでは、新聞記者の方にもインタビューで述べさせてもらいました。

そして、本当に悲しいことですが、その連鎖反応が起きています。当然、殆どの責任は、日本の戦後教育のあり方等にあるかと考えます。しかし、一部の責任は、マスコミの報道姿勢にもあるのではないのでしょうか？なるほど、イジメの問題に限らず、全ての深刻な問題を広く世間に知らせる責務、あるいは社会の木鐸としての役割、また報道の自由の重視ということは十分に承知しています。しかし、イジメの問題を報道するときには、イジメそのものやイジメに対する教育機関の姿勢を告発する、という姿勢と同時に、自殺という負の連鎖を断ち切るという報道方針も必要だと痛感します。もし、「イジメによる自殺」の報道がこれほどなされていなかったら、あるいは自殺の報道の中に「自殺する行為に対する否定的なメッセージ」が含まれていたなら、これほど負の連鎖が起きていなかったのではないかと、もう一度、報道姿勢のあり方を報道関係者自らが問い直してもらいたいと思います。

私達、教育関係者として心しなければならぬのは、当然「イジメの発見や防止」また「イジメへの対応」などですが、もうひとつ「若者が死を選ぶ」ことや、「困難な状況の中で自死を選ぶ若者を育てた教育のあり方」への問いかけも必要であるかと思っています。

教育においては、「イジメは恥ずかしいことである」、「イジメをしているのを見れば、それを止める勇気を持つことが大切である」ということ等と共に、「何があっても自ら命を絶つようなことがあってはいけない。強く自らを鍛えていかなければならない」という指導も必要だと思います。

全てが萎縮し、若者が弱くなり、表面的な正義のみが尊重されていくとすれば、日本の国はダメになるのではないかと心配しています。本校では「目に見える実力」だけでなく、「目に見えない実力」を重視していますが、「目に見えない実力」は、決して無菌状態の中で培われるものではありません。イジメは論外であり、イジメに対しては厳しい措置を取ることにはしていますが、そうかといって成長過程で生じる、成長に必要な生徒同士の自然な軋轢や一時的な対立関

係までも否定した「懐の狭い、戦々恐々とした教育のあり方」には疑問を感じます。

2012.09.17 Mon

14日と15日の2日間にわたって本校の文化祭が開催され、今回も多くの方々に来校いただきました。高校3年生は初日に元阪神タイガースの選手である赤星憲広氏を招いた講演会を開き、大学受験に向けての「喝！」を入れてもらいました。私も講演の前に応接室で赤星氏とお話をしました。元野球選手としては、与田剛氏や広澤克実氏とも会食をしたこともあり、初めてお会いした時には、その大きな体格に驚きました。しかし、今回は反対に、大きな活躍をなされた赤星氏の小柄な体格に驚きました。と同時に、その小柄な体格の内に秘めた熱い志を実感できる人柄にも敬服いたしました。本校でも早速、今回の文化祭を通じて、赤星氏の推進しておられる「車いす寄贈募金」の活動をサポートさせてもらいました。

また赤星氏からも、本校生徒の講演を聴く態度についての称賛の言葉をいただきました。

さて、幸運にも心配していた台風の影響がなく、文化祭も無事終了しましたが、ただひとつ残念なことは、本校の自治会執行部や生徒会が企画していた校庭でのフォークダンスだけは、突然の雨で中止となりました。

「文化祭のしおり」に書いた挨拶文を下記に掲載しますが、自治会指導部の森本部長からは、「校長の挨拶文が長すぎて、小さい文字でしか（しおりに）入れられなくなり、困ったものです」という苦言を頂戴しました。最近、スピーチだけは短くできるようになったのですが、記事となると、まだまだ書き過ぎてしまいます。実際、文化祭のしおりに掲載された私の挨拶文は、読むのに虫眼鏡が必要な小さな文字になっていました。しかし、余り反省はしていません・・・。

第64回文化祭を迎えて＜一部省略＞

さて今年は、本校生だけを対象に、短時間ながら校庭で火を燃やし、その回りでフォークダンスをするという画期的な（復古的な？！）企画が了承されました。自治会執行部や生徒会の熱意と努力によるものです。フォークダンスといえば、私（達）にも、男子校であったときの懐かしい場面がいくつかあります。

思い起こせば、2001年度に国際コースの開設がなされ本校に女子生徒達が入ってくるまでは、男子生徒にとって「1年間でただ1度」しか許されていない「集団的未知との遭遇」の機会でした（女子生徒の皆さん、『未知との遭遇』などという言葉を使って申し訳ありませんが、男子校の男子生徒にとって、女子生徒は「未知そのもの」でした。少なくとも、以前、本校生であった私にとっては『そう』でした）。つまり女子生徒がキャンパス内にあふれるという「めったにないワクワクする機会」で、その文化祭の4、5日前から、ソワソワし出した男子生徒達も多かったように記憶しています。男の子同士が手を取ってフォークダンスの練習をする、少し違和感のある場面（笑）もありました（私事になりますが、私は「冷静」を装っていました）。

それが今では、女子生徒達が文化祭や体育祭の大きな牽引力となっており、そういった大きな行事の場では、男子生徒と共に（あるいはそれ以上に）女子生徒達の楽しげな声が響き渡っています。

本年度の高校3年生諸君！！諸君は長かった男子校の伝統（但し「花のアスリートクラス」は除きます）の最後を飾るアンカーとなりました。そして諸君は「アンカーとして相応しい生徒達」であるとの評判を聞いています。ほとんどの生徒が受験に向けてのラストスパートに入っており、おちおち文化祭を楽しむ余裕などないかと思いますが、そういう皆さんにとって今回の元阪神の赤星憲広氏の話は「つかの間の安らぎ」となるのではないかと思います。赤星氏からの講演からも「何か」を学び取って欲しいと願っています。

また、コーラス大会においては、1期生が高2となった中高一貫生徒達や文理コースの生徒達が優勝を目指して、2期生と共に参入してきます。中学生達のコーラスも、先輩のアドバイスをを受けたりして、年々進化を遂げてきていると聞いています。とても楽しみです。他のコースの生徒達も練習の成果を思い存分出し尽くす歌声を披露して下さい。演出やコスチューム等も楽しみにしています。

いずれにせよ今年も桃山らしい素晴らしい文化祭となることでしょう。

そして「桃山らしい」というのは、「楽しく温かく伸びやかで品位とケジメがある」ということです。本校の文化祭に来ていただける方全員を、桃山の生徒らしい温かい心と桃山の生徒に相応しい品位ある態度で、礼儀正しくお迎えしましょう！！

最後になりましたが、自治会執行部や生徒会をはじめ、文化祭実行委員会や風紀美化委員会の諸君の努力に心からの敬意を表します。また、PTAや中高同窓会の皆様方の多大なご協力、ご支援に厚く御礼申し上げます。

「ん？それで」

2012.09.09 Sun

何日か前、元大学教授で（現在は客員教授）現在、教育評論家としてラジオなどで活躍しておられる下橋邦彦先生がわざわざ私に会いに本校を訪れて下さいました。氏は現在、悩める教師らのための相談機関である「教師駆け込み寺」を運営されており、多くの著書も記され、今もなお幅広く教育の分野で活躍されておられます。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さてその下橋先生が私に会いに来られた主な目的は「ん」でした。私が発表した「いろは唄」には、いろはの最後の「ん」が抜けており、未完となっているのが残念であるということでした。実際、私自身も、「ん」について、何か創ろうとしたのですが、「ん」から始まる単語がありませんでした。だから私はそのことを弁解したところ、こういう使い方で始められるのではないかとご指摘されたのが、下記の唄でした。

「ん？それで」すぐに答えず 間を置いて

子らの表情 見つめる教師

（下橋邦彦先生作）

ということで、私は先生が一例として創って下さった一首が、教師の生徒対応の仕方について非常に大切なことを示唆する優れた作品でしたので、その場で先生の許可を得て、「いろは唄」の最後の一首に「そのまま」付けくわえさせてもらいました。（世間ではそれを「パクッた」というそうですが・・・）

思えばありがたいことです。ある塾では、私の「いろは唄」を壁に張り出してくれているとのこと。

また先生からは新聞に掲載された「いじめ」についてのインタビュー記事についても貴重なご意見をいただきました。さらに「現在の教師の抱える問題」や「教育現場での問題」について、ご自身のキャリアや現在運営しておられる「教師駆け込み寺」での経験に基づいた貴重なお話をいただきました。短時間ではありますが、密度の濃い時間を持つことができました。

2012.09.02 Sun

昨日、中学のオープンキャンパスが実施されました。多くの小学校6年生達（中には5年や4年の年少さんたち）とその保護者の方々に来ていただきました。その中の体験授業の数学においては、かなり難しいと思われる内容を本校の教員が教えたようです。それには桃中生達も助手として参加しており、各生徒はそれぞれ先輩ぶりを発揮して、難しそうにしている児童達の横で、立派な助手を勤めたそうです。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さてその桃中生達（中学3年生）の（東大を初めする関東の難関大学見学を兼ねた）勉強合宿に関して、教員の助手をしてくれた卒業生から私にメールが送られてきました。その卒業生は現在、大阪大学工学部応用自然科学科応用化学コース3回生の荒武 将弘君です。その卒業生からのメールには、愛校心と共に、後輩達を思う気持ちが溢れています。本人の了承を得ましたので、ここにそのメールを紹介させていただきます。

温井校長先生へ

こんにちは。いつもお世話になっております。

先日、中3の勉強合宿の引率をさせて頂いたので、その時の感想です。

勉強合宿自体は、7/30,31,8/1の3日間で、僕は7/30,31の2日間お邪魔させて頂きました。

生徒たちは、朝8:30から新大阪を出発していたので、夜になると少しは疲れがでるのかと思っていたのですが、そんなこともなく夜10時まで真剣に授業を受けていました。

その後、夏期講習期間中に実施した数学のテストが一定の成績の満たない生徒は残って、課題の完成をさせていました。

その際に、僕は生徒の質問を答えていたのですが、もちろん僕に直接質問する生徒もいたのですが、僕が一番感心したのは、互いに教え合いをしている生徒たちがいたことです。それを見て僕はこういった学び合いの雰囲気というのはとても大切にしていかななくてはいけないなと思いました。

その居残りが12時過ぎまであり、僕も全員が終わるの見届けて部屋に帰ろうとしたら、まだ教室に残っている生徒たちがいました。

事情を聞いてみると、翌日の早朝試験（英単語）のために、残って自習すると言っていたのです。それを聞いて、僕はとても感心しました。

恥ずかしながら、僕が高校生の頃そこまで勉強していたかと言われると？マークがつきます。

そのかいもあってか、早朝試験はよくできていたようです。

2日目の午後から、僕と東大生の八木で、高校生活と大学受験と大学生活について話をしました。昨日も遅くまで起きていて眠たいはずなのに、僕や八木の話をととても真剣に聞いてくれていました。その際、感想を書いてくれていたので、またそれを読むのが楽しみです。

特に、八木の話は東大の素晴らしさについて熱く語っていたので、みんな東大や京大といった旧帝大を目指して、諦めずに頑張りたいと思いました。

彼らのこれからの成長がとても楽しみです。

僕は、翌日大学の期末試験があったため、この話の後、大阪に帰らせて頂きました。

今後も、時間があるときには文化祭などを見に行こうと思います。今回は、とても貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。

今後ともよろしくお願いします。

コメントできませんでした

2012.08.31 Fri

昨日の職員会議では、先ず、今学期より1年間の留学生生活を本校で送ることになる米国人留学生の挨拶がありました。来日してから日が浅いため、たどたどしい日本語でしたが、教員達から温かい拍手を受けました。それに続いて、東北の南三陸町にボランティアに行った生徒達の報告がなされました。職員会議の会議室で大勢の教員を前にしながらも、代表の4名の生徒が立派な報告をしてくれました。そのあと、被災地で撮った写真を編集した約10分間のDVDを全員で観ました。そこには震災の傷跡や本校生達が瓦礫を片付けている姿などが映っていました。そのDVDが終わった後、議長をしていた教頭から「校長、何かコメントを」と乞われたのですが、とてもコメントなど云えるものではありませんでした。かいがいしく働いている様子の生徒達の姿には感動しましたが、それ以上に、まだまだ復興とは言い難い被災地の風景に言葉が出ませんでした。

微力ではあっても、東日本大震災で被災された方々への支援を学校として継続していくことを改めて固く心に誓いました。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

以下の文は8月19日に南三陸町に向かうボランティア生徒達（34名の高校生）に手渡したメッセージです。保護者の方への簡単なメッセージも含まれます。

<東北へ向かう生徒の皆さんへ>

先ずは東北へのボランティアに参加できることに感謝して下さい。人々に手を差し伸べることができるということが、幸せです。自ら進んで何かができるということが、幸せです。皆さんの気持ちを理解して送り出してくれる保護者の方々がいるということが、幸せです。全てに感謝して下さい。

きっと皆さんが東北ですることは、東北の方々、地元の方々にとっても喜ばれ感謝されると思います。もちろん私も学校長として皆さんの行動をととても誇らしく思っています。しかし、他からの評価は、それほど重要ではありません。「ありがとう」と言ってもらえるかどうかは、それほど重要ではありません。一番重要な事は、当然、一日も早く東北の人々に蘇ってもらうことです。生活においても気持ちにおいても、蘇ってもらうことです。次に重要なことは、「私達の為すべきこと、あるいは出来ることをする」ということです。確かに私達のする事、あるいは出来る事は小さなことかもしれませんが、しかしそこに「誠」がこもっていれば、それでいいのです。「至誠、天に通ずる」という言葉がありますが、大きな誠があれば、どれほど小さいことでも天（＝神なるもの）を動かす大きな力となるのです。誠というのは、聖書では愛と表現されています

。「小さなことを大きな愛をもってしなさい」とマザーテレサは言っていますが、どうか祈りを込めて、愛を込めて、それぞれの作業を行ってください。

思えば、1995年の阪神淡路大震災の時、大阪の学校として桃山学院高校が被災地へ真っ先に駆けつけました。そのあとも本校が大阪私学の中心として援助を続けました。それから6月のある日、本校の放送部の連中が大震災の記録を残すために、カメラやマイクを持って私達教員に同行しました。雨が激しく降る日で、その日の作業は仮設住宅へ引越しをするご高齢者達の引越しの手伝いでした（カメラ撮影の許可は取っていました）。

しかし、引越しをする高齢のご夫妻が住む最初の家に着いたとき、その家の天井は震災で梁がむき出しになっており、その天井の多くの箇所から激しく雨漏りがしていました。

放送部の生徒達は、雨に打たれている筆筒や椅子などの家具を見た瞬間、自分達の目的、つまりカメラを回したりインタビューするのを忘れて、引越しの手伝いを始めました。私は、その時、彼らに「引越しは僕ら（教員）がするので、君らは自分のする事をしなさい」と命じました。またその家のご夫妻も、どうかこの家をカメラに残して欲しいと頼みました。そこで、彼らは必死でカメラを回し始めました。カメラを回している生徒のひとり「涙でファインダーがのぞけなかった」と言っていました。その記録映画はNHK杯に入賞しましたが、そんなことは重要ではありません。ただ、放送部の人たちが、激しく降る雨の中、カメラを回さずに家具を運ぼうとする姿を見たとき、私は心の底から「桃山の教師でよかった」と感じました。そして神戸の復興を信じました。

<保護者の皆様へ>

文末になりましたが、今回の東日本大震災へのボランティア活動への参加を支援していただき、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。教員と共に南三陸町へと旅立つ生徒達が現地で何を感じ取るのかは、各自違ったものとなるかもしれません。またその事が、今回の活動に参加した生徒一人ひとりに何をもたらすのか、それも今は明確に言えないかもしれません。ただ、何ものにも代えがたい体験になることだけは確かであると考えています。そして、本当に有難いと思うことは、学校側の呼びかけに多くの生徒達が応募してくれたこと、またその生徒達の気持ちを保護者の皆様が後押ししてくれたということでもあります。今後とも本校の教育活動へのご理解、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

いじめの加害生徒について

2012.08.20 Mon

今月14日のサンケイ新聞の夕刊で「いじめ問題への提言」についてのインタビュー記事が掲載されました。記事を読まれた様々な方からの反響も大きく、記事に対する好意的な感想も多くいただきました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

いずれにせよ、私へのインタビュー記事が、少しでもイジメを受けている生徒や保護者の方々を救う一助となれば、あるいは学校関係者のイジメへの対応の参考となれば幸いです。

さて、そういった感想の中に、「新聞記事のあと、すぐに私のブログの『いじめの対応』について合計8つの項目を全て読んだが、加害生徒に関して殆ど書かれていないのが残念である」という主旨の感想がありました。

もっともな感想だと思います。私自身がイジメの加害者については言及しないと決めていたことでした。大きな理由としては、「加害者についての理解が乏しい」というものです。既にブログで述べたことですが、私がイジメについて（おそらく普通の学校関係者より）少しだけ詳しいかも知れないのは、殆どが「関西いのちの電話」での経験やカウンセリング関係の研修を受けてきたからです。特に10年間勤めた「関西いのちの電話」での経験は非常に貴重なものでした。その中で、私は様々なイジメについての相談を受けました。しかし、その殆ど全てが、被害者もしくは被害者の保護者から、たまに被害者の友人や「イジメを止められないでいる第3者」からというものでした。残念ながら、加害者から、あるいは加害者の保護者からのイジメの相談はひとつもありませんでした。あと学校関係者からの相談も1件もありませんでした。「クラスでのイジメの対応について困っている」という相談ぐらいあってもよさそうなのですが、これも残念なことでもあります。

そこで私はここで、何故、イジメの加害者やその保護者からの相談が1件もなかったかについて「類推」に基づいて答えさせてもらいます。第一の理由として挙げられるのは、「イジメる方は、イジメをイジメとして捉えていない、あるいはそれほど深刻に捉えていない」というのが実情ではないかと思います。中には、被害者を自殺や不登校にまで追いやるイジメも、加害者はそのイジメを「イビリやイタズラ」程度にしか考えていないことがあるかと思います。あるいはイジメを相手の性格や態度を矯正させる「(集団)指導」と考えていたりする場合もあるかと思います。あるいはイジメを行う原因は、加害生徒達の性格的な問題や家庭環境、さらには学校生活での不適応からくるフラストレーション、あるいは本人自身さえ気付かない「心の闇」と云ったものがあるかもしれません。個々によって違うでしょう。あるいは複合的な原因がある場合も多いでしょう。中には「イジメられないためにもイジメに加担している」という弱さを持った子供達もいるかと思います。

また加害者の保護者については、先ず「自分の子供がイジメをするわけがない」と思っておられる方が多いのかも知れません。中には「イジメられるより、少々のことならイジメる方が安心である」という自己中心的な見方の方もひよっとするといえるかもしれません。また「賤」という

点で、是非善悪や「ものの程度」を子供達に教える場としての機能が欠落している家庭もあるかもしれません。

ただ、そういったイジメの加害者となる子供自身や家庭に問題がある場合があっても、やはりイジメを阻止するための努力を最大限にしなければならない現場は学校にあることは変わりません。

そういう意味からも、いのちの電話の相談員をしていた10年間の私の経験だけの話しですが、イジメについての相談が、加害者や加害者の保護者からなされなかった以上に、教育関係者からの相談が1件もなされなかったことが残念でした。

また、この間、イジメについてどういう対応をしているか、教育に関わる様々な人たちの意見を聞きました。その殆どは、私が聞いた限り、イジメの対応については、完全とまではいかなくても「できる限りの対応」を行っているとのことで安心しました。ただ2件だけは、次のようなことを聞きました。

「前任校（他府県の公立中学校）では、イジメをなかなか認定しようとしなかった。というのはイジメをイジメと認定してしまうと（、イジメを認定しながら）それに対応できなかったということで、より大きな責任を問われてしまう。それならイジメに気づかなかつたと云うほうが責任を免れやすい」というなんとも情けない内容でした。

そして、もう1件も似たような内容でした。

但し、これも2件とも「今回のこと（大津市のイジメ問題）で、学校側も大きく変わるのではないのでしょうか」という結論でした。そのことを信じたいと思います。尊い命を自ら絶った生徒や保護者の痛恨を無駄にしないためにも、「イジメ防止」への歩みを止めてはいけないと考えています。

あと、イジメを受けている生徒に対して、小学生でも分かるような簡易な表現でのメッセージを出して欲しいという要望もいただきました。難しい課題ですので、もう少し時間をいただきたいと思います。

職業調べ

2012.08.03 Fri

桃山学院中学校がキャリアガイダンスの一環として行っている「職業調べ」の2作品を紹介します。現在高校1年生となっている生徒が、中学3年生のときに作成した「職業調べ」です。生徒の氏名は伏せさせてもらいましたが、この他にも素晴らしい作品が多くありました。

職業調べ

職業名

外交官

()組()番()

外交官とは？

世界各地の約200ヶ所の在外公館や、外務省本省に勤務し、国家間の交渉の先頭に立ち活躍する。
キャリア組とノンキャリア組に分かれる。

<キャリア組>

→ “**国家公務員試験**”
に受かった人たちのこと。

<ノンキャリア組>

→ “**外務省専門職員採用試験**”
に受かった人たちのこと。

国家公務員試験

国家試験の中で1,2を争う難い。but
受験資格：20歳以上33歳未満

外交官の働き方

本省で2年の研修

↓
各国の大学で2~3年研修を受ける。

↓
外交官らしい仕事ができる。
2~3年ごとの異動。

外交官の暮らし

一生のほぼ半分以上を外国で暮らすと言われている。



外交官に

ふさわしい人とは

- 頭の回転がはやい
- 柔軟な発想力を持つ
- 豊かな敬愛がある

将来の夢への意識付け

簡単になれる職業ではないかもしれませんが、しっかり勉強して、夢を叶えて、日本のために働きたいです。

(現行のI種-II種-III種は廃止
総合職試験・専門職試験
に分かれる。)

就職活動
今日から

英語を中心に、真面目に勉強する。
多くの知識を身につける。
頑固なので、柔軟な人になれるよう努力する。

職業調べ

職業名

CGデザイナー☆

()組()番()

★ CGデザイナーとは？
3D, 3DCGソフトを活用して、テレビのタイトルや、CMアニメーションなどを作成する。

★ 平均年収：400万~490万円

★ 休日出勤・残業あり。

★ 必要な能力

- デッサン力
- コミュニケーション力
- CGグラフィックを作成するスキル
- 忍耐力
- デザイン力

メリット

結果が見れるのが楽しい。

デメリット

心身共に衰弱。好きでなければや、ていけない。



就職活動
今日から

毎日何でもいいので絵をかき、センター試験に向け、全体的に学習する。
経済学について調べる。

公的レベルでのいじめ防止策（いじめの対応その8）

2012.08.01 Wed

大津市での出来事に触発され、イジメの対応をブログで取り上げて以来、予想以上の反響があり驚いています。特に、「厳しく対応すべし」という学校側の対応についての持論に賛同意見が多く寄せられました。また「イジメを受けている生徒へ」（7月28日付ブログ）の内容を「もっと平易な言葉で書かれてはどうか」というご指摘も、敬愛する方から頂きました（これについては今後の課題にいたします）。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

但し、そういった賛同意見は有難く拝聴しながらも、私の持論には限界があることも承知しています。つまり、私が校長を務めている学校は私学であるという点です。私学の場合、例え中学であっても、極端なケースには「退学措置による（他私学や公立への）転校」という最終的な方策が残っているからです。幸いなことに多くの私学はそこまでの措置を取ることは稀であり、本校においても、当然、そういった措置を取るような状況になったことはありません。ただし、私学においては、退学という措置が制度として存在するだけで、（刀が鞘の内であって、その威を発する如く）深刻な問題行動の抑止力としての効果は否定できないかと思えます。それに比べて、公立中学校の場合、例え学校側がイジメを察知し、それに対応しても、そのイジメを阻止する最終的な方策は警察への介入依頼という以外にないのが現状ではないでしょうか。

当然、イジメを察知した場合は、イジメを行っている生徒達に厳しい対応を取らなければなりません。それでも（犯罪とも云える）深刻で執拗なイジメを阻止させることができない場合もあるかもしれません。厳しく指導しても止まない場合はどうすればいいかということです。家庭の協力を求めなければなりません。加害生徒の家庭自体が機能していない場合はどうすればいいかということです。

ある公立中学のベテラン教員は、少し立たせただけで体罰と言われ、厳しく指導すれば学校に行かなくなったことを保護者から責められ、まるで「手足を縛られてリングに上げられたボクサー状態である」と自嘲していました。そういった中でも、（中学校の教員をしている卒業生等を通じて）私が知る限り、中学の先生方はイジメの対応には精一杯努力をしています。ただ、教員だけでは、あるいは学校側だけの努力だけでは解決できない、という声があるのも事実です。

なるほど、公立中学では、イジメを含む悪質な問題行動に対しては、その反省を促すために「出席停止」という措置が取られたりしています。ただ出席停止には問題点もあるようです。ひとつは出席停止による「授業を受ける権利」の侵害です。「加害生徒には権利なんかない」と言ってしまうかもしれませんが、やはり授業に出ないことで、登校してきたときの教室での学習が一層困難なものになります。この間、担任は家庭訪問をして学習プリントを手渡したり、各教科担当者が家庭教師のようにしている学校もあると聞きました。そういった学校側の努力は別にして、やはり学校に来られないことで、学習面での遅れは不可避であり、そのことが、加害生徒が再登校した時に、さらなる問題行動を誘発させる要因になりかねません。また、もともと学校が嫌

い子供なら、出席停止を深刻にとらず、「わずらわしい」学校からの開放と捉えることもあるか
と思います。また出席停止は、あくまでも家庭でのケアがなされるということが前提になり、
(家族の居場所としての) 家庭としての機能が失われている場合、その場が仲間達のたまり場
になったりするといったマイナス面を生じるかもしれません。

そこで私は2つのことを提案していきたいと考えています。

ひとつには「加害生徒の別室登校(別室指導)の徹底」です。こういったケースでは「登校困
難な被害生徒を別室登校」させている学校もあるようですが、別室登校しなければならないのは
加害生徒の方かと考えます。「別室登校」というのは学校に来て「仲間」と共にいることがで
きないため、群れることが大好きな「やんちゃ」な子供達には、かなりキツイ措置になるかと思
います。また一時的なイジメグループの解体にもなるかと思えます。既に、こういった別室登校
を実施している中学校も多いのではないのでしょうか。

そしてもうひとつ提案したいのは「転校制度」です。こういったことが公立中学校間で行われ
ているということは、寡聞にして知りません。

具体的には、悪質なイジメの加害生徒を他の中学への転校させる制度です。ケースによっては
卒業時までの転校でなくても、一時的な転校であってもいいかと思えます。またイジメグループ
があれば、その中心となる生徒だけの転校でも十分効果を発するよう思えます。また悪質で深
刻な問題行動を起こしているグループに対しては、そのグループの個々の生徒を別々の中学校へ
転校させる措置さえあっていいかもしれません。転校先では、元加害生徒達自身が、イジメられ
ていた生徒の孤立感を体験するかもしれません。その子供達にとっては「いい薬」になるでし
ょう。教育には「苦くていい薬」も必要です。ただし、それはあくまでも教育的な措置であり
ます。従って、当然、転校先の学校では、新参者としての苦勞を強いられる元加害生徒に対する
配慮をしなければなりません。転校先で、その生徒がイジメられることがあってもいけないし、
また新たなイジメグループを形成するようなことがあってもいけません。転校生を迎える学校側
の十分な注意と配慮が必要になってくるかと思えます。

また転校制度の前提として、校区内外の各中学間の密接な協力や情報の共有が不可欠であり
ます。このことについては、やはり国のレベルでの制度決定が必要になるかと思えます。大津市
のような悲惨なイジメを2度と起こさないためにも、さらに具体的な対策が国として早急になさ
れなければなりません。それが、今回、不幸にして亡くなられた方やそのご家族のために、私達
ができることのひとつではないかと思えます。

私も、そういった思いを持って、今回この「イジメの対応」シリーズを書かせてもらいました
。校長としての職務の合間をぬって書いた記事ですので、言葉足らずの内容や読みづらい点多
々あったかと思えます。ご容赦下さい。

本校生はもちろんのこと、日本の児童や生徒達が、いきいきと目を輝かせ、充実した学校生活
を送ってくれることを強く願っています。

さらに世界中の子供達が全員、等しく教育の機会に恵まれることを祈ってやみません。

学校レベルでいじめを抑止する対策（いじめの対応その7）

2012.07.30 Mon

ここでの内容は、教育関係者にも「参考」として読んでいただくという前提で書かせてもらいます。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

先ずご理解いただきたいのは、本校が「完全無欠」という前提で書いているわけではないということです。もちろん教職員共々、「完全無欠」を目指しての努力は続けています。

抽象論になりますが、本来、教育に限らず、政治体制においても企業においても個人においても「無誤謬性」というのはあり得ないと考えています。特に、教育機関が、自らその権威を守ろうとする余り、あるいは社会的評価を損ねてはならないとする余り、無誤謬性に固執したとき、隠ぺい体質や事無かれ主義に陥る危険性を孕んでくるように思います。

要するに「私達（教育機関や教育者）は「間違いをおかさない」とか「間違っではいけない」という思いが、却って間違った方向に私達を導くように考えています。ですから、以前書いたことですが、「本校にイジメはありません」と断言する学校よりも、「本校でもイジメがありました。今後も起こる可能性はあります。但し、イジメについては、それが起こらないように最大限の予防に努めます。そして起こった場合には即座に厳正に対処します」という学校を信じます。（2012年7月5日付ブログ「いじめの対応」参照）

本題に入ります。

学校側としてイジメを抑止する対策は主に4つあると考えています。

1番目は、「イジメが起きない学校づくり」です。生徒達みんなが生き生きとした学校生活を送れるようにすることです。生徒達がお互いの個性を尊重し合えるような学校作りや日々の教育活動を促進しなければなりません。生徒達が生き生きと輝いているとき、その学校で起きるイジメは激減すると思います。校風そのものがイジメを異質なものとしてしまいます。校則での束縛が強過ぎる学校では、閉塞感が生じ、イジメは沈静化するのではなく潜行化することもあります。あるいは成績や受験結果だけを偏重する教育環境では、「人間、勉強さえできればいい」という偏った価値観で、イジメを引き起こす心の闇を生み出す可能性があります。といっても勉学面での不適應や将来的な目標が持てない生徒達が多くいることも、イジメの温床を形作る可能性があります。

また学校全体を生き生きとした場にするためには、教職員も生き生きとしていなければなりません。問題が起これば、皆が一丸となってサポートし合う職場でなければなりません。無関心が横行したり、教員間の不信、教員と校長との軋轢、あるいは思想的な対立や教育信条の対立が歪な形で現場に持ち込まれていたり、そういったことが放置されていたりすると、学校の雰囲気そのものが不健全なものとなってくると思います。

トップが強すぎて（怖すぎて？）教員が率直な意見の具申もできない、あるいは（勤務評価を怖れて）失敗したことや問題点をトップに対して隠ぺいしなければならないようでは健全な組織

とはいえません。反対に、教職員の組織が強すぎて、トップが常に教職員の顔色だけを窺っているようでも、組織として機能不全を招くかと思います。

☆ いのちこそ いのち育む いのちなり 教師自ら いきいき生きよ

☆ けなし合う 教師が多く いるならば 殺伐の気が 学校覆う

(「教育いろは唄」より)

2番目に「イジメを許容しない」という厳しい学校側の姿勢を堅持することです。本校は、自由な雰囲気であり、補導措置についても「緩やか」といわれることが多いかもしれませんが、イジメに対しては厳しい措置を取ることにしています。またイジメについては、それが起こってから対応するより、それが起こらないようにする必要から、学校側が「イジメに対しては(退学を含む)厳しい措置を取る」ということを生徒達に知らせておく必要があります。

また、なぜ「イジメがいけないのか」ということも生徒達に理解させておく必要もあります(2012年7月5日付ブログ「いじめの対応」参照)。

3番目に体制の問題です。イジメに限らず、何らかの問題が起きた場合には、すぐにその問題がトップにも伝えられ、学校側としての対応ができるようにしておかなければなりません。当然多くの学校でも、そのようになっていると思います。あるいは本校とは違ったシステムで「そのようになっている学校」も多くあるかと思います。一応、本校では問題が生じた場合、すぐに担任会が招集され、そのあと担任会の報告を受けて、校長、教頭、チャプレン、さらには養護教諭、各学年主任等が参加する委員会が開かれます。その委員会では、事実経過の確認や当該生徒の措置・対処・対応等が審議され決定されます。また保護者への連絡の仕方についても話されます。小さな事柄であっても、長い時間をかけて審議されることもあります。

特にイジメについては、こういった学校側としてどう対処するかが非常に重要になってくるかと思います。私自身、職員会議では「生徒の命にかかわることなら、例え箸のこけた事でも、私に報告するように」ということを言っています。そのせいかわざわざ「箸のこけたこと」まで報告しに来る先生がいます。それは「箸のこけた」ことであって「命には関わらないじゃないか」というような気がします。そこで「そんな事ぐらい、いちいち校長に告げに来ないように」と言ってしまうと、肝心の時に報告を躊躇されても困りますので、黙って我慢しています(笑)。

4番目は教員の資質の向上です。これも私がいつも言っていることですが、「教育の中心は教員に在り」ということです。いくら学校側の体制がしっかりしたものであっても、現実に生徒や保護者と直接対応する教員の資質や力量に問題があれば、イジメを防ぐどころか、イジメが起こっても、不適切な対処となってしまいます。初期対応が適切になされない場合には、さらにイジメを深刻化してしまうことがあります。また、イジメが解決したあとのケアがなされなかったり、場合によっては「イジメが解決した」と思い込んで、形を変えて続いているイジメに気付

かなったりしてしまいます。また必要な保護者との連携がなされなかったり、保護者への対応も的外れなものになったりします。だからこそ、教員、特に生徒達との接触が一番多いクラス担任の資質や力量が大きく問われます。そしてもし、万が一、クラス担任にそういった資質や力量がないと判明した場合には・・・？

研修への参加要請（参加強制？）、集団指導の徹底、副担任の充実、転職の勧めなど、各学校長が考えざるを得ないでしょう（笑）。

☆ 変化した 生徒の様子 身落とすな 早期に発見 早期に対応

☆ 連携を 密にするべし 家庭とは 学校だけで できぬことあり

☆ 足らざるを 知りて努力 怠るな 生徒と共に 成長続けよ

（「教育いろは唄」より）

（続く）

保護者レベルでいじめを阻止する方策（いじめの対応その6）

2012.07.29 Sun

イジメをわが子が受けている（かもしれないと心配しておられる）保護者の方々が、このブログを読んでいるという前提で書かせてもらいます。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

まず、自分の子供がイジメられているかどうかを見極める必要があります。

理想的には、イジメの初期段階でイジメを受けていることを本人の口から保護者に知らせてくれるのが一番いいわけです。イジメについては早期発見、早期対応が理想です。あるいは本人がイジメに耐えきれないぐらいになって初めて保護者に知らせる場合もあるかと思えます。実際、イジメをしている生徒達は、できるだけ学校側に知られないようにしているので、保護者の方が先に気付いて学校側に知らせるケースも多くあるかと思えます。

ただ、前にも書きましたが、イジメを受けている場合、それが深刻なイジメであっても、本人がなかなか学校にも親にも云わないケースがあります。さらには「イジメを受けているのではないかと心配して本人に聞いても、それを否定する場合さえあります。

あるいは困ったことではありますが、保護者の方が自分の子供の学校生活について神経質になり過ぎて、ちょっとした出来事に過剰反応し、それを重大なイジメであると思い込むケースもあります。要するに過保護が高じて過干渉となり、子供の自然な成長に必要な友人同士の葛藤やナカタガイまでを回避させてしまうわけです。

また場合によっては、イジメを受けている（と思った）保護者が学校を介さずに直接、加害者である（と思われる）相手の保護者に一方的な抗議をして、保護者同士に埋めがたい溝を作り出し、そのことが却って子供同士の関係性を阻害するケースもあります。こういうケースでは保護者に対する学校側の指導的対応が必要です。

さてここでは、本人自らイジメを保護者に告げない場合、本人の兆候からイジメの有無を察知するポイントのいくつかを記させてもらいます。

<自分の子供がイジメを受けているかどうかを察知するポイント>

1. 直観（何となく様子がおかしいということが一番見抜けるのは母親の場合が多いようです。やはり自分が産み育ててきただけに、子供のちょっとした様子の変化に気付きやすいのかもしれない）。
2. 学校に行きたがらない。理由は「イジメられている以外の理由」を述べる。（「腹痛」「頭痛」など身体的症状を言う場合が多い。実際、学校でのストレスが身体的な症状となって現れる場合もよくある）
3. 早退(遅刻)をよくする。（この場合も身体的症状を述べる場合が多い）
4. 学校のことを話したくない。
5. 家での様子は、ボンヤリ、イライラ、ムツツリ、コソコソ、オドオド、ビクビクなど（電話

の音に怯えたりすることもある)。情緒が不安定で、ため息などもよくつく。

6. 弟や妹を苛めたり、ペットを虐めたりするケースも見られる。親や物に八つ当たりする場合もある。
7. 学校での様子を聞くと、具体的な話をしない。「べつに」という答えなどが多い(但し、思春期の子供には「べつに」と言う反応も多くなってくるので、これだけでは判断できません)。
8. だんだん、あるいは急に金使いが荒くなったり、場合によっては親のお金をコッソリ抜き取ったりする。
9. 帰宅後、急に(呼び出されたりして)外出する。
10. 着衣の乱れや汚れが目立つ。
11. 学用品がなくなったり、損傷したりしている。
12. 身体にキズを作って帰る(また、入浴時など、明らかにそういったキズを見せないようにしている)。
13. 家でシャドーボクシングやキックの練習等をやり出す(私が一時期、理不尽でない理由によって(?!)小学校高学年でイジメられていた時、加害生徒達をコテンパンにヤっつけているシーンをイメージしながら、家でシャドーボクシングの真似ごとをよくやりました。かなりストレス解消になったように記憶しています)
14. 携帯電話を全く見ようとしなないか、あるいは反対に携帯電話(のメール等)を常に気にしている。

次に「イジメられていると推測できる場合」、その推測を確信にもっていく方法を述べさせてもらいます。

これも参考になればという思いで書かせてもらいました。

1. 本人に聞く。聞き方は父性的に「問い質すように聞く」のか、母性的に「共感的に聞く」のか、あるいは単刀直入に聞くのか、間接的に聞くのか(例えば自分の中学時代のイジメの話などをした流れで、相手の話を引き出すのか)等、いろいろあるかと思いますが、こればかりは、それまでの、あるいはその時点での親子関係のあり方によってかなり違って来るかと思っています。案外、直接、単刀直入に聞くことによって、本人が告白する場合がありますし、反対に直接的な聞き方では、なかなか「イジメを受けている」と言わない場合も多くあります。
2. 他の信頼できる保護者から(例えば小学校時代に子供を通じて知り合って、今は同じ中学の別のクラスにいる子供の保護者)に頼んで、それとなく学校でイジメられている様子がないかといった情報を提供してもらおう。
中には、親がこういったことを他の保護者に聞いているということがイジメをしている子供達に分かったら、と心配される方もおられますが、それはそれで加害生徒達のイジメを抑止する面もあるかと思っています。「大人(保護者)が知っている」「(そのうち)学校にも知られる」と意図的に分からせることもひとつの対処法であるかと思っています。

3. 担任に聞く。そして担任が何も気付いていなかったときには、担任に頼んでシッカリとした調査をしてもらうことです。そして期限を決めて、どういう調査をしたか、その結果はどうであったかを報告してもらうことです。イジメの確認については、本来はクラスの状況を一番よく知っているクラス担任に聞いたり対応を頼んだりするのが理想です。どうしても担任が頼りないという判断をせざるを得ない場合には、学年主任、あるいは生活(生徒)指導部長、あるいは教頭や校長に依頼する方法があります。ただ、校長や教頭等の上位の管理職は、現場のことが分かっていない場合もあり、結局は「問題を担任に振る」だけとなる可能性もあるかと思えますので注意が必要です。担任が「パス」なら、学年主任あたりが適切かもしれません。学年主任なら担任がどういう対応をするかについてもよく心得ているので、現実的な対応をしてくれると思いますし、一担任よりも校長に近い立場にいますので、学校全体として取り組むときにも有効な役割を果たしてくれるはずです（あくまでも一般論です）。

最後に、悪質なイジメが自分の子供になされていると判明した場合の対処法を述べさせていただきます。

それは上記3と同じ、「まずは担任に」ということになりますが、イジメの調査ではなくイジメの対処ですので、担任には学校全体の問題として扱ってくれるよう強く求めていいと思います。またそのようになっている学校も多いと思います。後は、具体的な対処法についても担任から聞き出して下さい。そしてもし、万が一、担任や学校そのものが信頼できないとすれば、後は教育委員会レベルにまでイジメの問題を持ちこまざるを得ないということを伝えて、（校長の私が言うのもおかしいのですが）校長にプレッシャーをかけて下さい。確かに、何かあればすぐに「教育委員会に訴える」と言う困った保護者もいるようですが（そういう保護者のお話はまた別の機会に）、学校側に事無かれ主義や隠ぺい体質があるとすれば、さらに上位の機関への訴えも必要なわけであります。さらに、万が一、教育委員会が機能していない場合には（その万が一が天津市の件では起こったわけですが）、あとは警察や司法の手を借りざるを得ないかと思えます。結論としては、陰湿で執拗なイジメを止めさせるには、学校側にあらゆる手立てを取ってもらう必要があるわけです。当然、担任の采配と力量によってイジメを阻止・解消する場合も多々あります。ただ、担任が自分の采配と力量によってイジメを阻止・解消できるとしても、学校側がイジメの問題を知っていること、そして常に機能的に学校側が一丸となってイジメの問題に対応し、それを解決する体制ができていることが大切です。

（続く）

いじめを受けている生徒へ（イジメの対応その5）

2012.07.28 Sat

今回、止むに止まれぬ思いに駆られて書き出した「イジメに関する」ブログへの反響は、予想以上に大きく、筆者としての責任の重さを痛感させられています。また他校（他府県の中学）で現にイジメを受けている子供の保護者の方からの話も伺い、その根の深さを思い知らされました。

そこでブログのタイトルを今までの流れで「イジメの対応」とするところを、今回は、「いじめを受けている生徒へ」とさせてもらいました。それは、実際に、他の学校でイジメを受けている生徒達やその保護者の方々に少しでも参考にしてもらいたいという切なる願いからです。前回のイジメを克服する方法の?「強くなる」及び?「友達を作る」の続きで?「助けを求める」ということについて述べます。

今まで、4つのTで始まる個人レベルでの対応策を3つまで述べてきましたが、結論から先に云いますと、執拗なイジメ、悪質なイジメ、集団でのイジメに対しては、言うまでもなく「助けを求める」が最も有効な手段となります。

ただ、多くのイジメに遭っている生徒達が、イジメられながらも助けを求めない場合があり、その理由というのは主に3つあると考えます。

第一番目はイジメを受けている本人がイジメをイジメとして受け入れていない、あるいは受け入れられないというものです。傍から見ていると、どう考えてもイジメであるのに、本人がそれを受け入れていない状況があります。理由としては、仲良しゴッコの延長線上や友人同士であった関係性へのこだわりがあります。またイジメる側も、いつも過酷なイジメを継続する訳ではなく、時には仲間として迎えたり、一時的に親密な関係を思い起こさせるような言葉をかけたりするからです。事が大きくなりそうになると、イジメる側がよく言う言葉には、「何言うてんねん、俺ら友達やろ」というのがあります。（しかし、そういった加害者の言葉に騙されてはいけません。仲間なら決して脅したり、暴力を振るったり、理不尽な使い走りをやらせたりはしません）。

また回りのクラスメイトや家族が心配して、イジメられている本人に「大丈夫か?」ときいても、本人自身が（自尊感情等から）「平気、平気」と答える場合もあります。しかし、そういった言葉に騙されてはいけません。回りで見ているイジメと感ずる場合、被害者が「平気である」と云おうと、それはイジメなのです。

イジメられながらも助けを求めない（求められない）第2の理由は、いわゆる「チクツた」ということでイジメが加速することを恐れているからです。乱暴な言い方になるかと思いますが、ちょうど暴力団に脅されながら、お礼参りを怖がって被害届けを出せないようなものかもしれません。しかし、イジメを被っていればチクらなければなりません。チクるという表現は非常にマイナス・イメージが強いのですが、要するに「告白する」ということです。あるいは自分のような被害を他の人にも負わせたくないという公的な気持ちから告白する行為は、「告発する」と

言い換えてもいいでしょう（カッコ悪いことではなく、カッコいいことだと思ってください！！だから回りで見ている子も、イジメを目撃すれば、何とかその事を教員に告発してあげてください）。勇気を持って、不当な扱いや暴力的な扱いを教師や保護者に告白するのです。告白しないで受け続ける心身のストレスは、思い切って告白した場合の一時的なストレスよりも遥かに大きいと考えたほうがいいでしょう。一挙に解決する可能性もあります。ただ告白する場合は、次回に述べる「告白(告発)の仕方」を参考にして下さい。そして正しく告白(告発)すれば、報復を必要以上に怖れることはありません。

例えが悪いかもしれませんが、警察に暴力団の暴力行為や脅しを告発したからと云って、実際に「お礼参り」される例は皆無に近いということです。理由は、脅しや暴力行為によって課せられた罪状が、お礼参りによってさらに加重されるからです。私も若かりし頃、義憤にかられて、極めてタチのよろしくないお方を訴えたことがありました。そのことでは、その方達から「覚えておけよ！」という「お礼参り」の約束ももらいました（?!）。その事を私はいまでも覚えています。未だお礼をしてもらっていません（笑）。深刻なテーマを述べるのに冗談みたいなことを言って誠に申し訳ないのですが、要は「少しの勇気を持って」もらいたいのです。勇気を出さなければならない場面は、長い人生の中で、必ず1度や2度はあるはず。勇気を持って告白することが大切です。深刻に考えすぎると、報復を恐れ過ぎていたり、そして告白を遅らせていると、事態はさらに深刻化してくるかもしれません。

次に助けを求めない（求められない）理由は、学校で一番身近に居る存在、つまり担任に対する信頼感がないということにあります。「安心して助けを求められる担任」ではないと思っているからです。要するに「うちの担任に言っても何もしてくれない」という不信が先行しているからです。実際、何もしてくれない担任、あるいは何もできない担任はいると思います。しかし、多くの担任は、本当に自分の生徒がイジメの深刻さを訴えたなら、真摯に対応してくれるはずです。案外、「何もしてくれない」というのが生徒の思い込みである場合もあります。ただ残念ながら、そうでない場合ももちろんあります。そういう場合には、「告白(告発)の仕方」も非常に大事な要素になってくるかと思えます。

以下「告白（告発）の仕方」について述べさせていただきます。

<参照> イジメの告白(告発)の仕方

下記の項目をイジメを告白(告発)する場合の参考にしてもらえればいいのかと思えます。

1. 自分が体験したイジメの事実を記録する。
できれば5W1Hの記録を残す、つまり「いつ(When)、どこで(Where)、だれが(Who)、なにを(What)、なぜ(Why)、どのように(How)」という記録を残すことです。さらに、その時、イジメを目撃していた人の名前も書くようにして下さい。イジメられている人は今日から始めてください。
2. 先ずは一番身近な担任にイジメを告白してみてください（例外はあります）。ほとんど全ての担任は、あなたの告白を真剣に受け取り、必要に応じて他の教員と協力して、イジメを止

めさせようとしてくれるはずです。

3. 保護者に関わってもらって下さい。父親や母親にイジメの事実を伝えると同時に、自分に対するイジメを止めさせるため、自分がイジメの告白(告発)を学校で行うことを言って下さい。自分ができなければ、保護者の方にイジメを告発してもらって下さい。保護者に助けを求めることは、全く正常なことです。この段階では、「自分が学校で頑張ろうとしていることを」を知ってもらっていることだけでも重要です。
4. (残念なことではありますが) 担任が正しく対処してくれない場合には、「担任以外の教員」あるいは「生活(生徒)指導部」あるいは学校側(教頭や学校長)に「イジメの事実」を伝え「イジメの対応」を求めざるを得ないというメッセージを担任に伝えて下さい。自分を超えて他の教員や学校側に告げられるというメッセージが、担任にイジメへの真摯な対応を促すプレッシャーともなります。またプレッシャーという意味では、保護者もイジメについて重大な関心を持っているということも担任に伝えて下さい。
5. 「一応」担任の立場を重んじることも大切ですが、どうしても担任が信頼できない(と判断される)場合には、直接、「信頼できる教員」や「生徒(生活)指導部」あるいは教頭や学校長に訴えてもいいかと思います。イジメに対しては学校全体で対処してもらわないといけない場合が多々あります。当然、保護者の直接的な学校への働きかけも必要であると考えます。
6. もし可能なら、複数の仲間と一緒に、イジメの告白(告発)を行って下さい。
7. 口で伝えるのではなく、文書(手紙)による告白(告発)も可能です。
8. イジメがひどい場合には、学校を休むと同時に、休んでいる理由がイジメによるものであると、学校側に知らせて下さい。学校側にイジメの深刻さを知ってもらうことが大切です。
9. イジメの相談ができる場所があります。希望しないなら、相談員に名前や学校名も言う必要がありません。

<参照>イジメについて相談できる機関の一部です。

* 24時間いじめ相談ダイヤル 0570-0-78310 (なやみ言おう)

* 大阪府 グリーンライン 06-6772-7867

(警察の少年相談窓口で名称は違いますが、各都道府県にあります)

* 関西いのちの電話 06-6772-1121

(全国的な組織で各都道府県にあります。私も10年間相談員
をしていました)

(続く)

いじめの対応（その4）

2012.07.27 Fri

前回のイジメを克服する方法の? 「耐える」の続きで? 「強くなる」及び? 「友達を作る」というについて述べます。これについてはイジメられているからといって、急に武道なんかを習い出すと、それが却って更なるイジメを誘発させたり加速させたりするという危険性もあります。しかし、やはり「イジメに負けない強さ」を身に付けることは、イジメを克服するひとつの方法ではあります。執拗なイジメを被り、強くなりたいという一心からボクシングを習い、世界チャンピオンにまでなった内藤大助選手の話は有名ですが、そこまでならなくても、やはり自ら強くなろうとすることも、イジメを跳ね返す力になると思います。 <?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

私事にわたって恐縮ですが、私の息子は1680グラムで生まれた未熟児でした。そこで父親として私が行った非常に数少ない教育のひとつ(?!)は、(失明の可能性が無くなった時点で)、武道を習わせて「心身を強靱にする」ことでした。それは身体的なハンディにより、高校を出るまで何とか理不尽なイジメを被らせたくないという思いからでした。(そのせいで、息子には「男は強ければいい」という偏った価値観を小さいときに持たせしまったという弊害もありました。) また息子だけでなく、イジメにあっている親戚の子供にも武道を習わせ、イジメ被害から抜け出させた経験もあります。

また武道を習いに道場に通ったり、体育系のクラブに入部することで、イジメを受けている学校の間(クラス)からの「避難場所」を与え、その中での新たな交友関係を築くこともできるようになります。さらに担任とは異なった大人(師範やクラブ顧問や年長者など)に出会えることによって、イジメに耐える心理的余裕も生まれるかもしれません。

次に? 「友達を作る」について述べます。今回の大津市での事件でもイジメを目撃して心を痛めていた多くの生徒達がいまして、勇気を振り絞ってイジメの事実を学校側に訴えた生徒もいたわけですが。イジメを受けている子供の苦しさは主に2つあります。ひとつはイジメそのものからくる「心身のダメージ」です。もうひとつは「孤立感」です。特にイジメられてる子供の孤立感は私達が想像する以上に強いものがあります。中には「みんなが自分を毛嫌いしている」という被害妄想を持つに至ったり、「学校以外の人達(例えば近所の人達)も自分の悪口を言っている」という神経症的な症状に至ることもあります。ところが実際は「みんな」ではないのです。大津市の問題についても明らかになりましたように、イジメの加害者に批判的な生徒達、さらにはイジメの被害者に深く同情している生徒達も多くいるのが普通です。中には、これも大津市の問題について明らかになったように、何とか手助けしたいと思っている生徒達もいるのです。ただ集団的なイジメの真ただ中にいる子供には、そういうことは考えも及ばず、孤立感を深めていくように思われます。成程、イジメを受けている生徒に対して、他の生徒が直接「救いの手」を差し伸べることはできないにしても、せめて帰宅後に電話で話をするぐらいのことはできるわけです。自分には「話せる相手がいる」「みんながみんな自分の敵ではない」さらには「自分のことを分かってくれる友人がいる」というだけで、直接的なイジメの解決にはならなくても、孤立

感だけは緩和されるようになります。

A君：「中学校の時、お前には云わなかったけど、俺は～や～達からイジメを受けてたんや」

B君：「ああ、うすうす気づいていたけど、助けられなくて悪かったと思ってる」

A君：「いいや、お前が友達でいてくれたから、学校に行けてたんや」

というような会話が、何年か後になされたりする場合があります。

ですから、（この記事を読んでいる中で）現在イジメを受けている生徒がいたら、どうか「この子」と思う生徒（自分のことを分かってくれそうな生徒、信頼できそうな生徒、以前親しくしていた生徒、他の学校に行っている生徒等）と親しくなって下さい。別に最初からイジメの話をしなくてもいいのです。怖くて助けられないと思いながらも、何とか力になりたいと思っているクラスメートもいるはずです。場合によったら他のクラスに気の合いそうな仲間がいるかもしれません。少なくとも「自分は一人ではない」ということを信じて、誰かと友人になって欲しいと願います。

但し、「友達を作る」というやり方も、イジメの加害者達が「ある程度の限度をわきまえている生徒達」である必要があります。イジメを受けている生徒に同情しながらも、加害者や加害者のグループが「手に負えない」連中なら、被害生徒と友達になることによって「いつ自分もイジメの対象にされるか分からない」場合もあるわけです。それでも、敢えて勇気を持ってそういった生徒と友達になってあげられる人がいたら、本当に立派だと思います。

本校では、いつでも、イジメをしないのは当然ながら、イジメをしているのを見たら、直ちにそれを止められる「立派な人間」になってもらいたいということを言ってきています。（続く）

いじめの対応（その3）

2012.07.26 Thu

これから私は「いじめの対応」についての見解を述べたいと思います。それらの見解は、長年にわたる教育現場での経験に基づいたものですが、それ以上に、30代から40代にかけて「関西ののちの電話」での経験やカウンセリングの研修等に負うところが少なくありません。特に「関西ののちの電話」の相談員としての経験はいじめの構図を知る上で私にとって貴重なものでした。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

当時は「いじめ相談ダイヤル」なども設置されていなかったせい、また、「のちの電話」へのいじめ相談も少なくありませんでした。電話をしてくる年齢層もさまざま、当然いじめられている子供の保護者からの相談もありました。そこで気付いたことは、いじめを受けている子供やその保護者は、学校に対して不信感を持っている場合が非常に多いということです。相談員は規定によって名前や職業などを相手に知らせないということになっているので、電話をかけてくる人は、私が教育関係の者だと知らずに、延々と学校への不信や担任への不満を述べることも多々ありました。また、学校側が全く気付いていないことも多くあるということを感じました。ただ、現在と違うところは、当時には携帯やスマートフォン等のSNSによるいじめが存在していなかった点です。このSNSによるいじめは現在かなり深刻化していると思います。一瞬にして悪質な情報が飛び交う世界です。これについては個人だけでなく、学校や企業なども風評被害を被っていることも多いかと思っておりますので、これについてはまた稿を改めて書かせてもらいます。

今回から書く内容が少しでも「いじめを受けている生徒やその保護者」の参考になれば幸いです。

いじめの対応については、**？. 生徒個人のレベルでいじめを克服する方法、？. 保護者レベルでいじめを阻止する方策、？. 学校でのいじめを抑止する対策、？. 公的レベルでいじめを防止する制度**を、私自身の持論として述べてみたいと思います。

まず生徒個人がいじめを克服する方法について述べてみます。それは4つのTで始まる方法、つまり「耐える」「強くなる」「友達を作る」「助けを求める」の4つです。当然、悪質で執拗ないじめに対して生徒個人でできること、特に小学生や中学生にできることは限られていますし、より重要なのは学校側や大人の対応にあることは当然です。ただ、やはり子供が自ら「いじめを克服する」ことができれば、それはそれで「成長」や「自信」という果実を手に入れる機会となることも否めません。但し、大津市のケースや男子生徒を溺れさせた「集団暴行」とも云えるケース等、悪質で執拗ないじめについては問題外です。個人的に「克服できる」レベルではありません。

ということで、最初に「耐える」について述べますが、ここでも「耐える」についての持論は、自力で耐えられる程度のいじめが前提となります。

実際、小さなイジメは私達の多くが経験してきたことです。「仲間外れ」や悪戯なども子供の世界にはよくあることです。また前にも書いたことですが、明らかにイジメと分かる場合は別にして、イジメと「じゃれ合っていること」の区別や仲良しゴッコの中でのナカタガイも低学年ではよくあることです。それを全て大人が介入して解決することも、ある意味、子供の成長を止めることにも繋がります。

大人の世界にもイジメに近いもの、あるいははっきり云ってイジメそのものがあります。例えば会社に入って、上司から不当な扱いや叱責を受けたからといって、学校と違って、会社にはそれを訴えて解決してくれる先生も親もいないわけです。そこでは家族のため、あるいは自分の将来のため、涙ながらに耐えなければならないこともあるかと思います。（但し、余りにもひどい場合には然るべき機関に訴えたりすることは可能です）

また、ある程度、耐えられるほどのイジメなら、先生に訴えて「チクツた」と言われるよりも、あるいは頼りないと思っている担任（全国的にはそういう先生も少なからずいるのではないかと危惧します）に言うよりも、「耐える」方がいいという選択肢もあるかと思います。実際、日本全国には「耐えている子供たち」も多くいるかと思います。当然、ただ耐えるだけでなく、そのイジメから逃れようと自分なりに知恵を働かせたり、時が過ぎるのをひたすら待ったり、さらには他の事で気を紛らわしている子供、さらには自分自身が自分より弱い立場の者のイジメに加担していることさえあるかと思います。そういった「耐え忍んでいる子供達」には、一般的な励ましであっても、「苦しんでいるのは君だけじゃないよ」とか「いつまでもイヤなことが続くわけじゃないよ」とか「学校だけが全てじゃないよ」というようなエールを送りたい気がします（但し、イジメられるのを逃れるために「イジメる側」になっている場合はまた話は違ってきます）。

また保護者の方も「それぐらい我慢しなさい！！」と言っている方もいるかと思います。それはそれで「社会に出てから必要な精神力や忍耐力といったものを子供に身に付けさせる」ひとつの妥当性のある家庭教育のあり方だと思えます。

実際、耐えていると、学年が上がるとかクラスが変わるとかイジメる子の対象が変わるという、何らかの状況の変化によって、自然にイジメがなくなったり軽減したりするケースもあります。但し、最初は「耐えていれば何とかなる程度のイジメ」であっても、「耐える」という態度が、さらにイジメる側を増長させる危険性も孕んでいることも忘れてはなりません。そこを学校なり保護者なりが見極めなければなりません（続く）。

いじめの対応（その2）

2012.07.24 Tue

終業式では、全生徒対象に「大津市で起きたイジメ問題」にも言及しました。<?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

要点は、イジメに対する私自身の見解と、そういったイジメが起きた場合に本校は厳しい措置を取るということ、そしてさらに2つのことを付け加えて述べました。

ひとつは（大津市の中学の場合は、そのイジメを目撃しながらも、みんなで止めたり、みんなで声を上げ続けたりすることができなかったという事情は十分理解できることとして）本校では、やはりイジメをしている場面を目撃した場合には、勇気を持って、それを止める生徒達が多くいることを期待するということを述べました。そういう場面では「なにアホなことをしてんねん」と言える生徒もいてもらいたいと述べました。そして、そのことに関連して、イジメに限らず、サイレント・マジョリティーになってはいけないこと（中学生の皆さんには少し難し過ぎる話だったかも知れませんが）、また真の勇気とは「怖がらないことではなくて、怖くても逃げないこと」、「勇気も持って声を上げること」だということにも敷衍しました。

さらに、何があっても自ら命を絶つことは容認できない、ということも生徒達に強く訴えました。後に残された家族のことを考えても、自ら命を絶ってはいけないと強く訴えました。この私のコメントに関しては、大津市で亡くなられた中学生に対して校長はどう思われるのでしょうかという率直な疑問を、終業式の後、私に求めた教員もいました。当然、私は、自ら命を絶ったその中学生においては、中学生では到底耐えきれないほどの厳しい状況の中にあっただし、責任はイジメた側、あるいはそれを放置した大人達にあることは十分承知しています。しかし、それでも、どれほど辛い状況にあっても、（イジメに限らず）どれほど過酷な状態に追い込まれても、若者が自ら命を絶つことはあってはならないという思いを持っています。自殺ではありませんが、私自身、生徒に亡くなられた哀しみを体験しています。まして残された親のことを思うと、いたたまれない気持ちになります。

また今後、心配でならないのは、今回のことを引き金にして、そういった（イジメによる自殺の）連鎖が起こるのではないかということです。今も尚、イジメにあつて辛い状況の中にいる子供達は日本に大勢いるように思います。もしかすると、私達教職員がいくら注意していても、本校にだけっているかもしれません（前々号参照）。今後は教育機関だけでなく、マスコミ等も含めて、そういった連鎖が起こらないように、「イジメは悪い」だけでなく「イジメを放置する学校や教育委員会が問題である」だけでなく、「何があっても自ら命を絶つようなことをしてはいけない」ということも同時に強く訴えていく必要を感じています。本当に今回、自ら若い命を絶たざるを得なかったお子さんのためにも、また想像を超える哀しみや怒りの中にあるその子のご両親のためにも、その子の死を無駄にしてはならないと考えています。今回の件が大きな教訓となり、イジメ防止のための大きな改革の糸口となることを祈ってやみません。

イジメにつきましては稿を改めて、再度、持論を述べさせていただきます。

2012.07.22 Sun

終業式（7月20日）は、高3生徒のみを大講堂（トリニティーホール）に集め、中学生を含む他学年は館内テレビ放送のライブで行いました。実際には、終業式が済んでも、夏期講習、勉強合宿、クラブ合宿、桃山合宿、サマーキャンプ等の行事が入っていますが、一応は1学期の区切りということで、活躍したクラブ員の賞状授与等を行った後、校長挨拶をしました。また終業式の後には、高3生徒に残ってもらい「大学受験に向けての話」をさせてもらいました。<?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

終業式での挨拶では主に2つの事柄を述べました。

ひとつは、来月の19日に南三陸の向かう30数名の本校高校生のボランティア（応募者の中から作文等で選考）についてでした。

話の要点としては、今年の1月の弁論大会で中学1年生の生徒が発表した「本当の意味でのガンバレを言うために」の内容を引用して（2012年1月27日ブログ「お団子賞新設」参照）、支援というのは言葉だけではなく行動を伴わなければならないこと、また今回の東日本大震災のボランティアには、実費を支払ってまで、多くの生徒達が応募してくれたことを述べました。さらに、九州での豪雨被害が伝えられてから、1名の生徒のいわゆる「ドタキャン」があったことも伝えました。そのドタキャンの理由は、東北ではなく、今回の豪雨で深刻な被害を受けた（親戚も居て、より馴染みのある）九州の被災地にボランティアに行くからというものです。その生徒の主体的なドタキャンに改めて敬意を表します（?!）

さてもうひとつ全生徒にした話は大津市で起きた出来事に関してです。

このことについては、稿を改めて次回のブログで述べたいと思います。（キャリアガイダンスの一環として行っている「職業調べ」について、その素晴らしい作品例をブログで紹介すると約束していた2名の生徒さん、もう少し待って下さいね）

閑話休題

翌21日には中高同窓会の総会が行われました。年々、同窓会への出席者が増えてきていますが、特に今回の懇親会には国際コースの1期生達が7名も参加してくれました。これらの生徒達は2001年に国際コースを発足させて初めて受け入れた女子生徒達でした。初めての女子生徒の受け入れということで、当方の苦勞も多々ありましたが、それだけに彼女達の高校生活の印象もひととき強く、愛校心も並々ならぬものがあると感じました。

また同窓会の懇親会においては、国際コースの4期生女子卒業生の2名が率先して東北ボランティアの寄付を募ってくれました。お陰でその場で10万円近くの寄付を多くの出席者からいただきました。

この場を借りて深く御礼申し上げます。

2012.07.05 Thu

昨日（7月4日）から今日にかけて、新聞やテレビで大きく報道されている大津市で起こった「イジメ」の問題について書きます。今日は久しぶりに時間ができたので、ブログで他の事を書く予定でしたが、あまりにもショッキングな出来事なので、急遽「イジメの問題」について書くことにしました。特にアンケートで教員がイジメを放置したことを示す回答がなされており、それを読んで心に詰まるものがありました。せめてブログを書くことで、その詰まるものの一部でも吐き出したい思いに駆られています。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

新聞の記事には、自殺した生徒に対するイジメに関して「先生も見て見ぬふりしていた」とか「一度、先生は注意したけれどこわくて言えなかったらしい」とかの回答が生徒対象に行ったアンケートでなされたとのこと・・・。

腹立たしい思いと、悲しい思いとが交錯しています。

「イジメられて自殺する」ということは起こってはならないことです。と云うより、起こしてはならないことです。やはり学校側の責任、市教委の責任、そして担任を始めとする教員の責任は非常に重いものだと思います。

なるほど、学校現場でイジメは起こります。どれほど注意していてもイジメは起こると考えた方がいいと思います。もし「保護者の皆様、安心して下さい。わが校には、イジメはありません」と断言する学校があれば、私はその学校を余り信じることができません。また、本当にそのように思っている学校あるとすれば、ある意味、非常に危険でもあります。むしろ「本校でもイジメがありました。今後も起こる可能性はあります。但し、イジメについては、それが起こらないように最大限の予防に努めます。そして起こった場合には即座に厳正に対処します」という学校を信じます。

実際に、学校の学力レベルに関係なく、イジメというのは起こるものだと考えたほうがいいのです。当然、「イジメの原因」、「イジメの仕方」、さらに「イジメられ方」（イジメを受けて傷を負いながらも「笑う」という反応しかできない場合など）も千差万別です。どこまでがイジメであるのか、判別しにくい場合もあります。特に低学年の時には、単なる仲良しゴッコなのか、じゃれあっているだけなのか、判別が難しい場合があります。しかし、少しでも疑わしいと感じれば、様々な方法や様々な方向からイジメの有無を確認しなければなりません。本人との面談も「ひとつの方法」です。しかしイジメによって追い詰められている子供は、「イジメられている事実」を隠すこともあるのです。だから家庭での様子や他のクラスの生徒からの何気ない聞きとりなどを行うことが大切です。しかも綿密に慎重に行う必要があります。担任レベルだけの調査、教科担当者も交えての調査、生活（生徒）指導部レベルでの調査など、そのケースに応じた調査が必要です。当然、養護教諭などがイジメに気付く場合も多くあります。また図書館員などもイジメに気付く場合もあります。何も「アンケート」ばかりが、イジメを察知する方法ではありません。そこまでしなさいとはいいませんが、プロの教師なら、生徒の顔色だけで「何か」

を察知して欲しいと考えています。ただ、それでもイジメの有無の判別は難しいのは確かです。

但し、今回の事件は、「イジメの察知が難しい」という以前の出来事です。明らかにイジメと分かっていたはずですが、それが分かっているながら、手を打てなかった、と云うよりイジメを放置していた当事者の無責任さには呆れてしまいます。（教育に携わる者が他の教育機関についての厳しい物言いをどうかと思われる方もおられるでしょうが、今回ばかりは物申さずにはおれない心境です。はっきり言って「情けない！」です）。

さて、今回のように明確にイジメと判別できる場合は別にして、イジメを察知するのは難しいケースも多々あるということは既に述べましたが、だからこそ、まずはイジメが起こらない教育環境作りが不可欠でもあります。イジメを行う生徒達の「心の闇」が取り除かれるような教育環境が必要です。生徒同士が共に相手の人格を尊重し合えるように、お互いの個性を認めあえるように、教育環境（日常の指導も含めて）を整えていくことが大切です。絶対にイジメが起こらない学校作りというのは不可能に近いかもしれませんが、やはりそれに向けての最大限の努力が学校としてなされていかなければなりません。常に前向きな努力は続けなければなりません。

そして前向きな教育的努力とは云えませんが、もうひとつ大切なことがあります。それは「学校側はイジメに対しては非常に厳しい対応をする」ということを表明するとともに、実際に厳しい対応をすることです。

はっきり云って、イジメが起こった場合、「ホームルームで話し合っ解決しましょう」とか「イジメがよくないことを皆で考えてみましょう」という対応では全く不十分であるように思えます。むしろそのような甘い対応が余計にイジメを進行させることになるケースも多いと聞いています。「イジメには断固とした対応」が必要です。そして生徒達全員が「うちの（学校の）学則やルールは緩やかだけど、イジメだけには厳しいなあ」と思っていることもイジメを抑止する大きな要素となります。

本校でもイジメはゼロではありませんでしたが、非常に少ないのは、ある意味、イジメのない環境作りや教育指導と共に、イジメに対する学校側の姿勢を生徒達が知っているからかもしれません。（また2学期の初め、校長からの挨拶で「イジメには厳しい対応をする」と述べさせてもらいます）。実際、私自身の経験の中で、イジメをした生徒に対して極めて厳しい措置を行ったことがあります。その時の校長や他の担任から「厳しすぎる」という批判を受けるほどでしたが、その措置を断行させてもらいました。

何故「イジメに厳しい対応が必要なのか」というのは、イジメはイジメられた人の一生を左右する問題ともなるからです。自殺とまではいかないまでも、イジメられることによって学校に行けなくなった生徒達が、多く日本中にいることを忘れてはいけません。その子供たちの人生を「イジメた人達」も痛感しなければなりません。ここでの「痛感」とは「痛みを感じとる」ということです。自分がイジメたこと（あるいはイジメに手をかした事）の結果を、場合によっては、一生イジメた側も背負って欲しいと考えています。

当然、イジメの問題は、単に個人の問題ではなく、社会全体の問題、あるいは教育全体の問題、あるいは家庭の問題など、その原因は複合的であるというのは理解しています。またイジメをする子供達自身が抱える「心の闇」、あるいは子供達の中に存在するヒエラルキー的なもの、あ

るいはイジメについての措置を行う上で、考慮すべき個々の事情やイジメの深刻さや陰湿さの度合いなどがあることも承知しています。

しかし、今回のような事件は、日本のどんな学校であっても、決して起こしてはならないことなのです。

それにはやはり、生徒と一番身近に接触する「教師」の能力、教師の力量、教師の人間性が大切です。

もし「イジメを見ても見ぬふりしている教師」なら、即刻、自ら教師を辞すべきであると考えています。

<「教育いろは唄」より>

罪づくり 教師と医者が 筆頭ぞ いのち預る 重み知らずば
これだけは 許しはしない いじめには そういう覚悟 生徒に示せ

2012.06.15 Fri

昨日(6月14日)は高校の体育祭、本日は中学の体育祭が府立体育会館で行われました。昨日の高校の体育祭は、合同校長会出席のため閉会式までおれなかったのが実に残念で、後ろ髪を引かれる思いで体育館を後にしました。最近、どういう訳か、後ろ髪であろうと前髪であろうと引っ張られるのがとても嫌です・・・(?!)。

ここで、全く話は変わりますが皆さんは「チャンスの神様には前髪しかない(後ろ髪はない)」という西洋の格言をご存じですか(Take the Fortune by the forelock!)?

つまりチャンスが向こうから来る時に、さっとその前髪をつかまなければ、チャンスは一瞬にして過ぎ去ってしまうということです。またチャンスの神様の後ろ髪をつかもうと思っても後ろ髪がないのでつかめない、つまり一度逃したチャンスは取り戻せないということですね。

ちなみに最近の日本のビジネスマンは海外でNATOと呼ばれていると聞きました。つまりNo Action Only Talkということで、本社の伺いを立てなければ、そして本社で稟議書を回したりして時間をかけなければ現場では何も決められず、そうしている間に商談成立のチャンスも他のアジア諸国にもっていかれるという話です。経済界に限らず、そういった点は是非改めて、往年の日本の勢いを取り戻してもらいたいと願っています。

閑話休題

さて本校では高校も中学校も団対抗で行われています。高校では赤、黄、緑、青の4つの団に、中学では赤、黄、青の3つの団に、各学年や各コースや各クラスの生徒達が万遍無く一つの団に入るように振り分けられます。今回改めて、そういった各団に別れての振り分け方に意義を感じました。普段、クラブ活動等以外であまり出会う事のない各学年、各コース、各クラスの生徒達が同じ色の団旗のもとに結集し、団ごとに競技の優劣を競い合うということは、学年やコースやクラスの垣根を取り払うという教育的意義は当然のこととして、見ていても実に気持ちのいいものがありました。特に毎年進化を遂げているように思われる「応援合戦」においては、その事前の練習を含めて、それに参加する生徒達にコースや学年を離れた多くの出会いの機会を与え、また皆で力を合わせて何かを成し遂げるという協調性や責任感や達成感というものを身につけるいい機会にもなっています。また体育祭を実施するに当たっては、中学も高校も教員だけが主導するのではなく、さまざまな面で生徒達の力を引き出しながら行っており、そのことには、生徒達の主体性を養うという点における教育的意義があるように思います。言ってみれば、体育祭は本校の教育目標のひとつである「目に見えない実力」を養成する大きな機会の一つにもなっていると確信しています。またPTAの保護者の方々の協力も体育祭や文化祭を盛り上げたり素晴らしいものにする上で大きな役割を果たしています。(この場を借りまして、体育祭において受付をしていただいたり写真を撮っていただいた保護者の方々に深く御礼申し上げます)。

閑話休題

中学の体育祭ではクラブ対抗リレーで教員も自分達のチームを組んで走りました。みんな生徒

に負けてはならじと必死で走りました。剣道部の顧問は剣道衣を着て、少林寺拳法部の顧問は拳法の道着を着て走りました。但し、結果は3位でした。そのことについて、閉会の辞で私は中学生徒達全員に「先生方が1位でなく3位になってナサケナイと思っている生徒達は手を挙げて」と聞いたところ、結構多くの生徒達が正直に手を挙げました（笑）。そのあと「それでも必死で走っている先生の姿を見て『何だかいいなあ』と感激した生徒達は拍手をして」と聞いたところ、実に多くの拍手が沸き起こりました。本当に桃山の生徒達は優しいですね！！

閑話休題

多くの生徒達が集まって行う高校の体育祭には熱気があり、中学の体育祭には活気があるということを書きましたが、実際、そういった子供たちの持つ熱気や活気は同じ空間にいる私にも及びました。と云ってもまさか若い先生に交じって走る訳にもいかず、せめてもの活動ということで「よーいドン」のピストルを撃たせてもらいました。よく考えましたら、小さい時、運動会の時にピストルを撃つ先生の姿を惚れ惚れと見ていたものでした。いわば「片手で耳を押さえながらよーいドンのピストルを空に向けて撃つこと」が忘れていた私の幼かりし頃の夢の一つでした。ということで校長の特権（?!）を利用して、今回、中学生のリレーのとき、体育の先生に頼んでピストルを撃たせてもらいました。火薬ではなく電子音を出す銃口のないピストルでした。それも空に向けるのではなくマイクに向けて撃つものでした。それでも、そのピストルを手にしたとき私もつい興奮してしまい、近くにいる教員にそれを向けてバキューンと叫んでしまいました。その教員も、一瞬私につられて「ワァー」と撃たれた格好をしてくれたのですが、急に真顔に戻り、「校長、まずいですよ、保護者席から丸見えですよ」と注意されました。反省しています・・・。

ということで、生徒達の頑張りと保護者の皆様の協力、そして教員の働きと校長の反省の内に、中学校と高校の今年の体育祭も無事に終了しました。

最後になりましたが、今回、高校の体育祭の折にも、また中学の体育祭の折にも、保護者の方から「『校長だより』を楽しみにしています」と言われ、本日、早速、この「校長だより」を書かせてもらいました。

今年も実に素晴らしい体育祭でした！！

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

2012.05.27 Sun

現在、毎年恒例の「第一志望校宣言」を高3生徒対象に実施しています。これは高校改革1期生から実施している行事で、今年は4期生達を対象に行っています。第一志望宣言というのは自分が第一に志望とする大学名と志望理由を記入した宣言書を、担任から学年主任、それから進路指導部長を経て、最終的には校長の所にまで持ってくるというものです。校長に手渡すときには、ひとりひとりが校長室に入って自分の名前と志望校を本人が読み上げます。それに対して私の方は質問を投げかけアドバイスや激励を行います。儀式と云えば儀式と云えますが、志望校への決意を明確にする上で効果があるようです。最後は私から（これも恒例となっている）「五角形の合格金色エンピツ」というのを手渡して固い握手をして終わります。中にはかなり緊張して6組を6年生と言い間違えたりする生徒もいて、こちらもそれなりの意気込みと緊張を強いられます。なかには私の著書を持ち込んでサインをねだったりする面白い生徒もいます。また志望理由もさまざまで、今回も「バック・ツー・ザ・フューチャー」という映画を子供の時に観て以来「時間」ということに興味をもって、大学では本格的に科学を学びたいというユニークな志望理由がありました。そういえばガンダムにあこがれて工学部に行きたいという志望宣言も2年ほど前にありました。（教育においてはキッカケがとても大事だと痛感します）<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さて生徒達の興味ある志望校宣言にもまして、今年はさらに特筆すべき志望校宣言が行われました。それは高3のK先生による志望校宣言でした。そのK先生のクラス生徒全員の志望校宣言が終了したあと、その先生はおもむろに「僕の志望校宣言も受け取ってもらえますか?!」と私に迫りました。正確にいうと「志望校合格者数宣言」です。その宣言書には、自分が担当するクラスの第一志望大学への予想現役合格者数が太字で書かれてありました。そして宣言理由としては、「今年度は国公立現役合格においてもS英数コース、英数コースからも一目置かれる数の合格者を輩出し、桃山学院高校の進学実績の向上に大きく寄与したい。そのためには、さらに生徒に対する指導の充実を図り、実りある進路相談を今後も実施していきたい」という趣旨のことが力強く書かれていました。おまけに自分の氏名の所と合格目標数値のところには拇印まで押されてありました（K先生、まさか血判ではないでしょうね?）

そのとき私は、教師自らが生徒と共に志望校宣言を提出するという姿勢と同時に、宣言書の文面から溢れ出る生徒への思いとその本気度に感銘を受けました。まさに「その意気やよし」とするものです。

それに応えて私も熱い思いでK先生の宣言書をしっかりと受け取りました。当然、その先生にも合格金色エンピツを1本手渡して（本当は100本ほど手渡したかったのですが）、最後にガッチリと固い握手を交わしました！！

2012.04.27 Fri

この校長だよりに掲載した「教育いろは唄」（本年2月11日付けのブログ）が大手新聞の今月24日の朝刊に掲載され

(http://sankei.jp.msn.com/west/west_life/news/120424/wlf12042408300004-n1.htm)、多くの方々に知っていただきました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

私の長い教員生活で培った経験が少しでも（他校の先生方を含めて）若い先生方の教育活動のヒントにでもなればと創ったものですが、今回新聞に掲載していただいたことで、今まで以上に大きな反響をいただきました。それはそれで実に嬉しいことではありますが、それ以上にマスコミの持つ大きな力を実感しました。ちょうど教育いろは唄が掲載された当日に「大阪高校共学部会」という大阪府下の私立共学高校の全校長が集まる定例会があったのですが、そこでも他校の学校長から多くの感想をいただきました。また教育関係以外の多くの方々からも感想をいただきました。中には随分会っていなかった卒業生や同窓生からの連絡もいただきました。自分が感銘を受けた箇所を教えてくれる方もいました。ある唄の意味するところを詳しく教えてほしいという方もいました。副作用（?!）としては、聞かれない限り答えないでいた年齢もしっかり世間にバレてしまいました。またはっきりした顔写真によって、これまで以上、例えば「よいこ部」に出演したりニュース番組でインタビューを受けたりしたとき以上に、ご近所さんには校長だということが露見したような気がします。これからは、品位ある本学の評判を落としてはいけないので、休みの日とはいえ、夏に甚平姿で近隣を歩き回るのも控えたいと思っています（笑）。

また今までも、そして今回でも、興味深かったのは、教育いろは唄を読んだ方の年齢や職業などによって感銘を受けた箇所が違っていることでした。例えば、医師をしている卒業生は、やはり「罪づくり 医師と教師が 筆頭ぞいのち預かる 重み知らずば」という唄に衝撃を受けたという感想をくれました。同僚達にも見せてもう一度「医師としての襟を正すよすが」とすることによって、私の拙いいろは唄が医師の自覚を促すのに役立ったということに喜びを感じました。

また結構ベテランの教員の多くは「押し黙る 生徒を前に 何とする 僕も分からぬ その場でなけりゃ」という唄を気に入ってくれました。実際、教育現場における生徒の対応はマニュアル通りにはいかないことも多々あって、その生徒の問題や背景やその場の流れ（TPO）によって、「臨機応変の対応」が求められるということを長年の経験で分かっておられるのでしょ

あと、つい約束してしまったことに「教育いろは唄の解説書作り」がありますが、これは実際何年先になるかは分かりません。ひょっとしたら約束を破るかも知れませんが、そうなれば私の取材をしてくれた（そして年齢以上に若く見える写真と撮ってくれた）K記者を含めて、解説書作りを約束した皆さん方、本当にすみません、お許し下さい。約束を破りそうな気がしてきました・・・。

あるいはまた、もう少し私も熟成してくれば、「人生いろは唄」などというものを調子に乗って書こうかと思いますが、やっぱりこれも書けなさそうな気がします。熟しても熟成せず、という訳であります・・・。

2012.04.15 Sun

高校の入学式では「立派な大人になる」ことをテーマに式辞を述べました。以下はその抜粋です。中学の入学式で述べた話については、再度、違う角度から高校生達にも伝えたいと思っていますので、ここでの掲載は控えます。と申しますのも、結構「校長だより」を読んでいる高校生達も多くいるようで、中学の入学式で述べた話をここで読まれますと、新鮮味がなくなるかと思いますので・・・。

<今日よりぞ> (高校入学式式辞抜粋)

生徒の皆さんは今日の入学式をどのように迎えていますか？私は卒業式であっても入学式であっても、また結婚式や成人式であっても、式というものは非常に大切なものであると考えています。それは単なる儀式ではなく、自分自身が古い自分をうちすてて、新たな世界へ向かって新たな一歩を踏み出すためのセレモニーであります。今でいう、自分の人生をリセットするためのものでもあります。

さて古い自分を打ち捨てると言いましたが、吉田松陰と言う人が自分の親戚の子供が15歳（の元服）を迎えたときにおくった言葉があります。それは「今日よりぞ 幼（おさな）心を打ち捨てて 人となりにし道を踏めかし」という言葉です。

吉田松陰というのは皆さんもご存じかもしれませんが、わずか30年足らずの生涯でしたが、明治維新をなし遂げる有能な多くの人材を育てた革命家であり教育者でありました。15歳を迎えたときに、今日から大人であるということの自覚を促すために今の言葉をおくりました。ちょうどここで入学式を迎えんとしている多くの皆さんと同じ年ですが、昔は15歳というのが大人になる年齢とされていました。さてその15歳の子供に吉田松陰は「今日よりぞ 幼心を打ち捨てて 人となりにし道を踏めかし」と云ったわけであります。要するに「もう子供っぽいことは卒業して、この日を境に立派な大人になるようにしなさい」と言ったのです。

話は変わりますが、以前生徒達に作文で「将来何になって、どういうことをしたいか」ということを書かせました。そのとき、それぞれ「科学者になって核融合の研究をしたい」という生徒や「教師になって小学生を教えたい」という生徒や「法律を勉強して弁護士になりたい」とか「医療の世界で難病を治したい」とかいろいろな事が書かれてありました。どれもこれも素晴らしいものでしたが、私が一番感動したのは「立派な大人になって、世界をよりよくしたい」というのがありました。

そして実際、その生徒は今、実に立派な大人として国際関係の仕事に従事しています。なるほど、一生懸命勉強して、法律家になったり医師になったり科学者になったり教師になったりエンジニアになったりするのには、本当に大切なことでもあります。しかしそれ以上に、職業がいかなるものであれ、人間として立派でなければならないと考えます。

さてそれでは「子供と立派な大人の違いはどこに」あるのでしょうか。それはいくつもあるでしょうが、ここで私は3つの大きな違いを述べたいと思います。

まずは使命感というものかと思います。使命感を志しといってもいいかもしれません。子供は感情の世界に生きています。好きか嫌いかで物事を判断し、何かあると不機嫌になったり、機嫌よくなったりします。それはそれで子供としては間違っていないです。英語ではチャイルドライク、つまり子供らしいという言葉で言います。いい意味で使われます。しかし大人になっても感情のままに生きているなら、それは英語でチャイルディッシュ、つまり「子供っぽい」という悪い意味で使われます。そして大人とは自分の感情は感情として持ちながらも、それを乗り越えた次元で生きていける人のことを云うのです。その中でも使命感を持った大人こそ立派な大人といえるのです。

科学者としての使命、教育者としての使命、政治家としての使命、公務員としての使命、弁護士としての使命、守衛さんとしての使命、母親としての使命、さまざまな使命があるかと思います。立場や職業は違っても、少しでもその立場や職業や役割を通じて、自分の目先の利害を超えて自分以外の者の役に立とうとする思いが使命というものです。そういう使命をもった立派な大人に成長してもらいたいと願っています。それにはまずは、今自分に与えられている使命を自覚することです。今の皆さんの使命は「使命を持って働ける立派な大人となる」ことが皆さんの使命です。しっかり勉強して、自分がこれだと思える仕事、つまり自分が自ら進んで使命を果たせる道に進むことができるようになることが、皆さんの今の使命です。本当に世界にはいろいろな問題があります。貧困や暴力、不当な差別、子供の強制労働などです。また日本にもいろいろな問題があります。しかし「世界を少しでもよくする、日本の国を少しでもよくする」といっても、自分自身が確立できていなければ、それも果たせません。たとえ、政治家になって、あるいは医師になって、あるいは教師になって、その社会的使命を果たそうとしても、まずはその資格や能力を養わなければその使命は果たせません。そのためには、繰り返しになりますが、今日から、しっかりと学びを深め、なりたいと思えるものになれる力を身につけてください。

さて2番目に立派な大人にあるものは覚悟というものです。自分の感情に決着をつけて、新たにやり直すことができるのも覚悟があるかないかです。

例えば、身近な例でいいますと、先ほど、私は「入学おめでとう」と言いましたが、実際は第一志望の高校に落ちて、全くめでたいとは感じられない人たちもいると思います。しかし、もし今日から覚悟を決めて、新たな気持ちでやっていこうとするなら、それは大人への第一歩となるわけです。今のうち覚悟ができる生き方を身につけておいて下さい。好きな人ができてプロポーズするにも覚悟がいります。難関大学に向けての勉強をするのにも覚悟がいります。いじめをしている人を止めるのにも覚悟がいります。もしAとBの道があって、自分は本当はAの方に進みたかったんだけど、力及ばずBになってしまったとします。そのとき、もし覚悟を決めてBの方で努力をすれば、その人にとって結果的にBがよかったということになるのです。だからこそ、まずは今日からしっかりと覚悟を決めて、自分の世界を切り開いて行ってもらいたいと願っています。

最後は、「ものの見方」です。その全ては物をどう見るかによって変わってきます。先ほど、

明治維新の話をしました。明治維新を成功させた立役者の多くは身分も低く経済的にも貧しい下級武士たちでした。その中で、さまざまな苦勞を強いられたのですが、彼らは「私が今このように苦勞しているは、きっとこれから先、天が私を使ってくれるために、私を鍛えているんだ」と考えて頑張り抜いたからであります。あらゆる苦しみを、彼らは苦勞ととらずに天が自らに課した試練と捉えました。違った観点から自分の苦しみや苦勞を見ることができ、辛いことを乗り越えていくことができたのです。

さてそれでは、その様々な観点をどうすれば身に付けることができるのでしょうか

それは読書と出会いです。いろいろな本や新聞を読むことによって、いろんな人と出会うことによって、いろいろなものの見方や感じ方ができるようになってきます。そうか昔の人達はどのように考えたんだ、とか、そうか今の世の中の流れはこのようにも捉えられるんだとか、ああこういう生き方や感じ方もあるんだということができるようになってきます。自分ひとりが体験できることは実に限られています。そこで読書を通じて、あるいは人との出会いを通じて、様々な人の生き方やものの見方や真実というものを知ることができるようになるのです。

どうか今言った、使命ということ、覚悟を決めるということ、またものの見方を広げるということが大切だということを心に留めておいてください。また先ほど一人の生徒が述べた「立派な大人になって、世界をよりよくしたい」という思いを皆さんにも共有してもらいたいと願います。繰り返しになるかもしれませんが、世界をよくするためには、まずは日本の国をよくしなければなりません、しかし日本の国をよりよくし、世界をよりよくするためにも、まずはあなた方ひとりひとりが立派な大人として自立していかなければなりません。

自ら光を発するだけでなく、周りを明るく照らす人になってもらいたいと願っています。

2012.04.08 Sun

「みなさん、おはようございます。いよいよ新学年が始まります。私にとっては新年の始まりである正月よりも、新学年の始まりである4月のほうが、より身が引き締まる思いがします。そして新たな気持ちがつつと湧き上がってきます」という私の挨拶で職員会議が始まりました。他の部署の会議や担任会や新人研修は4月2日の月曜日から始めていましたが、勉強合宿なども終わって全員が揃う職員会議が持たれたのが4月6日でした。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

また150名近くが集まる合同職員会議では、新人教員のために私の方から役職者の紹介をしようと思いました。「しようと思いました」というのは、実際はその場になって、ひとりの役職教員のファーストネームがアヤフヤだと気づき、急遽、自己紹介という形でさせてもらいました。教頭、各部長、各主任……。みなさん、さすがに一点の誤りもなく「自分の部署と氏名」を言うておられました（笑）。その時、やはり自分の声で自分のことを語るのが一番いいと感じました。それはその方が間違いない（当たり前です）というより、まして校長の仕事としての「役職者紹介」が面倒だというのではさらさらなく、やはり声には、顔つきと同様に、その人の持つサムシングが宿るからであり、紹介する人と紹介される人との距離が少しでも近づくであろうという理由です。来年度の合同職員会議では部署と氏名ともうひとつ、使命も言うてもらおうかと考えています。もう一度云いますが（これを読んでいる教職員もいますので）、それは「校長の仕事としての『役職者紹介』が面倒だというのではさらさらなく」です……。

話は「面倒」という言葉によって急転しますが、私はいつも「教育は手のかかる作業だ」と考えています。例えば、生徒の学力を伸ばすには、「こういったプリントも役に立つかなあ」と思えばプリントも刷らなければならないし、「今日新聞で読んだ記事は生徒にも是非読ませたいなあ」と思えば、それをクラス人数分、あるいは学年分を印刷しなければなりません。これも自分の担任クラスだけに読ませれば、大したことはないのですが、もしそれを学年全体に読ませたいとしたら、学年主任の許可もいるだろうし、印刷も手間がかかります。ということから教育はやろうと思えば思うほど、これでいいという限界がないほど手間がかか

るものかもしれません。反対に「手を抜こう」とすれば、これもある程度できないわけではありません。必要最小限で担当教科を教え、必要最小限の担任業務を行い、（作りやすく採点しやすい）テストを作り、他の必要業務を他の教員や役職者から批判されない程度に必要最小限で黙々とこなしていれば何とか「やっていける」からです。但し本校には今そんな教員は居ませんし、今後も居てもらっては困ると考えています。「生徒とのかかわりが面倒だ」と思ったりする段階で、既にその人の「教師としての老化」が始まっているでしょうし、今後そういう方が現れれば是非転職を勧めたいと考えています。もしいけば、自分の意義ある人生のためにも、そして何よりも生徒達のためにも転職なされ、もっと自分が前向きに積極的にかかわれる道を見つけてもらいたいと願ってしまいます（2012年度2月12日「校長だより」いろは唄<や>参照）。

そうかと言って、この3月に大阪に来た大学時代の私の友人のように「燃え尽き症候群」で鬱となり、定年前に退職するようなことになってはいけません（この話は別の機会にでもしたいと思いますが、彼はその県下で「困難校を立て直す生活指導部の熱血教員」として名を馳せていました。が、余りにも熱く、余りにも意欲的で、「生徒の問題と家庭内の問題」という土俵に両足をどっぷりと入れすぎたこと、また最後に行った学校の事なかれ主義（友人曰く）の校長との衝突も重なり、入院するほどの鬱病を患いました。3年間療養して何とか回復を遂げ、何年ぶりかで私に会った彼の一声は「お前、よく校長なんかやっているな」という非難でした……。よほど校長との葛藤で酷い目にあったようです）。

さて話を戻し、その本校役職者の自己紹介ですが、早速、4月7日の高校入学式と中学入学式でも、同じ方法で新入生の前で役職者の教職員には自己紹介をしてもらいました（やはり前年度までは「校長からの紹介」）。高校の入学式での効果についてはひとりの反対意見しか聞いていませんが、中学の入学式では非常に評判が良かったようです。とに角、私の方から壇上に並んだ仰々しい役職者の方々に「中学1年生を対象にしていることを念頭において自己紹介をして下さい」と云ったためか、鬼の（本当は天使のような、但し剣をもったミカエル天使のような）R生活指導部長まで自分の役割を優しく語って、会場を和ませてくれました。少なくとも不安と緊張の中にある小学校を上がったばかりのピカピカの中学1年生にはよかったと思います。

閑話休題

合同職員会議では、私の方からは本校の教育目標について聖書の言葉を引用し

て「健全な社会を作る健全な青少年の育成」にあること、またそれぞれの生徒の可能性（聖書の言葉では神から与えられた各生徒の賜物）を最大限に伸ばすこと、さらに学力の伸長を図る基本は「授業（講習や課題を含めて）の更なる充実」にあること、また生活面での指導においては愛情と同時に「ダメなものはダメである」と指導できる厳しさ、さらに生活面での指導については全ての教員が当たらなければならないこと等を述べました。また授業アンケートでの生徒からの評価を重視していることも述べました。

ということで4月7日の入学式を迎えました。入学式の式辞の要旨は次回に掲載します。

2012.03.22 Thu

3月10日には中学の卒業式が挙行されました。思い起こせば去年の中学の卒業式は、大震災の翌日の3月12日でした。当然、その日には予定していた式辞を取り止めて全く違う話をしました。今回の式辞でもやはり東日本大震災の話の避けて通ることはできませんでした。一日も早い生活の復興、そして心の復興を願ってやみません。 <?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さて、今回も中学を卒業する生徒一人一人の名前を私から読み上げて、卒業証書を手渡しました。但し、今回から、中学教頭からのアドヴァイス（注文?!）で、全員「～殿」ではなく、男子生徒には「～君」、女子生徒には「～さん」というように読み上げることになりました。それはそれでいいのですが、大きな体育館の会場の隅々にまで声を通そうと大声で名前を呼び続けるのは決して楽な作業ではありませんでした。卒業式に出席している教員の一人は「校長、最後までもつかなあ～」という心配もしたそうです。一度だけ無意識にある一人の生徒だけ「～殿」と読んでしまい、会場の笑いを誘いましたが、今回も卒業式は厳粛な雰囲気の中で行われました。但し、そのあと本校のカフェテリアで行われた卒業生と保護者による謝恩会は「歌あり踊りありの明るく楽しい」（桃山らしい）謝恩会となりました。本当に2期生達も1期生に劣らず元気とやる気が一杯です。また中学の先生方が創ったビデオでは、ある中学生が「お母さん、これからもまだまだ大変な年頃になるけれども宜しくお願いします」というようなことを言ったり、「懇談会ではいろいろ辛い目にあわせてごめんなさい」というようなことを言ったり、本当に素敵な子供たちでした。

今後も、その元気とやる気を勉強においても発揮して、予定通り3年後の大学受験での素晴らしい結果につなげて欲しいと願っています。

3月20日の祝日には本校の交換留学制度40周年記念の行事が、外国からのお客様を招いて行われました。米国の校長やコーディネーター、さらに交換留学制度発足に貢献された元教員や多くの元留学生達を招いた楽しい会となりました。今回の40周年で特に気付いた点は、本校若手教員の気配りの見事さでした。外国からのお客さんを迎えてもてなす大変さは私自身経験していることですが、今回そういったことが複数の教員のチームプレーによって、「レセプション会場でのティーセレモニー（お点前）やスライド撮影、さらにはお土産の選定に至るまで実によくなされていました。

その時、東京で大手広告代理店の経営陣の一人として活躍している一人の卒業生から結婚式に招待されました。といっても、本人の結婚式ではなく息子さんの結婚式でした。私も職業柄多くの結婚式に招待されてきましたが、卒業生の息子さん（本人は卒業生ではありません）の結婚式に招待されたのは「初めて」で、誠に嬉しい限りでした。

そういった「初めて現象」として思い出すのは、同窓会を同窓生達の保護者同伴で行ったこと

もあり、これも非常に嬉しく楽しいものでした。懇談会でいうと、兄弟同伴（これは結構あるようです）や祖父母同伴などの「初めて現象」もありました。そういったことについてはまたの機会に・・・。

2012.03.14 Wed

諸般の事情があり、ブログの更新が延び延びになってしまいました。2月は様々なことがありながらも、一回しかブログの更新をすることができませんでした。そこで前回のブログ「教育いろは唄」から今日に至るまで書き損ねてきたことをある程度、ツイッター風にまとめて書きたいと思います。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />そこで先ず「ツイッター風に」ということですが、ツイッターについてはよくいろんな人から書くように勧められたりもしますが、ある人のアドバイスに説得力があったので、ツイッターには踏み切れないでいます。そのある人とは、今入院加療している本校卒業生の「やしきたかじん」さんです。一日も早い病氣平癒と現場復帰を祈っています。

次に、前回のブログ「教育いろは唄」は予想以上の反響を「学外から」いただきました。やはり本校の教職員をはるかに超える人達（他校の教員を含めて）が私の拙いブログを読んでおられることを痛感しました（笑）。

次に1月30日に昨年に引き続き読売放送のニュース・テンで本校での取り組みが紹介されました。昨年のニュース・テンでの放送やMBSでのラジオ放送と同様に、今回も本校が番組で取り上げられることについては広報をしませんでした。そして今回も後で多くの人達から「お叱り」を受けました。それについて述べさせてもらうと、その日の午前中に撮られた内容が、急遽その日の午後に放映されたからであり、広報する時間が全くなかったからであります（言い訳です・・・）。

放映された内容は、本校が実施している「授業アンケート」についてでした。本校は中学高校ともに教員の実名入りの「授業アンケート」を全生徒対象に実施しており、その授業アンケート結果を冊子にして教員全員が閲覧できるようにしています。その結果、自分の指導力だけでなく他の教員の指導力も一目瞭然となり、それを契機として各教員の自覚を深め、各教員の指導力の更なる向上を図ることになっています。学校としてもマイナス評価の目に付く教員には管理職がその原因や理由を質し、教科指導力向上を目的とした講習への参加等を促しています（「命令されている」と感じている教員もいるようですが・・・）。その質問項目には「授業に対する熱意を感じるか？」などの項目も入っており、かなり具体的な指導力を問うもので、その点が、現在導入が予定されている公立学校教員の人事評価との対比で放映されたのではないかと思います。ただ生徒を対象とした教員の授業評価で留意しなければならない点は、要するに「生徒にオモネルための簡単なレベルの授業や安易な成績評価」に流れるようなことがあってはいけないということです。よく多くの大学では「あの先生は出席しているだけで単位をくれるので人気がある」という話を聞いたりしますが、そういう要素が生徒の採点する教員評価に入らないように注意が必要です。そのため本校の授業アンケートでは、上記に述べた生徒が感じる「教員の熱意」や「授業中に寝ている生徒を起こすか」などを含めた授業運営力を問う内容も質問項目に入れていきます。

次に2月18日に高校の卒業式が実施されました。今年も素晴らしい卒業式となりました。一人の女子生徒などは、私が卒業証書を壇上で手渡すとき、握手をしながら「桃山に来て本当によかったです！」と一言、私に言ってくれました。おそらく後方に列席しておられた保護者の方々には遠すぎて壇上での私の表情まで読み取れなかったでしょうし、ましてや名前を呼ばれて立ち上がる一人一人の卒業生達や私から卒業証書を受け取るクラス代表の表情は見えなかったわけですが、本当に壇上にも生徒席にも感動が溢れていました。

その後、私からの式辞ということになりましたが、私は「幸せな人生と意義ある人生の違い」を中心に話をしました。

主旨は「幸せな人生」と「意義ある人生」は必ずしも一致しない。当然、すべての人達には「幸せな人生」を送ってもらいたいと願うが、それ以上に「意義ある人生」を送ってもらいたいということ。そして「意義ある人生」を送る上で、必要な要素についての考えを述べさせてもらいました。ただ、「意義ある人生を送るための要素」については、卒業式では時間の関係で十分に述べられなかったこともあるので（それでなくても校長は話し出すと止まらないと教員からは指摘されていますので）、いつかブログでその点についての考えを述べさせてもらいます。

また卒業した保護者の方々が開催された「謝恩会」も実に印象的なものでした。ただ今回も卒業生を送り出した各担任がマイクを手にして壇上で述べるクラス自慢には私も教頭も閉口しました。まあ自分が担任をしたクラスが「どこよりも一番だ」と思えることはいいことなのですが・・・。

そのあと3月10日に行われた中学生の卒業生については次回のブログで述べさせてもらいます。

2012.02.11 Sat

先月、ある新聞に元仙台高検検事長（現在は弁護士）が37年間の検事人生で体得した捜査の方法論や心得を「捜査いろは唄」という形で出版したという記事が載っていました。そのことに触発され、私も私なりの「教育いろは唄」なるものを創ってみました。そしてその「いろは唄」なるものを敬愛する方にお見せしたところ、「公表すべし」ということで背中を押されました。

ということで、少しでも教育現場にいる若手教員達の参考になればとの思いで下記に掲載させていただきます。

嬉しいことではありますが、結構多くの他校の先生方も私の拙いブログを読んでくれています。その数は確実に本校の教員より多いかと思えます（笑）。

各首について、今後機会があれば、順を追ってコメントも付けていくつもりでいます。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<い>

いのちこそ いのち育む いのちなり 教師自ら いきいき生きよ

<ろ>

論だけで 何も変わらず 情ありて 初めて開く 生徒の心

<は>

背景を 知りて叱るが 肝要で 知らずに怒る 怖さを思え

<に>

人間を 人間たらしむ 教育を 為さずに為すな 学校教育

<ほ>

掘り起こせ 生徒に眠る 可能性 苦勞してこそ 実る教育

<へ>

変化した 生徒の様子 見落とすな 早期に発見 早期に対応

<と>

友達が いない生徒 いるならば 先ずはその子の 友となるべし

<ち>

血の通う 教育こそが 大事なり パソコンだけで できぬことなり

<り>

理想だけ 語るは易き ことなれど 地に足つけよ 教師自ら

<ぬ>

ぬかるみに 足を取られて もがきいる 生徒の苦しみ 先ず受け止めよ

<る>

類型化 するのは避けよ レッテルを 剥がして見れば 純なる命

<を>

面白さ なき箇所ならば おもしろく 教える工夫 日々に精進

<わ>

笑いある 明るい教室 目指すなら 教師自ら 明るく生きよ

<か>

通い合う 心と心 あるならば 後の指導は 楽になるなり

<よ>

良きところを 見つけ伸ばすが 使命でも 悪しき所を 正すも使命

<た>

足らざるを 知りて努力を 怠るな 生徒と共に 成長続けよ

<れ>

連携を 密にするべし 家庭とは 学校だけで できぬことあり

<そ>

そっとして おくがいいこと あるけれど そっとし続け 疎遠になるな

<つ>

罪づくり 教師と医者が 筆頭ぞいのち預る 重み知らずば

<ね>

寝たくとも 生徒ひとりが 気になって 眠れぬ夜あり 教師であれば

<な>

慣れるのは 大事なことで あるけれど 狎れて教育 惰性にするな

<ら>

乱暴な 言動あれば 注意せよ 見逃す教師に 使命感せず

<む>

無理するな ばかりで生徒 育たない 時には無理も 大いにさせよ

<う>

嘘をつく 子供もいると 見抜くべし 見抜いた上で うわての指導

<い>

行く道は 生徒それぞれ 違えども 彼らを見送る 願い変わらず

<の>

伸びる子も 伸び悩む子も みなすべて わが子と思い はぐくみ育てよ

<お>

押し黙る 生徒を前に 何とする 僕も分からぬ その場でなけりゃ

<く>

苦勞して 育てた生徒 去りてなお 音信途絶えず 幾年たてぞ

<や>

やる気ない 教師であるなら 辞めるべし 生徒が気のどく 自身も哀れ

<ま>

真面目でも 真面目だけでは つとまらぬ 多彩な生徒 多様な保護者

<け>

けなし合う 教師が多く いるならば 殺伐の気が 学校覆う

<ふ>

不可能と 思う子供を 励まして 達成の歓び 共に手にせん

<こ>

これだけは 許しはしない いじめには そういう覚悟 生徒に示せ

<え>

えこひいき 生徒は必ず 気づくもの 物言わぬ子の 寂しさ知るべし

<て>

手を尽くせ 言葉も尽くせ 意を尽くせ それでダメなら ひとまず待てよ

<あ>

あしたこそ あしたこそはと 願いつつ 待ちたる思い いつかは通ず

<き>

咲く花は 咲くときまでは 咲かねども 咲く日に備え 世話怠るな

<き>

聞く耳は 物言う口に 勝りけり 聴くこと学べ 先ず何よりも

<ゆ>

ゆっくりと するのも大事 ときとして 焦る指導に 無理が出てくる

<め>

目立つ子に 心ばかりを 向けるなよ 目立たぬ子らに 光見つけよ

<み>

「みんなそう」 子らがよく言う 言葉なり その未熟さを 知りて対せよ

<し>

知りたりと 云えども生徒の 一部なり 知らざるところ あると知るべし

<え>

遠慮すな 助け求めよ 同僚に 心ひとつで 生徒の指導

<ひ>

卑下するな 偉ぶることも あるなかれ 汝が持てる 賜物生かせ

<も>

もろもろの 問題あれど 逃げるなよ 誠一筋 向かうほかなし

<せ>

背中にて 語れるほどの 人となれ 見えざる光 生徒を変える

<す>

健やかに 育てと願う その思い 親であっても 教師であっても

2012.01.27 Fri

昨日、本校の中学生弁論大会が大講堂（トリニティホール）で行われました。今回も各クラスの代表18名から熱のこもったスピーチがなされました(http://www.momoyamagakuin-h.ed.jp/momoyamagakuin-jh/news_topics/004596.html参照)。

昨年度の弁論大会でも、多くの素晴らしいスピーチがなされたこともあり、今回は最優秀賞、優秀賞、敢闘賞に加えて、校長賞、教頭賞、そしてさらに「お団子賞」が急遽付け加えられました。お団子賞というのは、近くにあるお団子屋さんのお団子が賞品として贈られるものです。

(今回、そのお団子を私が買いに行きましたら、オーナーの方がおられました。そして昨年末に私がMBSのラジオ番組に招かれた時、その団子について語ったことを非常に喜んでおられ、オマケをしてもらいました、余計な話ですが・・・)。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さて他の優秀な賞に交じって、そのお団子賞を取ったのは中学1年生のスピーチで、タイトルは「本当の意味でのガンバレを言うために」というものです。その主旨は「私達は東日本大震災で被災した方々に『ガンバレ』と言いながら、瓦礫さえ受け入れようとしなさい」というもので、そこには放射性物資の数値など客観的なデータも使われていました。また「大文字」焼きに使うと被災地から集めた薪、被災者が亡くなった家族への思いなどを書きこんだ薪を、放射能汚染につながるという風評だけで取り止めにした話などを紹介し、私達の風評に対する脆弱さ、さらには自分だけが安全で無難な所に身を置いて「ガンバレ」という欺瞞を鋭く指摘するスピーチでした。

その他、賞こそ取り損ねたけれど、「いのちの電話」というテーマで自殺の問題を扱った3年生のスピーチなど、甲乙つけがたい内容のものが多くありました。私自身が関西いのちの電話での相談員を10年間続けてきたことから、そのスピーチを聞きながら、改めて「いのちの問題」を深く考えさせられました。また「いのちの問題」という点に関しては、2年生のスピーチに「死ぬってことは」と死そのものをテーマにしたものがありました。これは偶然にも今月の中旬に中学1年生対象に行った私の「死についての話」のテーマにも繋がるものでした。この話でも私は「親死ぬ、子死ぬ、孫死ぬ」(2008年8月29日の当ブログ参照)の話を用いたり、自殺することの不幸を述べたり、今を充実させて生きることの大切さを中学1年生の生徒達に訴えました。今回はひとつひとつのスピーチに対するコメントを壇上で述べさせてもらいました。

来年度の弁論大会を楽しみにしています。それと同時に、ここまで「生徒の発表力」を育ててこられた中学校の先生方にも改めて敬意を表します。

2012.01.23 Mon

今回は「働く意味」について様々な考えを紹介させてもらい、私なりのコメントを記させてもらいます。と言うのも、先週（1月16日）行いました高校3年生対象の卒業記念礼拝において、時間の関係もあり、またその日は卒業記念礼拝のあとセンターの自己採点のスケジュールが入っていたこともあり、主にセンターテストを受験した生徒達や私学の受験を控えた生徒達を対象にした話に終始してしまいました。少数ではありますが本校を出て公務員などの職業に就いて働き始める生徒へのメッセージを述べずに終わってしまいました。そこでそういった生徒達を念頭においてこのブログを書くことにしました（卒業式では、そういった「働く意義」についても述べる予定です）。またこの春卒業して働き始める他校の生徒達や大学生も参考にしていただければ幸いです。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

本題に入ります。

「人はパンのみによって生きるにあらず」と云う有名な言葉が聖書にあります。当然、人はパンなしで生きていくことはできません。そしてそのパンをどう獲得し、どう分配するかという問題、それはそれで極めて重要なことであり、大きく云えば経済学等で扱う一大テーマともなるでしょう。そして、そういった観点から「働く意味」は「パン代を稼ぐことだ」と云うことができるかもしれません。しかし、それはあくまでも働く必要性であって、働く意味とはなりにくいかもしれません。

ここで、私は「働く意味」について11項目を述べさせていただきます。下記の11項目については全て網羅されていると確信します。何故なら、「その他」の項目があるからです（笑）。参考にして下さい。そして読者それぞれの「働く意味」を見出して下さい。

（1）働く意味など言われなくても、給与をもらっている限り働くのは当たり前である。（「その通り！」でもあります・・・）

（2）働く意味など言われなくても、働くのが大好きだから一生懸命働く。（あなたは幸せです・・・）

（3）会社には、いろんな面で、お世話になっている（なることになる）。欠点の多い私でも雇用してくれた（?!）。給料も頂いている。せめて、一生懸命働くことによって会社や雇用主に恩返しをしなければならない。（あなたは信頼できる人です!）

（4）すべての仕事は世界と未来につながっている。たとえ組織内のことであっても、自分のしていることが、人々の幸せや社会（あるいは日本、あるいは世界）を良くすることにつながる。そういう意味で日々一生懸命働くことに意義を感じる。（立派です!）

(5) 次世代にいいものを少しでもいい形にして残すのが今生きている者の使命である。(ある時、酔っ払った「やしきたかじんさん」が言っていました・・・)

(6) 出世するために、しっかりと働く。(悪くはないでしょう・・・)

(7) チーム内の上司や仲間から評価を得るために、しっかりと働く。(それだけ?)

(8) 家族のため、あるいは自分の将来の安定のために一生懸命に働く。(大事な事です!)

(9) 死ぬ時に後悔したくないから、一生懸命に働く。(素敵な動機です!)

(10) 神様から見られて恥ずかしくないように働く。(素晴らしい~!)

(11) その他

ずいぶん無謀でシュールな表現もありますが、上記はあくまで「働く意味」についての個々の考え方を典型化し、アトランダムに網羅したものです。カッコ内はちょっとした私の個人的な感想で、それで十分かもしれませんが、(6)~(11)の6つについては蛇足させてもらいます。

<上記(6)「出世するためにしっかりと働く」について>

「出世するために働く」という表現には安易で世俗的なマイナス・イメージがあります。しかし、それとは別に「出世するために能力を磨き、しっかりと働き、実績を上げるんだ」という人があるのも、組織を活性化させる重要な要素になります。また個人的な成長を促す原動力としてプラスともなります。組織においては、縁の下の力持ちは非常に大切ですが、縁の下の力持ちばかりでは、発展力とはなりません。

<上記(7)「チーム内の上司や仲間から評価を得るためにしっかりと働く」について>

職場の人間関係は程度の違いこそあれ、どこの職場でも難しいものです。教育現場も例外ではないかもしれません。私がよく若手の先生方に言っていることですが、私達教育に携わる者が目を向けるところは生徒なのです。職場の人間関係はどうでもいいとは言いませんし、良好な人間関係は仕事をスムーズに運ぶ上でも欠かせないものだと十分理解しています。しかし肝心の自分が拠って立つ原点(教員なら生徒や学生)を忘れて、職場内の小さな人間関係ばかりに関心や注意を向けているようでは本末転倒であります。教員であれば、生徒や学生のためと信じることであるなら、自分の言動が全教職員から反発されても悔いがないという覚悟が必要な場合もありますし、職員の方であれば、組織の改善に必要と判断したときには、同僚や上司から「冷たい目」で見られても、突き進む覚悟がある場合もあるはずです。いわゆる「仲良しゴッコ」や「事な

かれ主義」ばっかりが蔓延る組織は遅かれ早かれ世間（社会）から取り残されるでしょう。

<上記（８）「家族のため、あるいは自分の将来の安定のために、組織を消滅させないよう一生懸命に働く」について>

「働く意味」としては非常に消極的な理由だと思いますが、私は、その理由だけで一生懸命働く意味になると思います。

<上記（９）「死ぬ時に後悔したくないから、一生懸命に働く」及び（１０）「神様から見られて恥ずかしくないように働く」について>

（９）と（１０）は非常に似通っているかと思います。「生きる意味」を基盤にして考えた上で、こういう「働くことの意味づけ」があってもいいかと思います。「ものごとを為して犯す罪もあれば、ものごとを為さない罪もある」という落書きが何年か前の旧高校棟のトイレの落書きにありました（落書きはいけませんぞ！）。別にトイレの落書きに影響を受けた訳ではありませんが、教育について云えば、せつかく教員をしながら生徒・学生の可能性を伸ばしてやらないのは、罪とは言わないまでも、教員の使命感や責任感の欠如であると考えています。まして生徒にやる気を失くさせるとか、就職活動に取り組んでいる学生を就職させられない、ということに痛みを感じない教職員がいれば（わが桃山にはいないと確信していますが）、そのことについて猛省をすべきでしょう。

（１１）「その他」の中には、「先人達が血の滲むような苦勞をして創立し発展させてきた組織を消滅させないために一生懸命に働く」ということなども入るでしょう。

また自己成長とか達成感とかいうのも入るかと思います。但し、自己成長や達成感といったことは、あくまでも仕事をした結果であるかもしれません。仕事を通じて成長していくことや、自分やチームが企画し懸命に努力したことが成功すれば、感動や達成感をもたらすことも確かなことです。また組織内の何らかの問題を発見し、その発見から得た課題をどう解きほぐすかの手段を考察・実行することで自己評価を高めたり、自己実現をしたりできるかと思います（この箇所については何かの著書に書かれていました）。

どうか「その他」には皆さん自身が自分の考えを当てはめて下さい。

願わくば、人生の３分の１ほどを費やす仕事が、生き甲斐のひとつとなることを願ってやみません。

ところで、ここでひとつの問題が出てきます。もし自分の就いた職業が「不本意なものであるなら」という問題です。これについては一概に述べることができません。簡単に言うなら、「どうせやる仕事ならイヤイヤやっても３年間、勇んでやっても３年間、とにかく３年間は最大限に前向きな努力を続けなさい！」とか、「今している仕事を好きになるように頑張れ！」とか「仕事をやり続けていけば面白くなる！」という勇ましい言葉が出てきますし、実際にそういうケースも多いと思いますが、それでも「一概に言えない」難しさがあります。仕事は大切ですが、人格

破壊につながっていいほど大切ではありません。仕事をする以上、ある程度の無理は必要ですが、無理のし過ぎはいけないと思います。そうかと云って、安易に転職を繰り返したりするのも問題であります。最低限云えることは、何があっても周りから信頼される生き方や困難な中でも正しく判断し努力できる底力を学生時代に身につけておく、あるいは仕事をしながら身につけていく必要があるでしょう。

例え、第1、第2志望の仕事に就けなくても、第3志望の仕事の中で、しっかり働き、その中で自らの能力を磨けば、やがて自分が汗を流した苦勞や努力が開花し、結果的に第3志望が最高の選択だったということにもなるのです。そのためには、私がいつも言う「目に見える実力」と「目に見えない実力」のふたつが必要だと思います。最近知った言葉で「(人生を決める)最後は人柄だ」というのがあります(この点についてはまた後日述べさせていただきます)。

「強くなければ生きられない。優しくなければ生きている値打ちはない」・・・昨年度の卒業式の式辞で引用した言葉です。

生活指導部長からの呼びかけ

2012.01.20 Fri

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

先日の朝、中学と高校内で教職員が連絡用に使っている校内共有メールに、次のような全教員に対する呼びかけが生活指導部長よりありました。

<呼びかけ>

1月16日（月）の朝、・・・電車、・・・駅7時15分着の急行に乗っていた小学校6年生のお母さんから本校にお礼の電話がありました。

16（月）当日、中学校入試の為、受験会場に向かう途中で、小学校6年生の息子さんが車内で気分が悪くなってしまい、桃山学院の女子生徒（おそらく高校生）のスカートを汚してしまったそうです。週の初めに、服を汚してしまい、本当に申し訳ないのと、迷惑をかけてしまったにも関わらず、息子のことを気遣ってもらう言葉もかけて頂き、本当に感謝しています、とお礼の言葉を電話口でおっしゃっていました。

改めて御礼の気持ちを伝えたいのでその生徒さんを探してもらえないか、とのことでした。

18（水）の朝終礼で、少しこの話を伝えていただき、該当する生徒がいましたら、担任に申し出るようにさせてください。教室では言いにくいという生徒であるかもしれないので、後にでも担任（副担）に伝えるようにうまく話をしてあげてください。申し出て来ましたら、私の方までご連絡をお願いします。

申し出て来ないこともあるかと思いますが、そのような場合は、次の特徴で個人的に先生方から尋ねてみてください。

[その生徒の特長]

髪は肩につくか、つかない程度で、身長は160cm前後。

リュックサックは白地に柄がついていた感じ。

・・・電車利用でおそらく・・・駅で・・・駅寄りの車両に乗って来た様子。

以上のような内容での「生徒探し」の校内メールでした。本当に健全で心やさしい生徒達がたくさんいることを嬉しく思っています。また、そういう事に対する生活指導部長の対応にも温かいものを感じました（後でその生徒が判明し、校長室にも来てもらいました）。

2012.01.09 Mon

昨年は、東日本大震災をはじめ、さまざまな出来事ことがありました。今年こそ、平穩無事な明るい年となることを祈ってやみません。

今回は、昨年末の終業式と今年の始業式で全生徒に対して述べた年末・年頭の私からの挨拶を掲載させてもらいました。

"The Bible in one hand, the newspaper in the other"

「片手に聖書、片手に新聞」という言葉がありますが、学校教育においても教育理念（本校ではキリスト教精神）に基づく教育と共に、今まさに進行している時代の事象に対する視点や対応案を生徒たちに提供していくことも肝要であると考えています。

<2学期終業式での学校長挨拶> 2011年12月24日

早いもので、もう1年が過ぎ去ろうとしています。今年は本当にいろいろありましたが、中でも東日本大震災は私達の安全に対する思い込みを大きく変えるものでした。そしてその大震災の影響は今後も日本の国、特に我が国のエネルギー政策に影響を与えていく事は確実であります。 <?xml:namespace prefix = o ns =

"urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

そういった中で私は原子力発電所の問題について、いくつかの新聞や雑誌などにも目を通してきました。そこで面白いことに気付きました。新聞や雑誌によって記事の内容や方向性がかなり違うということです。さらに同じ内容について書かれていても、その書かれ方が違うということです。例えば、ある新聞は「原子力発電を廃止する方向」つまり脱原発が正しい今後の在り方であるというように書いているかと思えば、反対にまだ日本に必要な電力を賄えるだけの代替エネルギーがないのに、安易に脱原発をすることは日本の経済力を衰退させ、取り返しがつかないほど、国力を弱体化する結果にしかならないと書かれています。また雑誌によっては放射能汚染によって予想される被害を、パニックを煽るほど深刻に書いているのもあれば、反対にそういった被害は科学的な根拠がないものであるという専門家の意見を紹介している記事もあります。

そういった正反対の記事を読みながら、本当に真実を知ることの難しさと真実をきっちり知るための訓練や知性が必要であると実感しました。また自分の意見はどうであるか、自分の考えはどうであるかということを、冷静に客観的な情報をもとに

形作っていく必要があることを痛感しました。諸君にも是非、ひとつの出来事に対して、一部のマスコミが報道したところだけを読んで、それだけを真実として鵜呑みにするのではなく、その背後に何があり、真実がどこにあるかを見抜く力を持ってもらいたいと願っています。

さて新聞という話のついでに、少し古くはなりますが、大震災のあとに読んだ新聞に感動的な記事が出ていました。それはポーランドという国についてです。実は今回、東日本大震災に関しては、米国だけでなく、台湾やトルコやポーランドという国が、いち早く援助の手を差し伸べてくれました。

そして私自身、トルコや台湾がどうしてこれほどまでに、日本に温かい援助の手を差し伸べてくれるのかは、その背景も理解していました。その二つの国の多大な援助の背景にある話については、今後の機会に話させてもらいます。しかしポーランドという、日本から遠く離れたヨーロッパの小さな国が、阪神大震災の時と同様に、今回も、日本の国にどうしてこれほど温かい援助の手を差し伸べてくれたのかを初めて知りました。

それは今から100年以上前にさかのぼる出来事に由来するものでした。第一次世界大戦後、ロシアによって多くのポーランド人たちはシベリアの原野に送られ、難民となり飢えと寒さに苦しみました。そしてそういった過酷な環境の中で親を亡くす孤児たちを、日本の国が、ポーランド人からの要請を受け入れて、孤児の救出に乗り出しました。その結果、平均年齢5歳、765名に及ぶ孤児を大阪と東京に迎え、飢えや凍傷で傷ついた彼らの治療に当たりました。中には凍傷の上に腸チフスを発症していて、もはや手遅れを思われる幼い女の子の孤児がいました。ところが、松沢フミさんという若い看護婦さん（敢えて看護師ではなく「看護婦さん」という言葉を使用しました）のひとりには、それがかわいそうでならず、どうせならせめて自分の胸で死なせてあげたいと願い、毎晩、その幼い女の子の横で眠りました。その結果、その幼い子は奇跡的に命を取り留めましたが、その様子を見届けてから松沢看護婦さんは倒れてしまいました。自ら腸チフスに感染していたのでした。結局、当時、孤児の世話に当たった人達は、日本に迎えた孤児を一人として死なせはしませんでした。死んだのは松沢フミさんという看護婦さん一人だけでした。私はこの記事を読んで、なぜ惜しみない援助がポーランドから送られたのか、その背景を知ることができました。ポーランドの人達は100年以上前に日本の人達がしたことを忘れていませんでした。私達も、100年以上の前の話ですが、

日本の国や日本の人達がポーランドの孤児達に対して取った尊い行為を忘れてはならないと思います。

さっきも申しましたように、あらゆる出来事にはその背景があり、隠された真実もあるということをもう一度理解していただき、今日本で起きていること、そして世界で起きていることに関心を持ってもらいたいと願っています。今日は時間の関係もありますので、物の見方やものの感じ方の違いがどのように生じるかについては別の機会に述べさせてもらいます。

最後に、いよいよ受験に向けての追い込みに入った高3生諸君のさらなる健闘と成功を祈願し、また生徒全員が新年を明るく元気に迎えられることを心から祈って、私からの終業式の挨拶とさせていただきます。

<3学期始業式での学校長挨拶> 2012年1月7日

みなさん、おはようございます。冬休みはどうでしたか？またお正月はどうでしたか？去年は日本にとって本当に大変な年でしたが、今年こそ、平穏無事な年であることを祈ってやみません。何か大きな不幸や悲惨な出来事があって、私達は初めて「平穏無事」であることのありがたさが実感できるのかもしれない。

本当に今年はどんな年になるのでしょうか？

私の心配していることはいくつかあります。そのうちの1つは、何と言っても、再度、突然に大きな被害をもたらす巨大地震や大津波の発生であります。既に日本は地震の活動期に入ったと言われています。専門家の何人かは東海地震、東南海地震、南海地震が連動して起こる可能性を述べたりもしています。またもう一つ心配なことは、ヨーロッパに端を発するかもしれない世界大恐慌の発生です。これも今のところ何とか発生を抑える努力がなされているのですが、一度世界大恐慌が起こると、日本でも多くの倒産が起こり、失業者が世にあふれ、将来を悲観して自殺する人達も激増します。大きな銀行や世界的な大企業でも倒産するのが世界大恐慌というものです。また第2次世界大戦の時と同様に、大恐慌のあとに大きな戦争が起こることも予測されます。もう一つは鳥インフルエンザがヒト型インフルエンザに変異して起こるパンデミックです。鳥インフルエンザが猛毒性に変異し、人から人への感染が広がったりする危険性については世界保健機関（WHO）も警告を発しているところで、これも一度発生すれば、世界で最大5億人が犠牲になると言われています。あとは今後の北朝鮮の核開発問題や中国との領土問題などなど・・・本当に今年も大変な年になるのではないかと心配しています。

皆さんはどうですか？余り、そういうことに関心もないし、自分には関係がないと思っているかもしれませんが、実際は、私達の誰一人として、世界や日本で起こることから、自分だけ無関係であることは不可能なことです。

さて、校長は、新年早々、今述べたような悲観的なことを何で述べるのかと思われる生徒もいるかもしれませんが、それは何も諸君の気持ちを暗くすることが目的ではありません。ましてそういうことが起きるのを待っている訳ではありません。私は、毎日、どれだけ遅く帰った時も、日本の国が安かれと願い、世界が平和であれと願い、日本人達、そして桃山の生徒達が無事であれと願い、神に祈っております。

しかし、私や皆さんの願いや祈りだけでは、避けがたい運命というものもあるのです。

では、なぜこのようなことを述べたかといいますと、理由は2つあります。ひとつは、「実際に起こったときにアタフタしないためにも」生きている限り何が起こるか分からないということを心の片隅にでも、しっかりと刻んでおいてほしいということでもあります。あくまでも心の片隅です。それを心の中心に据える必要はありません。心の中心には、今、自分が生きていることの感謝とともに、その中で今自分がなすべきこと、毎日の生活のなかで果たすべき役割と使命というものをしっかりと据えておいて下さい。そして学校生活の中でも、しっかりと自分を高めていってください。聖書の中に「光あるうちに光の中を歩め」という言葉があります。自分の周りが闇に覆われても、自分がその闇の中の灯（ともしび）となれるように自分を高めていってください。

いつ闇がやってくるかもしれません。

また勉学や読書を通じて知識や教養を高めて下さい。そうすれば、様々なモノの見方や、広い視野に立った世界観が身に着きます。それと同時に、人類の歴史をふりかえって、何もない時代自体が珍しかったことも分かるはずです。特に日本では何もない平和な時代がここ数十年だけ続いているので、私達はそれが当たり前であると勘違いしているけれど、実はそうではないということを十分に承知しておいて下さい。実際、ほんの70年ほど前には、諸君のような多くの若者を含め、300万人ほどの日本人達が戦争で亡くなっているのです。世界にとっても、日本にとっても、またひとりひとりにとっても、生きてある限り「何かが起こる」ものです。もちろん避けられる不幸や大きな問題は、それを回避し、その損失を最小限に抑

える最大限の努力というものは必要ですが、それでもそういった人間の努力を超えるようなことが起こるのが「この世に生きてある」ということです。

そこでもうひとつ私が述べたいことは、「人生、逃げ場なし」という覚悟の必要性であります。今申しましたように、逃げられない運命というものが人間にはあります。そういうとき、何があっても、動じない覚悟というものを持ってもらいたいと思います。このことは、大地震や大恐慌のような大きな問題に直面した時もそうですが、日常生活で起こる個人個人の問題に対しても、そうであります。問題から逃げようとすればするほど、その問題は大きくなるしかかってきます。どうせ避けられない運命や問題ならば、その運命や問題から逃げずに、それに立ち向かうという覚悟が必要です。まさにいかなる場合にも、「人生逃げ場なし」という覚悟をして、前向きに明るく生きていくことが大切であろうと思います。

実際、運命や問題から逃げようとするのではなく、それに力を振り絞って立向かった時、人間には思いもよらない大きな力が与えられたりすることもあるのです。また一つの扉が閉じられても、別の扉が開かれることもあるのです。

ということで、今年も、私達に何があるかも知れませんが、何があっても逃げないで、力を振り絞って、すべての困難に立ち向かってもらいたいと願っています。そして最後にもうひとつ、一人では超えられない困難でも、みんながひとつになって心を合わせ、力を合わせれば、何とか超えられることもあるのです。

どうか家族や友人や自分が出会った人達を大切にしてください。そして悔いのない毎日を送ってください。

これで私からの始業式の、そして年頭の挨拶とさせていただきます。

2011.12.11 Sun

「校長先生、最近ブログを更新されてないじゃないですか？」と言われます。実は更新しないのは理由がありまして……。その理由はしばらく謎のままにしておきたいと思います。と言っても怪しげな暗い理由ではありません。隠さなければならない理由でもありませんから、聞かれれば答えるつもりでいます。いずれにせよ「秘すれば花なり」ということもあります。

さて「謎」と言えば、皆さんは昨日（12月10日）の皆既月食をご覧になりましたか？ 私は夜空に浮かぶ皆既月食の月を観て、何かそこはかとない「畏れ」といったものを感じました。近くの公園の片隅のベンチに寝転がり見取れていました。なるほど、頭では皆既月食というのはいくらでも理解できます。しかし理屈を超えて、その現象に不思議なものを感じずにはいられませんでした。そして、なぜか、そういった不思議を不思議だと思って観ている人間の意識そのものが、もっと不思議な気がしました。

そのときの一首です。(句にも詩にもなっていないものですが・・・)

「私は誰だろう？あなたは誰だろう？ 誰は誰？ 不思議を 不思議のまま 不思議を生きる」

Who am I? Who are you? Who is who? Mystery is living mystery as it is.

実際、私達の生命や意識、そして生きていること自体が不思議な気がしてなりません。皆さんはどうですか？

私も皆既月食の月を観ながら、かなりルナティック(lunatic)な気分になりました。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

*lunatic=月の女神ルナ(Luna) に由来する形容詞で「怪しげな」という意味を持つ

2011.11.16 Wed

先週の11月12日（土曜日）、高校卒業25年目と4年目の卒業生達を迎えるホームカミングディが中高同窓会主催で実施されました。当然、私もその会には出席する予定でいたのですが、どうしても出掛けなければならない出張が入り、やむを得ず欠席となりました。そこでその代わりとして私からのメッセージを高校教頭から読み上げてもらうことにしました。結局、その日は、教頭は教頭として卒業生向けの話があり、事務長が私からのメッセージを読み上げてくれたそうです。しかし、そんな簡単なメッセージだけでは許してくれない卒業生達がありました。早速その夜に卒業生からの抗議の電話が入りました。「先生が出るということで出席したのに、欠席とは何事か！」というのが主な内容で、私としては非常にありがたいことでもあり、非常に申し訳ないことでもありました。特に4年目のホームカミングに来た卒業生達は、ちょうど大学を卒業して就職が決まっている連中も多くいるので、直接私に就職の報告もしたかったようでした。10名以上の卒業生達がカワルカワル、最初にかけて同窓生の携帯電話で私に「抗議と近況報告」をする場面がありました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

この場をかりて、改めてホームカミングディ欠席のお詫びを申し上げます。そして、心から「就職決定おめでとう！」の祝意を述べさせていただきます。

そしてさらにその夜の毎日放送を聴いた卒業生の何人かからも連絡をもらいました。「さんまさん」の放送を聞いていたら、その後の番組で突然、校長が出てきたので驚いたというものです。実はMBSの「広澤克己とDr.イトーのレーザー交遊録」にゲストで招かれ（1週間前の収録）、程よい（?!）トークをしたのですが、テレビで「よゐこ部」に出たときと同様、今更ながらマスメディアの力に驚きました。ラジオ番組に出ることも前もって（恥ずかしかったので）皆様にアナウンスしなかったことも、この場を借りてお詫び申し上げます。

閑話休題

この秋には警察関係者が集うOB会に出席させていただきました。本当に警察でも、警察職員から捜査第・課まで、いろんな分野で活躍している卒業生達が多くいることを嬉しく思っています。また彼らの礼儀正しさの中にある熱い思いにも感激いたしました。日本の治安を守るため、日夜努力している姿には頭が下がる思いがします。そこでついつい、夜などに巡回している見ず知らずのお巡りさんにも「ご苦労さんです」と声をかけてしまいます。時には怪しまれるようです。なるほど、夜遅く、見ず知らずの「おっちゃん」が、お巡りさんに声をかければ不審者と誤解されるのは無理もないことです。でも、どういう訳か、皆さん「ありがとうございます」と言ってくれます、とまどいながらも・・・。

閑話休題

不審者といえ、先月には「不審者侵入訓練」を阿倍野署の協力を得て行いました。万が一にもこのブログが不審者に読まれたら困るので、詳しくは記せませんが、これだけの規模での訓練

は「おそらく初めてでしょう」ということでした。

2011.10.25 Tue

前回のブログで書いた内容について、それを掲載した翌日、早速、全国規模の大手教育機関に勤めている方から感想をいただきました。今回はその方からの感想と、その方に教えてもらった「脳科学での視点」を紹介させていただきます。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

温井先生

おはようございます。「鯨の会」以来、ご無沙汰しております。今ころはご出勤途中なのでしょうか。

さて、昨晚、先生がUPされたブログを拝読しました。

◆私自身、先生が述べられた「『「教師こそ自分の天職だ』と思って教師になった訳ではありません」という点、とても意外に感じると同時に、励まされました。

なぜなら私自身が、どちらかという、「とりあえず」の動機で大学へ進もうと努力をした生徒だったからです。教室で生徒・保護者に対して学習指導をする際、「将来の目標を明確にイメージしなさい、そうでないと受験勉強がつらくなります」ということを伝えています。自分がそうでなかったのにもかかわらず、です。高校時代の自分と今指導している自分が矛盾していることに、しばしば違和感を抱いていました。先生のブログを読んで、そうじゃない学習指導もありなんだ！ と目からウロコが落ちましたよ。本日から実践してみます。

また、このブログを読んで、ある脳科学者の話をふと思い出しました。温井先生は直感でつかまれていたのかなと。

↓参考になりますでしょうか。

<http://www.mammo.tv/interview/archives/no095.html>

例えば、今日中に原稿を書かないといけないのに何もやる気がしないとします。そういうときは、とにかくパソコンに向かって文章を書き始める。そうすると側坐核に刺激が与えられ、やる気が出てき、気づいたら集中していた…なんてことになります。心理学用語では「作業興奮」といいますが、嫌々ながらやっているうちに夢中になるものなんです。つまり、やる気を生み出す方法は、まず努力してみること。僕は朝が弱くて、どうしても起きられない質です。でも、そういうときはとにかく起きてみることにしています。

ではいってらっしゃいませー。

2011.10.11 Tue

早いもので、今年も「第一志望宣言」が始まりました。第一志望宣言というのは、高3生徒が自分の目指す第一志望の進路が決定したとき、その第一志望の（主に）大学名と志望理由を宣言書に書き、それを担任と共に一人ずつ校長室に入って、その宣言書を私に手渡すというものです。めったに生徒と直接話をする機会に恵まれない私にとって、非常にワクワクする貴重なひと時でもあります。今まで生徒ひとりひとりの個性が光る宣言書をもってきました。前にも書いたことですが、志望理由では「小さいときにガンダムに憧れた。だから工学部に行っているいろいろと勉強したい」というものや「（小・中・高と自分が世話になってきた）阿倍野区のために尽くしたい」というもの、さらには「大学に行って立派な主婦になりたい」という理由までいろいろあり、生徒達の大学進学への目的と動機の高さには驚かされてきました。と同時に自分の夢に向かって進んでいく姿勢を実に頼もしく思っています。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さて、そういった自分の将来の夢をしっかりと描き、その夢を実現するための大学や学部・学科まで明確に決定している多くの生徒達に混じって、「自分が将来何をしたいのかまだ見つかりません。だから僕が大学に行く理由も分からないんです。でもとりあえずは～大学か～大学に行こうと思っています。そして大学に入った段階で、自分の将来の道を見つけたいと思っています」というような生徒達もいるのです。そういった生徒に対して、私はひとこと「『とりあえず』で大いに結構。文系か理系か決まっているだけでも良しとしましょう。大学でのさまざまな出会いや勉学の中で、自分の進みたい道を見つけてください！」と述べることにしています。私は未だ将来の道を思い描けない生徒達の「とりあえず」を、私の方からとりあえず力強く肯定することにしています。そういった瞬間、そういった（まだ将来を決めかねている後ろめたさを持った）生徒達の多くは、その顔を輝かせてくれます。

だってそうでしょう？！（誰に語っているか分からない言葉遣いをしてしまいましたが）。このブログを読んでくださっている大人の方々、皆様は全て高校時代に自分の将来の職業を明確に決定していましたか？中には大学4年になってもまだ分からず、とりあえず入った会社での仕事が自分の天職だったという方もおられるかと思えます。それどころか天職探しで転職を何回かなされた方もいるかとも思えます。私自身、「教師こそ自分の天職だ」と思って教師になった訳ではありません。「教育がひょっとしたら自分に合っている仕事かな？」と思い出したのが、教員になって3年目ぐらいで、「教育が自分には一番合っている仕事かな？」と思い出したのが10年目ぐらいで、「教育が自分に一番合っている！」となったのは40歳になってからでした。そして「教育が私の天職である」と自分に言い聞かせながら（！）納得できるようになったのは50歳を過ぎてからでした（笑）。

だから私は、明確に将来の夢を描いてそれに努力している生徒達を賞賛すると同時に、「とりあえず」の動機で大学へ進もうと努力をしている生徒達もとりあえずは大肯定することにしています。

閑話休題

私は、生徒によっては、勉強の仕方についても「とりあえず」を勧めてきました。特に勉強をしなければならないという気持ちを強く持ちながらも、気持ちばかりが焦って何から手をつけていいのかわからない生徒達に対しては、「とりあえず」の指導が効を奏することも多々ありました。「君の焦る気持ちは分かる。もう高3になったしなあ。あれもこれもやらなければならないからなあ。でも同時に2科目はできないだろうから、とりあえず今日は、帰り電車の中で単語を20個覚えてみて、家に帰ってからとりあえず世界史のフランス革命のところだけでも読んでみたらどう？」というようなことを言います。それがきっかけとなって勉強を始める生徒達を見てきました。実際、ものごとは「とっかかり」が非常に難しいものですから、最初から気構えてしまうと、それだけで疲れてしまう場合があります。「よし、明日から勉強だ」ということで先ず予定表を分刻みでキッチリ作ったり、参考書を揃えたり・・・、そういったことも大切でしょうが、うまくいかないことも多くあります（高校時代の私がそうでした）。勉強を大層なことと考えることが、却ってマイナスに働くのでしょう（高校時代の私がそうでした）。それよりも「とりあえず」今できることに「とりかかってみる」という方法・・・。この処方箋（?!）が「気持ちばかりが焦っている」ような生徒達には意外と効くものです。

2011.09.20 Tue

今月(9月)の16日、17日にかけて文化祭が行われました。

今月16日の朝の開会式において、自治会執行部や文化祭実行委員の生徒達は、運動場に作られたステージに上がり、全校生徒を前に文化祭の開会宣言などをしました。本校では、文化祭や体育祭の行事は企画から運営まで生徒達を中心となって行われます。その宣言と生徒達が舞台上で一斉に鳴らしたクラッカーを受けて(?!)私は次のような挨拶を全校生徒の前でいたしました。

<開会式でのあいさつ>

残念ながら天気予報では明日は雨です。せっかくの文化祭なのに、ここまで準備してきた文化祭なのに、外部の人を招く明日が雨というのは残念ですね。しかし、いくら雨でも、気持ちまで暗くする必要はありません。天気によって気持ちまで暗くする必要はないのです。せめて暗い天気なら、気持ちだけでも晴れやかにしましょう。人生においても晴れの日が続くとは限りません。曇りの日もあれば雨の日もあります。そうだからと言って気持ちまで暗くしなければならないことはないのです。自分が明るくなれば、周りも明るくなります。明るい人が2人いれば、それはさらに明るさを増加させます・・・。

但し、そうはいかない場合もあります。それは愛する人や家族を亡くした悲しみです。今なお、そういった悲しみや苦しみの中にいる人がいます。・・・・。昨日から、台風12号で被災を受けた和歌山に行っている教員がいます。無担任の教員ですが、文化祭が終わってからも、さらに2人の教員がそれに加わります。それに関しては、文化祭中、SBSやBSAの生徒達が中心となって、東日本大震災の募金と同時に台風12号による被災者の方々のための募金活動も行いますが、みんなで協力して下さい。あとは、今年も外部から多くの方が来られると思います。そういった人達には、例年通り、さすが桃山の生徒であると思ってもらえるように、心から温かくお迎えして下さい。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

以上のような話をしたと思いますが、もしよければ文化祭のパンフレットに書いた挨拶文を最後に掲載していますのでお読みください。今回の文化祭を迎えるにあたっての私の気持ちと願いを書かせてもらいました。

ところで文化祭の初日は、例年、学校の内部だけで行われます。コーラス大会の予選や外部からの識者を招いた講演会などが行われます。

今回の講演会は、大学受験において現代文の指導と著作で有名な出口汪先生(<http://www.deguchi-hiroshi.com/>)を招いての講演となりました。対象は高校3年生と中学生でした。私自身、出口先生の著書については20年以上まえから「お世話になって」まいりま

した。というのも、いわゆる現代文というのは決定的な指導法がなく、現代文を不得手とする生徒達に対して専門外の者が言えることとは、漢字や熟語を覚えなさいということや新聞や本をよく読むということ、さらには様々な問題集をこなしなさいというぐらいで、常に隔靴搔痒の感がしていました。そういったときに私が探し求めて出会ったのが、「出口の現代文」（当時は代々木ライブラリーから出版されていました）という本で、私は一読するなり「これは何かが違う」という印象を持ち、自分でもやってみました。そのうえで、現代文が不得手な生徒（理系の生徒が多かった）や努力しながらも伸び悩んでいる生徒達に「出口の現代文」をやらせてみました。すると、おもしろいことにほとんどの生徒は成績が下がりました・・・ただしそれは一時的な現象で、そのあと少しずつ、あるいは飛躍的に現代文の成績を伸ばしていく生徒たちが出てくるようになりました（但し、途中であきらめた生徒達は当然成績も伸びないままでした）。その「一時的な成績の下降現象」については、この前、直接出口先生に会ってお聞きし、納得できる答えをいただきました。要するに「なんとなく感覚で理解していると思っていた読解が、論理による理解に変わる一時的な過渡期的現象」というものです。

さて、本校では来年から、その出口先生による指導法が一部国語の授業で正式に取り入れられることになったと聞いており、とても楽しみにしています。

そしていよいよ文化祭本番の17日、この日は朝から多くの人達が本校の文化祭に来ていただきました。また「中学と高校が分かれて行われるコーラス大会」の会場は、例年に増して多くの人達が来ていたようであります。高校のコーラス大会（1, 2年生のみの参加）決勝でも非常に熱のこもった競演が繰り広げられましたが、特に今回は、新たに中高一貫性達が加わることにより、例年以上の熱い闘いであったように感じました。

<文化祭を迎えるに当たってのパンフレット掲載記事>

2011年度、第63回の文化祭を迎えることになりました。

まず初めに、わずか半年余り前に発生した東日本大震災で被災された方々に、謹んでお見舞い申し上げます。同時に、今なお、この大震災で家族や愛する者を失った人達、家屋や仕事を失った人達、仮設住宅や避難所で不自由な生活を強いられている人達・・・私達は改めてそういった人達の悲嘆や失意や不安を心に憶えるとともに、本校でこうしたフェスティバルを教職員、生徒全員が揃って開催できることを心から感謝したいと思います。

大震災後、本校の卒業生であるヤシキタカジンさんにお会いしたとき、桃山の生徒たちに伝えて欲しいと託されたメッセージがありました。それは「（東日本大震災で）生きどうても生きられへんだ若者がいるんや。津波に流された命があるんや。そのことを忘れんと、その分、しっかりと生きんとあかん！！」というものでした。このことは既に昨年度の終業式で生徒諸君に述べましたが、もう一度、そのメッセージに込められた思いに心を馳せたいと思います。その思いは、何も有名な人の口から出た言葉だから価値があるのではなく、たまたま3月11日の想定外の大惨事によって、多くの人々の心に芽生えた共通の思いを表しているから、インパクトのあるメッセージになっているのではないかと思います。つまり世の中には何が起こるか分からない。だ

からこそ、今日の一日一日を生きていること、あるいは生かされて在ることに感謝し、そして充実させて生きていくことが大切であると伝えているのではないかと思います。

そして生きて在ることの感謝と喜びを表すための特別な日がフェスティバル、つまり祭りの意義でもあります。特に日本で行われる多くの祭りには、亡くなられた方への鎮魂の祈りと願いがこもったものであると聞いています。

今回の文化祭は、そういったフェスティバルあるいは「祭り」の原点に立ち戻った気持ちで迎える文化祭であって欲しいと願っています。

最後になりましたが、文化祭開催に至るまでの自治会執行部や生徒会をはじめ、文化祭実行委員会や風紀美化委員会の生徒諸君の努力に敬意を表します。また、PTAや中高同窓会の皆様の多大なご協力とご支援に深く感謝申し上げます。

2011.09.04 Sun

長くブログを更新しないですみませんでした。実はいろいろありまして、更新する機会を失いました。8月中旬の大阪私学展での盛況、8月末、ヤシキタカジンさんの音頭取りで橋下知事と平松市長とが対談した白熱の場面等など、いろいろ書きたいこともあったのですが、あれやこれやと言う間に過ぎ去った8月でした。それらのことについては次回のPTA学級委員会などでまた発表させてもらうかもしれません。興味ある方は是非、PTA活動にも積極的にご参加下さい（笑）。<?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

今回は8月24日に行われた教員研修について書かせてもらいます。

去る6月にある若者が、フリー・ザ・チルドレン (<http://www.ftcj.com/>) の広報のために校長室を訪れました。その若者は本校スクール・バイ・スクールの活動 (<http://www.momoyamagakuin-h.ed.jp/sbs/index.html>) でアドバイスをいただいていた方の紹介でしたので、私も経歴等は詳しく聞くことなく会うことにしました。

私は校長室に入ってきたその若者を一目見て驚きました。とにかく、逆立った髪の毛が紫と金色に染め上げられ、エレキギターを背中に担いでいました。どこからどう見ても、音楽に魅入られたパンクロッカーという印象でした。ところが話をしているうちに、「タダものではない」という印象に変わってきました。落ち着いた物腰と澄んだ眼、そして虐待や搾取されている世界の子供達に対する熱い思いというものが伝わってくるからでした。そこで私は話の途中でしたが、手っ取り早く相手を知る方法を取りました。つまり「あなたは一体何者ですか？」ということ率直に聞いたのでした。

彼の答えは「ひとことで言いにくいのですが、まあ牧師をしています」という答えでした。また数学の専門家であり、音楽家であり、アスリートでもあるということでした。詳しくは書ききれませんので、一応、彼に依頼して書いてもらった自己紹介欄を、本人からの許可をとって末尾に載せさせてもらいました。まさに「人を見た目で判断してはいけない」ということを身をもって知らされた訳であります。名前はフェイス天野さんです。父親は日本人で母親は韓国人ということで、中学校から大学まで米国で暮らしていたそうです（たまたま本校の英語科教員のひとりが同じ大学にいました）。

夏期研修会には、教頭とも相談の上、そのフェイスさんに来てもらうことにしま

した。と同時に、研修会のテーマの一つは、「人を外見や先入観で判断する間違い」について先生方に学んでもらうということになりました。

というのも、気をつけていなければ、私達自身、生徒を服装や成績や生活態度など、その子の外に現れた部分だけで判断してしまい、その背後にある状況やその子のもつ善なる本質を見失う可能性があるからです。そういったことは教育にとってマイナスでしかありません。

さて研修会当日、フェイスさんには、ダークな色で真面目な髪形のカツラをかぶって登場してもらいました。そして一言も発することなく、バイオリンを弾いてもらいました。そこで私は目をキョトンとしている先生方に向かって「彼は何者だと思いますか？」ということ問いかけました。何名かの教員は「今日は研修会ではなく、音楽会か」と思ったかも分かりません。その後、彼にはバイオリンを置いて、完璧な英語でみんなに挨拶をしてもらいました。通訳は英語の教員が勤めました。そこでまた「彼は何者でしょうか？」という私からの問いかけ。その後、フェイスさんは突然、ホワイト・ボードに数学の問題を書き、それを流暢な日本語で解説し始めました。そこでまた「彼は何者でしょうか？」という私からの問いかけ。そしてその後、彼はカツラを取ってパンクロッカーの見事な髪（！）を皆に披露しました。教員達はのけぞったのようでした。そして最後に、私が彼の経歴を説明し、フェイスさんの指導のもとでワークショップに入りました。ワークショップでは、私達がどれほど「外見や先入観を持って人を判断したり、人に接したりしているか」を体験的に自覚するという内容のものでした。

短時間でしたが中身の濃い研修ができたかと思います。

また昼食時には「外部からの不審者侵入」の訓練も行いました。最初、この訓練を教職員には「訓練と知らせずに」抜き打ち的に行ってはどうかと考えましたが、余りにも必死になり過ぎて、クラブ活動などで校内にいる生徒達も巻き込んでしまっただけという心配から、一応、当日になって訓練ということを知らせました。また不審者役になってもらうのに相応しい教職員（？）も3名、前もって指名し、校内に身を隠したり逃げ回ったりしてもらいました。

この訓練によって得た経験や教訓をもとに、10月には全生徒を交えた「不審者侵入の訓練」をする予定です。

さて昼食後の研修会のテーマは「桃山をよくするために」というものでした。ここである教員からは「既に桃山はいいじゃないですか」という意見も出されたのですが、それに対して「社会も企業も教育も常に進化していかなければならない」と

いうこと、そして「何事においても、ましてや教育活動においては、さらに良くするための工夫は常に不可欠である」ということを述べ、全ての教員に「桃山をさらによくするための論議」に参加してもらいました。これも「得るところ大」の研修であり、今後は教員から出された意見を各部会や職員会議などで具体的に検討していくことにしています。

尚、この研修会で私が何よりも嬉しかったのは、ワークショップでの本校教員の熱心な関わり方をフェイスさんやアシスタントの方に褒められたことです。私には校長をしていて嬉しいことがいくつかあります。もちろん生徒達が成長し生徒達が褒められることは何よりも嬉しいのですが。本校の教職員が外部の方に褒められるのもなかなか嬉しいものであります。

<Faith 天野氏の経歴>

学歴

- 1992年3月 埼玉県飯能市立美杉台小学校卒業。
- 1994年6月 アメリカ・イリノイ州ヴィラパーク市立ジャクソン中学卒業。
- 1998年6月 ヴィラパーク市立ウィローブルック高校卒業。
- 1998年8月 イリノイ州私立ノックス大学入学(早稲田大学と姉妹校関係)。
高校教育と数学の両方を専攻。
- 2002年8月 イリノイ州私立ジャドソン大学入学。「音楽伝道」という神学(聖書)と音楽を同時に勉強する学科を専攻。
- 2005年12月 ジャドソン大学卒業。

活動等

高校時代

アメリカではクラブや委員会をいくつもかけもち出来るので、色々と幅広く活動する。陸上(短距離)、サッカー(フォワード)、スキー&スノーボード、オーケストラ(ヴァイオリン)、ジャズバンド(ギター)、キワニス・クラブ(「世界の子供たちに奉仕する」社会奉仕団体)、アムネスティー(国際人権救援機構)、生徒会、数学クラブ、クリスチャン・アスリート・クラブ等。早朝聖書研究会も創立する。

学校外では教会で中高生礼拝の賛美リーダーを務めたり、日本の音楽に興味がある人の為のサイトで翻訳の仕事始める。

教師を目指す生徒が毎年60名だけ選ばれるゴールデン・アップル奨学生となり、表彰される。また、コンピューターのプログラミングを勉強し、成績が良かったのでマイクロソフトから「年収六桁(ドル)で働かないか？」とスカウトされるが、教師に情熱を持っていた事と、毎日ずっとコンピューターと向き合うのは無理だと思い断る。

大学時代1

陸上、オーケストラ、生徒会(一年生の時から選挙で当選)、カイ・アルファ(世界規模の大学生クリスチャン団体)のリーダーを務めたり、フラタニティ(社会、慈善団体)でチャプレン(団体牧師)に任命されたり、付近の教

会で賛美奉仕をする。

同大学で数学や日本語のチューター(学習助言者)の仕事をしたり、日本人留学生や駐在員、またその家族に英語を教える仕事をしたり、ユース・コート(青少年裁判所)でカウンセラーとして働いたりする。

近辺の高校で数学が不得意だった生徒に教えた「英語版九九」や、教育専攻で研究していた「子供が互いに教えあう」というテーマが注目を受け、他州から招待され講演や実践をしたりする。

そして2001年にマラウィが飢饉で困っている事を知り、大学等で募金を集め、夏休み中にマラウィの孤児院に届けに行く。マラウィの他にもザンビア、モザンビーク、ジンバブウェ、南アフリカ等にも行く。

大学時代2

オーケストラ、聖歌隊、キャンパス礼拝の賛美リーダー、生徒会留学生代表、キャンパス小グループ・リーダー、そして弦楽四重奏やハンド・ベル隊を立ち上げたりする。聖歌隊のツアーではワシントンDC、カリフォルニア、ドイツ、フランス、オランダ等に行く。コンサートでは指揮、振り付け担当、生徒代表演説等をしたり、移動中に寄ったスターバックスでメンバーを数人集め、アカペラで歌わせて無料でコーヒーを貰ったりする。

また、同大学で音楽やユース・ミニストリーを専攻している生徒たちで作ったロック・バンドで中西部をツアーし、色々なイベントや教会等で演奏や講演をする。

また学校外でも、地域の日本人キリスト教会で中高生会のディレクター、夏キャンプのカウンセラー、ギター講師等をしたり、アメリカ人教会で聖歌隊の指揮者や、音楽ディレクターの仕事もする。2003年には、中西部に住んでいる社会人日本人クリスチャンをターゲットにしたセントラル・コンフェレンスと言う集会を立ち上げ、今でも毎年継続されて行われている。

1999年から2005年までは、JCFN(ジャパニーズ・クリスチャン・フェロウシップ・ネットワーク)主催の、主に海外でクリスチャンになった高校生以上から30代以下が300人ほど集まる集会にて賛美リーダーをしたり、高校生の小グループ・リーダーを務めたりする

2005年の11月にテネシー州にある明治学院高校にて一週間の特別伝道講師を務める。朝の礼拝での説教、聖書の授業での特別講師、夜の図書館での質問応答、コンサート等を行う。

卒業後

ロサンゼルスに移転し、アズサ・パシフィック大学にて行われている日本人留学生をターゲットにした集会でアドバイザーを務めながら、地域の教会やイベント等にて、講演、演奏、通訳、翻訳等の仕事をしたりする。ロサンゼルス近辺に滞在するクリスチャン独身男性の為の集会も創立する。

2006年11月末に日本に移転し、ミュージック・ミニスター(音楽伝道者)&イベント・コーディネーターとしてCAN(クリスチャン・アーティスト・ネットワーク)に所属し、CAN主催のイベント、ゴスペル・ラジオ・ステーション主催のラブ・レボリューション、GOCHAと言うクリスチャン・アーティストが出演するライブ等に出演したりしている。

また東京都東久留米市にあるクリスチャン・アカデミー・ジャパンでチャペル講師として働いたり、青梅市にあるグレイス・クリスチャン・インターナショナル・スクールで教師として働いたり、埼玉県飯能市にある聖望学園にて講演&コンサートをしたり、新座市にあるクリスチャン・ライフ・センターでユース・パスター(中高生と青年用の牧師)をしたり、色々な教会等で講演を行っている。

2010年よりFTC(フリー・ザ・チルドレン)というNPO団体でモチベーション・スピーカーとして学校等で講演やパフォーマンスを通して子どものエンパワーメントをしている。他にもリーダーシップ・トレーニングや、インドでの学校建設の旅の引率、カナダでのリーダーシップ・トレーニング・キャンプのスタッフなどもしている。

講演やパフォーマンスの他にも、小中学生英会話教室の講師、個人英会話講師、ギターやピアノやドラム等の講師、陸上のコーチ、サッカー・キャンプのカウンセラー、通訳、翻訳(本、映画脚本、チラシ、ポスター)の仕事もしている。英検一級(優秀賞)。TOEIC985点(1問不正解)。

生い立ち

日本人で大学教授(英語)／牧師の父と韓国人で牧師／看護学校教授の母を持つ。日本生まれ、アメリカ育ち。日本の小学校で四年生の時、家庭訪問時に担任の先生に「個性が豊かなので、このまま日本の中学、高校に行ったら個性が無くなるか、いじめられるかもしれない」と言われ、卒業後にアメリカ留学する事を両親が決心する。

14歳の時、教会に通っているからクリスチャンだと思っていた自分の考えの間違いに気付かされる。自分は罪を犯していないと思っていたが、実は人を傷つけていたり、「神様の用意されている道から外れて生きている事」が罪だと知り、イエス・キリストを自分の罪からの救い主として受け入れる。

中学、高校と日本人は自分一人きりだったので、日本と韓国のハーフでアメリカ育ちの自分の境遇に悩み、日本には帰国せずに、移民の国であるアメリカで高校の数学教師を目指す事にする。しかし、1999年末に参加したJCFN主催のイクイッパー・コンフェレンスで初めて大勢の若い日本人クリスチャンに会い、衝撃を受ける。2000年にはロサンゼルスで行われた世界規模の大学生クリスチャン集会にて、日本に行った事もなく、日本人の知り合いも全くいないのに、「神様が日本への思いを与えてくれたのは何かの理由があるから」と、日本の為に毎日泣きながら祈るアメリカ人に会い、自分が日本の国籍を持って生まれてきた事には何か理由があると確信し、日本に戻る事を決意。人は全員生まれてきた理由と、生きる目的があるという事、そして、いつも愛されているという事を日本で伝えている。

2011.07.31 Sun

最近、何十年ぶりかである卒業生に会いました。その時も、その卒業生は、「あの時先生の言われた・・・という一言のお陰で、僕は本当に立ち直ることができました」と言ってくれました。しかし、私にはその卒業生に「そういう一言」を述べた覚えがありません。だから私は彼に「僕はそんなこと言っていないよ」と言ったのですが、彼の方は「そんな筈はありません。あの時の先生の一言で立ち直ったのが自分自身ですから、僕が忘れる筈はありません」と確信をもって言い返されました。僕としては「ああそうだったかなあ」と言う他はなかったのですが、実はこういうことはよくあることです。私の一言で「立ち直る」とまではいかなくても、私の一言で「やる気になった」とか、私の一言で「進路についての迷いが消えた」とか言われることはよくあることですし、また私自身、それを憶えていないということも、同じぐらいよくあることです。

また、何も生徒を勇気付けたり立ち直らせたりする言葉を言っているのは私だけでなく、先日もある保護者の方から、「うちの子供は併願で失敗したことをくよくよ思っていたのですが、K先生の一言立ち直りました」ということを私に言われました。そしてその事を、そのK先生に話すと、やはり「そんなこと言いましたかねえ」という、私と同じようなボケた(?) 答えしか返ってきませんでした。

さて何を言いたいのかと言いますと、先ず、言葉には大きな力を持つということです。例え、その言葉が何気なく発せられたものであっても、それが相手の人生にまで大きな影響を及ぼすことがあるということです。そして影響には「いい影響」と「悪い影響」とがあります。確かに私に「先生のあの時の一言のお陰で～」と言った生徒は、私の一言が彼にいい影響を与えたのは間違いないでしょうが、怖いのは反対もあるということです。「あの時のあの先生の一言のせいで、僕は・・・」という場合もあるということです。そして、こういった場合、もっと怖いのは、余程のことがない限り、そういう卒業生はおそらく私の前には姿を現さない点であります。そういった言葉を言った時点で、言われた方の生徒の気持ちには私に対する不信感が生まれ、ある意味その私を見切る訳ですから、余程のことがない限り、そういったことをわざわざ伝えてくれないかと思えます。ただ、誰も今のところ私に「あの時の先生の一言のせいで～」とは言いには現れていないので、「余程のことはなかった」とは思いたいと思えます(?!)。

まさに言葉というのは善にも悪にも使える道具であり、人を癒すのも言葉であれば、人の心を踏みにじるのも言葉であります。言葉を使えるというのは人間にだけ与えられた特権ですが、それが特権である限り、私達はその特権を正しく使う責務があると痛感します。特に若者に影響を及ぼす立場にある者は、そのことを深く自覚し自戒しなければならないでしょう。

聖書には「最初に言葉があった」と記されています。また言葉には霊が宿るという「言霊の思想」は脈々と日本文化の中に伝えられています。

最後に私の好きな言葉を紹介しておきます。

「愛語よく回天の力あり」

日本の曹洞宗の始祖である道元禅師の言葉であります。

意味については「愛に満ちた言葉は天を変えるほどの力を持つ（いわんや人間をや）」というように私は解釈しています。

先ほども述べましたように、言葉には人を生かす力もあれば、人を殺す力もあります。私達、特に教育に携わる者は、そのことを十分自覚した上で、その時その時の生徒の状況に応じて、生徒を癒し、生徒を立ち直らせ、生徒を和ませ、生徒を奮い立たせ、生徒を慰め、生徒を生かし、生徒を輝かせる言葉を使っていかなければならないと痛感します。

2011.07.20 Wed

本日（7月20日）、大阪市内全域に暴風雨警報が発令されていたため、やむを得ず1学期の終業式を取りやめることにいたしました（7月中はずっと講習等が入っているため、延期することもできずに残念でした）。また12時からインターハイ出場の決まったサッカー部とハンドボール部の壮行会も100名程の参加人数で行う予定でしたが、これも本日10時の時点で暴風雨警報が解除されていなかったため、やむなく中止とさせていただきました。

そこで生徒への連絡は全て明日以降、講習等で生徒達が登校してきた折に、文書での通達となりました。今回は、異例のことですが、前もって、生徒諸君に配布する予定の「終業式の挨拶代わり」を下記に掲載させていただきます。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<2011年度 1学期末 学校長挨拶>

桃山学院中学校高等学校

校長 温井史朗

今日は、台風のため終業式を中止せざるをえませんでした。そこで急遽、皆さんに幸せになってもらう方法を教えたいと思います（?!）。と言っても、幸せになる方法というのはいろいろあって、人によっても違うだろうと思います。絵を描くことが何よりも好きな人は絵を描き続けられることで幸せな人生を送れるだろうし、働くのが好きな人は働くこと自体が幸せな人生を形作る大きな要素となるでしょう。ですから、これが「幸せを得る確実な方法」であるというのは余りないかも知れません。それに自分の幸せだけを求めて、幸せになっている人も少ないように思えます。

しかし、現実には、幸せな人もいれば不幸な人もいるわけでありまして。私自身も、長い間生きています中で、幸せな人も、不幸な人も、幸せでもなく不幸でもない人も、数多く見てきました。その中で、私は、幸せになってもらう方法は教えることができなくても、幸せな人に共通した特徴は教えることができると思います。まず、幸せな人の特徴は「明るい」ということです。すごく暗くて幸せイッパイという人は見たことはありません。幸せだから明るいということもあるかと思いますが、明るい人はやはり明るい運命を引き寄せるのではないかという気がします。次に「何事にも前向き」ということです。何事にも前向きな人は、エネルギーに溢れています。もっと正確にいうと、前向きになることによって、エネルギーが溢れてくるのでしょう。そもそも、人間の身体は前を見て前に向かって歩くようにできていることから分かるように、生物学的にも「前向きである」というのは本来のあり方なのでしょう。3つ目に「心が温かい」というこ

とです。いくら経済的に恵まれていても、冷酷な人で幸せな人というのも余り見たことはありません。つまり明るく前向きで温かい人に幸せな人が多いということです。ここで、「ワタシは暗い！」と嘆く諸君もいるかもしれませんが。しかし今は暗くても、余り心配することはありません。私なんか、自慢ではないけれど、周りにいるだけで、周りの人が暗くなるほど暗い少年でした。さらにそれほど前向きではなく、どちらかというと斜め向きでした。ただ、自分には「温かさ」だけはあったような気がします。少なくとも名前（姓）の半分にはありました（?!）。

それはさておき、（私の話が急に変わるように）人間は変わることができます。

自分は暗いと思っている人であっても、とりあえず前向きに何かを始めて下さい。とりあえず身体を動かすことから始めてください。未だ何も始めていない人なら、とりあえず今日からでも数学の宿題に手を付けるとか、簡単な英文読解からでも始めて下さい。人間は何かを「心改め決意も新たに始める」というのが極めて難しいので、「とりあえず何かを始める」ことから始めることをお勧めします。私の場合は、とりあえず大学に行くことを決め、とりあえず勉強を始めました。とりあえず始めた勉強も、慣れないせいか、最初はしんどいものでした。また勉強を始めてみて、自分の学力が全く足りないというのも痛感しました。しかし、好きでなかった勉強も、いざ始めてみると、いろいろ暗くアレコレ思い悩んでいるよりは、心がはるかに楽になりました。自分の中の何かが明るくはじけて、輝き出しました。それは努力する喜びでもあり、自分の成長を実感する喜びであったかもしれません。やはり人間にとって成長するというのは、進化という宇宙の法則にも合っているだけに、魂の部分での喜びがあるのかもしれません、ね。一日中、テレビやゲームをした後の、空しさを伴った楽しさとは全く異質の喜びです。そして、前向きに学んで成長を続けることを習慣にして下さい。

「習慣が変われば性格が変わり、性格が変われば運命が変わる」という言葉もあったように思います。

さて、また話は変わりますが、温かい気持ちになれないのは、ひとつには人の痛みが分からないからです。人の痛みが分からないのは想像力が足りないからです。たとえ想像力がなくても、自分が経験していれば、人の痛みは分かります。愛する家族を亡くした人は、同じように愛する家族を亡くした人の深い哀しみに共鳴することができるでしょう。

話はまたまた変わりますが、「優しさ」の優という字は、人を表す「イ」という字に「憂」という字からできていますね。人は憂いをもって初めて、優しさを持てるということなのでしょう（確か太宰治が言っていました）。

さて、それでは、哀しみや憂いの経験もなく、想像力もない人はどうすればいいのでしょうか。それは、読書をして下さい。想像力を養うための大きな方法は、読書です。さまざまな生き方やさまざまな見方、それにさまざまな感じ方を身に付けるのは読書が第一です。この夏、いろいろ本を読んで下さい。

最後にもうひとつ、幸せな人の特徴、それは「感謝の気持ち」を忘れない人です。このことについては次回また。

新学期には全員の元気な登校を待っています。

これもちまして、中止となった終業式の挨拶代わりとさせていただきます。

集中力をつけるには

2011.07.05 Tue

先週の木曜日、高校3年生の全員を対象に集会を開き、「モチベーションが絶対にアップする」という演題で私と進路指導部長が話をしました。その中で私は、「なぜ大学に行くのか?」という生徒諸君に対する問いかけから始め、「一番楽しい高3の過ごし方」と「一番しんどい高3の過ごし方」の話をしました。そして最後には「成功する意味」と「(何事においても)成功するための5つの具体的な方法」についても述べました。ところが、最後の集会で進路指導部長が「集中力の必要性」を述べたのを聞いて、私も言い忘れた大事なことを思い出しました。と云う事で、ここでは集中力ということについて述べてみます。結構、生徒諸君もこのブログを読んでいるようですので、云い忘れたことを高3生全員に語るつもりで述べてみます(高3生には改めてブログを読んでもくれるように云いますが)。

限られた時間の中で何事かを成し遂げるためには、進路指導部長も話の中で述べたように、集中力は必要不可欠なものであります。

<話は突然変わりますが、日露戦争に備えるため、ロシア革命支援工作の目的で北欧の国でボルシェビキ(ロシアの革命勢力)と接触していた明石元二郎という軍人は、相手との話に夢中になると、集中の余り我を忘れ、オシッコをしているのも忘れて服を濡らしたという逸話まで伝わっています。>

まさに何事を行う場合においても、集中力というのは事の成否に大きな違いを生みだします。それでは、その集中力を付けるにはどうすればいいかと言うことです。

答えは簡単です。集中力をつけるには「集中する」ことです。まさにLearn it by doing it.です。「テニスの上達を図るにはひたすらテニスをする」のと同じ理屈です。

本校では、自習ステージというものを設けており、中学と中高一貫コース、そしてS英数コースと英数コースの生徒は全員参加することになっています(国際コースと文理コースは希望者)。その中で、1年生の最初の頃は、生徒達もなかなか勉強に集中できず、非常に時間が長く感じられるようですが(そのせいか1年生の間は自習中よくトイレに立ったりします)、そのうち「時間が速く過ぎる」と感じてくる生徒が多くなってきます。それは彼らが「集中できるようになってきたから」です。最初は2, 3時間の内、10分ぐらいしか集中できなかったのが、やがて20分になり、30分となり、集中できる時間が増すとともに、集中の深度も増してくるのでしよう。そうなれば、高校で8時まで行われる自習ステージも苦にならなくなってくるばかりか、却って8時という中途半端な時間で勉強が中断される(集中が妨害される)のを嫌う生徒も出てくるわけです。また自習ステージにはチューターがついており、自習ステージの間、生徒達の机の間を歩いたりするのですが、「靴音がうるさいので歩きまわるのを止めてほしい」という要求も出てきます。しかし、そういう要求が出てくるといのは「まだまだ集中が本物ではない」と云えるかも知れません。靴音も気にならないぐらいに集中するようになってもらいたいと願います。

特に、逆説的ですが・・・勉強が好きでない生徒にこそ必要なのが集中力です。つまり、集中すれば「嫌いな勉強時間も速く過ぎ去る」からであります。嫌いな勉強ほど長くて辛く感じられるものはありません。だから勉強そのものを「集中して取り組む」か「自分から（勉強に飛び込んで）好きになるか」のどちらかです。しかし、そのうち2者択一が2者同時で一つになります。つまり「集中して好きになり、好きだからますます集中する」という状態です。そうなれば退屈で長い鉛の時間も、短く輝くプラチナの時間になります。勉学に対して生徒達の目が輝いてくる瞬間です。

まあ、何はともあれ、先ずはJust do it！です。本当に前回の講演で述べたように「（勉強を）やらなければならないと思いながら、不完全燃焼で毎日を過ごす一番しんどい高3時代」ではなく、「やらなければならないことを、しんどいながらも精一杯やりながら、一日一日を充実して過ごす一番楽しい高3時代」を送ってもらいたいと願っています。

改めて、受験を控えた高3生達にエールを送ります。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

ハンドボール部もインターハイ出場決定！

2011.06.17 Fri

本校サッカー部に引き続いて、ハンドボール部も平成23年度高校春季総合体育大会で優勝を果たし、見事インターハイへの出場を決めました。ということで15日に大阪市立中央体育館で行われた高校体育祭の開会式では、インターハイ出場を決めたハンドボール部、サッカー部を始め、好成績を出した軟式野球部、ソフトテニス部など合計6つのクラブの表彰状を演台の上で読み上げました。それらの部員に対しては全員から温かい声援の拍手がなされました。また、高校の体育祭には600名を超える保護者の方々が観戦に来られました。そして翌日には同じ中央体育館で中学の体育祭が行われました。これも昨年同様、非常に盛り上がった楽しい体育祭となりました。

昨年度から中学では3学年が揃った体育祭が行われていますが、それにつけても思いだすのは中学設立初年度（2008年度）の1期生3クラスだけの体育祭です。時間繋ぎのためにクイズ大会をしたことなども今では私達のいい思い出となっています。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

ありがとう、サッカー部の諸君！

2011.06.10 Fri

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

平成23年度大阪高校サッカー春季大会で、本校のサッカー部が見事並み居る強豪校を押さえ、初優勝を飾り、今期大阪ナンバー1の栄誉を獲得してくれました。その優勝を受けて、昨日のお昼休みにサッカー部員全員が顧問やコーチと共に、校長室を訪問してくれました。優勝旗と優勝カップと賞状を私に手渡してくれるためでした。2008年度の高校改革開始以来、勉強面だけでなく、ハンドボール部や水泳部等と共に、サッカー部も大きな力をつけてきています。

私が観戦した決勝戦では、スタンドに「日本一へ努力」と大きく書かれた横断幕が掲げられていました。それは私達が全校で取り組んでいるM1プロジェクト（「桃山を日本一の学校に」するプロジェクト）を受けて作成し、あらゆる試合で掲げてくれていた応援幕だと分かり、心底感激致しました。

いずれにせよ、下記の対戦表を見るにつけ、本当に優勝する難しさと素晴らしさを実感した次第であります。ありがとう、桃山学院高校サッカー部の諸君！

次は日本一へ向けてのキックオフです！！

<http://www.osaka-fa.jp/kotairen/image/H23/H23shunki.pdf>

2011.06.05 Sun

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

よくあることですが、子育てについて語ったりすると、そのことで不安になったり、しきりに反省されたりする保護者の方がおられます。例えば、この前のブログで述べたようなこと、つまり「兄弟を比較ばかりして育てると良い影響はない」というようなことを述べると、当然そのことを非常に反省される方がおられます。「そういえば、自分の家では兄弟の比較ばかりしていて、長男に劣等感を持たせてしまった」というように反省するわけでありませぬ。私自身、保護者の方がそういう気持ちになられるのは十分に理解できることではありますが、結論から言いますと、余り反省し過ぎるのもよくないかと思ひます。子育てに後戻りはできませんし、別の育て方をしていれば必ず良かったかという、こればかりは分かりませぬ。それに反省の省の字を分解すれば、「少な目」となり、反省は少な目がいいということも聞いたことがあります。是非、反省は少な目にしていただければと思ひます（笑）。やはり大切なのは「これから」ではないかと思ひます。

また何事も不安に思ひ過ぎたり、神経質になり過ぎるのもどうかと思ひます。親の不安や心配が過ぎると子供の気持ちにも余裕がなくなることがあります。よく教育現場では「困った親」という言葉を使ひますが、自分自身の長い経験の中で、（学校にとって）「困った親」というのは実は本人自らが（家庭内の問題などで）「困っておられる親」である場合も多いと感じました。中にはご夫婦で「困っておられる方」もおられました。その困っている理由はいろいろありますが、その困っている状況を抜け出すには、学校ができること、家庭と学校とが協力してできること、また家庭でしかできないこと、あるいは本人しかできないこと、いろいろあるかと思ひますが、要はその見極めが大事だと考えます。

あと、「教育の目的」ということについて考えます。その目的というのもいろいろあるでしょうが、やはり「自己解決能力の養成」というのも教育現場での大きな教育目標のひとつになると確信します。社会に出れば、親が代わって会社の問題を解決してくれるわけでもないし、「言いつけるべき先生」もいないわけでありませぬ。やはり生きていくには、社会に出る前に必要な強さを身につけさせなければならぬかと思ひます。但し、人間としては、強さだけで事足るわけではなく、優

しきや思いやりの気持ちも必要であります。強さばかりで他人の痛みを分からない人間に育っても困るわけであります。そういう子供は、ともすれば親が老いたときには、その老いた親の気持ちも理解できないことになるかも知れません。

そういう観点からも（私が今年の卒業式の式辞で引用させていただいた）下記の言葉は、人間の在り方について言い得て妙であると痛感します。

「強くなければ生きられない。優しくなければ生きている値打ちはない」（レイモンドチャンドラー）

子育て「していいこと、いけないこと」

2011.05.29 Sun

前回のブログ「叱られることの意義」について書いたところ、ある方からそのブログの中で言及した、「子育ての中での『1つのしてもいいこと』と『2つのしてはいけない』こと」について、具体的に聞かせて欲しいと言われました。当然、第1回PTA総会に出ておられた方は既に聞かれた内容ですが、もう一度、その私見を述べさせていただきます。

先ず「1つのしてもいいこと」ですが、それは、「子供の育て方で夫婦同士が子供の前で云い争う」という点です。まあ、夫婦同士の云い争いなどを子供の前でしないにこしたことはないのですが、そういった子供の育て方について子供の前で云い争うというのは、思うほどに悪影響を子供に与えることはないそうです。「お前が余りガミガミ云うから、こんな風になるんや」というのに対し、「あなたが甘やかすから、ダメなんですよ」というような言い合い・・・案外、子供は「まあ、自分のことでお父さんもお母さんも大変だ」（笑）と思い、親の関心が自分に向いており、それが口喧嘩まで発展し、そこに自分に対する愛情を感じたりするものかもしれません。ただし、それは「してもいい」ことで「したほうがいいこと」でも「すべきこと」ではありません（笑）。但し、以前書いたように（2010年3月7日付のブログ）、父親のいない所で父親の悪口を言ったりするのはタブーです。「あんたがこうなったのも父親に似たからやな！」とかを子供に訴えるのはいけません。例え、そうであっても・・・。

さて、その後「してはいけないこと」の話になりました。ひとつは「兄弟を比べてはいけないという話」です。もっと正確に云うと、露骨な比較を口に出してはいけないという話です。特に男の兄弟の場合は避けた方がいいわけでありませぬ。その中でも特に「兄と比べて弟を褒めたり、弟と比べて兄を貶す」場合には要注意です。と言うのも、男の兄弟は、いい意味でも悪い意味でも、ライバル関係にある場合があります。それがいいように作用すると、弟は兄を尊敬し、兄を見習いたいと思って頑張るといふことがあります。また兄と同じ分野では負けるので、違う分野や違う仕事で、兄との差をつけようとすることもあるかと思ひます。極端な例かも知れませんが、ひとつの例として、日露戦争で活躍した秋山兄弟があるかと思ひます。海軍にはいった秋山真之は陸軍にはいった兄（秋山好古）を慕い、兄の生き方に影響を受け、兄に負けない活躍を自分の持ち場で果たしました。しかしそれが悪い方向にいくと、兄弟の仲を冷たくするだけでなく、不要な劣等感を片方に負わせ、不健全な方向へと駆り立ててしまう場合もあるかと思ひます。

そしてもうひとつは「お前なんか生まれてこなかった方がいい」というような相手の存在を否定するような云い方も避けなければなりません。元気のある子供なら「何を云うんや、勝手に生んでから」などと口答えもするかもしれませんが、多感な子供や自己肯定感の希薄な子供は「そうか自分なんか生まれてこないほうがよかったんや」という不健全な思いを胸に刻んでしまうことがあるからです。あと「出ていけ」という言葉も避けるべき言葉です。やはり何があっても家というのは子供が安心して居られる唯一の場ですから、「出ていけ」という言葉は心理的にも子供

を追いやることになるかと思います。実際（私のかつての子育ての経験では）「出ていけ」と言いたくなる気持ちも充分理解できるのですが・・・。結局、出ていかれて心配するのも親であります。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

* 勘当じゃ 旅先では フグ食うな （どこかで読んだ川柳です。グーグルで調べても、内容が不確かなのか、どこで誰が読んだ川柳か分かりませんが、勘当してさえ、子供を心配する親心がよく表れていると思います）

* 「父のために証（アカシ）えず 母のために証えず」（これもどこかで聞いた文句です。ある夫婦が共に相手を罵り合うような夫婦喧嘩をして、村の長老か誰かに「どちらが悪いか」の判定を求めました。その時、どちらが悪いか判定するために、その子供が呼ばれ、「お父さんとお母さんのどちらが悪いのか」と聞かれた時に、子供が述べたという言葉です。子供にとっては、父も母も掛け替えのないものなのでしょう）

2011.05.22 Sun

5月7日に新年度初のPTA総会があり、新しい役員を選出がなされました。その際、恒例により、PTA会長の挨拶に引き続き校長の挨拶がありました。先ず私は何よりも旧役員に対する感謝の思いを述べさせてもらいました。そしてその後、少し時間をいただいて教育の話をしました。

教育の話といっても、述べたのは「叱られることの意義」と、あとは子育ての中で、1つの「してもいいこと」と2つの「してはいけない」ことでした。今日はこのブログで、その時に話をした「叱られることの意義」について語らせてもらいます。

実は5月に入ってから、私が教師になりたての頃に教えた生徒達（といっても今では全員オジさん）が集まった同窓会がありました。その中で、皆が話題にした話は、先生、つまり当時の私に叱られた話題でした。それは今回だけのことではなく、そういった「先生にこっぴどく叱られた話」は、何期の同窓会でも卒業生達が目を細めて懐かしく語る学生時代の思い出のひとつであります。「あの時、自分達は夜の10時まで教室に残された」とか、「あの時の先生は、マジで怖かった」という話や「まさか自宅にまでおしかけられて叱られるとは思っていなかった」などなど・・・。

そこで思うのは、「叱ってあげること」の意義です。その意義のひとつは、同窓会で話せる良き思い出を作ってやることでもあります・・・。と言うのは冗談ではありますが、「叱りつける」というのは教師が本気で「やってはいけないこと」を教え込む伝達方法のひとつであると考えています。例えば、イジメなど「これだけは理屈なしに許されない！！」という場合には、理屈抜きで叱りつけてもいいと思っています。身体全体で怒りを表現する、または身体全体で「本気で怒っている振りをする」ことが大事だと思っています（身体全体といっても、それは言葉と感情の一致した表現という意味であり、決して体罰という意味ではありません）。特にイジメや自殺は「理屈抜きでダメである」というメッセージを、担任や担当者が本気で生徒に伝えることが大切だと思っています。

あともうひとつ「叱ってあげること」の意義があります。それは、親からも教師からも、ましてや隣のおっちゃんからも、本気で叱られたことのない子供は、大人になってからリスクが発生するかも知れないからです。例えば、会社に入って仕事の失敗で上司からひどく叱られた場合、「ひどく叱られる」という免疫が付いていない分、叱られた内容よりも「ひどく叱られたこと」に対するショックが大き過ぎることが起こります。実際、叱りつけた次の日から来なくなる新入社員の話はよく聞くところです。

だからこそ、しっかりと本気で叱られる時期というのが必要かもしれません。但し、中には全く叱る必要のない子も確かにいますので、このブログを読んだからといって、無理に叱るようなことがありませんように・・・。また、ただ「叱る」ではだめであり、何で叱られたかを、叱った後からでもしっかりと伝えることも大切です。

またいちいち叱らずとも、「いつまでクヨクヨ悩んでいるんや。もうええかげんにして大学受験で頑張れ」というような一喝だけで、目を覚ましてくれる生徒もいます。実際、そういった担任（K教諭）からの一喝で第一志望の公立高校受験の失敗から見事立ち直った生徒もいたという話も先日聞いたばかりです。きっとその担任の一喝には生徒の立ち直りへの強い願いや愛情が込められていたのでしょう。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

「可愛いくば、五つ教えて三つ褒め、二つ叱ってよき人となせ」

二宮尊徳

風化させてはいけない

2011.05.15 Sun

先日、仙台市役所を通じて、本校宛てに仙台市民の方々の思いが込められた礼状が届きました。その礼状には「この震災が、仙台、東北、そして日本のさらなる発展のきっかけになることと信じて、日本を担う未来の子供たちのために市民一同前を向いて進んでまいります」というメッセージも記されていました。

早速、私はその礼状を社内メールで教職員に流すと同時に、この大震災を風化させてはいけないことを伝えました。その折、下記の映像を観てほしいということで、ユーチューブの映像も紹介しました。

その映像には日本で放映されなかった場面が映っています。バックミュージックについての是非の意見もあります。しかし、もしよろしければ、私のブログを読んでいただいている皆さんも(バックミュージックを聴きながら)観ていただきたいと思います。そして「風化させてはいけない何か」を感じ取ってもらえればと願います。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<http://www.youtube.com/watch?v=zrJje5pTZ0A>

2011.04.23 Sat

4月7日の夜、（やしき）たかじん氏に会う機会がありました。私が行ったとき、ちょうどレストランの外に椅子を出してワインを飲んでいました。その時、どういうわけか一つのバッグを大事に抱えており、レストラン内で行われているOSAKAあかるクラブで挨拶をするときも、それをしっかりと抱えておりました。実は、そのバッグには大震災救援の寄付として、人から預かった300万円と自分の分の1000万円が入っていたのでした。そしてその現金がたかじん氏らしく、わりと「無造作に」担当の人に寄付されました（その寄付の渡し方が粋でした）。たかじん氏も大震災の被災者の人達のために何ができるか思い悩んでいるようでした。そのひとつに、関西から発信をするTシャツなんか創れないかというようなことがありました。ただ、そのTシャツにプリントするフレーズが難しいのも確かで、単に関西弁で述べられるだけのフレーズなら価値がなく、関西弁の中にも自分達の応援の思いを伝えるようなフレーズはないのか、というようなことも「考えなあかん」ということでした。

それはさておき、私が翌日（4月8日）、本校の生徒2000名余りをグラウンドに集めて始業式を行うと告げた時、「みんなに言うといて」と託されたメッセージがあります。本校の生徒限定のように述べ伝えられた言葉ですが、とても素晴らしいメッセージなので、このブログでも紹介させてもらいます。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<桃山学院高校第66期生たかじん氏からのメッセージ>

「（東日本大震災で）生きとうても生きられへんだ若者がいるんや。津波に流された命があるんや。そのことを忘れんと、その分、しっかり生きんとあかん！！

<私の感想>

今回のメッセージには、犠牲となった若者達への哀悼と今生きている若者達への熱い思いがこもっている気がします。たかじん氏は歌手でありエンタテイナーであると共に、人の心に直接語りかけるような言葉をインスピレーションで紡ぎ出す詩人でもあるかと思いました。以前に聞いた「ハートの偏差値を高めよ」というたかじん氏からのメッセージと共に、今回も彼の口から思わず出てきた言葉を聞いて、私も胸にグツとくるものを感じました。早速、次の日の始業式で桃山の生徒全員に伝えさせてもらいました。

2011.04.15 Fri

本校の中高のホ ~~N~~ ~~A~~ ~~w~~ ~~e~~ ~~s~~ ~~-~~ ~~0~~ のT ~~2~~ ~~p~~ ~~i~~ ~~c~~ ~~k~~ 年度入
ました」という記事の中段に、「学校長式辞は
いました。ということで、入学式で述べた話を
ます。ただし今回の式辞も原稿を離れた話とな
ろがあればご容赦ください。

また、4月7日の午後から挙行された中学校の
なわれた高校の入学式で述べた内容とほぼ同じ
表現にはしましたが）、高校で述べた<内?容だけ
x m l : n a m e s p a c e p r e f i x = o n s =

< 入学式式辞概要抜粋 >

さて、本来なら、ここで私は高校生ガイドブ
式での式辞を述べさせてもらうつもりでありま
いたのですが、やはりどうしても諸君に訴えた
述べさせてもらいます。

既にご存じのとおり、今、日本は大変な困難
然襲った大震災の被害に茫然自失の状態にあり
た人達の悲しみはどれほどのものでありましよ
波で飲み込まれ、家も仕事も失った人達の絶望
また今なお、避難所で余震の恐怖や被爆の不安
っている人達の辛さはどれほどのものでありま
のはたくさんあります。そして人間は失って初
ったかということが分かるのです。ほんの一瞬
一瞬にして失われました。被災者に逢われた何
したが、それは家族を助けられなかった思いか
然の脅威の前で人間の無力さを痛感する悔しさ

しかし、地震や津波でも奪えなかったものが
素晴らしさであります。海外の新聞やテレビで
だけの混乱の中にあっても暴動や略奪が起こら

て伝えられています。それどころか人々が協力する人達の姿は海外のメディアでも称賛されているにありながらも、自分を投げうって被災者のための人達も、称賛に値するものであります。

しかし、そのような日本が今、この大震災に、大きな被害を被って、再起不能なほどのダメージそして今、私達は、被災した人々を救い、こころを癒すために何ができるかを考えなければなりません。当然、すぐになされる直接的な援助は本当になった次の日から、本校生徒や卒業生達は寄付集生徒達の思いを受けて、私達教員も3月20日、4月2日からは、やはり2台の車を連ねて1000の避難所への炊き出しに行っていました。

何度も言うようにそういった直接的な救援活動も思いますが、また政治によってできることも多く、しかしそれだけが私達にできることではありません。このような困難の中にある被災者だけのためだけでなければなりません。

実際に諸君達がしなければならぬことがあります。それは教えることでもあります。もっと言うなら、教育の力を持った若者を育てることが私達に課せられたと同時に日本の将来を背負って立つにふさわしい君の諸君らの使命でもあります。

様々な学びによって自分を高めることが、日々でもあります。そして私は、日本を立ち直らせながらもさらにもっとより良き国として日本を創平和に繋がることであると確信しています。

修身齐家治国平天下という言葉があります。平和にするためには、まず自分の国を安定させない自分の家庭を安らかな場にしなければならぬ自身を立派に確立するようにならなければならぬどうか、日本の将来のためにも、また震災に

は世界の平和や人類のためにも、そして家族や
て下さい。立派に成長して、大きな働きがなせ
な働きというのは何も社会的に、あるいは政治
ありません。医療なら医療の世界で、経済なら
ミの世界で、行政なら行政の世界で、教育なら
界で、人々に貢献でき、日本や人類の未来に貢
いうことでもあります。それには高校生ガイドブ
学力と目に見える実力とともに、責任感
を身につけて下さい。そしてそのためには、毎
さい。

まだまだ、日本は、あるいは世界は今後も大
。しかし、それらの困難を乗り越えていく強さ
を身につけて下さい。

< 以下省略 >

2011.03.23 Wed

3月19日の終業式では、今回起こった大震災の話を中心にさせていただきましたが、同時に本校の救援隊が現地に出発するのに必要な救援物資を保護者宛てのプリントで要望させていただきました。

その結果、何日か前に中学校の保護者の方々に一斉メールでお願いしていた物資ともども、たくさんの救援物資が集まりました。

特に現地からの要請でお願いしてあった灯油ポリ容器などは車に積みきれないほど集まりました。中には灯油を一杯につめて持ってきて下さる方々もいました。そのお陰で、1000リットルの灯油を現地に届けることができました。その他、医薬品や下着やレトルト食品等も車に積めるだけ詰め込んで、20日の午後2時、警察からもらった緊急車両証をはった車2台（ハイエース）が、H教諭によるお祈りの後、桃山学院中高を出発しました。

今回の初動救援活動は、本当に多くの方々に支えられて始めることができました。震災後すぐに活動費として「少くない額」を寄付して下さった「私がよく行く焼き鳥屋（南蛮亭）のおやじさん」や、同じく「少くない額」を本校スタッフに手渡して名前も告げずに去られた保護者の方、また桃山の生徒と分かり喜んで生徒達の募金箱にお金を入れたくださった通勤者の方々、灯油を届けて下さった方々、食糧を届けて下さった方々、医薬品を届けて下さった方々、下着や防寒着などの衣類を届けて下さった方々、仕分けを手伝ってくれた方々、何かできることはありませんかと申し出て下さった方々、また車を運転して現地まで届ける役を引き受けてくれた教員、また後方部隊としての役割を進んで引き受けてくれた教職員、「普段、奥さんからもらうお小遣いの額が少ない」と不平を言いながらも目を見張るような額を寄付してくれた教員、またわざわざ学校までお金を届けに来てくれた卒業生など・・・全てが嬉しい限りでした。桃山の底力を見る思いでした。中には「このような学校（?!）に子供を入れることができ、本当によかったと思っています」という有難い言葉を私にかけて下さる保護者もおられました。

そして21日には現地の災害対策本部に到着した教員からの報告がはいりました。全て、心から喜んで受け取ってもらえたということ、特に灯油については殆ど残っていない状態であったので、本校が持ち込んだ1000リットルの灯油は実に喜ばれたそうです。また他の救援物資もすぐに必要とされる避難所に届けられるということでした。

そして4名の教員が帰りの車で自分たちが食べるために取っておいたパンやミカンまで、対策本部の人に「これらはいかかですか?」と聞くと、すぐに「置いていって下さい」と言われ、現地での物資の不足が如何に深刻であるかということも分かったとのことでした。また彼らは現地で、津波に破壊された地域の様子も直接目にして、まさに言葉を失ったようであります。

今日、甲子園で高校野球の開会式があり、その開会宣言で選手代表が力強い声で「がんばろう、日本!!」と宣誓しました。本当にその通りだと思います。被災者の人達が少しでも早く立ち直ってくれることを祈ります。しかし失った家屋は建て替えられても、失った家族はもどらな

いという現実・・・神戸大震災で愛する家族を失った人達の多くは未だその傷跡を引きずったままであります。

それでも私達は頑張らなければなりません。「神様はひとつの扉を閉じたとき、また別の扉を開いて下さる」という言葉を信じたいと思います。

今回の大震災で松山千春さんのメッセージも印象的でした。「知恵がある奴は知恵を出そう。力がある奴は力を出そう。金がある奴は金を出そう。『自分には何も出せないっていう奴は元気を出せ!』」

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />



「現地に届けられた1000リットルの思い」



「被災地に入って茫然とするF教諭」

2011.03.13 Sun

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

まさに茫然自失の災禍です。

3月11日、私は午後2時から始まった大阪私学の校長会へ出席していました。そして3時少し前、会場となっている大阪私学会館が揺れ始めました。私達の会議は3階で行われていましたが、建物全体が揺れるような大きな揺れでした。私は机の下に頭だけでも隠すように他の校長先生達に指示もしたかったのですが、議長でもない私がひとりパニックになっているように思われるのも厭だったので、皆さんと一緒に静かに揺れが収まるのを待っていました。（このことは私の後の反省材料となり、今後の本校での避難訓練に生かすつもりです）。

そして地震が収まってすぐに携帯でニュースを見ると、宮城で震度7の地震発生と表示されていました。私はそのことを隣に座っておられた他校の校長に話すと、その校長は自分のお子さんが仙台におられるということでした。当然すぐにその場で電話をかけられたのですが、電話がつながらず非常に不安そうにしておられました。

それから私もすぐに学校に電話をして（幸いにも私からの電話はつながって）教頭や事務長に生徒の安否確認をし、何事もなかったということで一安心しました。

ただ、学校や生徒、あるいは私達の住んでいる所には「何事もなかった」というだけで、続々と伝えられるニュースは筆舌に尽くしがたい悲惨なものでした。

私は心の中で「どうかこれ以上、被災者の数が増えませんか、被害が拡大しませんように」と繰り返し祈りながらも、阪神大地震の経験から、とても今報道されているような被害では済まないという悲壮な思いもしていました。

その時以来、私の頭に繰り返し浮かんでくるフレーズがあり、今も被災地の状態を映した映像を観るたびに思い起こされるフレーズがあります。それは「天地に仁なし、万物を以て芻狗（すうく）と為す」という老子が述べた恐ろしいフレーズです。つまり「大自然には慈愛などというものはなく、全てのものを犬のワラ人形のように無慈悲に扱う」という意味のフレーズです。

今はまさに「天地に仁なし」という思いです。神にも「何でなんですか」と問いかけてしまいます。摂理と言われても、試練と思っても、私達の知覚のレベルでは到底納得できることではありません・・・。

そうかと云って、ただ大自然から容赦なく与えられた過酷な運命を嘆いていてばかり

もおれません。被災に遭われた人達をサポートするために、皆がなんとか力を合わせなければならない時でもあります。そして日本に住む者たちがひとつになって、終戦以来の国難ともいえる今回の惨事を克服していかなければなりません。

本当に微力ですが、桃山でも早速、本校ボランティア活動の中心となっているSBS（スクール・バイ・スクール）とBSA（The brotherhood of St.Andew）とが協力して、明日14日から募金活動を始めることになっています。生徒からの申し出を嬉しく、誇りに思っています。SBSとBSAは既に四川大地震やミャンマー大洪水のときに手を組んで募金活動を行っているので心強い限りです。また、昨日は、阪神大震災のときに協力頂いた方からの申し出や、国際コースの同窓会から募金の申し出もなされています。

さらに明日は、阪神大震災での過酷な救援活動を経験している教員達が集まって、「今、何ができるか」を協議することになっています。学校側としても、そういった活動を、できる限りのバックアップしていきたいと考えています。

<心に刻まれる中学第1期生卒業式>

昨日（12日）、桃山学院中学校の第1期生の卒業式が行われました。

きっとこの卒業式は、全ての者にとって心に刻まれる卒業式となると思います。ひとつには第1期生の卒業式であるということ、そしてもうひとつは東日本大震災の翌日ということで・・・。

本来ならば、卒業式で校長は式次第に書かれてある内容の式辞を読み上げることになっていますが、私はそこに書かれてある式辞は各自読んでおくようにと述べ、思いつくままに、前日の大惨事を受けての話とさせてもらいました。

私自身、予定していた話の内容ではなく、思いのままに述べた内容なので、何を述べたのか余り覚えていませんが、主に次のようなことを述べたように思います。

「惨事というものは起こらないにこしたことはないけれど、どうしても起こってしまう。それに対して、人間は無力である。そして若いからといって、そういった惨事で命を落とすこともある。また大切な家族を失ってしまうこともある。そういった中で、やはり「一日一日を充実させて生きていくことが何よりも大切である」ということ、さらに私自身が学生時代に死にかけて時に思った内容、つまり「もっと親孝行しておきたかった」とか「世の中に少しでも貢献したかった」という後悔の念、さらには「日ごろから悔いのない生き方をしておくことの必要性」などを述べました。そして、最後に私が好きなマルチン・ルターの言葉（壇上で私はニュートンの言葉として間違って紹介してしまったかもしれませんが、申し訳ありません）と二宮尊徳の言葉をもって締めくくりました。

「もし明日世界が滅びるとしても、私は今日リンゴの木を植える」（マルチン・ルター）

「この秋は 雨か嵐か知らねども 今日の勤めに 田草とるなり」（二宮尊徳）

＜被災地の皆様に＞

被災地の皆さん、衷心よりお見舞い申し上げます。そして今後は、皆様の困難や困窮が少しでも軽減され、甚大な被害と喪失の苦しみから立ち直っていただけますよう、本校のチャプレンを始めとする教職員一同、心よりお祈り申し上げます。

2011.02.20 Sun

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

昨日、高校の卒業式が、学院創立125周年を記念して2年前に建てられた記念体育館（ダビデジム）で挙行されました。卒業生や保護者の方々を合わせて、千数百名近くになる人数でしたが、最初から最後まで、厳かな中にも卒業式らしい静謐な慶びに溢れた雰囲気の中での式となりました。それにしても、もう何年も前から定着していることですが、各担任がひとりひとりの生徒達の名前を呼び、それに合わせてひとりひとりが返事をして起立していく式の進め方は、時間はかかるけれども、本人にとっても保護者の方にとっても、また教員達にとっても、「大切な生徒ひとりひとりの新たな旅立ち」を心に刻むのに相応しい進め方であると実感しました。実際は、その生徒ひとりひとりに校長から直接卒業証書を手渡すのが「卒業式の最適なあり方」であるとは思いますが、残念なことに、500名を超える生徒達がいる中での個々への卒業証書の手渡しは、おそらくそれだけでも数時間がかかってしまうことになるので、断念せざるを得ない状況であります。

但し、1学年3クラスの中学校の卒業式では、全員に私からの卒業証書の手渡しを行いたいと思っています。

また、今回の卒業式では、正式な卒業式が終わってから「2部」という形での集いがなされました。そこでは、学年団のひとりであるW教諭が撮影・編集した学園生活のビデオが上映されたり、担任団が舞台上に上がったりして、和やかな雰囲気の中で大いに盛り上がりました。また強く感銘を受けたのは、F学年主任が生徒全員を起立させて、舞台の担任団への一礼のあと、全員うしろの席にいる保護者の方に向かせ、感謝を込めた一礼をさせたことでした。「一礼をさせた」と言えば、何か強制的な感じがして、桃山に相応しくないように思われる方がいるかもしれませんが、そう思う人は「きっと桃山の素人」（笑）ではないかと思っています。第一、保護者の方への感謝は、生徒達が何よりも表わしたかったことではないかと感じています。私達も「感謝する心」というものを大切にしています。そして「気持ちを形で表わすことの大切さ」も、本校生徒達は日々の学校生活の中で身につけていっていることを実感させられる場面も多くあります。それが証拠（?!）に、昨日も、担任だけでなく、U進路指導部長さえ、「自分は担任でも教科担当者でもないのに、何人かの生徒達から花束や寄せ書きをもらい、感謝してもらった」と実に嬉しそうに私に告げました。毎年、そういうことは結構よく見られる光景で、退職する先生の最後の授業には、別に誰かが指示したわけではないのに、花束が贈られたりもします。

それにしても（突然の話題転換で申し訳ありませんが）「先生というのは実によく喋る！！」

保護者の皆さんが開催して下さった「謝恩会」が卒業式の終了後に市内のホテルで行われました。その謝恩会では、各担任（副担任を含め）がステージに上がって、何か一言を述べるというアレンジがなされていました。そして、司会者の方からは、一言だけ、つまり時間の関係もあり、

ひとり1分以内で何か述べて欲しいと申し告げられていました。ところが、卒業式で高揚したせいか、何とほぼ全員が、喋ること喋ること……。

そしてその内容の殆どに共通したのは、異口同音で「自分の担任した生徒達や教えた生徒達がなんと素晴らしかったか」という生徒自慢であったのではないかと思います。

でも考えてみれば、そこまでの熱い思いや愛情を生徒達に持てる教師というのは、「先生になって本当によかった先生」であり、そういう教師達に受け持ってもらった生徒達にとっても、それは幸せなことではなかったかと思えます。

しかし、その中にあっても、きっちり1分以内で収めた教師がいました。語り尽くせぬ熱い思いを持ちながら、1分以内の寸言で持ち時間を守った姿勢、……私自身が率先して見習わなければならない姿勢だと感じました。

今回、卒業される生徒、そして保護者の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

またPTA活動を通じて、さまざまな面で本校の教育活動を支えて下さった皆さん、誠にありがとうございました。この場を借りまして、重ねてお礼申し上げます。

第30回大阪国際女子マラソン

2011.01.30 Sun

本校の前の「あびこ筋」が今年から大阪国際女子マラソンのコースとなりました。主催者側からの協力依頼についても快諾し、トイレ等での便宜を図らせていただきました。またランナー達への応援の意味を込めて、本校の吹奏楽部が道路に面した本校敷地内で力強い演奏を奏でました。実際、本校の守衛さんも、選手達が通過するときの吹奏楽の演奏を聞いて、何かグツと胸に込み上げてくるものがあったということでした。（残念ながら私は校長室で新入生を迎えるに当たっての協議のため、一番いい所は見逃してしまいました）。

とはいえ、私自身も応援の意味を込めて、前もって30カ国の国旗がはためく万国旗（15メートルほどの長さ）を2セット購入し、この日に備えていました。そして昨日、その万国旗のロープの一端を2階にある中学棟の教室の窓の手すりから垂らし、もう一方の端を1階のフェンスのところに結わきつけました。中学の教室に万国旗を持っていくと、何名かの中学生達が「わー、校長！」と声を掛けてくれて、早束手伝ってくれました。またその万国旗には、優勝候補の一人と目されていた外国人選手の国旗（ルーマニアの国旗）がないので、別にその国旗を作って窓に貼ったりもしました。ある教員がそういう作業をしている私の姿を見て、「校長がそんなことしなくても、言ってくればやりますのに」と申し出てくれましたが、実は・・・こういうことが好きなんです！親切な申し出にはとても感謝しますが、ひとり校長室に居てじっと書類仕事をしているより、例え寒風の中でも身体を動かして旗を垂らしたりしている方が好きな訳であります。

さて、そういった作業をしていたのは昨日の3時過ぎでしたが、何名かの人達が本校の前の歩道をマスクやマフラーをして通り過ぎていきました。足早に通っていく人もいれば、周りの風景を見ながらゆっくりと歩いているランナーとおぼしき人たちもいました。おそらく本日の大会に備えた下見ではないかと思われれます。知らない人にでもよく声をかけることが多い私ですが、今回はさすがにそういったランナーとおぼしき人たちに「お声がけ」をするのは遠慮いたしました。

とにかく、無事に大阪国際女子マラソンが終ってほっとしています。何よりも2階から吊るした旗のロープが切れて、ファーストランナーの前を遮り、それが選手のペースを乱すということが全くの杞憂であってホッとしています。実は、昨夜眠ろうとしていると、急にそのことが気になって気になって仕方なく、今日は登校するなり点検作業を行ない、念には念をとということで、本日も2重3重の補強を行なったりしました。ワレながらケツコウ神経質であります。

それはさておき、来年も大阪国際女子マラソンが素晴らし大会になることを願っています。

赤羽有紀子選手、悲願のマラソン初優勝、おめでとうございます。これからも益々頑張ってください。

さて、今から万国旗を降ろしに行ってみます。

国際教育が報われる？！

2011.01.26 Wed

橋下知事が大阪のTOEFL上位50校に計5億円の予算を配布する方針を府教委に示しているという記事が新聞に載りました。それは、私立も巻き込んだ英語力の競争となるもので、50校の中でも上位得点校ほど、手厚い分配となるということです。目的は「国際社会で活躍できる人材育成のため」ということであり、そのことについては実に嬉しく思っています。

理由は2つあります。

まずひとつの理由は、本校は国際教育の実践において「何年にもわたって実に苦勞してきている」からであります。今から39年前（1972年）に本校はいち早く「若者達の国際教育の必要性」を痛感し、米国の高校と姉妹校提携を結び、交換留学生制度を確立し、毎年3～5名の留学生を米国に送り出し、本校も米国人留学生達を受け入れてきました。まあ、一口に交換留学といっても、渡米や来日のための煩雑な事務手続き、生徒を送り出す前の英会話特訓や来日留学生達のためのホストファミリーの募集、また来日生徒達のための日本史や日本語の授業など、実に大変な手間や経費がかかる仕事であります。そういった手間や苦勞にも関わらず、本校が、米国との交換留学制度を維持したまま、2001年からの国際コース創設を決意したのは、ひとえに「留学体験は若者の成長に大きな効果を持つ」ということを実感してきたからであります。国際コースではクラス単位でカナダへの留学を実施するとともに、2年前からはカナダからの留学生達も迎えています。またいち早く、他コースの生徒達のための短期英語研修制度も実施してまいりました。

さらにアジアにも目を向けるために、フィリピンの寒村に村人と協力して学校を建てる運動であるスクール・バイ・スクールも生徒を中心に行われてまいりました。また本校では、韓国のハンドボールの強豪校との姉妹校提携を結び、毎年、それぞれの場でハンドボールの試合を通じた交流を10年以上前から続けています。

そういった表面的には非常に華やかに見える「国際教育」や「国際交流」というものも、実際にはそれを支える教員達の地道な努力や保護者の方々の協力（特にホストファミリー）があって成り立つものであります。そしてそういった国際教育というものが、例え「TOEFLでの得点」という視点であっても、大きく評価されることは誠に嬉しいことでもあります。実際、英語については「国際教育の結果としての英語力」ということで、本校生徒達は大いにその「本物の英語力」を発揮してくれると確信しています。

そしてもうひとつの理由として、最近ますます顕著になってきている日本の若者達の内向き志向であります。そのことは米国への留学生達の数にも顕著に表れています。実際、日本人の米国留学者数の減少傾向に歯止めがかからず、今では台湾にも抜かれ世界で第6位に落ちました（ちなみに第1位は中国）。今後、日本が国際社会で生き残るためには、海外へ活路を見出す元気な若者や、タフな外国人達とも対等に渡り合える能力（語学力を含む）を備えた若者が必要であります。日本を活性化するには、何よりもこれからの日本を背負っていく若者達を元気にしなければならないと思っています。（話は少し逸れますが、日本を元気にするには、まずは地元の大阪

からということで、私の卒業生であるF氏もタカジンさんからの直接のミッションを受けて、「OSAKAあかるクラブ」の活動に昼夜にわたって奮闘努力を続けています。昨日の同窓会にも、後輩のI君を引き連れ、「OSAKAあかるクラブ」への参加を呼び掛けに来ていました。）

なにはともあれ、若者達を元気にするためには、できるだけ若い時期にココロザシや将来の方向性を持たせ、実力と自信を身に付けさせることではないかと思っています。そして本物の英語力というのは、当然全てではないにしても、そういった自信をつけさせる大きな要素となるのは間違いありません。また海外での様々な体験や人との出会いも、若者達の視野を大きく広げ、成長へのモチベーションを高めるものであると確信しています。

昔、「若者よ、書を捨てて街に出よう」という素敵なタイトルの本が流行りました。私からは、「若者よ、英語を話して海外に出よう」（笑）という檄を送りたいと思います。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

驚愕（共学）の事実

2011.01.23 Sun

昨日（1月22日）、中高同窓会の役員新年互礼会が多くの卒業生を集めて盛大に行われました。今までと違って、女子の卒業生達の姿も何名か交じるようになってきて、長年にわたり男子校の伝統の中で青春を過ごした年配のOB達にとっては、女子の卒業生がいるという驚愕（共学？）の事実直面するひと時ともなったのではないかと思います。また司会は、第一部では「華の73期生」のM.田中氏、第二部では毎年名古屋から駆けつけてくれる名物司会者のY.田中氏（同じく73期）が担当され、その闊達な舌裁きには毎度のことながら感心させられました。また、各自が受付で貰った△クジに書かれた数字の発表による賞品ゲットも、賞品そのものはささやかながらも、「おっちゃん達」までが自分の番号が当たらないかと気を揉み、また自分の番号が当たり番号であると分かった時の大喜びする様は、まさに全員が高校生に戻ったかのようでした。 <?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

またいろいろな席で名刺交換が行われているのを見るにつけ、同窓会は非常に自然なコネクション作りや就活の場でもあると実感しました。今後、女子の卒業生が増えるにつけ、もしかすると婚活の場にだってなるのではないかと、と思っています。

会の最後には、昔の校歌（昭和9年～昭和48年）と今の校歌（昭和49年以後）の2つの校歌を時代別に分れて皆で高らかに歌い、楽しい会を終了しました。

「同窓会の集いが、こんな楽しいと分かれば、もっと早くから役員になっていればよかった」という声や「同窓会の総会が待ち遠しい」という声も聞き、私も来年度のクラブOB・OG連合会や同窓会総会を心待ちにしています。

2011.01.15 Sat

今日はセンター試験の第一日目であり、また本校中学校入試の第一日目（A日程）でもあります。

ということで、センター試験の会場に激励に行っている先生方を除く多くの教員が、早朝から中学棟に集まり、最後の中学入試に向けての顔合わせと打ち合わせを行いました。

校門前には早くから塾の先生方も熱い思いで受験生達の激励に駆けつけておられます。

また2時間目の算数の試験が始まって、保護者の方々の待機場所である図書館に行ってみますと、それこそ水を打ったような静けさの中で、各自、机の前やソファーに座って本校図書館にある本や雑誌に目を通しながら、子供達の受験が終るのを待っておられました。祈るような気持ちで待っておられるのでしょうか、非常に厳粛な感じがいたしました。

さて「祈る」と言えば、まさに先週の13日（木）には、昨年と同様に「大学入試センター試験受験者のための祈り」の集会を講堂で高3受験生を集めて行いました。

私からは今年も昨年同様の事を述べさせてもらいました。実際、私は同じ話をするのは余り好きではないのです（と言いながら同じ話を知らず知らずに何度もしてしまいます・・・）が、去年その同じ集会でした話が「とても役立った！」という賛辞（お世辞）を今年の3年生からもらっていますので、同じ内容の話をさせてもらいました。

つまり、「受験に当たってのフィジカル面での対応、メンタル面での心構え、スピリチュアル面での実践」というものでした。詳しく聞きたい方は是非、本校に入学して下さい（笑）。

それはさておき、やはり今回の集会でも際立ってよかったのは、現場に立って今の学年の生徒達を一番よく把握している各（副）担任からの一言メッセージであり、それに進路指導部長（元は大学応援団長）の声を張り上げての叱咤激励、最後の学年主任の挨拶、そして何名かの教員が人知れずに撮っていたビデオ放映でした。全員が、音楽とともに映し出される高校生活での各場面を鑑賞し、感傷にふけりながらも、完勝を心に誓い合うひと時でした（下手なシャレですみません）。まさに奇しくも何名かの担任が自信を持って伝えた「諸君の日頃の努力は必ず実を結ぶ」というメッセージや「目標はセンターではない。センターが良かったからといって安心することも、悪かったといって悲観するのも禁物、次に向かって最後まで悔いのない勉強を続けることが大切である」という趣旨の言葉は実に印象的で、きっと生徒達全ての胸に落ち着いたと思います。

ということで中学受験、大学受験の諸君、また来月10日に行なわれる高校受験の諸君、全ての、そして一人ひとりの、健闘と幸運を心からお祈りいたします！

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

ドクターミスミスの答え

2011.01.12 Wed

前回のブログの続きとなりますが、生徒達に少し時間を与えて考えてもらったドクターミスミスの問題の答えは、「ドクターミスミスは亡くなった父親の奥さんで、その子供の母親です。要するにドクターミスミスは女性である」というものです。

(さて、そのあと、終業式の挨拶として以下のように述べました)

私がこの問題を聞いたとき、「ドクターミスミスが男であると」という思い込みから抜け出ることができませんでした。諸君の時代は、私達が育った時代とは違うので、それほど男女の役割についての思い込みというのは強くないかもしれませんが、私達の時代には、まだまだ女性の社会進出、とくに専門的な知識や技能を必要とする職種への進出は多くありませんでした。それだけに、そういった時代に育った私なんかは思い込みが強く、「ドクターミスミスは腕利きの外科医で。仕事中は、常に冷静沈着、大胆かつ慎重で」と述べられた段階で、私の頭の中には白衣を着てメスを持つ男性外科医のイメージが固定化されて、その固定化されたイメージから抜け出た発想が全くできませんでした。

そしてこの話の答えを知った時、私はなるほどと思うと同時に、固定観念や先入観というものが、どれほど自由な発想や思考の広がり制限し、狭めているかを思い知らされました。

人間は、物事を客観的に観ているようでいながらも、実際は固定観念や先入観にとらえられている点が多いと思います。そして、注意しなければいけないのは、そういった固定観念や先入観というものは、物事を客観的に判断したり、新しいものを生み出したりする上で、大きなマイナス要素となるだけでなく、場合によってはとても危険な場合もあるということです。

例えば、今はどうか知りませんが、何年か前まで、アメリカのテレビの娯楽番組で登場してくる日本人の典型的な姿とういのは、たいてい「眼鏡をかけて、ニヤニヤ笑いながら、カメラを肩からぶらさげ、すぐにお辞儀ばかりをする」というものです。そしてそれを見て、アメリカの人たちは面白可笑しく笑うのです。さてどうでしょうか、日本の人たちはみんな眼鏡をかけているわけではないし、カメラをぶらさげているわけではありません。また意味もないのにいつもニヤニヤ笑っているわけではありません。しかし、アメリカの娯楽番組では、往々にして日本人がそのような姿に描かれており、日本に来たことのないアメリカ人達の中には、それが日本人であるというふうに思いこんでいる人がいるかもしれません。まあ、この程度の思い込みなら別に大したことはないかもしれませんが、それが行き過ぎると、民族的な蔑視につながったり、差別を生んだりする危険なものになりかねません。

さて思い込みや先入観が危険なことについては、この一例だけで済ましたいと思いますが、次には、そういった思い込みや先入観が、斬新な発明や発見を阻害するだけでなく、企業にとっても大きな不利益につながったという話も多くあります。それはアイポッドです。実は、アイポッドがアメリカで発売される前、世の中はソニーのウォークマンが席卷していました。ところが多くの音楽をパソコンから取り込めるアイポッドが出現するやいなや、アメリカのアップル社のア

iPodに見事にソニーは敗れてしまい、携帯音楽機器ナンバーワンの地位を譲らなければなりません。ソニーにとって失われた数年間という失墜の時が続くわけですが、実はソニーも既に、iPodのようなパソコンを通じて音楽をダウンロードできる仕組みを考えていたわけです。しかし、ソニーの首脳陣には、まずはCDの後にはMDプレーヤーがもっと普及するはずであるという思い込みや「音楽配信に伴う著作権の問題の解決は非常に困難である」という先入観があったのではないかとされています。ところが、実際は、アップル社は著作権などの問題を思い切ったやり方でクリアし、iPodの販売に踏み切ったと言われています。それ以外にでも、日本人が発明しながらでも、なかなか既存、すなわち今まであったものにこだわる日本の狭い枠組みの中では受け入れてもらえず、海外に流出したものも多くあります。日本の国にとっては非常に残念なことであります。（最近のニュースでは、ソニーのウォークマンがiPodの販売数を上回ったとあり、同慶の至りです）

どうか諸君には、既に文系であろうと理系であろうと、あるいは文系に進もうと理系に進もうと、桃山での勉強や多くの分野の読書や仲間との交流を通じて、客観的に物事を見て、冷静に物事を判断する態度、そしてそれと同時に思い込みや先入観に囚われず、友人や人と接したり、自由に物事を発想する力などを養ってもらいたいと切に願っています。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

以上で、私の年頭の挨拶にかえさせていただきます。

ドクター・スミスの問題

2011.01.10 Mon

1月8日の3学期始業式の挨拶では、冒頭でドクター・スミスの話をさせていただきました。

<始業式挨拶>

皆さんおはようございます。学校長の温井です。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

皆さん、冬休みやお正月はどうでしたか？ 楽しいお正月、そして充実した冬休みを送れたでしょうか。

さて今日は、この機会を利用して、諸君達にひとつのことを伝えたいと思います。そのためにはどうか今からする話をよく聞いて、私からの質問の答えを考えて下さい。既に知っている諸君もいるかと思いますが、その諸君は答えをもらさないようにして下さい。

今からする話はドクター・スミスという外科医の話です。

ドクター・スミスは、アメリカのコロラド州立病院に勤務する腕利きの外科医です。工作中は、常に冷静沈着、大胆かつ慎重で、難しい手術も手掛けると同時に、地元の市長からも、とても厚い信頼を得ています。

そのドクター・スミスが夜勤をしていたある日、緊急外来の電話が鳴りました。交通事故のケガ人を救急車で運び込むので、緊急手術をしてほしいという電話です。父親が息子と一緒にドライブ中、ハンドル操作を誤り谷へ転落、車は大破、父親は即死、子どもは重体だと救急隊員は告げました。

20分後、重体の子どもが病院に運び込まれてきました。その顔を見て、ドクター・スミスはアッと驚き、茫然自失、つまり頭の中が真っ白になりました。その子は、ドクター・スミスの息子だったのです。

さて、問題は交通事故にあったその父と子とドクター・スミスはどんな関係かということです。その関係を答えて下さい。

つまり事故に遭い、父親は即死であったが、救急車で運ばれてきた子を見て、ドクター・スミスは、その子供が自分の息子であるので驚いたというものです。そしてその事故に遭った父と子とドクター・スミスとの関係はどんなものですか、というものです。どうですか、皆さん、分かりましたか。20秒待ちます。答えが分かれば、本当にどうっていいことのない問題です。

<さて皆さんも考えて下さい>

*「答」と「始業式での挨拶」の続きは次回のブログにて

2011.01.01 Sat

皆さん、明けましておめでとうございます。 <?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

元旦というものは不思議なもので、毎月毎月、月の初めの1日というのがありますが、年の初めの1日だけは気持ちまでもが全く違ったものと感じます。なるほど今年がどのような年になるかは誰も予想がつきませんが、それでも新年の始まりの日ということで心までがリセットされるかのように感じます。

先ほど年賀状を受け取りに学校に行ってきましたが、閑散としたキャンパスに吹く風にも新たな息吹を感じ、校舎にも思わず「今年も宜しく」と挨拶をしてまいりました（笑）。

さて「今年がどのような年になるかは予想がつかないもの」と述べましたが、私の好きな一首に「明日の日は 雨か嵐か 知らねども 今日の務めに 田草摘むなり」（原典は二宮尊徳の「この秋は 雨か嵐か知らねども 今日のとつめに田の草を取る」）というのがあります。また「明日、世界が滅びるにしても私はリンゴの種を植える」（マルチンルター）というのもあります。実際、子供たちのためにも世界が滅びるようなことがあってはいけませんし、滅びないように祈りもしますし、当然滅びないためにどうすればいいかと、真剣に考え具体的に行動することは何にもまして不可欠なことであるとも考えています。確かに、昔、ノストラダムスの予言等にごとよせて、「世界が滅びる」ということを喧伝する番組や人々がいましたが、そういった若者の心まで暗くする滅亡論に私達（特に教育に関わる者）は決して与してはなりません。例え万一、（世界の滅亡とまでは言わなくても、日本の社会システムや経済が）崩壊しそうな怖れがあっても、みんなで希望を共有しながら叡智を結集し、「滅亡（崩壊）回避」の努力を最後まで明るく（?!）前向きにし続けなければならないと考えています。また、例え嵐が来るにせよ、例え世界が滅びそうになると思えても、先ほど述べた2つの金言の含意はしっかりと受け止めて、今を充実させて生きなければならないと考えています。

私が入学説明会で本校受験希望生徒の保護者の方々に言っている「私たちが大切にしている3つのこと」の一つに「今いる生徒達を大切にする」というのがあります。本校では今まで様々な改革を行ってきましたし、今後も将来を見据えたヴィジョンをさらに明確に打ち立てていく必要があるかと思っています。しかしそういった中であっても、私たちが何よりも大切にしなければならないのは、「今、自分たちの目の前にいる生徒達」であり、日々の教育活動であると考えています。何よりも大切なのは「今」であり、「今いる生徒達」であります。何事も「今を疎かにして将来の希望や発展はない」と考えます。

そこで、今年の年賀状にも書かせてもらったことですが、「私達はシツカリと軸足を地に付けた教育を行っていきたい」と願っています。

ということで今年も宜しく願い申し上げます。

私が生まれてきた訳は

2010.12.31 Fri

皆さん、今年も1年間、「校長だより」を読んでいただき誠にありがとうございました。
多くの方たちに読んでいただいているのに、今年も遅筆ですみませんでした。
最後に2学期の終業式で生徒達に語ったメッセージを掲載しておきます。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<終業式挨拶>

皆さん、おはようございます。学校長の温井です。
今からある歌の歌詞の一部を朗読しますので、どうか耳を傾け、心を傾け、聞いて下さい。

私が生まれてきた訳は 父と母に出会うため
私が生まれてきた訳は きょうだいたちに出会うため
私が生まれてきた訳は 友達みんなに出会うため
私が生まれてきた訳は 愛しいあなたに出会うため
春来れば 花自ずから咲くように
秋来れば 葉は自ずから散るように
しあわせになるために 誰もが生まれてきたんだよ
悲しみの花の後からは 喜びの実が実るように

私が生まれてきた訳は 何処かの誰かを傷つけて
私が生まれてきた訳は 何処かの誰かに救われて
私が生まれてきた訳は 何処かの誰かを救うため
夜が来て 闇自ずから染みるよう
朝が来て 光自ずから照らすよう
しあわせになるために 誰もが生きているんだよ
悲しみの海の向こうから 喜びが満ちてくるように

私が生まれてきた訳は 愛しいあなたに出会うため
私が生まれてきた訳は 愛しいあなたを護るため

皆さんは今朗読した「いのちの理由」という曲をご存知ですか。有名なシンガーソングライターのさだまさしさんが創った曲で、私はこの歌を、12月17日、上宮高校の120周年記念式典に招待していただいたときに、初めて知りました。ご存じの諸君もいるかと思いますが、上宮高校は仏教系の高校です。その高校は、平安末期から鎌倉時代にかけて、法然上人という方が開い

た浄土宗という仏教の教えを受けて創立された学校であります。ちょうど桃山学院がキリスト教の教えの素晴らしさを教育に生かすために創立されたのと同じだと考えていただければいいかと思ひます。さてその「いのちの理由」というのは、法然上人が亡くなられて800年の月日を偲んで（800年大遠忌）、浄土宗の本山が、さだまさしさんに創ってもらった曲だということです。

まあ、その曲の由来は別にして、私はその上宮高校の120周年で知ったその歌、特にその歌詞の素晴らしさに心を打たれ、皆さんにもどうしてもその歌詞を知ってもらいたいと思ひ、本日の終業式で述べさせてもらうことになりました。

実は本日は、今学期の始業式の時にした毀譽褒貶の話、つまり人間は誰でも褒められたりすれば貶されたりもするので、余りあてにならない他人の評価ばかり気にしては駄目である、つまり今でいう「周りの空気ばかりを読むような生き方ではなく、自分が正しいと信じることを貫く勇気を持ってもらいたいという話、この話は既に前回した話ですが、その例として、勝海舟や日露戦争当時の外交官である小村寿太郎という人の話を述べる予定でありました。ただ余りこの歌詞が素晴らしいと思つたので、予定を変更して、その歌詞の朗読をさせてもらいました。是非、私が当初述べようとしていた日露戦争当時の外交官である小村寿太郎については、現在、NHKで放映されている「坂の上の雲」を観ていただければある程度分かつていただけるかと思ひますし、吉村昭氏の「海の史劇」という小説を読んでいただければ、さらによく理解できるかと思ひます。是非、自分たち自身で、勝海舟や小村寿太郎という人の生きざまを学んで欲しいと思ひます。さて、話を元に戻して、もう一度、今の歌詞のごく一部だけを朗読させてもらいます。しっかりと聞いてもらいたいと思ひます。

・・・・・・・・・・・・・・・・

どうです、諸君も私のようにこの歌詞を素敵だと感じてもらったでしょうか。同じように感じてもらったら嬉しく思ひます。ただ、諸君と私とでは、素敵だと思つた箇所が違うかもしれません。あるいは、既に、この歌詞を聞きながら、諸君自身が「私が生まれてきた訳」に思い巡らせたかもしれません。実は私も、この歌詞を耳にしたあと、すぐに自分なら「私が生まれてきた訳」をどのように考え、どのように表現するだろうと思ひを巡らしました。

さて、私が私なりに「私が生まれてきた訳」を皆さんに言うことは、今は差し控えたいと思ひます。私が言ったとしても、それは私が生きてきた中で、あるいは私が生かされてきた中で私が見つけた答えでしかなく、今の諸君の若々しい感性の中で見出された、あるいは諸君のハートで感じ取られた答えではないからであります。

どうか、諸君自身の中で、諸君自身の感性で、その「私が生まれてきた訳」というものに思いを巡らせてもらいたいと思ひます。そして、できれば、諸君が思い巡らした「私が生まれてきた訳」を、私にも聞かせてもらいたいと願っています。

それは、何かの紙切れに書いた一遍の詩でもいいですし、短いフレーズでもかまいません。あるいは哲学的な表現でも一向に構いません。どのようなものでも、どのような表現でもかまいませんので、諸君が思いを巡らした「私が生まれてきた理由」というものを、是非私に聞かせてもらいたいと願っています。

校長室に直接届けてもらっても結構です。校長室の扉は開いています。

またそれを届けるのは、この終業式の後でも、新学期がはじまってからでも結構です。とても楽しみに待っています。

最後に、「いのちの理由」の歌詞の最後には次のような言葉がありますね。

「私が生まれてきた訳は 愛しいあなたに出会うため
私が生まれてきた訳は 愛しいあなたを護るため」

きっとあなたのお父さんやお母さんは、あなたがこの世に誕生したとき、そして産着に包まれたあなたと初めて出会ったとき、このような気持ちを持たれたことだと思います。

どうか皆さん、健康に気をつけ、事故のないよう、充実した冬休みを送ってください。
受験を控えた高3の諸君は、最後まで気を抜くことなく悔いのない勉強をつづけて下さい。
また新学期、諸君の元気な姿に接することを楽しみにしています。
以上で終業式での私からの挨拶とさせていただきます。

2010.12.29 Wed

12月下旬のある日の夕方遅く、文の里駅で地下鉄に乗ろうとホームに降りていくと、少し離れた所に一人の大柄な若者が、放心状態で壁に寄り掛かって線路の方を見ていました。正直、この若者ひょっとしてヤバイのではないかと、つまり線路に身を投げるのではないかという気がして、近づいて行きました。そして少し近づくと、横顔から何となくX教諭に似ているなあと感じていた通り、その大柄な若者は本校教諭のXであると分かりました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

「よう、どうしたんや」と声を掛けると、一瞬夢から覚めたようにハッとして、「ああ・・・校長先生ですか」と、地球外生物の出現を目の当たりにしたかのようにハッとして、こちらに顔を向けました。

私は「何か電車ででも飛び込みそうな気配やったで。大丈夫かいな」と明るく問いかけると、「はい、大丈夫です」と、ますます大丈夫でないと思えるような声で答えてくれました。そこで私は「何か悩んでいるの」と率直に問いかけました。すると彼は「はい、懇談のことで・・・」と言い、その後に付け加えて「今日の3者懇談会で何組かの中の1組が凄く気にかかっているんです」と答えました。そこで電車が入ってきて、会話は中断されました。それからしばらく間があって、車内で私の方から「何がそんなに気にかかっているの」ということを問いかけると、彼は「私の懇談での応答がその生徒に適切だったかどうか、特に保護者の前で生徒に述べたことが、あれでよかったのかどうか悩んでいるんです」ということを述べました。私は、電車の中ということもあり、それ以上深くは、その親子と交わされた懇談の内容を聞きませんでした。要するに彼は、その日にした何組かの2学期末の3者懇談の中の、1組の懇談の成果について、学校を出てからもずっと思い悩み続けていたわけです。

地下鉄の車内でも彼の表情は「悩める教師」の代表のような感じがしていました。その悩める教師の悩める内容、つまり1組の懇談がうまくいかなかったかもしれないという悩みを知って、私の彼に対する評価が一層高まりました。溢れんばかりの自信を持って生徒や保護者に対応するベテラン教師もプロとして素晴らしいかも知れないけれど、やはり「立ち止まったり、悩んだり、迷ったりしながらドロ臭く」日々の教育活動に専念している教師達も、ある意味、とても熱くてクール（クールは英語で「かっこいい」）に思えます。

そこで私は、彼を少しでも慰めるため、私が現役時代（?!）の懇談会でしてきた失敗をいくつか紹介しました（それほど、「多くは」していませんが・・・）。その中でも、今思い出しても赤面することがあります。それは「懇談会で同姓の生徒の通知表を間違っって見せて懇談を行った過ち」というものです。つまり、個人懇談会で出来上がったばかりの通知表を手渡ししながら、私は「山本君、えらい成績が伸びたね」と言い、本人もホントですねと喜び、横にいたお母さんはもっと喜び、3者が共に喜び合っって終る頃、本人が「余り勉強していなかったのにこれほど上がると思わなかった」というツブヤキで、私がもう一度通知表を見たときに真実が判明したと

いう貴重な(?)体験です。その生徒の真の通知表では、今まで見ていた別の山本君の通知表と正反対の成績で、それを見て3者とも暫く沈黙が続いたという過ちです。その暫しの気まずい沈黙の後、私が出した結論は「通知表はウソつかない」というもので、山本君には山本君を見習うようにという妙な説得を行って、保護者も生徒も妙に納得してくれたので・・・私も随分救われました。

X先生、大いに悩んで下さい。但し、その生徒へのフォローはお忘れなく。今は昔、このようなCMソングがテレビで流れていました。

「ソ、ソ、ソクラテスが、プラトンか、みーんな悩んで大きくなった!!」

2010.12.19 Sun

去る12月11日（土曜日）、阿倍野区民センター大ホールで桃山学院中学校の第3回音楽発表会が行われました。私は残念ながら他の所用があり、終わり近くの発表演目からしか参加できませんでしたが、今年度初めて3学年が揃った発表会だけあって、ホールは活気にあふれていました。また多くの保護者の方々も聴きにいられていて、生徒達のパフォーマンスを拍手で盛り上げていました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さて、今回、この演奏会で何よりも感心したことは、演奏もさることながら（演奏は「発展途上の真摯さ」（?!）に満ちたものでありました）、演奏後の出来事です。それは「後片付け」です。演奏が終わった後、ホールに出された多くの予備椅子を何人かの生徒達が黙々と手際よく片づけている姿でした。聞くところによると、この生徒達は1クラス4名ずつが、俄か選出で後片付けの役を引き受けることになった生徒達だそうです。みんな実に積極的に後片付けに専念していました。そして教員たちはいちいち指示をすることなく、それをほとんど見守っているような状況でした。それを見て私には「中学生達もよく育ってきているなあ」という思いが溢れ、佐々木教頭を始めとする中学の教員達にRESPECTの念を抱きました。

私が担任をしているときは、「たかが後片付け、されど後片付け」という言葉でよく高校生達を指導してきました。特に文化祭などでは、「最後の後片付けまでキチットできたかどうかで文化祭は決まる!!」などど、少々独断的な言葉を使って、後片付けの大切さを強調してきました。一度など、文化祭が終わって教室の点検に行ったところ、後片付けが不十分だったため、翌日の代休に緊急連絡網を使って全員呼び出しをかけ、後片付けをさせたこともありました。

ある教育研修会で聞いたところによりますと、小学校や中学校で学級崩壊や授業崩壊が起こる前兆は、まず生徒達が掃除や後片付けを放棄し出すというものでした。なるほどだと思います。

本当に、積極的にしかもイソイソと後片付けを行っている中学生達を見たことが、今回の演奏会での私の貴重な感動体験でした。

2010.12.13 Mon

11月26日（金）の読売のニューステンで本校が取り上げられました。テーマは橋本知事の私立高校生等就学支援制度に関しての放送でした。実際、その制度が来年度から実施されれば、年収610万円未満の世帯の授業料負担は0円で、610万円以上から800万円未満は10万円の負担だけとなり、授業料の面での公私間格差は大幅に改善されることになるでしょう。そして放送内容は、そうなったときの私立高校と公立高校の募集に対する影響についてどうなるかという観点等から作られたものでした。

実際、授業料での負担が少なくなれば、多くの人達が「設備や教育内容の充実した私学」へ自分の子供達を通わせるのではないかということが提起されていました。そしてその設備や教育内容の充実という視点で、本校の図書館や放課後の少人数の講習等が放映され、また入試説明会当日（11月23日）の盛況ぶりも伝えられました。

ただひとつ残念だったことは、私がインタビューの中で橋下知事が推し進めようとしているパフォーマンス評価（進学実績やクラブ活動等について実績を上げた学校については府からの助成が加算される）について述べた部分が放映されなかったことです。「パフォーマンス評価の是非は別にして、教育の成果は数値だけで測られるものでない。例えば、引きこもりの生徒が担任の努力で学校に通えるようになったとか、今まで自分の事しか考えられなかった生徒が思いやりを持てるようになったとか、責任感や協調性が身に付いたとか言うような部分が教育の原点の一つでもある。そういった原点が、教育現場が数値を求める効率主義だけに走ることによって、疎かにならないようにしていかなければならない」という趣旨の発言は取り上げられませんでした。まあ、限られた放送時間の中で放送内容をしっかりと纏めるためには仕方がないことだと思いますし、その辺りのこと（パフォーマンス評価について）は橋下知事も私学課の方々も十分理解しておられることだとは思いますが、今後も就学支援制度の実施に伴う様々な意見が私学側からも公立側からも、そして保護者の方々からも出てくると思います。ただ教育改革の形態は別にして、日本の教育については大きな改革が必要であることは事実であり、それが大阪府だけでなく、日本全体のものとして論議が広がっていかねばならないと痛感しています。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

それにしても読売放送の横須賀アナウンサー、相当な勉強家であると共に、聴き出し上手のプロフェッショナルだと実感致しました。

元気一杯

2010.11.19 Fri

本校の軟式野球部は10月24日に大阪府の秋季軟式野球大会で優勝したあと、11月7日の近畿大会に出場し、惜しくも決勝で敗れ、準優勝となりました。そのチームの生徒全員が試合の報告に校長室に来てくれました。そこで私は全員に例のピカピカ「合格エンピツ」(?!)を手渡し、一人ひとりと握手を交わしました。みんな元気一杯です。コーチの磯田氏にはアメリカの姉妹校であるテキサス・セント・ステイヴンス高校から贈られた非常に貴重な帽子を贈呈しました。吉田、濱井両名の顧問はとても羨ましそうにしていました。



軟式野球部員達とともに（ロビーにて）

ガンダムになれ？！

2010.11.14 Sun

志望校宣言書の受け取りが進んでいます。志望校宣言書というのは高校3年生対象に昨年から実施している行事です。それは各生徒が目指す第一志望の大学を担任との何回かの面談等を経て決定したあと、最終的に生徒たちが一人ずつ校長室を訪れ、その志望校と志望理由を書いた宣言書を直接私に手渡す行事です。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

そこで私のほうから一人ひとりの志望大学や志望理由を確認するだけでなく、現在の勉学の進捗状況などを聞いたりアドバイスをしたりします。意外と時間とエネルギーがかかるものです。しかし、生徒達と会う機会が少ない私にとっては貴重なひと時であります。そして志望校宣言が終わった生徒には私からピカピカ光る金色五角形の「合格えんぴつ」なるものを渡すことになっています。「このエンピツのように心もピカピカ輝かせて最後まで力を抜かず受験に臨んで下さい」などという少々照れくさい言葉を添えたりもします。またある生徒は私の前で恥ずかしそうに「校長、ひとつだけお願いがあります。できたらテレビ（「よいこ部」）で放送された気というものを体験させて下さい」と申し出たりしました。担任に言わせると「普段は大人しくてそういったことを言う生徒でないのに」と意外な一面を見て驚いていました。当然、私はその生徒に「それなりに」気を体験してもらいました（?!）。

さてその志望理由については、本当にいろいろありますが、先月に受け取った志望宣言書には実にユニークな志望理由が書かれたものがありました。

そのひとつは「自分は阿倍野区の小学校、中学校、高等学校に通い阿倍野区にお世話になってきました。だから阿倍野区のために恩返しができるよう将来は地元で働き、そこから自分の視野を広げていき、社会に貢献できる立派な大人になろうと思います」というものです。志望大学は大阪市立大学です。私はこの女子生徒の志望理由は素晴らしいと思います。当然「世界平和のために」とか「環境問題を解決するために」とかという高邁な志望理由は称賛に値しますが、「阿倍野区のために」という志望理由も立派な理由だと思います。

修身齐家治国平天下（世界を平和にするためには先ず自分を律し、家庭を整え、自分の国を治めなければならない）という言葉がありますが、まさに世界をよくするためには先ず自分の居る所からという立派な発想です。英語ではThink globally, act locally「世界を視野に考えて、足元から行動しよう」と言う言葉もあります。

（その生徒に対して）本当に私は君の志望理由を心から支持します。頑張って阿倍野区のために尽くして下さい。阿倍野区をよくすることは大阪市をよくすることに繋がりますし、大阪市をよくすることは大阪府をよくすることに繋がりますし、大阪府をよくすることは日本を、そして世界をよくすることにつながります。そして家族や周りの人間だけでなく、自分が育った地域にも恩義を感じている君は素晴らしい人間です。

またもうひとつユニークな志望理由として次のようなものがありました。「小学校のころから好きだったガンダムに対する憧れがあり、そういうことを学び、道を究めて新しい世界を切り開

きたい」というものです。この男子生徒は大阪府立大学の航空宇宙工学科を志望しています。これも素晴らしい志望理由だと思います。父親と眺めた星空に感動して天文学者になった人や、自分を立ち直らせてくれた中学校の先生に憧れて立派な教師になった人、さまざまな理由があると思います。いずれにせよ、小さい時の感動体験が大きな動機となっているかと思います。

（その生徒に対して）ガンダムになってください（笑）。あるいはガンダムのような素晴らしいものを創る人になってください。健闘を祈っています。

（既に志望校宣言書を私に手渡してくれた全ての生徒達に）

ひとりひとりの志望宣言書を改めて読ませてもらいました。それぞれ感心して読ませてもらいました（あるクラスの志望宣言書には顔写真まで貼ってありましたね）。あとは宣言書に書かれてある志望校への合格を目指して悔いのない日々を送ってください。健闘を祈っております。

（これから志望宣言書を私に出すクラスの生徒達へ）

君たちと直接会って志望校宣言書を受け取るのを心から楽しみに待っています。

さすが「たかじん」！！

2010.10.28 Thu

先月下旬、本校の卒業生である「やしきたかじん」氏と深夜ダイブスギまで痛飲しました。そこには卒業生の大手広告代理店のF部長や放送業界のI君もいました。実にワイワイガヤガヤの楽しいひと時でした。互いに好きなことを言い合いながらのひと時でした。しかし、どんなに酔っ払っていても、なるほど以前（といってもかなりの昔）本校の新聞部の部長（同時にフォークソング部所属）であった「たかじん」氏の本領発揮！！と感心させられる鋭い発言がありました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

ひとつには「いいか、校長、桃山が伸びているのは嬉しいけれど、大学合格だけが発展ちゃうぞ。頭の偏差値だけを上げたらいかん。大事なんは気持ちの偏差値、ハートの偏差値や。そこを育ててくれたのが桃山や。俺の原点や。ハートの偏差値が大事なんや！これからもハートの偏差値もしっかりと上げてくれ」という発言。「ハートの偏差値」というような美しい言葉が自然に口から出てくるなんてまさにハートの詩人だと思いました。その後、本人が自らマイクを取って歌ってくれた「やっぱ好きやねん」も最高でした。

また「今の世の中やっぱりおかしい」ということで、何とかしなければならぬと語り合っていた話の流れの中で、私が「世の中を変えるのは若者、よそ者、・・・」と言いかけ、最後に来る言葉（実は「変わり者」）が思い浮かばなかったとき、彼はすかさず「タカジン」と言いました。

さすが・・・です。しっかりと元気をもらいました。そして、元気と二日酔いをもらった翌朝、私も「教育」という持ち場で世の中を少しでもいい方向に変えていきたいという願いを更新しました。あとはたかじん氏に母校桃山をしっかりと応援してもらおう約束をしてもらいました。

エキスパート10人が選んでくれました

2010.10.22 Fri

10月17日号のサンデー毎日に「エキスパート10人が選ぶ中高一貫校」ということで本校の名前が挙げられました。その中の「2011年中学入試の注目校」の3部門の内の2部門、つまり「人気があっそうな学校は？」と「大学合格実績が伸びている学校は？」という部門に本校の名前が挙げられていました。関西圏の学校で2つの部門に名前が挙げたのは2校のみで、さすがエキスパートの目は違うと妙に心楽しく納得しています。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

ただ「合格実績が伸びている学校」と言うことですが、まだ中学の1期生が今やっ3年生になったばかりなので、実際には高校生の大学入試実績に基づいた判断であったと思っています。あるいは現在の中学3年生の学力の伸びからの判定であったのではないかと思っています。実際、1学期末テストと2学期最初の実力課題テストで中学3年生と高校1年生が同じ数学のテストをしたのですが、中学のひとつのクラスが数Aの一部の範囲で高校1年生のクラスの平均点を抜いてしまいました。中学の数学の先生達は大喜びで、高1の数学担当者はさらに教科指導に熱が入ってきた模様です。

また英語においては、中学1年次にフォニックス（音声学）で徹底的に発音を鍛える方針のため、少し筆記テストでの出遅れ感があったのですが、やはり「英語学習の初期の段階で発音をしっかりと身につけることが、後の英語力の向上に大きなプラスとなる」という私達の期待通り（！！）2年生から3年生にかけて着実に英語力を伸ばしてきています。

本校に期待していただいている専門家の方々の期待を裏切らないためにも、そして何よりも本校生徒や保護者の皆さんの期待に沿うためにも、教職員一同さらなる努力を続けてまいります。

馬の名前も読み上げました

2010.10.17 Sun

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

最近クラブ活動での表彰状を読む機会がメッキリ増えてきました。体育クラブの活躍では水泳部の全国大会決勝戦出場やバレー部の近畿大会出場と全国私学大会出場、さらにサッカー部のアンダー18大会(200校余りの高校が出場)での準優勝(惜しくも関大一高に決勝戦で負け)、ソフトテニス部の近畿大会出場、また文化部では放送部の全国大会出場や美術部の上位入賞(中学生も含む)、更にはクラシックギター部(中学生も含む)の全国大会での銀賞受賞するなど、ホームルームの時間やアンデレタイムの時間に表彰状を読み上げる機会が増えてきました。正直言って、「桃山ってこんなにクラブ活動が盛んだった?」という思いもしますが、よく考えれば学校活性化の機運は進学面だけでなくクラブ活動にも及んで不思議はないかも知れません。当然、アスリートクラスの活躍やクラブ顧問の指導の熱意、そして何よりも各クラブ所属の生徒達の頑張りによるところが大であることは言うまでもありませんが、何か目に見えない力で桃山全体が後押しされているような気がします。ただ後押しだけでなく、試練も与えられたりもしますが・・・。

それはさておき、本校にクラブのない競技でも第65回国民体育大会に出て見事な成績を挙げた生徒がいました。その生徒は高校1年生ですが、少年ダービーで見事第4位の好成績(馬場馬術の部では第8位)を挙げました。私も馬術競技の表彰状とメダルを初めて目にしましたが、それには選手本人だけの名前だけでなく、馬の名前も記されてありました。当然、放送でも生徒本人の名前と共に、馬の名前も読み上げさせてもらいました。

<追伸>

早速、このブログを書いているとき、軟式野球部も秋季大阪大会の準々決勝に勝ち進み、近畿大会に出場することが決まりました。

校長、絶好調！

2010.10.11 Mon

どういわけか(?)文化祭終了後から生徒達からの励ましをよく受けるようになりました。「校長、頑張ってください」と言ってくれた生徒もいますが、中には「お疲れさんで〜す」と労をねぎらってくれる生徒もいました。何がお疲れさんかは別にして、思わず私も「ありがとうございます」とお辞儀して答えてしまいました。中でも極め付きは、3, 4名いた生徒達の中からひとりの女生徒が私の方に駆け寄ってきて、大きな声で「校長、絶好調！」と言ってくれたことです。私も一瞬あっけにとられたのですが、すぐにこの生徒の「思いやる気持ち」を(私なりに)察知し、心から感謝の念が込み上げてきました。おもしろくも重々しくなく、おかしくも心を込めて、「校長、絶好調！」と言ってくれたことを感じました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

こういった心優しく素晴らしい生徒達に囲まれて私は幸せですし、こういった生徒達のためにも、何があっても常に「校長は絶好調で」校長としての職務を遂行していかなければならないと思っています。

文化祭、楽しかったね！

2010.09.21 Tue

本校の文化祭は先週の17日18日の両日にわたって行われました。おかげで大成功の文化祭となりました。生徒諸君の取り組みだけでなく、PTAの保護者の方々や卒業生達の熱い御支援と御協力の賜物であります。

私自身も初日からハイテンションでありました。もともと祭りごとの好きな人間ではありますが・・・。

文化祭の開会の挨拶でも生徒達全員にテンションの高い挨拶をしてしまいました。

<文化祭での開会の挨拶>

皆さん、こんにちは、学校長の温井です。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

いよいよ今日と明日の2日間文化祭が行われます。

いろいろ準備を重ねてきた諸君もこの日を待ちどおしく思っていたことと思いますが、私も楽しみに待っておりました。コーラス大会もとても楽しみです。

一度、アスリートクラスがコーラス大会で優勝するのも観てみたいです（笑）。

また「桃フェス」とかいたポスターも素晴らしいですね。「桃山フェスティバル」を桃フェスと言っているんですね。お天気も素晴らしいですね。諸君も素晴らしい、先生方も素晴らしい、職員の方も保全の方も守衛さん方も素晴らしい。桃山が素晴らしい。何もかも素晴らしい。そして何よりも今ここに生きてあることが素晴らしい。「すべてが素晴らしいという思いと祝福を持って迎える」のがフェスティバルというものであります。それを日本語では「祭り」といいます。祭りとはマ、つまり間を詰めるという意味があると聞きました。それは何と何との間を詰めるのかというと、本来は神様と人間との間をつめる、普段は離れた所におられる神様と自分の間を詰めるということから祭りという意味になったという話を聞きました。ただ間を詰めるのは神様と自分だけでなく、自分の中の子供、心理学的な用語ではインナーチャイルドと言うんだそうですが、そういった自分の中の子供との距離をつめて、もう一度、幼かった無邪気な時の自分を蘇らせるものが祭りであります。非日常的な祭りには蘇りの力があるんですね。

そしてもうひとつ、人と人との間を詰める働きも祭りにもあります。

それは何も同じクラス、あるいは桃山の生徒達だけの間をつめるだけではありません。いろんな所から、多くの人たちがこの桃山の文化祭にやっこられます。卒業生の方や、近隣の方、また来年桃山に入学しようとしている方など、いろいろな方が桃山にやっこ来られます。そういう人たちと桃山の生徒達の間も詰まるわけでありまして。言い換えれば、普段会えなかった人達と親しく接する機会でもあります。どうか皆さん、この機会に、桃山の良さをみんなに伝えてほしいと思います。桃山の生徒にふさわしい品格と礼儀と笑顔をもって外部の人たちを迎え、気持ちよく文化祭を楽しませてあげたいと願います。

それではこの2日間が素晴らしい思い出の文化祭となることを願って私からの挨拶とさせていただきます。

きます。

但し文化祭のパンフレットには少し抑え気味の記事（どこが？）を書かせてもらいました。

<文化祭を迎えるに当たって>

思い起こせば一年前は新型インフルエンザが流行しており、実施するかどうかについての決断が迫られた文化祭でありました。結局、新型インフルエンザが弱毒性であるという理由は当然ながら、文化祭というのは生徒達が楽しみに待つビッグ・イベントであるとともに「貴重な教育的機会」でもあるという観点から、本校では文化祭の実施に至りました。但し、生徒達にとってはマスク着用の中で行われた文化祭であり、ある意味、非常に印象に残る文化祭となりました。

さて今回の文化祭の特色は、まず何と云っても、中学が初めて3学年揃った中で行われる文化祭ということかと思います。1学期に行われた中学の体育祭も、やはり3学年が一堂に会して行われただけのことがあり、非常に活気に満ちた体育祭となりました。今回の文化祭も、その中で行われるコーラス大会も含めて、体育祭同様に活気に溢れたものとなることでしょう。

また来年から標準コースが文理コースとなり、アスリートクラスを除いて男女共学となります。そこで男子生徒の牙城である標準コースの諸君にとっては、3学年揃って迎える最後の文化祭となるわけです。その意味では、記念すべき文化祭と言えますが、桃山の長く良き男子校としての歴史を思うと何やら感慨深い気持ちにさせられます（アスリートクラスの諸君、君たちが男子最後の砦ですぞ・・・）

昔、男子のみの桃山学院高校のキャンパスにも1年に1度パツと華が咲く日がありました。それが文化祭というもので、1年に1度女子学生達が訪れる「お祭り」でした。

その日を不安と期待でワクワク待ちながら、出し物の準備に専念している男子生徒達の何と可愛いことであったか・・・。

いずれにせよ今年も桃山らしい素晴らしい文化祭となることでしょう。

*本当にPTAの保護者の方々や卒業生の方々をはじめ、皆様、誠にありがとうございました。寄贈式で頂きました バザー等の収益金については有効に利用させていただきます。

桃山ってどんな学校？

2010.09.12 Sun

1週間ほど前にPTA総会が行われました。その総会で、私は先月8月24日に行われた本校の中高教員対象の教員研修会での話も少しさせていただきました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

その研修会で私は以前から全教員にしていた私からの問いかけ、つまり「桃山ってどんな学校と聞かればどう答えますか？」という問いかけに対する私自身の答えを表明しました。それは「桃山っていうのは熱意に溢れ指導力に優れた素晴らしい教員が多くいる学校だと答える」というのが私の答えいうものです。ところでそのあとすぐに「多くの教員ですけど、全ての教員と言えないところが少し心苦しいですね」と付け加えたところ爆笑を誘いました。まさか自分の担任を思い浮かべて頷いていた方はおられないと思うんですが・・・（笑）。但し、全ての教員が完全を目指して日々進化していつているのは事実であります。

その教員研修会で述べた内容を覚えている限り再現して下記に記してみました。

教員研修会での校長挨拶 <桃山ってどんな学校？>

今回も研修を始める前に何か私から一言ということですが、この前から私が皆さん方に行っている質問を覚えておられますか？つまり「桃山ってどういう学校って聞かれたら、どういう学校って答えますか？」という質問です。どうでしょうか？もう既に答えをもっておられる先生方もおられるかと思えますし、できたら先生方ひとりひとりにその質問の答えを尋ねたいところですが、今日は時間もありませんので、その質問に対する私自身の答えを述べさせていただきます。

つまり「桃山ってどういう学校ですか？」と聞かれたら「熱意に溢れ指導力に優れた素晴らしい教員が多くいる学校です」と自信を持って答えます。このことは学校説明会などでも強調していることです。

とにかく教育の中心となるものは教師であり、生徒の可能性を伸ばすのもそれを殺すのも教師次第であるということ、そして本校で最も誇るべきところは、建物や施設以上に教師であるということ強調しています。

このことは単に学校のPRのためだけに言っているのではないし、もちろん先生方へのお世辞で言っているわけではありません。

私自身痛感していることであります。先日もある塾の方には、塾訪問をされた先生についての非常に高い評価をもらいましたし、また8月の14日、15日の私学展においてもブースで説明している先生方の本気の熱意というものを感じました。おかげで、人数的にも桃山のブースに一番多くの人々が訪れておりました。いずれにせよ桃山に対する高い評価を支えているのは先生方ひとりひとりであると痛感しています。そして先生方ひとりひとりもそのように自覚して欲しいと願っています。また夏期講習や勉強合宿やクラブの合宿など、夏期休暇中の指導にあたられている先生方にも心から敬意を表したいと思えます。まさに桃山の教育を支えているのは、建物で

もなく、まして校長でもなく、先生がたひとりひとりのやる気と指導力であると思っております。もう一度、言いますが、「桃山ってどういう学校って聞かれたら、熱意にあふれ、指導力に優れた先生方が多く集まる学校だ」と私は断言しますし、先生方にもそう断言してもらいたいと思います。ただ、例えそうであっても、やはり「全て完璧な先生方が集まっている学校である」と答えれば嘘になるかと思えます。もともと私は「完璧な先生」なんていないと思っています。完璧を目指して努力している先生方は多くいても、完璧な先生はいないと思います。そして私はそれでいいと思っています。完璧を目指して、試行錯誤しながらも、ときには躓きながらも、常に学んで自らを磨き努力していくところに、教師自身の成長というものがあるし、そういう姿勢が生徒達にも伝わる場所ではないかと思えます。だからこそ、学びを深めるという点で、こういう研修も非常に価値があると考えています。またそれぞれ完璧でないだけに、共に足りないところを教員同士が助け合い補い合うところに、組織としての機能が健全になされ、教育活動も効果的になされていくと思っています。だからこそ、教員同士が共に集い、できたら夕方からの懇親会にも参加して親睦を深めるという点で、こういう研修のもう一つの価値があると思っています。

最後になりましたが、今回、行いました授業アンケートについては、生徒達からの評価を真摯に受け取り、今後の授業のさらなる改善に取り組んでいってもらいたいと思います。午後からは各教科に別れて「授業アンケートの分析と今後の取り組み」についての論議を深めて下さい。その報告を各教科主任から聞くのを楽しみにしています。

それでは、本日の研修会、最後まで共に有意義なものとしていきましょう。

2010.08.29 Sun

去る25日、新学期の始業式を全校集会の形で行いました。朝とはいえ残暑も厳しい折なので、できるだけ手短にという思いで私からの始業式の挨拶を全校生徒にいたしました。

まずは「暑いから早く終わってあげたい。しかし軽装で座っている諸君とは違い、背広姿でネクタイも締めて皆の前に立っている私に比べれば、若い諸君の方が絶対に楽なはずであります。だから、辛抱してシッカリと私の話の話を傾けるようにして下さい」という前置きから話を始めました。

ただ私の挨拶が終わった後も、演壇での留学生の紹介や教務部からの連絡事項などが続きました。そして私とは云えば、皆の前でクール（英語では「涼しい、カッコいい」という意味）なことを言った手前、背広を脱ぐわけにもいかず、汗みどろになりながらも始業式の最後まで皆の前で涼しげに立ち続けざるを得ませんでした。そしてふと「校長、熱中症で倒れる！」という新聞記事のヘッドラインが頭を横切りました（笑）・・・

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<2学期始業式でのメッセージ>

今日、一番に述べたいことは、「毀誉褒貶は世の常」ということです。毀誉褒貶という字は非常に難しい字ですね。後で担任の先生方に黒板に書いてもらってください。その意味はどういう意味かという、褒められたりけなされたりすることは世の中では昔からいつもあるということです。ある人が或る時には「非常に立派な人物である」と世間から評価されたかと思うと、その同じ人が、何か誤解を受けるようなことがあればすぐに咎められ、「あの人はどうしようもない人である」と同じ世間から非難されるということでもあります。君たちの間柄でいえば「あの子は本当にいい子や、あの子と仲良くなれてよかった」と褒められると思えば、今度はちょっとしたことで「あの子はおかしな子や、あんな子と付き合いたくないね」と悪口を言われたりすることです。それが毀誉褒貶は世の常ということです。いつの時代にもどのような組織にでもあることです。その具体例として本当は明治時代の外交官である小村寿太郎という人の話をしたかったのですが、今日は時間もないのでその話は次回にさせていただきます。

さて「褒められたと思えばけなされる」となれば一体自分はどうしたらいいのか？というのが、今日私が皆さんに伝えたい一番のテーマです。

つまり、結論から言うと「表面的な人の評価はあまり気にしないようにしなさい」ということです。今の言葉でいうと、空気を読むことばかりに気を使わないということです。おどおどして周りの空気ばかり読もうとしているより、勇気をもって自分の信念を貫く若者の方が私は好ましいと思っています。誰かが皆に悪口を言われていても、皆に同調することなく、「あの子はそういう子ではないよ」と言うような気構えや信念や勇気が必要です。そういう若者の方が将来、立派な仕事をやり遂げる人物になると思っています。

そこで最後にもう一言、どうしても覚えてほしい言葉があります。毀誉褒貶は世の常という言葉

以上に心に刻んでほしい言葉です。

それは「天知る、地知る、吾ぞ知る」という言葉です。

たとえ自分のしていることが人からどう思われようと、あるいは人から知られようが知られまいが、あるいはどうけなされようと、自分のしている正しさや誠の思いは、天地が知っている。天地を神様と置き換えてもいいかと思えます。またそれと同時に、何よりも自分のしていることの正しさ、あるいは自分の誠の思いというものは、自分自身が一番知っているということです。反対も然りです。つまり悪いことをして他人を欺くことはできても、神や自分は欺けないということです。

どうか、諸君には、社会へ出てからも、理不尽なことや辛いことに会うこともあろうかと思えます。人間不信に陥ることもあろうかと思えます。しかし、そういった中にあっても、人の評価ばかりを気にしないで、どうか自分自身で正しいと思える考え方や生き方を貫いて欲しいと願っております。

ということで、本日はこれで始業式の挨拶とさせていただきます。

2010.08.22 Sun

「私の経験から、どこの国でもいい人達はたくさんいますが、お金のためには荒っぽいことを平気でする人達がいることも悲しい事実です」。この1文はある雑誌社に依頼されて書いた「旅の安全」に関する記事の一部です。

先日はある新聞に、「発展途上国の子供たちは貧しいけれど、目はキラキラしている」という紋切り型の決め付けは、主に全共闘世代（実は私の世代）を中心とした人たちの美しい希望的幻想に過ぎないという旨のことが書かれてありました。なるほど、と思います。しかし、実際、私が発展途上国を訪れた経験からいうと、やはり子供たちの目はキラキラと美しいことは確かです。ただ、貧困と貧富の圧倒的な格差という現実や、教育を受けられないことからくる将来に対する絶望感などが、そういった子供たちから目の輝きを失わせていくことも確かで、これも「悲しい事実」であります。「焼け石に水」という言葉がありますが、私達にできることは平和的な体制の変革を模索すると共に、例え焼け石に水であっても皆が水をかけ続けることが焼け石を冷ます一助になるのではないかと考えています。そういった意味からも、本校のPTAや生徒達が行っているフェアトレードやSBSなどの活動を高く評価しています。

さて今年も猛暑が続き、ロシアやスペインなどの山火事や各国の早魃の被害も深刻なものとなっています。早魃や水資源の問題もこれからさらに深刻さを増していくものと思います。まさに今後は「焼け地球に水を」という言葉が出てきてもいいような状況に私達自身が追い込まれていくような気がします。私達はよく「エコで地球を守る」というような言葉を使いますが、実際は「地球に守られているのは私達自身である」というのが現実だと思います。その現実を悲劇的な結末で痛感させられる時期が来ないことを祈っています。

また問題は地球環境の問題だけでなく、日本においても「このまま座視するに忍びない」悲しい事実も多くあるかと思います。先日、劇作家の倉本聡氏による「帰国」というドラマを観ました。それは太平洋戦争で亡くなった英霊達が今の日本に帰ってくるという設定のドラマですが、その彼らの目に今の日本がどう映るかが描かれていました。彼らが自らの命を犠牲にして守ろうとした祖国が今の日本であるとするなら、彼らの死はどういう意味を持ったのかという問いかけがなされていました。家族の問題、社会や教育の問題など、さまざまな視点から描かれたドラマでした。

特に教育の問題は、私自身その真っ只中に身をおいている立場から、一番真剣に考えて続けている問題であります。

先日、ある出版社の方と話をする機会があったのですが、その方にいつか（退職後？）書かせてもらおうと口約束した本があります。タイトルは「萎縮する教育」というタイトルです。（ただ、そのタイトルでは売れないとのことで全く違ったタイトルが提案されました。少々品格のないタイトルなので、ここでの公表は控えさせていただきます）。実際、私自身いろいろな場面で教育全体を萎縮させる力を感じています。その萎縮させる力は出所も方向もはっきりと見える場合もあれば、匿名の手紙のように正体不明でありながら意図だけが悪意をもっている場合もあるかと思

います。ただ萎縮させられていくのは教育だけではありません。日本の政治も外交も経済も萎縮させられていっているのではないかという危惧を感じています。大人の世界でもあらゆる場面で事なかれ主義が横行し、長幼の序というのも死語と化し、正論を言う者が非難され、多くの若者達も周りの空気を読むことに汲々としているように感じます。ただ本校には、いかなる時代の流れにあっても、そういった負のエネルギーを跳ね返すだけの理念とバイタリティーというものが備わっているのは「嬉しい事実」であります。それは教員ひとりひとりが教育に対する情熱を持ち、生徒達に熱意を持って関わっていく姿勢に裏づけられたものだと確信しています。そしてそれに答えてくれる生徒達が本校には非常に多くいるのも「嬉しい事実」であります。

明後日（8月24日）は朝から夕方まで本校での夏期教員研修会がありますが、その研修会では教員の意識の向上が図られるだけでなく、教員全体の意欲やモチベーションがさらに高められるものと確信しています。

そして25日は2学期始業式、生徒達に何を語ろうか、伝えたいことが多過ぎて迷っているところであります。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

2010.08.01 Sun

前回のブログで書いたことですが、本校に留学していた3名の米国人留学生在が1年間の本校での生活を終えて無事帰国を果たしました。それにしても私が日本語教師を退いて以来の、米留學生達の日本語の上達ぶりには常に驚かされます。さすがに「有資格の日本語教諭」である優秀なM先生に教えてもらっているだけのことはあります。本校の留学制度はおそらく日本でも一番古いのではないかと思います。思い起こせば私が何十年前に無資格の日本語教師として米国人留學生に教えていた日本語といたら・・・、それはそれは結構ヤバイものでした（今はどうか分かりませんが、当時は無資格でも問題はありませんでした、念のために）。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

先ず私が日本語の教科書として使っていたのは、権威ある放送局が出している「権威ある標準語しか使われていない」権威ある「にほんご」という教科書でした。「わたしはアメリカからのりゅうがくせいです。なまえはジョンといいます。あなたのなまえはなんですか」というものです。

若い私はその権威ある教科書を使って、一生懸命、米国人留學生達に日本語を教えていました。そのうち彼らから不平と不満が述べられました。そんな日本語は使わないという不平と不満です。「ワタシハ〜」や「アナタノ〜」なんて言ったら笑われたということです。それに「ガッコウニ イカナケレバナリマセン」なんて言わずに「ガッコウニ イカナアカン」というのが、彼らの主張する「ホントのニホンゴ」ということです。そしてホントの日本語を教えてくださいという当然の要求がなされました（米国人学生は非常に明確に授業の改善を要求します）。そこで当時「物事を柔軟に考えるタチ」の私は、さっそく彼らのための「じつようにほんご」なるプリントを自分で作りました。そのプリントには「どうもどうも」という万能表現から「アホなことしたらあかん」というローカルきわまりない口語まで盛り込まれていました。おかげで彼らの日本語は・・・完全なる大阪弁と化しました。今、アメリカの多くの地方で大阪弁が話されているとするなら、その一端の功績（?!）は当時の無資格日本語教諭であるワタシにあったわけであり（笑）。

それはさておき、ある時彼らから「ワタシは〜」と「ワタシが〜」の違いについて聞かれたこともありました。また「ケッコウデス」という言葉の意味も聞かれたこともありました。例えば「ごはんをもう一杯どうですか？」と聞かれ「ケッコウデス」と答えれば、それはNo, thank you.の意味ですが、「窓を開けてよろしいですか？」と聞かれ「ケッコウデス」と答えれば、それはOK, の意味。彼らには「何故」ひとつの表現が全く違う二つの意味になるのか分かりませんでした。そして実際、当時私にもその「何故」が分かりませんでした（今も分かりません）。本当に日本語は難しいですね。

そこで私の日本語授業では一つのルールを適用することになりました。

それは何があっても先生であるワタシに「『何故』を聞いてはいけない」 “” Don’ t ask me

why.” というものでした。

この場を借りて、当時私が教えた米人留学生諸君に謝罪します。

2010.07.25 Sun

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

今月の9日、国際コース・クラスAの生徒達がカナダへの短期留学に旅立ちました。すでにカナダには長期留学のクラスBの生徒達が今年の1月より留学を続けています。また20日には、カナダ語学研修に出発する生徒達と米国留学に出発する生徒達の壮行会、及び帰国する米国人留学生達の卒業式が行われました。これからカナダや米国に旅立つ本校生徒達の期待と不安、また1年間の本校での留学を終えて帰国する米国人留学生達の日本での素晴らしい思い出や感動が（そして別離の哀しさも）溢れる会となりました。

さらに昨日24日には、米国から戻ってきた（出発時3年生達の）生徒達の卒業式も本校チャペルで行われました。その会には既に今年の3月に本校を卒業した同級生たちもお祝いのために元気な顔を見せてくれました。

また8月からは新たな米国人留学生達やカナダからの留学生達も本校に入学してくる予定です。

まさに「活気溢れるインターナショナル・スクール」という感じさえします。

さてそういう壮行会や卒業式では、必ず「校長挨拶」がなされることになっています。まあ、それ以外にも、校長挨拶というのは「目出度い席」なら殆どどのような場でもなされるのが慣例で、私もそれは校長の宿命（?!）として有り難くなさせていただいています。

ただ挨拶をする場合、自分で決めたルールとして、「同じスピーチはしない」というのがあります（だから今年に入って6回も結婚式に招待していただいたのですが、その6回とも違った内容のスピーチをするのが結構大変でした・・・）。

それはさておき、留学する生徒や留学から帰ってくる生徒達にだけは、必ず共通した同じ話をスピーチの一部ですることになっています。それは「感謝」ということです。自分達が留学まで行かせてもらえる「感謝」、そして「感謝があれば、次にはその感謝の気持ちを、どのように表わしていくか」というような話です。

と、ここまで書いた所で電話で用事が入りました。

実は昨日、教会での卒業式に来ていた卒業生の一人から「ブログの更新」を強く要請されたので、今日は何とかここまで書かせてもらいました。

次回のブログでは、あるクリスチャンの人から勧められて読んだ本「ホ・オポノポノ」の話（今述べた「感謝」ということに関連する内容）と、「日本語は難しい」という話をさせていただきます、できるだけ早い時期の更新で・・・。

最後になりましたが、この場を借りて、今回も米国人留学生達のホストファミリーを引き受けて下さった保護者の方々、心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

生活指導部の消滅を祈念して

2010.06.20 Sun

各校の生活（生徒）指導部が集まる地区ごとの会があります。今年度は桃山学院高校がその会の担当校をしている関係で、私も生活指導部長を含む本校の数名の教員とともに、その会に出席させていただきました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

それぞれの学校が抱えている問題や共通の課題などについて情報交換や意見交換を行い、有効な解決法などを話し合う非常に有意義な会であります。また今回は二神能甚氏という方（NPO法人ニュースタート事務局代表）を招いての講演会も行われました。二神氏は、不登校や様々な問題を抱えた青少年達を施設に預かり、その子供たちが学校に復帰したり社会へ出て行ったりするサポートをしておられます。

その1時間半以上に及ぶ氏の講演は非常に有意義なものでありました。特に、そういった子供を持った親たちは「何とか子供を立派に独立させるための特効薬」を求めるが、子供たちにとって不登校やひきこもりは「人生の問題として捉えている」という話や、親子間での根本的な価値観のギャップがある限り「いくら親に愛情があっても、問題解決には至らない」という話、また大きな時代の流れでの若者の価値観変容の話など、一言一句が大いに考えさせられる内容でありました。いろんな学校のいろんな先生方（特に多くの学校長）にも聞いてもらいたい話でもありました。

<追記>

いつも私は「警察と生活指導部は暇であればあるほどいい」ということを言っております。ということもあり、今回の講演会のあとの懇親会では、各校の生活指導部の先生方を前にして、次のような乾杯の挨拶をさせていただきました。

「ここにご列席の先生方のご健勝とご多幸、また各校のますますのご発展ご繁栄、それに反して各校の生活指導部の活動の場がこの先どんどん先細り、将来的には各校から生活指導部が消滅することを祈念して、乾杯！！」

皆さん、笑いながらも、大きな声でご唱和下さいました。

2010.06.20 Sun

体育祭が大阪市立中央体育館で実施されました。高校は15日、中学は16日に行われました。
<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

高校では3学年が赤団、青団、緑団、黄団の4団に分かれて競技が行われ、中学では赤団、青団、黄団の3団に分かれて競技が行われました。体育祭が始まる何日か前に、自分のクラスが何団に入るかが決められ、一度その所属団が決定されるとその団の勝利のためにみんなが全力を尽くすという仕組みです。各学年や各コース、さらには各クラスの枠組みを超えて、団ごとに一体になるという仕組みは教育的な利点も多いと思います。また本校では、体育祭の企画や運営は、中学では生徒会、高校では生徒自治会執行部や体育祭実行委員会が中心となってなされます。このことも私が本校の教育目標の一つとして言及している協調性や責任感や主体性といった「目に見えない実力」を育成する上で大きな効果があるものと確信しています。

体育祭の開会式で私は以下のようなことを述べました。

「体育祭とはそれぞれの種目で勝敗を決するためだけのものではなく、みんなが共に楽しむものであります。例えばリレーでトップを走っていて転倒したとしても、そのことで転倒した生徒を責めてはいけません。その生徒を温かく明るくからかって（笑）あげてください。第一、人生で転ぶことも少なくありません。大事なことは例え転んでも起き上がることです。そして最後まで走り続けることがもっと大事です・・・」

さて、私の開会の辞はさておき、高校も中学も素晴らしい体育祭となりました。例えば、高校では各団の応援合戦は何日も前から練習してきた結果、まさに甲乙つけがたいパフォーマンスを披露してくれました。またリレーや台風の目でも感動しました。特に、完全に上位との差が開き「ビリ」となるのが確実に分かっているのに、最後の最後まで力を抜かず必死で頑張る生徒達の姿に感動しました。またその最下位の生徒やグループに熱い声援を送る生徒達の態度にも感動しました。あまりにも素晴らしい体育祭だったので、他の先生に「体育祭を毎月一回しましょう！」と言って、苦笑されたほどであります。

また中学の体育祭においては、やっと3学年が揃って体育祭が実施できたことを何より嬉しく思いました。思い起こせば、2年前、1期生の117名しかいない中で行われた体育祭では、多様な競技をさせるにも人数が少ないので、ドッジボールなどの球技の合間にクイズ大会までさせて苦労していました。それに比べて今回は3学年が揃った体育祭でした。それでも3学年9クラスの体育祭では、いくらなんでも中央体育館は広過ぎて、がらんとした感じの「盛り上がり欠ける」体育祭になってしまうのではないかという心配がありました。開会式での整列した生徒達と体育館の大きさを比較して、来年はもっと小さな体育館を借りて行わなければならないと思ったほどでした。しかし中学生達の競技が始ってみると、そんな心配など吹き飛びました。中学生達の弾けるような活気と黄色い歓声が、そして保護者席からの熱い応援が、広い体育館をイッパイイッパイに満たしました！！

まさに生徒達にとっても「いい汗がかけた楽しい一日」であったかと思えますし、私自身も来年の体育祭が今から楽しみです。

<追記>

高校の体育祭で表彰状の手渡しをする時に泣いている生徒がいましたが、それ以外に、体育館の放送席の片隅で泣いている女子生徒がおりました。それに気付いた私は心配になり、「どうしたの、何か悲しいことがあったの？」と聞いても、嗚咽していて答えることができませんでした。「誰かにイヤなことでも言われたの？」とか聞いてもなかなか答えてくれません。そして最後に余りにも心配で「どうしたかだけでも言ってくれないかなあ」と言ったところ、一言「感動しました」と嗚咽の中で答えてくれました。あとで聞くと、本当に体育祭を成功させるために一所懸命、裏方的な努力をしてくれていた生徒だそうです。

その子は表彰状を一枚も貰えませんでした。その子を見て「感動（つまり魂の歓び）こそが一生懸命努力した者だけに与えられる何よりの表彰状である」と痛感しました。

2010.06.13 Sun

今年も「新鮮な風」がキャンパスを吹き抜けた。夢と希望に胸を膨らませ、緊張と不安に顔をこわばらせ、教育実習生達がやってきた！<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

5月24日からの3週間、教師になるためのトレーニングに桃山学院高校を巣立った大学生達が戻ってきました。その中には私が知っている学生達もいて、先週の始め、そのうちのひとりが「うまく教えられない」と落ち込みながら校長室を訪ねてきました。私がおその実習生に「何が問題なの？」と聞くと、生徒達が自分の面白くない授業を「気を使って聞いているのが伝わってくるんです」という答え。

なかなか客観的な授業評価をしているようです……。また昔から本校生徒達が気を使いながら、実習生を温かく優しく見守る態度、なかなかのものであります……。本校の古くて良き伝統の一つであるかも知れません。

そこで「自分で教えていて楽しくないなら、きっと生徒達も楽しくないと思うよ」と言い、その学生の指導案を見せてもらいました。なるほど、これじゃ、単なる知識の羅列だな……。アレモコレモ盛りだくさんではあるけれど、もうひとつ明確にポイントが定まっていない。また教え方を聞いていると「余りにも指導案」に縛られて、自分が「指導案」になってしまっている。そこで私は、10のことを調べて10を教えようとしたらいけないよ、10のことを知っていて1を教えること、10のことを教えるためには100の背景を知っていることが必要であることなどのアドバイスを与え、指導案など「一応の目安」であって、授業で頼るものであってはいけない、ということも伝えました。そして最後に「うまく教えようとしなくていい」ということも伝えました。下手でも「何とか分からせようとする姿勢」こそが生徒達に伝わるのであって、「経験を積めば授業もある程度はうまくはなる」と言って慰めました。

さて、その学生、3日後には目を輝かせて「生徒に褒められた」という報告にやってきました。生徒に褒められて喜ぶというのも可笑しい話ですが、それが実習生のウイウイしさでもあります。また「校長から下手でもいいと言われ、居直ったせいか、授業にもちよっと余裕ができてきました。少しは楽しくやれるようになりました」とのこと。

よかったネ！！

さて6月12日（土曜日）は教育実習の最後の日となり、昼食会が全ての実習生達のために開かれました。そこには私や教頭や教務部長だけでなく指導教員達も出席します。但し、今回は、私が出張のため出席できませんでした。もし出席していたら昨年と同じことを言ったかもしれません。

つまり

「3週間の教育実習はどうでしたか？おそらく諸君にとって大学生活の中で一番ハードな3週間だったかもしれません。そしてきっと大学生活の中で一番思い出に残る3週間になるでしょう

。君たちも教育の一端に関わることによって、教師の大変さというのを垣間見ることができたでしょう。教師というのはただ教室で自分の教科を教えていればいいわけではないことにも気付いたでしょう。と同時に、とても大変だけれども『とてもおもしろい!』という気持ちも湧いてきたでしょう。実際、教師というのは実にやりがいのある仕事だと思います。但し、それは教師という仕事が自分に合っている場合です。合っていればこれほどやりがいのある仕事も余らないと思います。但し、合っていないという場合、これほど苦しい仕事もないかも知れません。どうですか？この3週間で『教師という仕事が自分に合っているか、合っていないか』を心の奥底で感じ取ることができましたか？直感的にも教師という仕事が自分に合っていると感じ取った人は、これからシッカリと教員採用試験に合格できるように勉強に励んでください。もし『合っていないかもしれない』と感じた人がいるなら、どうか他の仕事を探して下さい。というのも、合っていない人が教師をすることは、その本人にとって不幸であるだけでなく、これから関わる多くの生徒達にとっての不幸だからです・・・」

以上の趣旨のことを述べたと思います。とても厳しい言い方ですが、実習生達にはクールな事実も「伝えて差し上げる」ことにしています。せっかく母校での実習にいらしてくれたのですから・・・。

実際、これから教師をする人も、今教師をしている全国の人たちも、もし自分が教師であることに喜びも生き甲斐も熱意も感じないなら・・・どうか、生徒達のために「すぐに教師を辞めて、自分にもっと合った仕事を見つけてもらいたい」と願っています。生徒達のために、どうか辞めて下さい!!（言い過ぎかな?!）

そして、そういった教師であることに喜びも生き甲斐も熱意も感じている教師達が充満している学校の校長というのはとても幸せ者だと思います。だから私も幸せ者だと思っています。

歴然たる違い

2010.06.13 Sun

6月2日から4日にかけての3日間、中学と高校のスポーツテストが行われました。その開始時には、恒例により、チャプレンのお祈りのあと、校長からの一言を伝えなければなりません。とにかく3日間とも天候に恵まれ、朝とはいえ、皆が整列している運動上は既にかかなり暑い状態になっていたため、メッセージはごく簡単に済ませました。

小学生のとき、校長が運動場に皆を整列させてする話が長くて、私が好きだった同級生のミカちゃんが貧血か何かで倒れたのを覚えています。だから、生徒を運動場に並べてする校長の長話が好きではありません（余計な話ですが、小さいときの個人的体験というのは大きくなっての公的姿勢にも影響するという一例です）。

特に今回印象的だったのは、3日の中学1年生と高校3年生対象のテストの開会式でした。左側に中学1年生が整列し、右側に高校3年生が整列しているのですが、その体格と雰囲気の違いには目を見張りました。まさに子供と大人です。10代の子供の数年の違いというのは予想以上に大きなものであります。そういった2つの全く違う年齢層の生徒達の前で話をするのは初めてであり、かなり戸惑ってしまいました。以下、その時話した内容です。<?

xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

（ゆっくりと優しい声で、中学1年生諸君のほうに目を向けながら）

「中学1年生のみなさん、おはようございます」

（早口で大きな声で）「高3の諸君、おはよう！」

（高校生の方からは笑いが漏れていました。先生方も笑っていたようです）

「さて、中学1年生のみなさん。今日はスポーツテストですね。中学1年生のみなさんは、今日自分が作った記録が、この後どのように6年間で伸びていくか楽しみにしておいて下さい。今日の記録がこれからの始まりとなる記録です。今日の記録カードにこれからの6年間の記録が付け加えられていくのです。とっても楽しみです」。

「さて高3の諸君。君たちの今日の記録は最後の記録になります。高1や高2の時の記録に比べてどうでしょうか。種目によって違うかもしれませんが、中には、勉強のし過ぎで、高2より体力が落ちている生徒もいるかもしれません。中には、この3年間、成績は全く伸びなかったけれども、運動能力だけは総合的に、そして着実に伸びたという諸君もいるかもしれません。それはそれなりに結構なことあります」・・・（少し嫌味な感じが出たかもしれません）。

「いずれにせよ、スポーツテストというのは、他人と競い合うのではなく、自分自身にチャレンジするのが目的です。自己のベスト記録を目指して頑張ってください。ただ「生命あってのベスト記録」です。暑いから十分に水分を取り、体調に気をつけて頑張ってください。暑いのでこれで私からのメッセージを終わります。

（拍手がありました、どういうわけか話を早く切り上げたときには必ず生徒達から拍手が起こるようです）

弁護士とはどんな職業か？

2010.05.27 Thu

今日、中学2年3年合同の第2回キャリアガイダンスが行なわれました。講師は本校の同窓会会長で東幸生（アズマユキオ）弁護士です。東氏は私の高校時代の同級生でもあります。

講演内容は「弁護士とはどんな職業か」というものですが、東氏は中学生を対象に話をしたことがなく、「泣く子も黙る敏腕弁護士の東氏」も講演の前には少々緊張していました。

その講演を始める前に「どういう話を聞きたいのか」について中学の方で生徒達にアンケート（下記参照）を取っていたので、一応、そのアンケートに沿った形での講演となりました。ただ時間の関係で、下記の質問の全てには答えられなかったことや具体的な事例の話が余りしてもらえなかったことが残念でした。また講演の後の生徒の質問も積極的になされたのですが、これも時間切れになって最後を打ち切らざると得なくなってしまいました。それにしても東氏自身、講演の後で本校生徒の積極性には驚いておられました。

私が聞いていて特に印象的だったのは（そして中学生にとってもそうだったと思いますが）、話の最後で述べた具体的な尋問内容でした。1審で敗訴した裁判で、その尋問により2審で見事に勝訴となった事例は本当に面白いものでした。また生徒からの「悪いと分かっている人の弁護もするのですか？」という質問については、きっぱりと「本当のことを弁護士にも言えないような人達の依頼は断る」と答えたところはさすが同級生（?!）と、誇らしく思いました。また「どういう人が弁護士に適しているか」ということに対し（1）正義感が強い（2）人間が好きである（3）文章力がある（4）数学ができる（論理性があるという意味で）と答えてもらったのも生徒達の参考になったのではないかと感じました。

ということで有意義なキャリアガイダンスでした。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<生徒のアンケートによる質問項目>

- ・ なぜ弁護士になろうとしたのですか。弁護士をされていてうれしいことやしんどいことはどんなことですか。どんな気持ちで仕事に臨んでいますか。
- ・ 弁護士になるまでどのくらいの量の勉強をこなしたのか。
- ・ 弁護士になるまでどのくらいの時間がかかるのですか。
- ・ 司法試験を何回受験されましたか。
- ・ 法律はどうやって覚えましたか。
- ・ 憲法第何条とか言いますが、本当に全部覚えなないといけないのですか。
- ・ 子どものころの夢は何だったんですか。
- ・ 弁護士はどんな仕事ですか。
- ・ 裁判はどのように進むのですか。判決までどんなことをしているのですか。何日ぐらいかかりますか。

- ・ 法廷で検察側と弁護士の関係は、ドラマにある通りピリピリしているのですか。
- ・ ドラマでは「本当は無罪なのに犯人にされた人を弁護士が弁護する。」という内容しか見たことがないですが、実際有罪の人を助けたりもするんですか。そのときどんな気持ちですか。
- ・ 1年間に何回ぐらい事件の弁護をしていますか。主にどのような事件を弁護していますか。
- ・ 弁護士になって人として学んだこと、マイナスに感じたことは何ですか。
- ・ 収入はいくらですか。テレビで30分の相談で1万円かかるといっていましたが、弁護士を依頼するときの費用はどうやって決まるのですか。1回の相談料はいくらですか。
- ・ 弁護士にも担当分野があるのですか。
- ・ 弁護士としての心構え。国家試験の勉強方法。年収などを教えてください。
- ・ なぜ弁護士になったのか。弁護士のやりがいは何ですか。
- ・ 検事から弁護士に変わる人が多いのはなぜですか。
- ・ 何時に出勤し、何時に帰宅するのですか。
- ・ 一番困った依頼は何ですか。
- ・ 新司法試験と旧司法試験の違いは何ですか。新司法試験に受かる勉強方は。弁護士の話だけでなく検事の話もしてほしい。
- ・ 裁判員制度について話してください。もし選ばれたらどうすればいいですか。検察審査会での弁護士の役割について話してください。
- ・ 私の将来の夢は弁護士です。いろいろ教えてください。
- ・ 若い弁護士に仕事がないというのは本当ですか
- ・ 弁護士が裁判で被告人を弁護して無罪にするにはどうするんですか。
- ・ 弁護士になるには何が必要なのですか。弁護士に向いている人はどのような人ですか。弁護士のやりがいは何ですか。
- ・ 悪い人の側に立って弁護をすることがあるのですか。その弁護で罪が軽くなったりすることはあるのですか。
- ・ 法学部とは主に何について勉強するのですか。
- ・ 学生のころの温井校長はどんな生徒でしたか。

テレビに映りました

2010.05.23 Sun

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

本日はNHKの昼のニュースでワタシの映像が流れました。と言っても「アツという間の顔出し」でした。

気づかれなかった方も多くいたかと思われませんが、それは何かと言いますと、大阪で初めて開かれた「教員採用フォーラム」（私学合同採用説明会）というのが開催され、そのことに話題性があったからです。もちろん私に話題性があった訳ではありません。このフォーラムは、私学の教員を志望する人たちを対象にする合同の会社説明会のようなもので、東京では既に開かれており、多くの教員志望者を集めていました。

本校はこのフォーラムが大阪でなされると聞いた時、すぐに参加を申し出ました。結局は全部で10校の参加がありました。本校では、朝から始まる当フォーラムに、各教科から教科主任を含む2名の教員、あと教頭や教務部長など総勢15名の陣容で臨みました。

こういったフォーラムへの積極的な参加も、本校の「教育の中心は教師である」という信念に基づくものであります。

さて午後からは「私学の魅力」と「プロの教師像」について語るように主催者側からの依頼を受け、教員志望者を対象に約1時間にわたる講演をさせていただきました。講演では先ず「教育は奇跡を起こせる」という話を本校での具体例を交えて語り、中盤は主に「私学で働くことの魅力」について語り、後半は「教師に必要な資質」などについて語りました。

最後は質問を受け付けました。その質問の1つは結構プライベートな質問で、私自身の教員志望や教員1年目について語らざるを得ませんでした。

また「私は話すのが得意でないけれど、どうすればいいか」と言う質問も受けました。

以上の中から「教育は奇跡を起こせる」という点、「私学で働くことの魅力」、「私自身の教員志望と教員1年目」、そして「話すのが得意でないけれど、どうすればいいか」などについて、今後のブログで書かせてもらう予定です。

お蔭で4つも書き上げました

2010.05.16 Sun

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

このブログを含め本日は4つのブログを書きました。お読みいただける方は当ブログの4つ前にある「変えるのはあなただ！」からお読み下さい。

実は昨日PTA懇親会の席で、各テーブルを回らせていただきましたが、その際、結構多く保護者の方から「校長のブログを読んでいます」という言葉をいただきました。実にありがたいことです。と同時に、「もっとブログを更新するように」というプレッシャーも言外の意味で感じ取りました（笑）。

ということで一挙に私のハンバーガーショップ書斎（ブログ「最適なる学習環境」参照）で、ブログを4つ書き上げました。これで一週間ぐらいは自分に課した「苦しくも楽しいプレッシャー」からは解放されそうです。

ところで

昨日、上記の懇親会の席で、新たに学級委員に就任していただいた保護者の方への挨拶を兼ねて各テーブルを回らせていただいたのですが、時間が足らず正面右側におられた半数近くのテーブルまでは回り切ることができませんでした。懇親会に来ておられた全ての保護者の方々に直接ご挨拶したかったので実に残念でした。次回の懇親会では正面右側からご挨拶に回らせていただきます。

温かくお迎え下さい。

校長、お痩せになったのですか？

2010.05.16 Sun

昨日、PTA委員会等が終わり、4時から懇親会に入りました。その懇親会の受付時に、ある役員の方から「校長、お痩せになったのですか？」と聞いていただきました。そのことを受けて、私は懇親会の挨拶で、そういった校長の体調に気遣ってくれるのは保護者であり、非常にありがたいことであるという話をさせてもらいました。そして懇親会には何名かの教員も出ていましたので、「それに比べて教員の誰一人、私が痩せたのか太ったのか気にかけてくれない」と皮肉も言わせてもらいました。ただ皮肉ではありましたが、同時に「よく考えれば、教員は生徒のことに目を向けておけばいいので、校長の体調なんか気にしている時間も余裕もあってはいけません。そして校長の仕事は、そういった生徒のために懸命に働いている教員の顔色を見ていることかも知れません」というフォローも一応はしておきました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

実際その通りだと思います。私が気遣う教員の顔色というのは、「顔色を窺う」の顔色でなく、「顔色がいい、わるい」の体調のことです。（私にとって顔色を窺うのは宇宙のカミさんと家庭のカミさんだけで充分であります、余計なハナシですが・・・）。ただし、直接生徒との接触が余りない校長の私と違って、各担任や教科指導の先生方は、両方の意味で生徒の顔色を見なければなりません。

例えば「叱るときには叱ることが大切」な事は言うまでもありませんが、それでもやはり厳しく叱りながらも、今自分が言っている叱責の言葉がどういう影響を生徒に与えるか、もっと言う必要があるのか、もうこれ以上言っただけではいけないのかを窺いながら、生徒を叱る必要があるかと思えます。怖くても生徒から信頼されている先生というのは、ただ単にいつも怖い先生であるのではなく、厳しいながらも生徒の顔色を窺っている先生です。そして何よりも生徒に愛情を持っている先生です。愛情を持っているからこそ、それぞれの生徒にはどこまで言えるかを見極め、叱っているときも顔色を見ながら、叱った後もフォローを忘れずにできる先生が、本当に生徒から信頼される先生であり、プロの教員（4月2日付けの当ブログ「プロでない条件」参照）と言えるかも知れません。

そういった先生が本校には実に多くいることが私の誇りであります。「全員ひとり残らずそうではないのですか？」・・・そうです。ひとり残らず、そうあります！

但し、念のため、このブログは教員全員にも読んでもらうことにいたします。

2010.05.16 Sun

5月8日のPTA総会に引き続き、一週間後の15日はPTA委員会総会が行われました。その後、中学部会や各学年部会が行われ懇親会も開催されました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

その席で私はたまたま前日観たテレビの内容に言及して「子供部屋が必ずしもいい学習環境であるとは限らない」という話をさせてもらいました。その番組では「子供部屋を持った子供はえてして自分の部屋で漫画を読んだりゲームをしたり友達とメール交換に時間を費やし、余り勉強はしない」ということをデーターや子供へのインタビューに基づいて教育の専門家が述べていました。いわゆる勉強の良くできる子供たちの多くはリビングルームを学習の場に行っているとのこと。リビングルームだと親の目が行き届くし、寂しくないので結構自学自習を続けられるとのことでした。

特にこの傾向は中学ぐらいまではよく当てはまるのではないかと思います。私自身も静かな場所では集中して読書や書き物ができない性癖（?!）があり、そういった話もさせてもらいました。

実際、私にとって一番そういったことに適した場というのは（最近では）家の近くの公園の前のバーガーショップの2階です。ここは私にとって「書齋活動の場」で、特に休日などはよくそこで読書をしたりワードで依頼原稿など打ったりしています。最初にコーヒーを飲んで途中でココアを飲んで3時間ほど粘ることもあります。

そのあと更に「学習の場」に言及して、私が生徒達に「自分に適した学習環境」を見つけるように指導していたことも話しました。実際に学習を進める要素として「とりあえず勉強にとりかかる」「3日坊主になっても5日目からまたやる復元力」そして「自分に合った学習環境」などを指導していました。

そういった指導の中で、玉造に住んでJR環状線を通っている或る生徒が私の指導に従って帰宅時に天王寺で「とりあえず」勉強の本を開いたそうです。そして気がつけば玉造を通り過ぎてしまっていたそうです。そこで仕方がないので勉強しながら環状線で一周したそうですが、そのとき「自分には環状線が合っている！」ということに気づき、それから「環状線学習生徒」となったそうです。冬は暖房、夏は冷房で最高だということで、周遊回数（?!）を1周から2周、そして3周へとハードルをあげていったそうです。そして彼はある時私の所へやってきて「今では4周するときもあるんですが、その時には3周目に鶴橋構内のパン屋さんでパンを買って食べるのを励みにしています」という話もしてくれました。まあ、とても面白い話ですね。（でもこの話、JRの方が読んでも、どうかお許し下さい。今は昔のことですし、自分に最適な学習環境を見つけるようには勧めましたが、JR環状線がいいと決して勧めたわけではありません。それに今は図書館やバンバーガーショップの禁煙席などは勧めることはあっても、決して環状線学習を勧めてはおりません。（言い訳ばいですが誠にすみませんでした）。

ということで、PTA学級委員総会でさせていただいた話を終わります。

変えるのはあなただ！

2010.05.16 Sun

5月8日、PTAの総会の前に、PTA新旧役員交代の会議が行われました。その席で、私は今まで積極的に本校のPTA活動に携わっていただいた旧役員に対してお礼を言うとともに、今年度新たに役員となられた新会長を始めとする方々に挨拶をさせていただきました。

その挨拶で使った言葉が「選ばれたのには意味が或る」という生徒の作ったキャッチコピーです。この言葉は先月下旬に行われた「三役合宿」の生徒制作のパンフレットの表紙に書かれた言葉です。3役合宿というのは、昨年まで「委員長合宿」と呼ばれていた1泊の合宿で、高校1年の各クラスの委員長と副委員長とが集まり、互いに交流してクラス同士の連携を深めるとともに、先輩自治会役員をサポートの下に、委員長・副委員長としての自覚を培うための合宿です。今回からは今までの委員長・副委員長に書記が加わることになったので「三役合宿」と呼ばれるものとなりました。

さてその生徒達が制作したパンフレットの表紙に書かれた「選ばれたのには意味が或る」の下には、非常にクズれてケバくてヤバい感じの男女の高校生が描かれています。当然服装も乱れていますし、女子はまさにマスカラをつけようとしているイラストです。いわゆる「全く高校生らしからぬ服装」で、本校の生活指導部長が見れば卒倒しそうな男女のイラストです。初め私がこの表紙を見たとき何でこんなイラストが描かれているのか、頭の中は???状態になったのですが、その???は裏表紙を見たときに!!!に変わりました。裏表紙は、表紙とは対象的な生徒が描かれていました。爽やかで目が輝いている高校生が描かれています。その片腕は未来を指しているように前に差し出されています。そしてそのイラストの上には「桃山を変えるのはあなただ！」というキャッチコピーと英文での説明が添えられていました。（残念ながら英文には2, 3の間違いがありますが、それでも敢えて英語で表現しようとした積極性には敬意を表します）

このパンフレットの中身は要するに合宿の実施要項ですが、この合宿の意義が表紙から裏表紙のキャッチコピーとイラストの違いで端的に表わされている気がします。

本当に、今回のこういったパンフレットに限らず、生徒達が自ら制作する作品の瑞々しい創造力に驚嘆することは少なくありません。

話を元に戻しますが、私もこのパンフレットを見て、なるほど桃山を変えるのは生徒達ひとりひとりである、そしてそういった生徒達を教育する教職員ひとりひとりの努力と情熱にあると痛感しました。

と同時に、保護者の方の積極的な関わりも、生徒達を健全に育てていく大きな要素となるということも併せて力説させていただきました。

とういことで新役員の方々、学級委員の方々、生徒達の健全な育成を図るためPTA活動への積極的な参加を宜しくお願い申し上げます。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

何で来たんですか？

2010.04.29 Thu

4月初旬、六甲のYMCAにて2泊3日で行う中学1年生対象のオリエンテーション合宿に顔を出させてもらいました。この合宿は、共同生活を通じて互いが知り合い、新たに始まる中学生活に慣れてもらうために行われています。またそこでは数学や英語や国語など各教科の勉強の仕方や学習への取り組み方等を教えることになっています。私が訪れたとき、あるクラスはカヌーの練習をしており、あるクラスはハイキングをしたりしていました。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

入学式の時にも感じたことですが、ピッカピカの中学1年生は「本当に可愛い」ものでした。また付き添いの先生方や現地のインストラクター達の大変さにも思いを馳せました。とにかく、すぐに走り回るそうです・・・。

さて私がその合宿を訪れた時、その中学生達は私の姿を見つけると「ワア、校長先生！」と元気な声で喜んでくれました。中には「校長先生、何してるんですか？」と聞いてくる生徒や、「校長先生、何で来たんですか？」と質問する生徒もいました。それに対して私は「それはねえ、みんなが楽しく仲良く過ごしているか見に来たんだよ」とか「家を離れて寂しがっている子がいなか心配で来たんだよ」というふうに答えさせてもらいました。これが高校2、3年生の勉強合宿なんかの訪問だったら、おそらく「サボってないか見に来たんや」とか「電車で来たんだよ」と冗談交じりに話すんですが、さすがに初々しい中学1年生達の純な問いかけには、そういった冗談も言えない雰囲気でした。

そして夕方5時から「数学の学習」についてのオリエンテーションが始まりました。その前に校長から一言ということで、中学1年生全員を前に「人を第一印象だけで判断しない大切さ」や「勉強を楽しむ」ということについて簡単に述べさせてもらいました。普通私は高校生達に話をしていると、どうしてもアレも言いたい、コレも言わなければならないという気持ちが先行し、早口で喋ってしまう傾向があるのですが、今回は最後まで早口にならないように意識し、ゆっくりと語りかけるように話をしました。みんな、カヌーやハイキングや昼の自炊などで疲れ切っている筈ですが、一人残らずそういった私からの話を真剣な表情で聴いていました。また私のあとの塩田先生からの数学の話も、真剣にノートを取りながら聴き取っていました。その間、私自身、本校の教員達に感動したことは、数学のオリエンテーションの時間にも係わらず、合宿に参加している全ての教員がその時間に加わり、生徒達の取っているノートを見たりしながら机の間を巡回したり、プリント配布の手助けをしたりしている姿でした。当たり前と言えども当たり前ですが、一つのこと、例えそれが他教科の時間であっても、全教員が関わるという姿勢にこそ、本校教師の真摯さがあるように思えました。校長としては誠に嬉しいことですが「この学年も学年担当の先生達に任せておいて大安心！」という気持ちが湧き上がって来ました。と同時に、「こういった中にも私学の素晴らしさがある」という印象も持ちました。少々手前味噌ですが、「自分の子供は絶対桃山中学に入れたかった」という思いにも囚われました。

中学教頭からは、中学1年、2年でシツカリと「見えない実力」を養ってきた中3生徒達の成績がかなり伸びてきているという報告を受けています。

今後、この中1生徒達が桃山の中でどのように成長を遂げていくかとても楽しみに思っています。と同時に、今年度も中学1年生から高校3年生に至るまで、保護者からお預かりしている大事な子供達に対して、私達も最大限の努力で教育的な責務を果たしていかなければならないと痛感しています。

プロでない条件

2010.04.02 Fri

4月1日、新たに本校の教員となるフレッシュ・パーソン8名を対象に本校のチャペルで祝福式を行いました。またそこで辞令の手渡しも行いました。辞令を手渡す時、「～先生」と敢えて「先生」というタイトルで各新人の名前を呼びました。そして「今日からイヤでも先生と呼ばれるので、先生と呼ばれることの自覚を持って、そのタイトルに恥じない働きをして欲しい」という旨のことを述べました。そのあと2班に分けて私からの訓示を校長室で行いました。既に各部署でのオリエンテーションは3月中に終わっていましたが、私から訓示を受ける新人教員達は緊張した面持ちで、私の前のソファや椅子に腰掛けました。まさにフレッシュ・パーソンと呼ばれるに相応しい初々しさでした。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

そこで私からは先ず「働くことの意味とは何か？」という質問をさせていただきました。

誰ひとり、私からの訓示が「問いかけ」から入るとは予想していなかったと思います。サプライズであったと思います。（実は物心ついた時から私はサプライズやワンダーがとても好きなのです。ただ校長になってからは、サプライズやワンダーが過ぎると、周りから不安がられるのは確実ですし、それなりの「体面」もありますので、ワンダーやサプライズは控え目にさせていただいています）。

それはさておき、とにかく一人ずつ違うことを答えなければならないと思ってか、皆さん本当に大変そうでした（これも新人トレーニングの一つだと思っています。と言うのも生徒の瑞々しい感性や予測できない言動に、慌てず騒がず対応するのも教師の資質ではないかと思うからであります）。

特に答えるのが最後になると答える事がなくなるという不安があったのでしょうか、先ずわれ先に答える新人、戸惑いながらも何とか皆に遅れまいと答える新人、皆に遅れながらも慎重に言葉を選んで答える新人、それぞれの個性が光って面白く感じました。

さらにひとつのグループには「プロとはどういうものか？」という質問でも責めてみました。この質問に対する答えも各自かなり面白いものでした。

さすが皆さん各教科の厳しい関門を切り抜け、最終面接でも合格しただけの力量や情熱を感じ取ることのできる応答でした。

その後、私からの訓示として、以下のような趣旨の「プロでない条件」ということを述べました。少し変わった角度からの話かもしれませんが、何かの参考にしていただければ幸いです。

<プロでない条件>

1. 気分・感情で働く。

つまり、プロであるなら、どんな体調が悪い時でも、生徒達への対応は常に最高のコンディシ

ョンの時と変わらぬように、どんなに気持ちが塞ぐようなことがあっても、生徒達にはいつもと変わらぬように接しなければならない、と述べました。

一例として、私自身の体験で（別に誇れるような体験ではありませんが）、朝の4時ぐらいまで痛飲していて、各停列車で各駅で嘔吐しながらも出勤を果たし、授業を元気一杯の振りをしてやりぬき、さらには8時まで講習をやったときの「身体の疲れと魂の歓び?!」というものを語らせてもらいました。（ちなみに「飲んだら休むな、休むなら飲むな」が父親から伝えられた数少ない我が家のモットーです。）

2. 「忙しい」という言葉や態度で生徒からのアプローチを遮断する。

よく生徒は質問に来ます。その場合、本当に質問したい場合もあれば、質問にかこつけて教師とコミュニケーションを図りたいときもあるのです。

つまりプロならば、そういった生徒からのアプローチには常にオープン&ウェルカムでなければならない、ということです。例え、実際に超多忙なときでも「今は忙しいけど、放課後ならゆっくり話もできるよ」ぐらいの応答はしなければなりません。

3. 声が小さい。

どれほど小さな声であっても、人格的な力で生徒に静聴させられるならいいけれど、それができない場合は、声だけでも生徒達全員に届くようにしなければならないということ。だから私自身も声だけは「大きく」を心がけていました。できないなら発声練習をしてでも訓練しなさい、ということも述べさせてもらいました。

4. 喋れない。

言わないでも分かる、は親しい者同士、以心伝心で伝わるのは大人の世界。まだまだ若い生徒達に大事なことを伝えようと思えば、言葉を尽く心を尽くしあらゆる角度から語らなければならない、ということ。お喋りになる必要はないにしても、教師としての表現力は磨かなければなりません。

これは対生徒達にばかりではありません。保護者との懇談会でも、保護者の方が気を遣って話し掛けてくれるようでは、やはりプロとは言い難いでしょう。

5. ポイントを押さえられない。

よく喋るのはいいけれど、何が言いたいのか伝えることができない。

「要するに何なんだ」ということが必要です。

6. 下ネタ。

まさかそういう教師はいないけれど、私が敬愛する教育学の先生から言われた「生徒に絶対に言ってはいけない3つの事のひとつ」。男子生徒なんかは喜ぶかもしれないけれど、確実に「心では軽蔑される」ということ。

7. 同僚の悪口。

例えどんなに気に食わない同僚がいても、絶対に生徒達に「特定教員の悪口」を言ってはいけません。純な魂は「平気で同僚の悪口を言う教師がどんな教師か」は判断せずに、教師の言ったことを信じます。（特に校長の悪口は絶対にいけませんぞ!）これは上記の「生徒に言ってはいけない3つのことのひとつ」。あとひとつは「特定政党支持の話」です。

8. 同僚の評価だけを重視し、同僚の目だけを意識する。

同僚にどう思われるか、先輩教員にどう扱われるか、管理職にどう見られるか、が関心の中心になるのはいけません。大事なのはあくまでも「生徒」です。生徒達をどう教え育てるかです。生徒のために「良し」とするなら、全ての教員を敵に回してでも「頑張って」下さい。

9. 叱れない、怒れない。

生徒達に愛情を持って温かく優しく接するのは大事です。しかし、本当の愛情があるなら、「ダメなものはダメ」とシッカリ叱れること、「これだけは許せない」とシッカリと怒れること（あるいは怒る振りをすること）が必要です。

10. 学ぼうとしない。

面白かったのは、最初の新人グループの教員の何人かが今述べてきた話の内容をノートに取っており、あとの何人かはノートも取らずに聞いていました。そこでひとこと「なぜ、今私が語っていることをノートに取ろうとしないの？学ぶという姿勢がないの？」とノートを取っていない新人達に問いかけました（イヤな校長ですね！）

とに角、老いも若きもシッカリと学んで欲しいと願っています。私も校長になってから色々と学ばせてもらっております。

最後に「教師であることを喜べるようにして下さい」ということと「挨拶はしましょう」ということで、私からの訓示(?)を終わりました。

自分が明るく前向きでなくて、どうして生徒達に「明るく前向きに生きること」を伝えることができるのか、自分が挨拶ひとつできなくて、どうして生徒達に「挨拶するように」と教えられるのか、ということを述べさせてもらいました。

以上です。

ということでいよいよ新学年のスタート！！

2010.03.31 Wed

2009年度も無事に終わり、今年度最後の職員会議で「学校長からの挨拶（メの言葉）」を全教員に述べるように天井教頭から言われました。恒例だそうです。ただ、あまり時間がないので、詳しくは社内メールで送らせてもらい、口頭ではごく簡単なコメントで済ませるということにしました。

そこで口頭では「組織内に於ける理想的な意思決定のあり方」について述べました。

ただし、あとで天井教頭からは、口頭でも十分長かったじゃないですかと指摘されました（笑）。

以下は私が全教員に社内メールで送った内容の抜粋です。

<教員の皆さまへ>

学年末に当たっての挨拶<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

今、校長室でひっそりと学年末に向けての（教員の）皆様への挨拶を書いています。

1年間いろいろありましたが、今年度も無事に終えられそうで、内心ホッとしています。

私も微力ながら、教職員の方々に支えられ、1年間、無事に校長職を遂行することができました。このことは偏に教職員の方ひとりひとりの熱意に満ちた働きと生徒への真摯な関わりや保護者への適切なる対応があつてこそそのものと深謝しております。

思い起こせばちょうど一年前の今頃、校長になるに当たってかかり付けの医師に身体の状態を診てもらいました。そのとき言われた言葉は、「先生、校長になって大変だと思います。ストレスで倒れないようにして下さい」というものでした。それに対して「僕は大丈夫だと思うけど、僕の周りの人がストレスで倒れるかも知れません」と答えました・・・。

運営委員会の先生方や事務職の方々、ありがとうございました。両教頭をはじめ私の周りの人たちも、私によるストレスで倒れることなく、1年間一生懸命頑張っていただきました。

さて校長となって気付いた事がいくつかあります。そのうちの1つは「教師っていいなあ！！」ということです。担任をしたり、教室で授業をしたり、生徒と直接関わったりすることが、大変なことや苦勞することがあつたにしても、どれほど輝きに満ちたことであつたか、初めて分かつたことであります。

20年以上も前、恩師のY先生が不治の病で入院し、その人を病院まで見舞いに行ったことがあります。その時、その先生は「一生懸命、患者の世話で忙しく働いている看護婦さん達がみんな眩しく見える、輝いて見える。本当に働くということが、働けない者から見て、これほど眩しく、これほど羨ましいことだとは思つてもみながつた」というようなことを言っておられました。今の私には、日々、教育の最前線で働いておられる先生方の姿が本当に輝いて尊く見えています・・・。

また校長になって気付いたことがあります。責任の重さであります。

その責任は何に対する責任かといいますと、当然今いる生徒や保護者全員に対する責任ということもありますし、教職員全員に対する責任でもあります。と同時に、桃山の将来に対する責任を痛感しています。

皆様もご存知のように、桃山には「実にいいところ」がたくさんあります。125年間のあいだに築かれてきた良き伝統というのもあります。と同時に、早急に解決しなければならない、あるいは中長期で解決していかなければならない課題というのもあります。また私学に対する逆風も更に強まっていく気配さえしています。そういった逆風の中にありながらも、みなさんと共に力を合わせ、叡智を結集し、全てをプラスに転じ、桃山を更に素晴らしい教育の場にしていくことこそが、ここで働く私たち全員に課せられた「生徒・保護者への、さらには桃山の将来に対する責務」ではないかと考えています。

何回も何回も言っていることですが、今年度125周年を盛大に迎えることができたように、25年先の150周年も皆で団子でも食べながら（本校に近くに美味しい団子屋さんがあります）笑って迎えるようにしなければならぬと思っています。25年先なんてすぐにやってきます。私も100周年を迎えたことを昨日のように思い出すことができます、ほんの一部を。

安心して下さい、「そう言えば、あんな校長がいた」と苦笑交じりで（?!）思い出してもらえる日なんていうのも、すぐにやってきます。

個々の生徒の良き可能性を見出し、それを最大限に伸ばし、保護者の方々の期待にも十二分に応えていけるよう、新年度もさらにいっそう精励努力し、日々の教育活動に邁進していきましょう。

ということで、新年度も宜しく願います。

子育ては難しい、第2弾

2010.03.07 Sun

昨日、ある方から、私が今年の10月22日のブログで書いた「子育ては難しい?!」の第2弾はまだですかとの指摘を受けました。その方も、それなりに子育てには苦勞しているようで次の話(第2弾)を待っているとのことでした。

ということで、「子育ては難しい」の第2段!

前回のブログで書いたように、実際どういうふうになれば子育てが上手くなされるかは不確定要素が多すぎることも確かです。ということで、私自身の経験からも、ある程度は自信を持って言えることだけを書かせてもらいます。

まず第一に「母親が父親の悪口を子供に言ってはいけない」ということです。

このことは平成12年に240万部のベストセラーとなった「だからあなたも生きぬいて」の著者であり、多くの少年少女の非行問題に弁護士として関わってきた大平光代さんも言っていることです。これは私自身も実感していたことなので、そのまま大平光代さんの言葉を引用させてもらいます。

「母親が父親の悪口を言う家庭はどこも暗い。『お父さんのようになってはだめ』と言っても子供にとって父親は父親。『お父さんってすごいんだよ』と話せば、子供は真っ白な心で尊敬し、やがて母が言って聞かないことも、父が言うのを耳を傾けるようになる」と。

私も全く同感です。母親が常に父親の悪口をいっている家庭で育つなら、母ひとりが頑張って子供を育てているほうが遥かに「子育てにはいい環境」だと言えるでしょう。

第二に、あまりにも「不自然で極端な育て方はマイナス」ということです。その日その時の気分感情だけで子供を育てると「情緒不安定な子供」や「大人の顔色ばかり見る子供」にさせてしまうことはよくあります。ましてや虐待はご法度です。虐待されて育った子供は極めて「自己評価レベル」が低くなり、あらゆることに懐疑的悲観的で幸福感を持ちにくくなると言われています。反対に気分感情を交えることなく、いわば「子供はこうあるべきだ」という理念や理屈でばかりで子供を育てると「温かみのない子供」や「いい子であることに疲れる子供」にさせてしまうことはよくあります。なんでも「ほどほどで自然」がいいかも知れません。昔、アルファ波(つまり安定した気持ち)で子供を育てるべきだというようなことが書かれた本がありましたが、私は間違っていると思います。私達が子供を育てた経験から言っても、子供をアルファ波などで育てることなんかできません。

中には常に親も安定した平常心を保っていることができる「手のかからない子供」もいるかも知れませんが、大概の子供は親のあり方を揺さぶるものです。感情的に怒ったり、怒りすぎたと反省したり、理屈でいろいろ言ってみたり、「こんな子供なんていらん」と思ってみたり(子供からは「こんな親なんていらん」と思われ)、たまには「良いところもあるなあ」と喜んでみたり・・・、いろいろな関わりの中で、親も迷いながら子供を育て、親も親として成長していくのが実情ではないかと思えます。

第三に、「愛情だけはしっかりと持っている」ということが大切だと思います。ただ問題は愛情

のあり方と表し方。

よく子供に何かを無理強いさせながら、「全てこれもわが子を思つてのこと」と思い込んでいる親がいますが、結局それは自分が叶えられなかった、あるいは夫に叶えてもらえなかった(?)自分の夢や自己実現の要求を、子供を通じて叶えようとしているだけのことで、果たして愛情と言えるかどうか疑問です。うちの子供は絶対に「イチロー選手のようにするんだ」とか「iPS細胞の山中教授のようにするんだ」という夢を親が持つのはいいかと思いますが、それもある程度子供の気持ちや資質を見極めてのことが必要であるかと思ひます。野球より学問が好きの子供に野球を無理強いするのは酷ですし、学問よりも野球が好きの子に勉強ばかりやらせるのも酷であるかと思ひます。やはり子供には「持って生まれた才能」もあれば「それほど持っていない才能」もあるかと思ひます。すべての子供はあらゆる才能を持っており、すべて努力しさえすればどんな才能でも花開くというのは非常に楽観的な哲学であります。ただ哲学であるうちはいいのですが、その哲学を信仰のように親や教師が持つてしまうと、悲劇を生むこともあるかと思ひます。

夢を育ませてやるのも親や教師の務めなら、(大人の目で見ても)不可能と分かる夢を適切な時期に適切なやり方で放棄させてあげるのさえ親や教師の務めとなる場合があるかもしれません。

閑話休題

幼い時にはシツカリと子供の身体を抱きしめ、少し大きくなればシツカリと子供の気持ちを抱きしめ、中学生になればシツカリと子供の気持ちを受け取り、高校生になれば「知らんぷりして」子供のお世話……。本当に子育ては難しいですね。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

最後に、子供がいくつになつても「ダメなものはダメ」という覚悟。

幼い子供に泣き叫んだら親は何でも言うこと聞いてくれると思わせないためにも、おもちゃ売り場で「ダメなものはダメ」と言わなければならないように、大きくなって「何で死んだらいけないの?」と万が一聞かれても「ダメなものはダメ」と自信を持って言う覚悟。

このことは教師にも言えることです。いじめはダメ。自殺はダメ。授業中の私語はダメ。ダメなものは何があつても絶対にダメと言う毅然とした態度が必要かと思ひます。

愛情があればこそ、厳しくできることもあるかと思ひます。

このことは子育てにも教育にも相通ずることあります。

当方が思う以上に生徒は教師をよく知つています。教師の気持ちをよく見抜いています。生徒を厳しく叱つたとしても、生徒のほうで「この教師は僕のことを気にかけてくれている」とか「この教師は私のことを心配してくれている」と分かつていれば、決して厳しく叱られたことを恨みません。例えそのとき恨んでも、いつかきつと叱つたことを感謝してもらえらるでしょう。ただ、恨まれようと恨まれなくても、感謝されようとされまいと、叱るときには叱るのが教師としての務めであります。また親としての務めであるかと思ひます。ただただ優しいだけが「いい先生」や「いい親」ではありません。もちろんただ厳しいだけが「いい先生」や「いい親」ではありません。

と言いながらも、すごく甘やかされて立派に育っている子もいれば、すごく厳しく育てられて温厚に育っている子もいるのです。子育ても教育も私がよく言う「見えざる神の手」が関わっているのかも知れません。

ということで、最後は祈りで締めくくります。

<神様、すべての子供たちが自分の持つ良き可能性を十二分に伸ばしていくことができますように！そしてそのために必要な全ての関わりを日々私達が愛のうちに成し遂げていくことができますように！すべての子供の保護者、そして教育に関わる私達すべての教職員の上に、子供たちを正しくはぐくみ育てる叡智と力とをお与え下さい！この小さな願いと祈り、主イエス・キリストの御名を通じて御前にお捧申し上げます、アーメン>

教室でのナマの生徒達

2010.03.05 Fri

今週の初め、アスリートクラスの保健の授業で、生徒達の前で話をする機会を持たせてもらいました。まあ、印象としては、みんな明るいこと、明るいこと！！

明るければいいというものではないけれど、とにかく明るいということは生きていく上で非常に大切な要素ではないかと思えます。ただ、願わくは「ただ明るいだけの男の子」では終わってもらいたくありません。そこで・・・、私がアスリートクラスの生徒達全員を前にして話した内容は、「自殺願望を持った人との電話での対応」という非常に重いテーマでの話とさせてもらいました。この話は私が「関西いのちの電話」の相談員として訓練を受けた時の話です。

いのちの電話の相談員を退いた今も守秘義務があり、具体的なケースについては話せませんでしたが、人の生命や人生について考える縁（よすが）となってもらえたのではないかと考えています。

ただ、そういった話だけでは納得しない「期待通りのアスリートの生徒達」ではありました。

授業の後半の10分ほどは、私が昨年「よいこ部」という放送で取り上げられた気功についての実演を求められました。

いずれにせよ、私にとって久しぶりに教室という場で「ナマの生徒達」と接することができた貴重な60分でした。

担任の先生方、自習などで時間があいた折には、是非お声かけ下さい！！

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

新たな地平線に！！

2010.02.23 Tue

第62回の卒業式がダビデジムで行なわれました。本学院創立125周年記念事業の一環として建てられ、今年の春から使い始めている新体育館での卒業式でした。2000名収容できる大きな体育館ですが、620名の生徒やその保護者の方々、また多数の来賓の方々で一杯になりました。

そして最初から最後まで厳粛な中にも温かい祝福の気持ちが満ち満ちた卒業式でした。

特に私にとって印象的だったのは、各クラスの生徒の名前がひとりひとり担任から読み上げられたあと、クラス代表が壇上に登り、私から卒業証書を受け取る瞬間でした。たまたま1組の最初の代表者が卒業証書を受け取る時に、私に手を差し出してくれたお陰で、握手が最後のクラス（18組）に至るまでなされました。壇上で卒業証書を受け取る時にシッカリと私と目を合わせる生徒、嬉しそうに微笑んでくれる生徒など、様々いましたが、どの生徒達からも、汗ばんだ手から伝わる緊張と同時に、「新たな地平線に向かって進んでいく」という意気込が伝わってきました。

ただ、ひとりの生徒、O君という生徒だけは、壇上で私との握手を忘れたようでした。私の知っている本当に素晴らしい生徒ですが、おそらく緊張していたのでしょう。

ということで、卒業式終了後、私はO君を校長室に呼んでもらって、シッカリと握手をし、余分に一本「ピカピカの合格鉛筆」を贈らせてもらいました。

実はもうひとり、校長室に呼んで握手し鉛筆を手渡した生徒がいました。それは「決意のことば」を卒業生代表として述べた3年生のN君です。その内容の素晴らしさもさることながら、その決意を述べる堂々とした姿勢と清々しい態度に私を含めて会場みんなは強く感銘を受けたようです（以下掲載）。

本当に、みんな立派に成長を遂げました。式典での態度を見ていると、生徒ひとりひとりの成長が実感できました。

卒業式のあとは、各自教室に帰って担任との交流、さらにはグラウンドでの記念ツーショットなどが賑やかに行なわれていました。そんな折、校長室にいる私は「少し寂しい思い」をしておりました。ひとりぐらい校長室を訪ねて来てくれてもよさそうなものなのに……。

また、場所を移動しての慶びと祝福と感謝と涙の混じった謝恩会、それら全てを含めて、最高に素晴らしい一日でした。

それにしても謝恩会での各担任の話は長かったですねえ……、「教師というのはとてもシャベリ」だということを再確認させていただきました（笑）

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

最後に改めまして、3年間にわたり、本校の教育に対して温かい理解と支援をしていただきました保護者の皆様に心から感謝申し上げます。



<卒業式のワンシーン>

決意のことば

2009年度 卒業生代表

梅のつぼみもふくらみ何となく春めいてきた今日この頃、入学して3度目の季節となりました。桃山学院で過ごした3年間は、何事にも変え難く名残惜しいものです。しかし、私たちにはこの先まだやるべきことがたくさんあります。今日は、その単なる通過点に過ぎません。この高校生活で得た学び、そして仲間と共に私たちは今日、卒業します。

先生方、私たちを心身共に大きく成長させていただきありがとうございました。進路や友人のことなど親身になってお話して下さったことは、本当に感謝しています。私が3年生になり以前よりもまして受験を意識するようになると、自分のやっている勉強方法でいいのかとあらゆることが不安になりました。焦る気持ちから集中力に欠けていた時、いろいろな先生方から「俺に付いてきたら大丈夫や」とか「自分を信じてやり続けろ」「不安になる暇があったら問題解きなさい」「1日だけ勉強から離れてみ」など様々なアドバイスを頂きました。このようなアドバイスが本当に自分の支えになりました。先生方の指導に反抗することもあり、たくさん迷惑をおかけしたと思います。しかし、私たちのことを思い厳しく指導して下さったことを、今では心からありがたく思っています。

お父さん、お母さん、今日このように無事、卒業式を迎えさせてもらい本当にありがとうございました。今日に至るまで、私たちの知らないところでたくさん苦勞をかけたことだと思います。反抗し、衝突することもありました。心の中では、自立していない自分を桃高生として生活させてもらっていることに感謝の気持ちがありました。しかし、その気持ちを素直に出すことができない自分もいました。3年生になり卒業を迎える今、その感謝の気持ちがいつもにもましてこみ上

げてきます。

在校生のみなさん、拙い私たちでしたが、いつも「先輩」と声をかけて挨拶してくれてありがとう。学年を超えて関わる機会というのはあまり無かったけど、文化祭や体育祭で頑張っている姿を見て多くのことをみなさんから学びました。これからもみなさんの桃山での生活が、充実したものになるよう祈っています。

同級生のみなさん、3年前の春、私たちはそれぞれの想いを胸に入学し、出会いました。初めは緊張や戸惑いが多く、ぎこちない関係でしたが、日が経つにつれ、そして行事に取り組むにつれ、私たちはかけがえのない仲間となりました。それぞれ進む道は違っても、また再会したときには笑って思い出を話し合えることを願っています。

どうして楽しく、充実した生活というのは時間をも忘れさせ、過ぎ去っていくのでしょうか。楽しかったことや、つらかったことのすべてが、かけがえのないものに感じます。桃山で過ごせたことを誇りに思い、胸を張って新たな道へ進んでいこうと思います。3年間、本当にありがとうございました。

万が一？！

2010.01.25 Mon

センター試験を目前に控えた1月14日（木）、高校3年生を対象に「大学受験者のための祈り」と激励会を行いました。その中で私からは、「試験当日アガらない」秘策について述べました。お陰でセンター試験が終わり自己採点にやってきた生徒の何人かからは「効果があった！」との報告も受け、とても嬉しく思いました。

また1月18日には2月下旬に行なわれる卒業式に向けての礼拝が行なわれました。その際、私からは、「浪人をしてはいけないタイプの話」とともに「万が一大学受験に失敗し浪人せざるを得ない場合には・・・」という話もさせていただきました。

例えば、浪人をしてはいけないタイプの1つは「現役中に既に浪人を計算に入れている」タイプの生徒である、というような話です。要するに現役合格を果たしている同級生を尻目に「先生、見事～予備校の難関コースに受かりました」というような生徒ではいけないというような話です(笑)。

反対に「浪人をしてもいいタイプ(?)」及び「正しい大学受験の落ち方」(笑)の話もしました。まだ大学入試の結果が分かっていないのに何という不謹慎な話をする校長だと思われるかもしれませんが、受験に限らず会社などの経営においても、「最悪を予測したり、させたりすること」は、何があってもグラつかない覚悟を決めることに繋がると思っています。会社の経営では「例え倒産しても生命まで取られることはない」という覚悟であろうし、受験では「例え不合格になっても人生そのものが終わるわけではない」というような覚悟ではないでしょうか。そういった覚悟を心中深くに据えた上で、前向き且つ積極的に、受験にも人生にも挑戦していくとき、道も開けてくるのではないかと考えます。

とは言え、昨年を引き続き、今年はさらに一層、本校の現役合格者の数は増えるものと確信しております。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />



<大学受験者のための祈りのあとの激励会>

始業式で日露戦争の話

2010.01.08 Fri

1月7日の3学期の始業式の校長挨拶では「日露戦争の話」をさせていただきました。その中で日本がロシアに勝った理由として私が考えている4つの要素のうち3つを述べました。すると顔見知りの生徒などから、終業式のあと廊下ですれ違ったときなど「あとのひとつの要素を詳しく教えて欲しい」という声を耳にしました。中には「次の機会に話します」と答えたところ、「僕にはもうチャンスがない」と言ってくれた高3生もいたりしました。

それこそ戦争の是非善悪は別にして（別に「別にしてもしなくても?!」戦争自体は非であり悪であるのは間違いないのですが、歴史的必然という観点から）、そういったことに関心を持ってもらえたことは嬉しいことでもあります。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<始業式での話>

みなさんおはようございます。そして明けましておめでとうございます。学校長の温井です。みなさんにとってはどのようなお正月だったのでしょうか？

私はこのお正月、もう一度、司馬遼太郎氏の書いた「坂の上の雲」を読み返しました。全8巻の史実に基づいた歴史小説です。みなさんは「坂の上の雲」というのをご存知ですか？ちょうど昨年の秋から暮れまでNHKで「坂の上の雲」の第一部が放映されていたので、多くの生徒達が知っているかと思います。

今、「坂の上の雲」を読むのは3度目ですが、私は「坂の上の雲」を切っ掛けとして、幕末から日露戦争について書かれた他の書物も時間の許す限り読んでまいりました。読むたびに新しい発見があります。比較的慎重な物の見方、あるいは歴史観を持っていたといわれている司馬遼太郎氏でさえ、戦争の良し悪しは全く別にして、もし日本が日露戦争でロシアに負けていたら、現在少なくとも北海道はロシア領になっていると言っております。なるほど歴史に「もし」という言葉はないかと思いますが、しかし客観的な国家規模や兵力の数から言えば、「負けて当たり前が無謀な戦い」であったわけです。国家予算でも8分の1しかない日本、さらに常備兵士の数では当時ロシアが300万人に対して日本が20万人、海軍の規模でも2倍もの大きな差がある日本が何故ロシアに勝てたかということです。

その細かな分析は専門家の人たちに任せるとしまして、私が思うのには大きく4つの要素があったのではないかと思います。今日はそのうち3つの要素について述べさせていただきます。4つ目の要素は「目に見えざる運」ということですが、これについて述べるには少々時間がかかるのでまたの機会とさせていただきます。

では日本が日露戦争に勝てた第一の要素ですが、それは当時の明治政府の非常に冷徹で現実的な外交政策にあったかと思えます。

そしてその冷徹で現実的な外交政策というのを裏打ちしているのは、多くの列強諸国に囲まれた当時の日本が、一歩間違えれば、他の多くのアジア諸国と同じように、日本の国そのものが西洋

の植民地になってしまうという深刻な危機感が明治政府にあったからではないでしょうか。

日英同盟を結んだり、アメリカ在住のユダヤ財閥に多額の戦時国債を買ってもらったり、ロシアの後方かく乱のためにロシア革命を援助するようなことも行ったとされています。

第2番目は、日本の内政、特に人材起用（の妙）にあったと思います。当時の政府の重鎮には、伊藤博文や大山巖といった、幕末から明治維新の過酷な時代を経験してきた人たちが数多くおりました。その人たちに一貫しているのは「人材こそ国家の宝」という思いであったかと思えます。あるいは日本にあるのは「人材」しかないという思いだったのかも知れません。

それだからこそ、優秀な人材の起用と育成に重きを置き、出身地や門閥に関係なく、優れた人材を抜擢し、政府や軍の要職につけたということでもあります。また軍事を充実させるために、単なる「精神論」に陥ることなく、謙虚にそして熱心に外国の軍事システムや戦略を研究したり、下瀬火薬弾といわれるような最新兵器を開発したりしておりました。

そして3つ目はそういった国家の危機感、あるいは西洋の列強諸国と互角にわたりあっていたという国家の気概が、そのまま国民全体の気概となったのではないかということでもあります。

特に、廃藩置県や明治維新を経て、新たな国家として誕生した日本の多くの青年達は、「天下国家のため」という志を胸に描いて学問をし、自分自身を精進させていきました。今の諸君なら「天下国家のため」を「世界人類のため」と置き換えてもいいかと思えます。

さて今日は、皆さんに私が興味をもっている歴史の話をさせてもらいました。中学生にとっては少し難しい話だったかもしれませんが、ある程度理解してもらえたのではないかと思います。今後も中学生達には難しい話をしていくこともあるかと思いますが、私が私の話を諸君に合わせるよりも、できれば諸君が私の話を理解できるように、勉強をし理解力を深めていってほしいと願っています。

さて、それでは、なぜ私が歴史の話、特に日露戦争の話をさせてもらったかと言いますと、それは諸君自身が大きな世界の歴史の流れの中で、今、ここ日本という国の中で、今あるような暮らをしているということ、そしてこれからも生きていく限り、誰一人歴史の流れから外れることはないということを知ってもらいたいからであります。また、今日の日本を日本にいた先人たちが創ってきたように、これからの日本の歴史、あるいは世界の歴史を作っていくのは、実は諸君ひとりひとりであるということを知ってもらいたいからであります。

また今日述べたことは歴史の話でありましたが、それと同時に諸君には今の世界についても学んでもらいたいと思います。世界の中の日本、あるいは日本が世界にどう対処していくかということも学び考えてもらいたいと願っています。

なるほど、誰それさんと誰それさんは仲がいいとか、今度こんな新しい製品やゲームソフトが出たとか、芸能人の誰それがいいとか悪いとかいう話は、子供らしくていいかも知れませんが、いつまでもどこまでも「子供らしい」だけではいけません。特に高校生達について言えば、それは子供らしいというのではなく「子供っぽい」ということになるかと思えます。

しっかりと世界を学び、日本のあり方や行く末を考えて下さい。そしてそういった学びの中で自分の行く道を求めて下さい。

最後に高校3年生の諸君、諸君たちには、あと一度終業式の日話しをする機会があると思いま

すが、どうか最後の最後まで気を抜かず自分の目標の達成のために全力で努力を続けて下さい。それと同時に、本校を卒業したあと、繰り返しになりますが、今日述べたことも念頭においていただき、しっかりと世界を学び、日本のあり方や行く末を考えて行って下さい。そして自分の行く道を大きな視野と高い観点からも求めて下さい。

諸君の健闘、とくに入試を間近にひかえている高3生徒全ての健闘を祈念して、年頭の話とさせていただきます。

あけましておめでとうございます

2010.01.04 Mon

新年を迎えることとなりました。

また1年、学校長としての重責を果たしながらも、ブログを通じて自分の思いや学校での出来事などを発信していきたいと思っておりますので、お付き合い下さい。

(卒業生からの年賀状に「先生のブログを読むのを楽しみにしている」というようなことが書かれてあるのも結構多くあり、嬉しい反面かなりのプレッシャーも感じています)

今日(1月3日)は、午前中に学校へ寄ったあと、午後からは本校卒業生(国際コース2期生)の小川響子さんのコンサートに行ってきました。

素敵なコンサートでした。歌の素晴らしさはもちろんのことですが、歌の合間に入る「語り」もとても面白く好感がもてるものでした。さすが歌も声もコンサートの雰囲気作りもニューヨークで磨かれているだけのことはあると感じ入りました。

また日本に来たときには、是非聞きに行きたいと願っています。

今年もいろいろありましたが

2009.12.31 Thu

今年もいろいろありました。嬉しかったこと、楽しかったこと、心配だったこと、心弾んだこと、心痛めたこと……。生徒達のひとりひとりが織り成すドラマには、毎年のことながら、目を見張るものがあります。そして時はとどまることを知らず、生徒達は成長を続けていきます。

まあ、いろいろあったにせよ、中学と高校の生徒達全員が無事に新年を迎えられることが何よりの感謝であります。当たり前と言えば当たり前のことではありますが、私達教職員にとって「生徒達が無事であること」が何にもまして大切なことでもあります。

しかし、いくら「安全第一」を心がけ、「誰もが安心して来られる学校」を最優先のモットーとしていまして、何か起こるときには起こるものであります。生徒達の安全のため学校運営者として最大の努力をするのは当然であっても、最後は「見えざるものの守護」に訴えるしかないような気がします。

そういう観点から生徒達の無事安全を祈らない日は一日たりともなかったように思います。ただし、教職員の無事安全を祈った日は一日たりともありませんでした（これを読んでいる教職員の皆さんゴメンナサイ、来年は少しは皆さんの無事安全も祈るようにいたします！）。

ということで感謝の内に2009年を終え、希望のうちに新年を迎えたいと思います。

最後になりましたが、このような不定期過ぎるブログにもかかわりませず、ブログを読み続けてこられた皆様、本当に「おつきあい」ありがとうございました。

このブログを読んでいる方すべて、そして読んでいない方もすべて、来年がさらに良き年でありますことをお祈り申し上げます！！

キャリア・ガイダンスに来て下さい

2009.12.31 Thu

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

今年も多くの素敵な卒業生達に出会いました。その中のひとりにY君がいます。本校の卒業生達が25年後に母校に集う同窓会・ホームカミングデーに来てくれ、私にも元気な顔を見せてくれました。そのあとの便りでも、Y君自身が25年間のあいだにしてきた話をいろいろ聞かせてもらいました。

Y君、君は大学卒業後はアメリカの有名企業で活躍していたとのことですね。その頃は、苦勞しながらも、非常に充実した日々であったことが想像されます。しかし、君の父上が何十億の借金を抱えて倒産されてからが本当の苦勞だったようですね。その借金の一部を肩代わりしながら、自らも会社を立ち上げてきた苦勞には頭が下がる思いがしましたし、ずっと誠実に働いてこられたその姿勢にも感銘を受けました。そして今は自分で立ち上げた会社が何とか軌道に乗ってきているという話も喜ばしものでありました。しかし、私にとって一番嬉しかったのは、「自分が苦しいとき本当に支えてくれたのは桃山高校時代の友人達だった」という話です。

ぜひ君にはキャリア・ガイダンスにスピーカーとして来ていただき、中学生達にいろいろ話をしてもらいたいと願っています（すでに君の話は高校生を対象にした全校集会で披露させてもらいました）。

君が自らの体験を通じて中学生達に伝えてくれるであろうことは、「希望」であり「友情」であり「仕事に向かう姿勢」などであるかもしれませんね。しかし何を話して何を伝えるかは全て君に任せたいと考えています。

また会いましょう！

応援宜しくお願いします

2009.12.29 Tue

国際コースを出た小川響子さんという卒業生（国際コース2期生）が音楽界で注目されています。既に在学中に日本クラシック音楽コンクール高校生の部にも入選し、現在はニューヨークのマンハッタン音楽院の3年に在学しています。既にソロコンサートも2回行っているとのことで、本校でも一度ゲストとして歌ってもらいましたが、その美声に多くの生徒や教職員が酔いしれたそうです。残念ながら当日やむを得ぬ所用があつて、私自身はその美声を聴く機会を逸してしまいましたが、1月3日(日曜日)に行われるニューイヤーコンサートには是非とも行かせてもらいたいと願っています。

場所は兵庫県立芸術文化センターです。

開場は13:00で開演は13:30で、前売りは2,500円で当日券は3,000円だそうです。

皆さん、応援のほど、宜しくお願いします。

2009.12.29 Tue

今月24日の終業式でのメッセージ（一部修正、割愛をしています）を掲載します。高校生向きのメッセージですが、中学の生徒達にも同じような内容の話をしました。

<終業式でのメッセージ>

みなさん、おはようございます。学校長の温井です。今年ももうあと一週間程で過ぎようとしていますが、この一年はみんなにとってはどのような年だったのでしょうか？

さて、今日は今学期に入って実際にあった本校生に関する話をさせてもらいます。実は2つの話があるのですが、時間の関係もありますので、そのうちのひとつ、ごく最近にあった話だけを今日は伝えさせてもらいます。

先週の木曜日にある見知らぬ女性の方から本校の教員へ電話がありました。その内容は、その女性が昭和町へ行くまでの歩道を歩いているときに目撃した話しです。その話によると、自分の前を歩いていた老人が帽子を強い風で吹き飛ばされ、その帽子が車道に飛ばされていったそうです。その時とっさにその老人の近くを歩いていた本校生の一人が車道まで出て、その帽子を拾い上げたということです。その女性はそれを見て、一瞬、車が来ているので「危ない！」と思ったそうです。しかしそれと同時に、一緒に歩いていた友人達も、その一人の友人を庇うため、車道に出て、両手を前に差し出し、走ってくる車に停止を促したそうです。そこで、その女性は、本校の高校生達のとった行動に感銘を受けて、本校に電話をかけてきたということでした。

しかし、その女性の思いは別にして、客観的に見れば、本当に危なかしい行為であります。頭で考えれば、車の通っている道に飛び出すのは、実に危ないことですし、言って申し訳ないですが、たかが帽子を拾うためだけに、そんなことをするのは馬鹿げています。また友達を庇うために車道に飛び出していった生徒達も同じよう馬鹿げた行為です。自分達がひかれればどうなるんですか。親達がどれほど悲しむことでしょうか。だから私は他の生徒諸君には絶対そのような馬鹿な真似をして欲しくないと思います。

しかし、しかしです。私はその高校生達がとっても大好きです。理屈抜きで本当に大好きです。頭で考えれば馬鹿げたことを、つまりたかが帽子を拾うために、とっさに車道にとびだせるなんて、実に素晴らしいです。そういった行動がとっさにとれる君達を羨ましいとさえ思えます。

また中学生諸君に関して言えば、ひとりのお年寄りが阪和線の車内に入ってきたとき、数名の生徒達が一斉に立ち上がって席をゆずったという話があります。これもその光景を見て感動されたある見知らぬ人からの電話で、1学期に知りました。本当に、この話も、全員が立ち上がらなくても、ひとりが立ち上がればいいことであります。

そういった人間の頭で考えないでする咄嗟の行動の中に、若い人たちの持つ、そしておそらく全ての人間がもっている<純真な魂の発露>というもの見出します。

昔、随分昔、私が高校生だったとき、自分が泳げないのに、川に落ちた子供を助けるために、川

に飛び込んで亡くなった方がいました。そしてそのことが新聞でも話題になり、私のいるクラスでもホームルームでの話題になりました。その行為についてどう思うかということが話し合われました。そのときある生徒が「自分が泳げないのに川に飛び込むなんて、本当に愚かしいことであり、それなら近くの人を呼ぶとかなんとか方法を考えるべきだ」というようなことを言った生徒がいました。正当な意見かと思えます。しかしその発言に対して椅子から立ち上がって、猛然とくっつかかった生徒がいました。「泳げて飛び込むなんて誰でもできる。自分が泳げないことも忘れて飛び込める人なんて、最高や。そして最高の死に方や」と言った生徒です。最高の死に方やどうかは別にして、猛烈に怒りながらそう言ったのを聞いて「すごいいい奴やなあ」と感銘を受けたことを覚えています。

さて、老人の帽子を拾ってあげた生徒達、その馬鹿げたことをした生徒達、きっとこの放送を聞いているとおもうので、できたらこのあと校長室に来てもらいたいと思います。君達のすてきな顔を見たいと思います。

最後にひとこと、どうか皆さん、帽子を取るために車道には飛び出さないで下さい。

それでは、よきクリスマスを、そしてよき新年を迎えて下さい！！

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

2009.12.16 Wed

先週の土曜日（12月12日）、第2回中学校音楽発表会が行なわれました。各クラス、練習を続けてきた合唱とギター演奏を披露するものです。会場には予想以上の保護者の方々が来ておられ、立ち見ができるほどでした。私も業務の合間をぬって聴きに行きましたが、合唱だけでなくギター演奏もなかなか見事なものでした。ギターがいいのか腕前がいいのか選曲がいいのかは別にして、楽譜と指揮者の両方を見ながら精一杯1クラスがひとつになりギターを弾いている姿は、実に「カッコよかった」です。私達の時代の縦笛（今はリコーダーと呼んでいるとのこと）もそれなりに良かったかも知れませんが、やはりギターのほうが弾いている方も聴いている方も、「音楽会」という気分にはなるようです。

ただ、中学1年生でギターに初めて手を触れる生徒も多く、最初はギターをアチコチにぶっつけてしまうので、先生方もヒヤヒヤものだったそうです。ギターの弾き方よりも「ギターをぶっつけない扱い方」から教えなければならなかったとのことでした。

また音楽発表会の最後の出し物、PTAコーラス・グループのコーラスも実にノリノリで、自分のお母さんの舞台姿を中学生たちも楽しそうに（恥ずかしそうに？）眺めていました。高校生になると「オカンやめといてや」と言うようになるかもしれませんが・・・。

いずれにせよ実に楽しい音楽会でした。来年は3学年揃うので、さらに盛大になるかと思っています。問題はそのときの会場ですが、いずみホールは無理にしても、せめて新体育館のダビデジムでも使えればと考えています。ただ、ダビデジムは2000名収容できる広さなので、それはそれで空間がありすぎて盛り上がりません。まさか聴衆に高校生達全員を動員させる訳にもいきません。ということでせめて中学の保護者の方々が親戚縁者の方々と共にご近所お誘い合わせのうえ来ていただくか、あるいは本校のPTAコーラス・グループがさらに一段と進化を遂げ、近隣の方々が「無料でプロのコーラスが桃山で聞ける」というような噂を聞いて殺到するぐらいになっていただけるか・・・。

楽しみにしています。

W議員、頑張ってください

2009.12.13 Sun

何と言っても卒業生達が活躍していることは嬉しい限りです。秋にはクラブOB・OG連合会の結成や25年目の同窓生の集いであるホーム・カミングデーや桃山学院大学の同窓会などがありました。桃山学院では今、いろいろな場面での活性化が加速度的に行なわれていますが、本校の教育活動を支えてくれているPTAや同窓会組織も共に活性化が図られてきています。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<W議員、頑張ってください>

さて、その卒業生の中に現在、衆議院議員をしている卒業生がおります。彼は桃山学院（旧）中学から高校、さらに桃山学院大学と進んだ生粋の桃山人です。その卒業生は今、衆議院議員として「内閣常任委員会」と「財務金融常任委員会」の委員を兼ねています。非常に見識があり情熱的でスケールの大きい卒業生です。その彼が私に同窓会の席で「在校中にはお世話になりました。本当に桃山の雰囲気の中で育ったことは大きな意味を持っています」ということを述べてくれました。と同時に「私にできることがあれば言って下さい」と言ってくれました。たとえ社交辞令(?)にせよ、もちろん私は彼が言った最後の言葉だけはシツカリと受け取り、「本当に言っているんですね?!」と強く念を押すと、ほんの少し不安そうに「はい、もちろんです」と答えてくれました。そこで透かさず次のように言いました。「それなら今すぐ私学に通う全ての生徒・学生の授業料を全部無料化にして下さい」と(笑)……。本当に議員さんは大変ですね……!

冗談はさておき、Y議員、日本の将来は若い人たちの肩にかかっています。日本の教育機関、いや日本の社会全体で素晴らしい人材を育成していくことができるよう、国と地方が共に協力しあって、精一杯頑張ってください。私学の公費助成についても大胆で前向きな取り組みをお願いします!!

教育の原点

2009.11.23 Mon

本日、多数の本校入学希望生徒や保護者を迎え、第3回（最終）入試説明会を実施致しました。高校は午前中、中学は午後を実施しましたが、共に無事終了することができました。要は、本校のありのままの姿を知ってもらえればいいだけのことですが、限られた時間の中でどれほど本校の姿を知ってもらえたか少し心配です。しかし毎度のことながら、今在籍している中学生達や高校生達や留学生達が舞台上上がっての説明は「ぶっつけ本番」という不安もありますが、説明会に来られている方々には説得力のあるメッセージとなっているかと思えます。

あと説明会を始める前に本校の学校生活を紹介する学校案内ビデオを上映するのですが、そのビデオには生徒達の生き生きした表情や活動が写っています。そして実際、そういった映像を見るたびに、私自身が何回観ても「本当にいい学校だなあ」という感銘を受けてしまいます（笑）。

ただ説明会に来られた方にもっと観てもらいたい場面というのがあります。

それは、生徒達を呼んで叱っている（あるいは褒めている）教員の姿であり、ひとりの生徒の指導等について生徒達全員が下校してから夜遅くまで話し合いをしている現場の教員達の有様であります。このことは説明会でも申し上げましたが、そういった個性も感性も家庭環境も違った一人一人の生徒達と真剣に愛情を持って教師が関わっているところにこそ、生徒達誰もが持つ「良き可能性」を伸ばさんと教師が精一杯努力しているところにこそ、教育の原点があるのではないかと考えております。その原点を忘れると、いくらいい施設や設備が整っていようと、いかに学力向上のシステムが完璧に近いものあろうとも、「誰もが誇れる学校」にはなれないと確信しています。 <?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

2009.11.13 Fri

昨日、高3生徒達の「打ち続く勉学の緊張と疲れ」を解放するため、ホームルームの時間を目一杯使って、学年主催の球技大会が行われました。私も運動場やテニスコート、それに3つの体育館で行われている各競技（サッカーやドッジボールなど）を見学して回ったのですが、高3生の熱のこもった競技や応援、そこでのイキイキした表情や澁刺とした姿を観て、私の方が目一杯の元気をもらえました。とくに面白かったのは「打倒アスリートクラス」ということで、アスリートクラス以外の生徒達がアスリートのチームを相手に戦う場面でした。非常に手ごわい相手だけに相当燃え上がるようですし、アスリートクラスの選手達もアスリートとしてのプライドをかけて戦わなければならないので、非常にエキサイティングな試合運びとなっていたようです。ある競技では一見するだけで力と技量の差が歴然としていましたので、つい私も（いつもの悪い癖で）「アスリートチームに勝ったら食事をおごってあげる」とアスリート相手に戦っているチームの控えの選手に言ってしまいました。残念ながら（あるいは有難いことに）、そのチームは勝てませんでした。但し、アスリートチームに勝ったチームもあったとのことですが、そのアスリートチームは自分の専門外の競技に参加していたチームとのことでした。

いずれにせよ、若者達が、ひと時であっても日常の勉学や教室の授業を離れ、スポーツに一生懸命汗を流している姿というものは実に爽やかなものでありました。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<追記>先生方、軽はずみな約束はいけませんよ！

教師は競技大会やコーラス大会で感動すると、すぐに「これで勝ったら何かおごってあげる」と言ってしまうようです。特に担任しているクラスの連中にはよく言ってしまいます。

ひとつには何とか自分の担任しているクラスを勝たせたいという身びいき（?!）と、一生懸命頑張っている生徒達の健気な姿に感動するからではないかと思えます。そしてもうひとつの理由として、競技したり応援したりしている生徒達のハイテンションが伝わって、そういう気前のいい言葉が思わず口をついて出てしまうからではないかと思えます。特に「これではうちのチームは負けるやろ！」というようなときに、このような「おごってやる」という言葉が多く出るようです。いくらハイテンションが感染しても、やはり「懐具合と可能性の計算」は頭でなされているようであります(笑)。

但し、先生方、気をつけたほうがよろしいですよ。これなら絶対にうちのチームが負けると予想して「好きな食べ物を奢ってあげる」と宣言したあと、見事逆転を果たされたりした場合もあります。

実際、学年のクラス対抗試合で「絶対うちの軟弱クラスは負ける」と確信していたクラスが、途中から盛り返して優勝を果たし、クラス全員に焼肉をご馳走する羽目となり、何ヶ月間のお小遣いが吹っ飛んだという悲劇の担任もいるそうですから・・・。

大学に行っても恥ずかしくないように

2009.11.13 Fri

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

中学生対象の話（下記のブログ記事）をした放課後には、高校3年生の大学合格（確定見込み）の生徒達約数十名（主に指定校推薦やAO入試で既に大学の合格通知を手にした生徒達）を対象にした話も行いました。現在高3では、指定校推薦やAO入試で早い時期に合格した生徒達が、放課後「大学に行っても恥ずかしくないように」4時半から学習を続けています。私の話はその放課後の時間を借りての話でした。彼らが学習しているカンタベリーホールに行ったときには、既にそれぞれが静かに自分達の学習に取り組んでおり、大学が決まった後も勉学を続けている姿勢に感銘を受けました。

話した内容は、大学に入学する前になすべきことや、大学での理系と文系での勉学に対する取り組み方の違いや大学生活の有意義な過ごし方などでした。その中で、特に気をつけて欲しいこととして、キャンパス内での怪しげな宗教団体や過激な政治組織や違法なマルチビジネスからの勧誘、また高額な英会話教材の購入などについての話などもして、各生徒達の注意を促しました。実際、私の知っている東京の大学関係者によると、大学に行って多くの者が雇るといわれている「5月病」の時期に、そういった被害に会う学生も毎年何名かいるとのこと。そういった点からも、桃山学院大学を始め、多くの大学の入学オリエンテーションでは、そういった話を多く取り入れるようであります。

あなたたちは今幸せですか？

2009.11.03 Tue

「あなたたちは今幸せですか？ 幸せな人は手を挙げてください。結構多いですね。でも手を挙げなかった人もいますね。その人たちは幸せではないんですか？ どうして幸せではないんですか？ 昨日から何も食べてないんですか？ 今日の朝食も食べられなかったし、お昼ご飯も食べてないんですか？」という問いかけから私の話は始まりました。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

先週の木曜日のホームルームの時間、中学生の1, 2年（2年前に始まった中学なので今のところ3年生は未だいません）対象に「校長の話」の時間を持たせてもらいました。私が行ったときには、既にカンタベリーホール（本校の中講堂）に中学生達は着席して待っていてくれました。行くまで一体何を話そうかといういろいろ迷っていました。ただ、ひとつ心に決めていたことは、単なる説教や抽象的な話や一般的な話ではなく、彼らの心に訴えることできる話にしようということでした。それには、私が本を読んだり間接的に知った話ではなく、私自身が直接遭遇したり出会ったりした体験に基づく話がいいと考えていました。その中で心に浮かんだのは「私が死にかけた体験」「素晴らしい人との出会いの体験」「私が苦しんだ体験」「私が手術をした体験」「私が心底驚いた体験」などでした。人間数十年を生きると本当にさまざまな体験をするものです・・・その体験が良き糧として私の人生に生かされてきたかどうかは別にしまして・・・。

私は最初「死にかけた体験」の話をしようと思いました。生きていることの素晴らしさを知ってもらうためにも、死に関する話は大切だと思っているからです。ところが舞台上が上がって、話の流れは上記の質問から「私が飢えた体験談」になりました。

大学時代、わずか3, 4日ご飯が食べられなかっただけの体験談ですが、「人間、飢えると発砲スチロールや消しゴムまで美味しそうに見える」という話や「空腹の極みで口にする一碗の重湯にどれほどの有難さを痛感するか」というような内容でした。

それは、生徒達に「ご飯が毎日食べられている限り、先ずは感謝をして欲しい」ということを願っての話でした。世界の半数の人たちが栄養失調に苦しんでいる現実や冷蔵庫を開ければそこに食べ物が入っている状態が「いかに恵まれている状態か」を知ってもらいたいと願っての話でした。なるほど聖書に書かれているように「人はパンのみによって生きるにあらず」ですが、「人はパンなしでは生きられない」というのも冷徹な事実です。「衣食足りて礼節を知る」という言葉にも大きな真実があるかと思えます。また飢えた者でない限り、飢えることの辛さを知ることはないということも分かって欲しいことでした。

太平洋戦争の時代を生きたクリスチャン一家を描いた「少年H」という小説の中で、著者の妹尾河童氏はある人物に「人間毎日食べていけるだけで幸せ」というようなことを語らせていますが、日本にもそういう時代があったわけです。今後、そういった時代が日本にやって来ないという

保障もありません。

<それにしても日本の食糧自給率の低下は憂慮に堪えません。なぜそのところが国政選挙でも大きな争点にならないのか不思議です。学校は安全であり生徒達全員が安心して学生生活を営める場でなければならないように、国家も安全であり全ての住民が安心して生活を営める場でなければならないように>

・・・私の話しに中学生達は熱心に耳を傾けてくれたようです。何かを感じ何かを考えるきっかけになってくれればよかったですと思いますが、ただ単に「校長に対する親しみ、あるいは好感」を持ってもらっただけでもいいかと思えます。私は生徒達が「**学校が好き**」であるということが、教育の中で非常に重要な要素になると確信しています。そしてその「学校が好き」という場合、あまり「学校の建物が好き」ということはないと思います。やはり生徒達に「学校が好き」と思ってもらうための中心になるのは（周りの友達ということとは別にして）**先ずは身近に接する担任であり教科担当者**であると思います。そして何番目か（ひよっとすると最後の理由）に「校長が好き」というのも入ってくるなら、そしてそれが学校を好いてくれるひとつの理由になるなら、それだけでも十分満足だと思っています。

*佐々木教頭、中学生達のスケジュールは詰まっているのは分かりますが、また私に話す機会を作ってください。

<追記>実際の史実はどうであったか別にして、フランス革命の前夜、パリの民衆が食べるパンがないと大騒ぎしていると聞いた王妃アントワネットが「パンがないならケーキを食べればいい」と言った話は示唆に富んでいますね。人は自分の立場でしか事物が見えず、人の苦しみが理解できないということでしょうか・・・。

<追記その2>

上記の<追記>を書いた直後、私の知り合いであるマッキーさんから抗議の電話をいただき、マリー・アントワネットは実際そんなことは言っておらず、ある本によると「民衆に食べるものがないなら私達のケーキなどをお分けしなければ」と言ったとのこと。あるいは敵対者が（アントワネットの人気に対する）妬みからそういう話を意図的に流布させたかも知れないとのこと。だからこそ私は「実際の史実はどうであったかは別にして」と書いたんですが・・・。ちなみに教養溢れるマッキーさんはマリーアントワネットの大ファンだそうです。知らぬこととはいえ、申し訳ありません。

こういった話（歴史上のエピソード）は一人歩きするから気をつけないといけませんね。

2009.10.30 Fri



今月28日、本校の留学先のひとつであるテキサス州のSt.Andrew' s Schoolから交換留学制度（EP）の責任者であるサラ・トッド先生が来校しました。夕方より歓迎会が盛大に行われ、留学生5名の中の3名の米国人留学生達や本校のEP卒業生やホストファミリーの方々と共にとても楽しいひと時を過ごしました。その歓迎会には、本校に留学したあとアメリカの大学に入り、現在JETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）で徳島に赴任している2名のアメリカ人青年も、わざわざ徳島からやって来て顔を見せてくれました。偶然、2人とも徳島に配属になったそうです。日本に着いて2週間目で参加した阿波踊りの話や徳島県人と大阪人の違いの話など、いろいろな面白い話も聞かせてもらいました。

またサラ先生は、大阪に来る前に東京に立ち寄ったそうですが、そこでは東京で活躍している本校の卒業生達や日本で働いている元米国人留学生たちから、心温まる歓迎を受けたとのことでした。

米国からの留学生を引き受けて下さっているホストファミリーの皆さん、カナダからの留学生を引き受けていただいているホストファミリーの皆さん、本当にありがとうございます。彼ら5名の留学生たちの明るい表情を見ていると、皆さん共に家庭で過ごしている時間の楽しさが想像

できます。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

桃山の生徒諸君、また留学生の応募が今年末から始まりますので奮って応募して下さい。（ちなみに本校の米国姉妹校の年間授業料は全て300万円以上ですが、それが相手校から奨学金として支給されます）

<追記>

昨日（10月29日）のホームルームの時間に中学生全員（1、2学年の計6クラス）に話をする機会を持ちました。また4時半からは既に指定校推薦が決まっている高3生徒達（今は学年主任の監督のもとで大学への入学に備えた学習を行っています）にも、大学生活の過ごし方等についての話をさせてもらいました。詳しくは次のブログで述べたいと思っています。

子育ては難しい？！

2009.10.22 Thu

子供を育てるのは難しいと実感します。あるいは、子供によってとても難しい場合がある、と実感します。おかげで、わが家の2人の子供も決してスクスクと順調に育ったわけではありません。正直言って、相当手を焼かされました（今は・・・2人ともマトモになっています。でも本当に君達には手を焼かされましたよ！！）

「おかげで」と言いますのは、実際、私自身が2人の子供に随分と手を焼いたので、その貴重な(?)経験が生徒と関わったり保護者の気持ちを共有したりする上で、随分役に立っている気がします。

私自身、そういった子育てに悩んだ結果、育児に関するいろいろな本を「自分達の育て方のどこが間違っていたのか？」という切実な観点から読ませてもらいました。その勉強の結果・・・育児において「これだけが正しいやり方だ！」と言うのが存在しないことが分かりました。

「子供は厳しく育てなければならない」と言いますが、厳しく育てられた家の子供が全て立派に独立した若者に育つ訳ではありません。「とにかく愛情をかけて育てればいい」と言いますが「あれだけ愛情を注がれてきた子供なのにどうして？」という場合も多くあり、「放任はいけない」と言われますが、放任されても健やかに育っている子もいまし、あるいは放任されて「理論通り」ダメになる子もいるわけです。「父と母の役割をきちっとして育てるのがいい」という考えもありますが、母親だけの家庭で立派に育っている子が多くいるのも事実です（ひょっとしたら父親はいないほうがいいのでは、と考えさせられる場合もあるほどです）。

その他「兄弟は多いほうがいい」とか「祖父母とは同居しているほうがいい」とか「母親は家にいるほうがいい」とか、いろいろなことが言われていますが、これらは全て「一概には言えない」ということです。だから、親の子供に対する姿勢や態度を含めて、どういう環境で子供を育てればいいのかというのは非常に難しいところがあります。では、環境は関係なく、遺伝的なものかと言うと、これもまた必ずしもそうではないという事実と直面することが多くあります。「え、あのご両親にこのような子供が！」という場合（いい意味でも悪い意味でも）も多くあります。

では「そうすればいいのか」ということですが・・・。またの機会にブログで書かせてもらいます。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

オーストラリアからの小学生23名

2009.10.15 Thu

10月14日(水曜日)にオーストラリアのSt.Andrew's校から小学生23名が来校しました。短時間の訪問でしたが、本校生徒達と校歌を歌い合ったり、本校に来ている米国やカナダの留学生達と談笑したりして、楽しい時間を過ごしました。本校と同じ聖公会の学校で、英語の校名もセント・アンドリュースで全く同じです。(写真の胸のワッペンに注目して下さい。これも本校と同じアンデレクロスです)。



*本校アンデレ館ロビーにて、23名の小学生達、両校教員、本校留学生達、そして私。

K君、おめでとう！

2009.10.15 Thu

本校1年標準コースに在籍しているK君が津田塾大学主催の第10回高校生エッセー・コンテストにおいて、見事700名を超える応募者の中から特別章を受賞しました。テーマは「100人の村の人たちに手紙を書く」というもので、その手紙を英語で書いても日本語で書いてもいいというものです。その手紙をK君は英語で書きました。なるほど、日本語で書くほうが楽でしょうが、敢えて英語を選んで書いたということが素晴らしいと私は感じています。

来週のホームルームの時間に少し時間をいただいて、表彰状を読み上げる予定です。

その折には「100人の村」についても言及する予定です。生徒達には今の自分達の境遇に対する感謝の気持ちを持ってもらい、「自分達がなすべきこと、またできること」について考えてもらおう一助となればと願っています。

<もしも世界が100人の村なら><?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

もし、現在の人類統計比率をきちんと盛り込んで、全世界を100人の村に縮小するとどうなるでしょう。その村には・・・

57人のアジア人 21人のヨーロッパ人 14人の南北アメリカ人 8人のアフリカ人がいます。

52人が女性です。 48人が男性です

70人が有色人種で30人が白人、70人がキリスト教以外の人で30人がキリスト教です。

89人が異性愛者で11人が同性愛者

6人が全世界の富の59%を所有し、その6人ともがアメリカ国籍

80人は標準以下の居住環境に住み、70人は文字が読めません。

50人は栄養失調に苦しみ、1人が瀕死の状態にあり、1人はいま、生まれようとしています

1人は（そうたった1人）は大学の教育を受け、そしてたった1人だけがコンピューターを所有しています

もしこのように、縮小された全体図から私達の世界を見るなら、相手があるがままに受け入れること、自分と違う人を理解すること、そして、そういう事実を知るための教育がいかに必要かは火をみるよりあきらかです。

また、次のような視点からもじっくり考えてみましょう。

もし、あなたが今朝、目が覚めた時、病気でなく健康だなと感じることができたなら・・・あなたは今いきのこることのできないであろう100万人の人たちより恵まれています。

もしあなたが戦いの危険や、投獄される孤独や苦悩、あるいは飢えの悲痛を一度も体験したことがないのなら・・・あなたは世界の5億人の人たちより恵まれています。

もしあなたがしつこく苦しめられることや、逮捕、拷問または死の恐怖を感じることなしに教

会のミサに行くことができるなら・・・あなたは世界の30億人のひとたちより恵まれています。
もし冷蔵庫に食料があり、着る服があり、頭の上に屋根があり、寝る場所があるのなら・・・あ
なたは世界の75%の人たちより裕福で恵まれています。

もし銀行に預金があり、お財布にお金があり、家のどこかに小銭が入った入れ物がある
なら・・・あなたは这个世界の中でもっとも裕福な上位8%のうちのひとりです。

もしあなたの両親がともに健在で、そして二人がまだ一緒なら・・・それはとても稀なこと
です。

もしこのメッセージを読むことができるなら、あなたはこの瞬間二倍の祝福をうけるでしょう
。なぜならあなたの事を思ってこれを伝えている誰かがいて、その上あなたはまったく文字の読
めない世界中の20億の人々よりずっと恵まれているからです。

(一部割愛)

楽しい楽しいPTA（その2）

2009.10.12 Mon

10日(土)のPTA学級委員総会の最後、今後本校のPTAが主催してなされるゴスペル・ワークショップのお披露目（ミニコンサート）がなされました。ゴスペル・ワークショップというのは、11月7日から3回にわたってゴスペルの練習を専門家の指導の元にしていこうという非常に楽しい企画です。

さてそのミニコンサートにはプロのゴスペルシンガーである寺尾仁志さんがグループと共に来校され、素晴らしい熱のこもったゴスペルを披露くれました。ゴスペルというのは観客と共に歌い共に身体を動かすことが大切だということで、ある曲目のとき、私達も簡単なフレーズと動作（両横の人の肩を両手でたたく）を覚えて、舞台のパフォーマンスに合わせました。ただ僕の横にはPTA会長のオジサン（T会長、私より若いのに「オジサン」呼ばわりしてすみません）しかいなかったの、オジサン同士が2人で肩を仲良くたたきあうのには少し違和感がありました。それでも結構ノリのいい方なので、楽しく歌と「肩たたき」をさせていただきました。（T会長、今年度でPTA会長という重責を終えられますねえ。私は今回、「本当にご苦労様」という思いで肩たたきをさせてもらいました。他意はありません(笑)。本当にご長男とご長女が揃って本校に在籍していただいたお陰で、長い間にわたってのPTA活動へのご奉仕・ご協力をしてもらえたと思っております。ありがとうございます。別の機会に改めて御礼を申し上げますが・・・、）。

またゴスペルと言えば、何年前、元NHKの朝のドラマの副ディレクターをしていた本校の卒業生が、ニューヨークから黒人の本格的なゴスペル・グループを日本に初めて招聘したこともあり、ある種の感慨を持って日本に広まってきたゴスペルを聴かせてもらいました。

そして今回、ゴスペルだけでなく、寺尾氏の話にも興味が惹かれました。特に自分の人生の中で最も実現したかったことが何であるかを明確に自覚したのが40歳になってからであるとか、「夢を目標にし、目標を予定としていく」生き方の話には、感銘を受けました。

例えばイチローや浅田真央選手のように、また私達が中高一貫教育の中で求めているように、自分の夢をできるだけ早い時期に発見し、それが自分にとって相応しい夢であるかどうかを確認し、その夢の実現に向けての最大限の努力を個々の生徒達が成し遂げていけるようにするのはとても大切です。早期の夢の発見は、その夢を実現する上で非常に効果的であると確信しています。ですから私達の教育上の理念については些かの揺るぎも持っていませんが、中には「40歳になって自分の夢に初めて気づくこともある」こともありだという思いは持っています。（だから未だに自分の将来の姿を描けない高校生達には「とりあえず大学に行って、その中での様々な学びや出会いの中で自分の将来のあり方を見つけなさい」と言ったりもしてきましたし、今後もそのことは機会を見つけて伝えていくつもりであります）。

また「夢を目標にし、目標を予定としていく」生き方については、今後、生徒達へのメッセージで使わせていただくつもりです。ただオリジナティーの問題もありますので、

「自分の予定がいつしか目標となり、その目標もいつしか夢だけで終わらせないように」日々の努力をしていかなければなりませんというふうには変えようかとは思っています・・・。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

PTAのみなさま、是非ゴスペル・ワークショップにご参加下さい。発表会もあるようです！

まさか2度寝の諸君はいないでしょうね？！

2009.10.08 Thu

今日は午前7時時点での暴風警報発令中により休校となりました。亡くなられた方や家屋損失に遭われた方には誠に気の毒ですが、強い風力の割には余り大きな被害がでなかったのが不幸中の幸いであろうかと思えます。<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

それにしても久しぶりの台風上陸に、きっと夜遅くまで「休校になるかどうかワクワクしながら」テレビを観ていた**フトドキナ**諸君もいたかと思えます。

とはいっても「台風が外れたせいで」期待していた休校がならず眠たい目をして登校してきたり、台風が「期待通り」やって来て、ヤッターとばかり2度寝を決め込んだりするの、昔も今も変わらぬ「非日常的な台風を前にした日常的な生徒達の台風の迎え方?!」かもしれません。

しかし、それは本当に台風の恐ろしさを経験していない世代だからかも知れません。いまだに私の幼い頃の思い出の中には、台風が怖ろしかったという思い出が残っています。

強くなってくる風の中をバスタオルを首に巻いて風の中を走り回っていた（きっと月光仮面や少年ジェットのまね：フルウ〜）ときの風の感触や祖父がトントンと板を窓に打ち付けていた金槌の音などに混じって、風が強くなってきて家に入れられたあと、暫くしてミシミシと音を立て家が揺れ始め、壁がパラパラと落ちてきた怖ろしい思い出などが残っています。

ただそれらの思い出の中で、鮮明に思い出すことがあります。それは猛烈に吹いていた風がピツタと止まったときのことでした。そのとき母親が私の名前を呼んで玄関から出してくれて、空を見せてくれました。そこで私が母と共に目にしたのは、急に風が止んだときの「畏ろしいばかりの空の蒼さ」でした。いわゆる**台風の目**です。本当に今でもその空の蒼さは私の瞼の裏に、今は亡き母の姿と共にはっきりと残っています・・・

<亡き母と 見上げし空の 蒼さかな>。

今思うと、それは多くの死傷者や家屋損失を出した伊勢湾台風か第2室戸台風ではなかったと思います。

2009.10.05 Mon

9月の25日と26日の両日にわたって、桃山学院創立125周年、大学開学50周年を記念する行事を、イギリスからカンタベリー大主教をお迎えして行ないました。特に26日は、本学院に関係する多くの方々（約1000名）を招待させていただき、記念式典と祝賀会をリーガロイヤルホテルにて盛大に執り行いました。

さて皆さんはカンタベリー大主教についてご存知ですか？

私自身、本学院にお招きするという段階からいろいろ調べさせていただいたのですが、現在のカンタベリー大主教は第104代目で、その影響力はローマ法王のごとく、世界中、特に米英などアングロサクソン系の国々を中心として非常に大きなものがあると言われていいます。

実際、本学院にカンタベリー大主教が来訪すると知った本校の米国姉妹校の関係者は一様に驚嘆しているようであります。また米国やカナダから来ている本校留学生の中には、その親から「カンタベリー大主教と一緒にいるところの写真を撮らせてもらいなさい」と言われている留学生もいるとのこと。（ただ残念なことですが、ツーショットは禁止されているとのこと）

その大主教についてはさまざまなエピソードがありますが、中でも私が最も感銘を受けたのは米国の聖公会において同性愛者の主教を認めるかどうかの論争が続いたとき、「今、私達には、そういう内部の問題にいつまでもかかずらい、論争に時間を費やしている余裕はない。外の世界には直ぐにでも解決しなければならない貧困、暴力、差別などの非常に深刻な問題が横たわっているを忘れてはならない」と述べられたということです。実際、短時間ながらも一緒に夕食を共にする機会をいただいたのですが、本当に澄んだ目をしながら低い声でゆっくりと話される雰囲気の中に、その人柄の素晴らしさが窺えるような方でありました。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

2009.10.03 Sat

9月18日と19日の両日にわたって文化祭が行なわれました。

今年も大盛況で、本校生徒達はもちろんのこと、PTAの方々、同窓生の方々、また外部の方々など多くの人たちにとっての素晴らしい文化祭となりました。

また「桃山学院中学校高等学校、文化祭決行により新型インフルエンザが蔓延」ということでマスコミからの非難を受け、私が矢面に立たされる場面もなくなりホッとしています。と同時に、記者会見で述べる「桃山らしいコメント」を考えていただけに少し残念な気もしています・・・。

私の方は、外部から来られた方々の対応に追われ、なかなか生徒達の展示を見たり演奏を聴いたりする機会に恵まれなかったのが残念でしたが、唯一、高校のコーラス大会だけは審査委員長ということで決勝大会には顔を出しました。

本当に決勝大会に残る生徒達の意気込みや実力は伯仲しています。だから同じ審査基準で行なわれるコーラス大会では、高校1年生が3位以内に入ることは殆ど不可能なぐらいです。

歌唱力などを中心に点数化されて審査されるのですが、最後の3位以内ぐらいになると単なる歌唱力というよりも、「聴いていてゾクゾクする」ぐらいのレベルに達します。だから優勝するクラスを決定するのは「ゾクゾ」か「ゾクゾク」か「ゾクゾクゾク」かになってくるわけです。当然今回優勝したクラスのコーラスは「ゾクゾクゾク」でありました。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

<追記その1>

中学のコーラス大会は、高校のコーラス大会と重なっていて聴く機会を逸したのですが、何人かの保護者の方々や中学の教員は「聴いていて涙するほど」可憐であったとのこと・・・。きっとウィーン少年合唱団のようであったのかなあ、と想像しますが、女子も入っていたのでさらに高音の透明感が引き立っていたのでしょう。でも中学男子には声変わりという「通過の苦しみ」が待っていますので、現中2生徒が中3あたりになると「また一段と違った音域のコーラスになる」のではないかと・・・、中学の保護者の皆様、来年の文化祭を楽しみにしましょう！

<追記その2>

予想通り、昨年に引き続き、今年もアスリートクラスは決勝まで残れませんでした。クラブの練習に明け暮れ、コーラス大会の練習に打ち込めないのが、当然といえば当然の結果であり、アスリートクラスの連中も、各クラブでの全国優勝は念頭においても、コーラス大会での優勝など眼中に置いてはいないようです。

ただし、今回のアスリートのパフォーマンスも昨年同様、抱腹絶倒ものだったそうです。わざわざ2年の学年主任などは私に報告をくれたほどです。聞くところによると、まず「なか卯」のCMソングを歌った後、みんなで「We will rock you」という英語の歌を歌うと舞台上で宣言したそうです。この歌は英国のロックバンドの歌っていた有名な歌で、結構難しい英語の歌詞の歌なので、その歌を歌うというのを聞いたとき、教員を含め会場みんなは心底驚いたそうです・・・、よく英語の歌詞を覚える時間があったなあ、とか・・・。

ところが全員でのコーラスが始まってみると、英語の歌詞のほとんど、というよりrock you,と一斉に叫ぶところ以外は、みんな「むにやむにやむにや」とか言って済ませたそうです。

全くアスリートクラスのユーモアセンスには驚かされるとともに、さすがに体育会系のノリを持っている連中であると感心しました。

good lifeよりgood lifeを?

2009.09.23 Wed

<下記の文は「学校はみんなが安心して来られる場でなければならない」という観点から、私がイジメについて放送で語った内容の抜粋です>

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

私が担任をしているときには、常に「イジメがあれば退学を含む措置も行う」とクラスで宣言しておりました。それまではクラスで宣言していたことですが、今、学校長として、同じ宣言をしたいと思います。「イジメについては退学を含む措置も行う」ということを皆さん、心にとどめて置いてください。なぜならイジメは**生命（いのち）**に関わる問題だと考えているからです。あるいはその人の**人生**に関わる問題だからと考えているからです。またその人の**生活**を根本的に破壊することもある問題だと考えているからです。さて今、私はイジメが生命、人生、生活に関わる問題であると述べましたが、実は、生命も人生も生活も、日本語では3つの言葉で言い表しますが、英語では、その三つのことばはひとつの単語で表現します。それは**life**という言葉です。**lifeには今言った三つの意味があります。つまり、生命、人生、生活です。**覚えておいてください。イジメはlifeに関わる深刻な問題となるから、学校側としても厳しい態度で臨まなければならないと考えているのです。

常に述べていることですが、学校はみんなが安心して来られる場所でなければなりません。みんなにとって安全な心落ち着く場所でなければなりません。大切なのは「みんなにとって」です。ひとりでもイジメなどによって辛い思いや悲しい思いをさせることがあってはならないと考えています。また保護者の人たちにも安心して自分の大切な子供を送ってもらえる場所でなければなりません。

さてライフについて三つの意味があると述べましたが、私は諸君たちには是非、good lifeを送って欲しいと願っています。その私の言うグッドライフのライフの意味は「人生」という意味です。もちろん生活という意味のライフで、good lifeを「いい生活」という訳をしてもいいわけですし、私も決して「いい生活」を否定するものではありません。しかしやはり「いい生活」以上に「いい人生」を送ってもらいたいと願っています。それには何よりも自分のライフ、つまりライフの3つ目の意味である、生命と言う意味のライフを大切にしなければならないと思います。そしてかけがえのない自分の生命と同じように他者の生命を思いやること、そして自分の生命や他者の生命を大切に生きていくことが、good life、つまり「いい人生」を送るために最低限必要な条件ではないでしょうか。どうかそこのところをしっかりと考えてみて下さい。

To do, or not to do: that is the question.

2009.09.18 Fri

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

To be, or not to be: that is the question. 「生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ」これはシェークスピアが書いた戯曲ハムレットの中で、迷えるハムレットが言った有名なセリフです。今回、私は、新型インフルエンザが流行している中で、外部の人たちもやってくる「文化祭を実行すべきか、すべきでないか」というハムレットの煩悶を経験しました。ちょうど、ある私立中学高等学校で500人ほどの生徒達が新型インフルエンザに罹患し、その原因は体育祭と文化祭にあったというニュースが流されました。本校の文化祭実施（9月18日、19日）の前々日の産経新聞でも大きく報じられていました。

しかし、いろいろ迷った末「外部の人たちも招いて予定通り実施する」という決断を教職員の後押しを得てすることにしました。

その決断をさせたのは、もちろん感染力は強いが強毒性のインフルエンザではないということが第一の理由ですが、それ以外に、心に思うことがあったからです。

いろんな教育現場では新型インフルエンザに伴い、修学旅行の中止、海外留学の中止、また体育祭や文化祭の中止が相次いでなされてきました。なるほど、そうすることによってマスコミからの批判や世間の風当たりには直面しなくて済んでいると思いますが、果たしてそれでいいのでしょうか。2度とない学生時代の楽しい思い出を作る機会や課外活動を通じて成長する機会を生徒達から全て奪って「何事もなくよかった」という姿勢でいいのでしょうか？

本校では常に生徒達に「目に見える実力だけでなく、目に見えない、つまり数値だけでは測れない実力をも身に付けて欲しい」と強く願っています。海外に行って異文化を体験することも生徒達が成長するための貴重な機会です。また文化祭などにおいては、クラス対抗コーラス大会での優勝を目指してクラス全員が練習を重ねたり、みんなで協力し合ってクラスやクラブの出し物や催し物の準備に取り組んだりすることも、生徒達が成長するための大きな機会と考えています。それに、そういったイベントは何よりも学生時代を振り返って「ほのぼのと思い出すことのできるheart-warmingな思い出」となるのです。また、毎日一生懸命勉学に励んでいる生徒達にとっては、久々の息抜きともなります。さらに文化祭などのイベントは、非日常的なハレの場として、若人達に創造的なエネルギーを発散させる機会となり、それが明日への意欲にもつながると信じています。

そういった教育的な観点からも、文化祭を実施するという決断をさせていただきました。

また、本校の文化祭は保護者や同窓生の方々の文化祭でもあります。保護者の方々はPTA学級委員を中心として、バザーの準備からお茶席の設営まで、本当に生き生きと活動しておられます。同窓会の役員の方々は同窓生コーナーを作って、そこで文化祭の日に本校を訪れる同窓生達と旧交を温めるのを楽しみにしておられます。また直接お聞きしたところ、PTA会長だけでなく他のPTAの方々や同窓会の方々にとっても、文化祭の中止は「考えられない」ことでもあるようです。「文化祭に備えて買い込んだお菓子をどうしてくれるんですか？」という非常に現実的(?)な理由から、文化祭の実施を求める方もおられました。また本校とは直接に関わりがない

外部の方でも、本校の文化祭を楽しみにしている人たちもおられます。また最後の文化祭ともなる高3生徒達は、講演に招いたプロ野球出身の与田剛キャスターの話を聞くのも楽しみにしています。

そういったことを全て鑑みて、学校長としての文化祭挙行の決断をさせていただきました。当然、新型インフルエンザ蔓延を防ぐためにできる限りの措置は取っております。外部の人たちにも迷惑をかけないため、外部の方にもマスクの着用をお願いするという措置はとっています。本校生には2日間とも全てマスクを着用させます。外部からこられた方には本校の白マスク集団を見られて「実に怪しげな学校」だと思われるのは確かでしょう(笑)。また外部の方でマスクを忘れた方には「50円以上御随意」でマスクを販売させてもらっています。ちなみに販売は、発展途上国に既にひとつ学校を建て、今は2校目を建てようと邁進している本校のスクール・バイ・スクール(学校による学校建設)と基督教の青年団(BSA)の生徒達が行い(彼らももちろん全員が白マスク)、その利益を2校目建設の資金に当てようというものです。

それでも、もし本校から多くの感染者が出て、マスコミの話題をさらった場合は……、私は記者会見で何を言うべきでしょうか?既に「よいこ部」という番組にチョコット出演して、マスコミの影響力の凄さは体験していますが……。

とりあえずは、「このブログを読んでいただきたい」と言うつもりではありますが……。

中学生現れる！

2009.09.10 Thu

今日、校長室に中学生が3名来室しました。目的は、文化祭で似顔絵を描くときに、併せて載せるインタビュー記事の取材ということでした。普段、校長室は高校棟にあることから、朝の挨拶以外に中学生と接する機会は高校生に比べて多くないのが残念でした。そういう意味でも、今日は中学生と校長室で話しできたことが新鮮でした。本当に、中学生は高校生と違う（！！）ということが、当たり前のことですが、自分なりに実感できました。成るほど、中学生と高校生の違いは「中学生は廊下を走り、高校生になると歩く」というような面白い気づきをしている先生もおり、そういう話は聞かされていましたが……。直接、高校生との違いを気付かされました。いずれにせよ、反応も高校生にあるような「テレ」があまりないので、最初から単刀直入に楽しい話しもすることができました。例えば、「先生は何ヶ国語を話されるのですか？」という質問に「3ヶ国語です」と言うと目を丸くして感心してくれるし、そのあと「標準語、英語、そして関西弁」と言うと、はじけるような笑顔で笑ってくれるし……。

そこで中学の教頭に「校長が中学生ともっと親しく接することのできる集まり」を持ってもらうことを提案する決心をしました。

佐々木教頭、宜しく申し上げます。

2009.09.05 Sat

PTAの公費助成委員会の役員の人たちが1時半から本校の会議室に集まり、今年の公費助成の進め方についての話し合いを行いました。とても前向きな会合でした。また2時半からは文化祭総務委員会のPTAの役員の人たちが集まり、やはり今年の文化祭での役割等について話し合いがなされました（その間、各学年部会や中学部会も開かれていました）。とても明るい会合でした。そして、3時半からはPTAの役員の人たち全てが集まる学級委員総会が行われました。大勢の人たちで200名収容の中講堂がほぼ満杯状況となりました。

まあ、皆さんとても明るく活発で、司会の書記（本校の教員）が総会を始める前に何度か「静粛に願います」と言わなければならないほど、ワイワイガヤガヤ、「楽しい」という雰囲気が溢れていました。「親が明るくなければ子供も明るくなれない、教師が輝かなければ生徒も輝けない」という思いを持っていますので、その雰囲気に私も本当に嬉しい気持ちになりました。

PTA会長が挨拶で、「PTA活動を皆で楽しんでもらいたいと願っています」と挨拶しておられましたが、そんなことを願わなくても、既に充分皆さんPTA活動を楽しんでいるようであります。私も楽しい雰囲気に乗せられて、例によってつつい喋り過ぎ、「校長あいさつ」というよりも「学校報告」となりました。ハンドボールの韓国との交流試合のこと、私学展のこと、そして・

・百罰一戒？（一罰百戒！）の件、などなど。

とにかく、皆さん、とても明るく前向きで活発であります。そりゃ、家庭では辛いこともあるかもしれませんが、ないかも知れません。しかし、学校にいておられる間は、自分の子供さんと同様、自分も学生になった気持ちで、老い（？）も若きも「**学校でみんなと一緒にいること**」を楽しんでもらいたいと願っています。まあ、そんなこと願わなくても・・・大丈夫でしょう。

桃山の生徒のお父さん、お母さん、保護者の方々、これからもどんどん積極的にPTA活動に参加して下さい。おじいさん、おばあさんも大歓迎です。「祖父母は孫の学校のPTA活動に参加できない」という規約はありません。まあPTAのPはParentのPではありますが、私達は歓迎します。ありきたりの言い方になりますが、家庭と学校（PTA会長に言わせると地域も一緒にPTC[omunity]Aが理想とのことで私も賛成）が、ともに手を携えていくことが、子供の教育にとっても、とても大切なことだと思います。それに楽しいですし！

生徒にも「勉強も楽しくなれば本物」と言っていますが、この話しはまた別の機会に・・・。

第一志望宣言！！

2009.09.03 Thu

今日、1学期から高校3年生対象に行なっている「第一志望宣言書」の手渡しに、あるクラスの連中が校長室にやってきました。第一志望というのはもちろん自分の目指す第一志望の大学で、各自が自分の行こうと決意している第一志望の大学名とその理由を書いた用紙を、校長室にやってきました私に直接に手渡すというものです。いわば「**決断と決意の儀式**」です。その用紙には担任⇒学年主任⇒進路指導部長の印鑑が既に押されています。各自が担任と進路相談を行なって決定した第一志望校を、さらに学年主任と進路指導部長が確認した上で私のところに持ってくるというものです。

私はその用紙を受け取り、必要に応じて私の方から質問したり激励したりしたあと、最後は「**合格鉛筆**」というピカピカ光る金色の「合格祈願・学業成就」と書かれたゴカッケイ（合格形）の鉛筆を渡すことになっています。それを受け取った後、強く握手をします。

今日の生徒達は、多くの明るく元気あるクラスの中でも特に元気がある（あり過ぎる?!）クラスの生徒達で、握手をしたとき「もっと気合を入れてください！」と言う生徒も、シッカリと私の手を両手で握り返す生徒もいて、なんだか私の方が大きな元気をもらえた気さえしました。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

Republican or Democrat?

2009.09.03 Thu

衆議院選挙も終わり、今回も多く選挙違反者が出ているようです。中には、選挙違反ではないけれど、この選挙の前に、大分県のある県立中学の社会の先生が、社会科のテストで生徒達に「支持政党とその理由」を尋ねる問題を出して物議を醸したという記事が新聞に載っていました。その先生は「時事問題に興味を持ってもらうことが問題で、採点対象にしていない」との弁明を行なっていました。

そのことで私が思い出したことがあります。それはかなり前の話で、私が本校の交換留学の相手校（米国東部では有名な私立高校）に滞在していたときの事です。そのとき、私が見学させていただいたSocial Studies（社会科）の時間に、その社会科担当教師が米国の2大政党のひとつである共和党（Republican）の支持者を招いて、その人から生徒達に話しをさせたのです。当然その支持者は共和党の政策が、もうひとつの政党である民主党（Democrat）よりどれほど優れているかを力説しておりました。ただただ驚きでした。日本でもし社会の時間に先生が、例えば自民主党を支持する人を教室に呼んで、生徒たちに話を聞かせればどうなるかと思うと、本当に驚きました・・・。当然、授業のあとで私はその先生に自分の驚きを伝えたところ、その先生は「大丈夫、前回には民主党の支持者を呼んで話をさせたから」という答えでした。

そしてさらに、次の授業では、生徒を出席番号の奇数組と偶数組に別け、最初の1時間は奇数組の生徒を共和党支持者として、偶数組を民主党支持者としてディベートを行わせ、次の1時間ではその役割を入れ替え（つまり奇数組を民主党支持者、偶数組を共和党支持者）にしてのディベートを実施するとのことでした。そしてそういった授業で目指していることは、生徒たちに政治に対する関心を持たせることと同時に、立場を代えた物の見方を知ってもらうこと、さらには論議で自分の意見をまとめ、それを発表する力を身につけさせること、また論議する際に必要な下調べを行う大切さなどを身につけさせることだと言うことでした。そのときはただ「なるほど」と感心しただけでしたが、今強く感じることは、日本の若者が世界に出て行ったとき、外交やビジネスなどの場で、「高校からこういった教育を受けてきた連中を相手にしなければならない」ということです。

なるほど「秘めたるは花」であるし、「言わなくても分かり合える以心伝心」というのはわが国の素晴らしい文化的特質でもあるかと思いますが、それとは別に、これからの日本の若者には「外国の人たちとも対等にわたりあえる能力」というものが必要であると思っています。幸い、本校ではホームルーム活動を重視し、「生徒たちに自分の意見を表現してもらう機会」や「論議の機会（例えば郊外活動の行き先の決定など）」などを持たせていますし、国際教育にも力を入れていますが、やはり日本全体の問題として「世界に堂々と出て行ける若者」を育てる必要があると思います。

それには語学力だけでなく、また弁舌の才だけでなく、品性や教養、さらには自国の歴史や文化にたいする造詣なども不可欠であると確信しています。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

Welcome to our school!!

2009.08.31 Mon



🐼 本年度、本校にやってきた留学生達です。

桃山学院創立125周年を迎える記念すべきこの年、初めての女子留学生も迎えることになりました。

本校からも初めて米国姉妹校へ女子生徒が留学しています。

左から

✚ トーリー（カナダの本校提携校から）

✚ パトリック（カナダの本校提携校から）

✚ モリー（アメリカ、ミシシッピの本校姉妹校から）

✚ ダニエル（アメリカ、ミシシッピの本校姉妹校から）

✚ エース（アメリカ、テキサスの本校姉妹校から）

保護者の皆さん、ホストファミリーの応募、宜しくお願いします!!

第2回オープンキャンパス開催

2009.08.30 Sun

6月21日に実施した中学オープンキャンパスに続き、本日（8月30日）は第2回のオープンキャンパスを実施しました。

本日も大勢の人たちに来ていただきました。今日の主役は小学校5年と6年の小学生達ですが、保護者の方にはその子供達が体験学習をしている間、学校紹介ビデオを観ていただいたり、私からの話をさせていただきました。

その話の中で、私は自分が桃山の教育の中で大切に思っている4つの柱というものを述べさせていただきました。非常に限られた短い時間だったので、皆さんにどこまでご理解していただいたか少し心配です。

ただ、前回もそうでしたが、本日も卒業生が子供を連れてきており、「是非、桃山に自分の子供を入れたかった。中学ができて喜んでいる」という言葉をかけてくれました。なるほど多くの方々が本校のオープンキャンパスや学校説明会に来てくださることは、本校に対する評価の高まりを肌で感じて、誠に嬉しいものであります。またそういった期待に大いに応えていくことも当然であると考えています。

ただそれと同時に、多くの卒業生達に自分の子供を自分が卒業した学校に通わせたいとお願いしていること、また兄弟姉妹を本校に送ってくださる保護者の方も多くいらっしゃるということが、何よりも本校の良さを分かっている証であると感謝しております。

桃山の持つ良さを堅持しながらも、さらに大学進学等の面でも大きな躍進していけるよう、教職員一同、力を合わせ心をひとつにして、さらなる努力を続けていきたいと思っています。

親死ぬ、子死ぬ、孫死ぬ

2009.08.29 Sat

2学期の始業式のメッセージの一部で、私は「いのちの大切さ」特に「若くして死ぬことがいかによくないか」について述べるため、一休さんのエピソードを例に出させてもらいました。

それはこのような話です。

ある裕福な檀家が元旦に一休さん（もうこのとき時は小僧さんではなく立派な禅僧になっておられた）を招いて、「正月だから何かめでたい言葉を掛け軸に書いて欲しい」と所望しました。そのとき一休さんが書いた言葉が「親死ぬ、子死ぬ、孫死ぬ」という言葉でした。その言葉を見てその檀家は、いくら一休さんだからと言って正月早々に縁起でもない言葉で、余りに無礼だと怒りました。そのとき一休さんは「考えてもみなさい。これほどめでたいことはない。親が死んだあと、次にその子供が死に、そしてその子供が（やがて老いて）死に、その後、孫が（やがて老いて）死ぬ。これが自然で、親の前に子供が死んだり、孫が死ぬことほど、悲しくて辛いことはない」と答えた、という話しを全生徒達にしたのです。

生徒達に「いのちの大切さ」を知ってもらうためには、やはり死の話は避けて通れないし、また若くして亡くなることが残された者にどれほどの悲しみや苦しみを残すかという話しもしなければならぬと思っています。

本校は「いのちの教育」に力を入れ、学校内各所へのAEDの設置や教職員・生徒対象の救命講習なども定期的実施していますが、そのこととは別に、「生きていることに感謝し、よりよく今を生きる」ことを教えるためにも、死生学（タナトロジー）的な観点からの教育も今後は必要ではないかと思っています。

<?xml:namespace prefix = o ns = "urn:schemas-microsoft-com:office:office" />

さて次に、キリスト教の学校でありながら、なぜお坊さん（一休さんは禅宗の僧侶）の話をするのかとお思いになる方がおられれば、このように答えるしかありません。

「いいものにキリスト教も仏教もヒンズー教もイスラム教もありません。要はそれを信じる人であり、その教えを生きる姿勢である」と……。

ブログをはじめます

2009.08.29 Sat

桃山学院中学校高等学校の学校長となっはや1学期も過ぎ、今また2学期を迎えることとなりました。アッという間の1学期間でした。その間、新型インフルエンザ発生などいろいろなことがあり、就任時の決意のひとつ、つまりブログで「私の経験や思い」を皆さんに伝えるという決意が、今まで延び延びとなってしまいました。

しかし、これ以上延期すれば、結局何も始められなくなるとの思いから、「とりあえず」始めるということにしました。

今後、できるだけ短期間の更新を心がけますが、学校長としての職務を優先しますので、あくまでも

「できるだけ・・・」となります。ご容赦下さい。